

松本市

*IDEGAWAMINAMI*  
出川南遺跡 IV

*HITTARI-KOFUNGUN*  
平田里古墳群

——緊急発掘調査報告書——

1994・3

長野県松本市教育委員会

## 序

南松本駅の周辺は以前より各種工場・事務所、一般住宅が立ち並び、松本市南部の商工業の中心として栄えてきました。近年、これらの開発に伴って何度か行なわれた発掘調査では、数多くの埋蔵文化財が出土しており、それらは出川南遺跡として知られています。

このたび当地にハイランドシティまつもと（信州ジャスコ南松本店）の建設事業が計画されたため、松本市が三井不動産株式会社商業施設事業本部より発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財の保護を図るための記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成3年10月から翌4年3月にかけて行なわれました。作業は冬の厳寒、降雪に悩まされましたが、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、竪穴住居址116軒、掘立柱建物址21棟をはじめとする多くの遺構、遺物が発見され、この地に古墳時代後期を主とする大集落が営まれていたことが判明しました。また、5世紀末の築造とみられる直径約38 mの古墳が見つかり、松本平で初の埴輪を伴う古墳として注目されました。これらの資料は遺跡の立地とともに、今後地域の歴史解明に大変役立つものになることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解を頂いた三井不動産株式会社の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

## 例 言

1. 本書は平成3年10月16日から平成4年3月28日にかけて行われた、松本市双葉5番20号に所在する出川南遺跡（第4次調査）および平田里古墳群の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査はジャスコ南松本店建設事業に伴う発掘調査であり、松本市が三井不動産株式会社より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 基準点測量は深志測量株式会社へ業務委託して、VIII系国家座標原点に基づいた測量用基準点を設置している。
4. 本書の作成は松本市より委託を受けた財団法人松本市教育文化振興財団が行った。
5. 本書の執筆は、第1章：事務局、第2章第1節：太田守夫、第2節：久保田剛、第3章第3節1：竹原学、その他の項目を関沢 聡が担当した。
6. 本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、福島紀子、福沢幸一、村松恵美子、横山小夜子、横山保子

遺物実測：石合英子、竹原久子、平出貴史、松尾明恵、MIN AUNG THWE、望月 映、吉澤克彦、関沢 聡

トレース：開嶋八重子、久根下三枝子、竹原久子、松尾明恵、望月 映

遺構図整理・一覧表作成：赤羽包子、林 和子

図版作成：赤羽包子、開嶋八重子、林 和子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、市川 温・木下 守・直井雅尚（遺構）

7. 遺物整理から本書執筆までの間、次の方々よりご教示を頂いた。

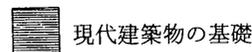
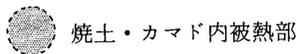
桐原 健、直井雅尚、望月 映、瀬川長廣

8. 本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴式住居址→住、掘立柱建物址→建、溝址→溝、土坑→土、ピット→P

使用例：第5号住居址→5住、第4号建物址→4建、第3号溝址→3溝、第2号土坑→2土、第1号ピット→P1（ただし、住居址に伴うピットの場合はP<sub>1</sub>）

9. 本書の中で使用した遺構の細部表現は次の通りである。



10. 出土遺物の注記・実測にあたっては「出川南BIII」の略号を使用している。

11. 本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

## 目 次

## 図 目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査経過	
第1節 調査の経緯	2
第2節 過去の調査と遺跡の名称	2
第3節 調査体制	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 地形と地質	4
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	8
第2節 遺 構	
1. 古 墳	9
2. 住居址	11
3. 掘立柱建物址	14
4. 土坑・ピット	14
5. 溝 址	14
6. その他の遺構	14
第3節 遺 物	
1. 土 器	15
2. 埴 輪	24
3. 石器・石製品	28
4. 土製品	29
5. ガラス製品	29
6. 金属製品	29
第4章 調査のまとめ	31

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	
第2図 調査範囲	
第3図 全体図	
第4図 遺構割付図	
第5図 遺構実測図1	
}	}
第38図 遺構実測図34	
第39図 第1号古墳平面・土層図	
第40図 第1号古墳遺物出土図1	
}	}
第44図 第1号古墳遺物出土図5	
第45図 住居址遺物出土図	
第46図 住居址カマド実測図	
第47図 土器実測図1	
}	}
第103図 土器実測図57	
第104図 埴輪実測図1	
}	}
第116図 埴輪実測図13	
第117図 石器1・石製品・土製品・ガラス製品実測図	
第118図 石器実測図2	
}	}
第120図 石器実測図4	
第121図 金属製品実測図1	
}	}
第123図 金属製品実測図3	

## 表 目 次

第1表 古墳時代後期土師器杯分類観察表	20
第2表 土師器杯Jと他器形の組み合わせ一覧	22
第3表 住居址一覧表	32
第4表 掘立柱建物址一覧表	38
第5表 古墳時代後期遺構出土土器主要器形一覧（別表）	
第6表 埴輪観察表（別表）	

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査の経緯

松本市のほぼ中央に位置する南松本周辺は、松本駅の商業地域から少し離れた商工混在型の地域として発展してきた。しかし、近年の長野自動車道の開通などに伴い、この地域は新たな商業地域として注目され始めた。出川南遺跡は南松本駅の南方に広がる周知の遺跡で、その中央にはJR篠ノ井線が南北に通っている。

この地域に第一種大規模小売店舗の建設が計画されたため、平成2年4月26日に松本市役所で出店計画説明会が開催された。このうちジャスコ南松本店（当時は「(仮称)ハイランドシティまつもと」）の建設予定地が過去の調査で弥生時代から平安時代の遺構・遺物が確認されている出川南遺跡に近接していたことから、開発事業者である三井不動産株式会社と松本市教育委員会は埋蔵文化財保護のための協議を行なった。その結果、まず事業地内の試掘調査を実施し、出川南遺跡の範囲を確認することとした。

試掘調査は平成2年10月25～26日と12月18～22日の2回に分けて実施され、合計24か所に設定した試掘坑のうち、10か所から遺構や遺物が確認されたため、今回の開発予定地が出川南遺跡の範囲内にあることが判明した。そこで、両者間で再度保護協議を行なった結果、店舗建設予定地のうち地下への掘削で埋蔵文化財が破壊される部分について、発掘調査を実施して記録保存することを確認した。

そして、三井不動産株式会社と松本市との間に平成3年10月15日付で発掘調査業務の委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。

平成3年4月10日 出川南遺跡発見通知（文化財保護法第57条の6第1項）の提出。

10月14日 出川南遺跡発掘通知（同上第98条の2第1項）の提出。

10月15日 埋蔵文化財包蔵地（出川南遺跡）発掘調査業務委託契約締結。

平成4年4月10日 埋蔵文化財拾得届及び保管証の提出。

発掘調査終了届の提出。

平成5年2月19日 埋蔵物の文化財認定通知。

## 第2節 過去の調査と遺跡の名称

出川南遺跡はこれまでJR篠ノ井線を挟んで、便宜的に東側を出川南A遺跡、西側を出川南B遺跡としてきた。そして、これまでにA遺跡は1次、B遺跡は3次にわたる調査（今回の調査）が行なわれてきた。しかし、昭和63年度の調査報告書では『出川南B遺跡』とする一方、例言の中で「出川南遺跡のB地点」と記述されたように、担当者間でも遺跡名の理解に混乱が認められた。

遺跡の性格を考えた場合、昭和61年度調査では弥生～平安時代の集落、同63年度の調査以降では古墳時代後期の集落が確認されている。地点によっては性格を若干異にする可能性も考えられるが、これまでの調査結果をみると、多少の粗密はあるものの古墳時代後期を中心とする遺構が途切れることなく広範囲に広がっていることが各地点で確認されている。今後の調査如何では、出川南遺跡の中で質的な違いが判明するかもしれないが、現時点では出川南A遺跡と出川南B遺跡と区別することは好ましくないと判断した。

以上のことから、これまでの調査はすべてを「出川南遺跡」で統一し、当初「出川南B遺跡第3次」として開始した今回の調査も、第4次調査と扱うことにした。

年度	調査期間	調査原因	注記略号	報告書名	修正後
S 61	1986. 5/20～6/25	市営住宅建設	出川南	『松本市出川南遺跡』	第1次
S 63	1988. 5/23～7/12	松本市南部体育館建設	出川南B-1	『松本市出川南B遺跡』	第2次
H 1	1989. 5/8～6/7	南部社会教育関係施設建設	出川南B-2	(未報告)	第3次
H 3	1991. 10/16～92. 3/28	ジャスコ南松本店建設	出川南B III	『松本市出川南遺跡IV ・平田里古墳群』	第4次

### 第3節 調査体制

#### 【平成3～5年度】

**調査団長** 松村好雄（～H 4. 6）・守屋立秋（松本市教育長）

**調査担当者** 直井雅尚、木下 守、市川 温、和田正雄（社会教育課）

**報告書作成** 木下 守、竹原 学、久保田剛、関沢 聡

**調査指導者** 太田守夫、桐原 健

**調査員** 竹原久子、松尾明恵

**協力者** 青柳洋子、赤羽包子、赤羽初水、浅井信興、浅輪敬二、敦森弘子、五十嵐周子、石合英子、石川末四郎、市川勝子、岩渕渡、内澤紀代子、内田和子、小穴仁美、大久保たつ子、大久保棟子、大久保幸子、大澤ちか子、大下恵二、大角けさ子、大谷成嘉、大塚袈裟六、大月育英子、大月みや子、大月八十喜、岡部登喜子、小野光信、尾沢嘉昭、開嶋八重子、金井榮一、河内ゆり子、北澤達二、桑井まさ、桑井益子、小池芳子、小岩井美代子、小松多賀寿、小松正子、坂口ふみ代、坂下 茂、清水百合子、鈴木なつ江、鷺見昇司、瀬川長廣、高橋登喜雄、高山淑三、瀧澤隆男、田口吉重、田多井亘、田中義一、田中雅子、竹平悦子、塚田つた江、塚田文子、鶴川 登、中沢愛子、中島新嗣、中島千矢子、中島治香、中村恵子、中村嵩、中村安雄、中村頼三、巾崎助治、原沢一二三、林 和子、平出貴史、福島今朝人、福島紀子、藤井久子、藤本利子、藤森寿々子、藤森久子、古畑正登、洞沢文江、前阪笑子、松田秀子、丸山恵子、丸山す江よ、三浦節子、御子柴長寿、三沢元太郎、道浦久美子、MIN AUNG THWE、村田昇司、村田良成、村松恵美子、百瀬五郎、百瀬縫代、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、矢島利保、山口幸子、横山真理、吉澤克彦、吉田勝、米山禎興、若井七十郎、和地弘寿

#### 教育委員会事務局

荒井 寛（～H 4. 3）・島村昌代（社会教育課長）、田口 勝（～H 4. 3）・木下雅文（課長補佐）、熊谷康治（～H 4. 3、課係長）、関沢 聡、竹内靖長、久保田剛（主事）、荒井由美、山岸弥生

#### 松本市教育文化振興財団

事務局：深澤 豊（～H 5. 3）・大池 光（事務局長）、牟禮 弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）  
考古博物館：神澤昌二郎（～H 5. 3）・熊谷康治（館長）、直井雅尚（～H 5. 3）・松澤憲一（主任）、久保田剛（主事）、遠藤 守（事務員）、荒井由美、藤原美智子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地形と地質

#### 1 位置と地形

本調査地は、松本市双葉5-20の市街地内にあり、市総合社会福祉センターの西隣に当たる。過去には、大規模な工場や施設が建てられ、地層表面（一部深部）の大部分は攪乱されていた。この付近一帯は、第2次世界大戦の前後までは広い畑地で、小麦・桑が栽培されていた。戦後の開田ムードで、地下揚水により一部水田化した。国道19号線の開通に伴い、にわか市街地化した。このため地形の観察は困難である。

地形上は奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に位置している。西の奈良井川、東の田川の現河床との距離は、それぞれ約1500m、約500mである。もともと、奈良井川・鎖川・梓川・田川・牛伏川・薄川等による複合扇状地として、形成された地形である。扇状地地形の分類によると、①段丘地形をもつ扇頂～扇央、②氾濫原の広がる扇央、③地下水位が高く、湧水も見られる扇端、④沼沢性の堆積をもつ最扇端に分けられるが、本調査地は③の堆積に近い。実際に調査地の北方ないし東西方500mには多くの湧水が見られ、特に穴田川・頭無川沿いは沼沢性の沖積地である。調査地周辺でも地下水位は2.2～6.9mが報告されている。地形面は一般に北東、穴田川の方角へ緩く傾斜（7/1000）している。

地形は奈良井川による堆積と考えられ、調査地の地層で観察された河床礫も、古生層系統（奈良井川）の砂岩・硬砂岩・粘板岩・チャート・珪岩に、わずかな花崗岩・輝緑凝灰岩からなり、田川系統の石英閃緑岩・安山岩は見当たらない。これを付近の遺跡の地層と比較してみると、もっとも近い出川南遺跡2次調査地点は田川系統、3次調査地点は奈良井川系統、その基底礫層は奈良井川系統で共通している。また1次調査地点・出川遺跡は田川系統、高宮遺跡は奈良井川系統である。奈良井川と田川の堆積層の接触をこれらの遺跡の地層と、やまびこ道路（国体道路）沿いの試掘結果や、出川南遺跡3次調査の地層から見ると、およそ出川南遺跡から穴田川左岸を結ぶ線が推定される。この一帯（双葉・芳野・笹部・高宮・石芝・野溝）に広がる奈良井川の扇状地性堆積物は、この接触帯に向けて前記の地形分類に示すように、②—③—④の堆積層を展開していると考えられる。したがって上流の野溝・笹部に砂礫層が多く、下流の双葉・芳野・高宮に砂質土層が多くなること分かる。やがて出川遺跡の堆積層の下部に見られるような、ヨシの腐植物を含む黒色土層（シルト・粘土）の形成帯へ進むことになる。また奈良井川から当然北東へ向けてくるはずの流れが、発掘面で北あるいは北西へ向かうのを見るのは、蛇行による結果で、やがてデルタ（三角州）性堆積に移ったものであろう。本調査地の堆積は、多分にこの下流域の性格を示し、蛇行する流れ、厚い砂質土層、大規模な洪水でなく蛇行の流れから広がったと考えられる砂礫はこれを物語っている。急速な都市化により、掘削・埋立・地ならしが行われた地表からは、自然の地層は観察できないが、遺構検出面（地下1m）からは以上の状態を知ることが可能である。

#### 2 遺跡内の流れと堆積層

今回の調査地のうち1～4溝は、堆積土層とともに同一地形面にあった当時の自然地形と見られる。その規模に大小はあるが、いずれも奈良井川系統の河床礫によって埋められていて蛇行性を示している。このうち1溝・4溝は最も自然流の形を示し、2溝・3溝は川幅が狭く、河床礫もほとんど細・中礫で、調査地内で消滅している。以下、それぞれの流路の状況を述べることにする。

4溝は最も規模が大きく川幅は3～5m、礫は径10×8、12×8、7×6cmの大礫、5×6、5×5cmを

中心とした中礫に、細礫・粗砂からなる。粗砂・細礫が多く、大・中礫はこの中に埋まっているという状態である。礫の種類は砂岩・硬砂岩～大・中・細礫の大部分を占め、粘板岩～細礫、チャート～中・細礫、珪岩と、わずかに粗粒花崗岩・輝緑凝灰岩である。各流れの中では最も大礫が多い。これらの礫・砂はよごれがなく新鮮である。北流として調査地へ入った流れは、N-38°-Wと西へ曲流し、幅を5 mに広げた左岸に砂堆積、右岸に礫堆積をつくって自然流の形を示す。調査地の出口ではN-40°-Eの北東流にかわる。河床の深さは80 cmまでしか観察できていないが、恐らく2 m前後と考えられる（1溝では2 m前後の厚さの礫層が観察されている）。この流れの兩岸には遺構が少なく、切り合い関係は左岸曲流部の103住だけである。

3溝は川幅1.5～3 m、礫は中・細礫を主とし、礫の種類は4溝と同じである。礫層の厚さは30～50 cmで極めて薄い。発掘地内へは北東流（N-50°-E）として入り、やがて北流に変わるが途中で消滅している。周辺に住居址や遺構が多く、相互に切り合っている。3溝と4溝の間に流れの跡と見られる蛇行性の砂礫の堆積や、広がりをもつ砂礫層が数箇所見られ、いずれも住居址を切っている。

2溝は川幅1.8 m前後、礫はほとんど細礫が中心で、時々中礫を混じえる。3溝よりさらに細かい。礫の種類は4溝に、礫層の厚さは3溝と同じである。調査地へは北東流（N-20°-W→N-48°-W→N-20°-W）に変わるが、3溝と同様に調査地内で消滅している。1～4溝のなかでは、最も礫が小さく、流れとみるか溝とみるか問題が残る。遺構の切り合い関係をみると、39住を切っているが、他の住居址には切られている。ただし、39住との重複は調査所見ではかなり不明瞭で、明確な前後関係を認定するのは危険である。2・3・10溝は4溝からの分流、導水とも考えられる。

1溝は川幅3～3.5 m、礫の大きさ・種類は4溝と同じく新鮮である。調査地へは北東流（N-30°-E）として入り、ほとんど向きを変えずに直進した後、N-40°-Eで古墳の西側を抜け調査地を出ている。河床の厚さは2 m前後と考えられている。住居址・遺構との切り合いは見つかっていない。

このほか1溝の東側に当たる調査地の南東隅に、N-50°-E、南東から北東に連なる幅9 mに及ぶ河床礫の分布が見られる。礫の大きさ・種類等は1・4溝の場合と同じであるが、遺跡面より約30 cmほど下部に当たり、堆積上面は地表から120 cmである。出川南2次・3次の基底礫層に近いものと考えられる。分布は一樣に広がるものでなく、1・4溝と同じように基底にあって、流れとして存在したものであろう。古墳の周囲の地山土層はこの上のものである。1・4溝礫層の上部と下部（南東隅の礫層）の関係はわかっていない。

遺跡の堆積土層は扇状地性堆積の末端の特徴を示している。今回の発掘では地層の断面を深く見る機会が乏しく、比較的上部と下部のわかる東壁の地層を、挿図にあげておいた。一般に表土は褐色の畑土、後に工場用地として攪乱されている。表土の下の土層は地山に当たり、青みがかった壤土で、その中に鉄分の斑点が広がる。厚さは1 mを超え、礫は流れや流れ込みとして集まるが、土壌内に散在することが少ない。土層中に腐植性のもを含まず、乾性であって、前記の扇端に近い位置の堆積と考える。またこの土層は、調査地の西壁ではさらに厚い部分が見られ、一樣でないことが分かる。古墳・住居址をはじめとする遺構は、この土層を利用している。

### 3 地形の形成と遺跡

地形の形成を知るには堆積層の状態と環境、堆積層の形成の順、できれば時代を調べる必要がある。

本調査地のような扇状地層では、土層と河床礫との関係が取り上げられる。すなわち、相互の被覆関係、同時異相、流れの割り込み（浸食）の三つがあげられる。また形成の順や時代を知るには、時代を示す対象物を見つけることである。調査地内では、流れの跡や土層は同じ地形面にあると考えられるので、遺構の年代と流路との切り合い関係が示準とされる。

4 溝の流れは前述したように、遺跡の存在期間を含め、流れを継続したものと考えられる。それは103住との新旧関係の解釈から求められる。4 溝が住居址を侵食し、さらに埋没させたと判断される。このことから4 溝は103住の存続時期以後表土に覆われたことになる。同じような河床礫の堆積量を示す1 溝の流れは、接する住居址がなく判断が難しいが、前に述べたような状態から、4 溝に近い環境と考えられる。

一方、多くの住居址が広がる中の3 溝や、4 溝—3 溝の間の蛇行性の河床礫層は、古墳時代後期の住居址を切っている。2 溝の流れは深さ30 cm、下底に粗砂、その上に土混りの細砂をのせた皿状の溝であるが、形成の環境や時期は3 溝よりも古いと考えられる。南東隅の河床礫は深さや堆積状況から見て、1 溝—4 溝の流れより以前に上の土層に被覆されたもので、第2次・3次調査の基底礫層と堆積時期が近いものと推定される。基底礫層と1 溝・4 溝・遺構検出面の土層との関係は、地層断面の資料が少ないため、判明していない。

このような堆積状況を地形の形成から見ると、およそ次のような順序が考えられる。

- ①南東隅の下部河床礫層の堆積。
- ②遺跡の含まれる土層の堆積。
- ③古墳築造
- ④古墳時代後期の集落
- ⑤平安時代の集落

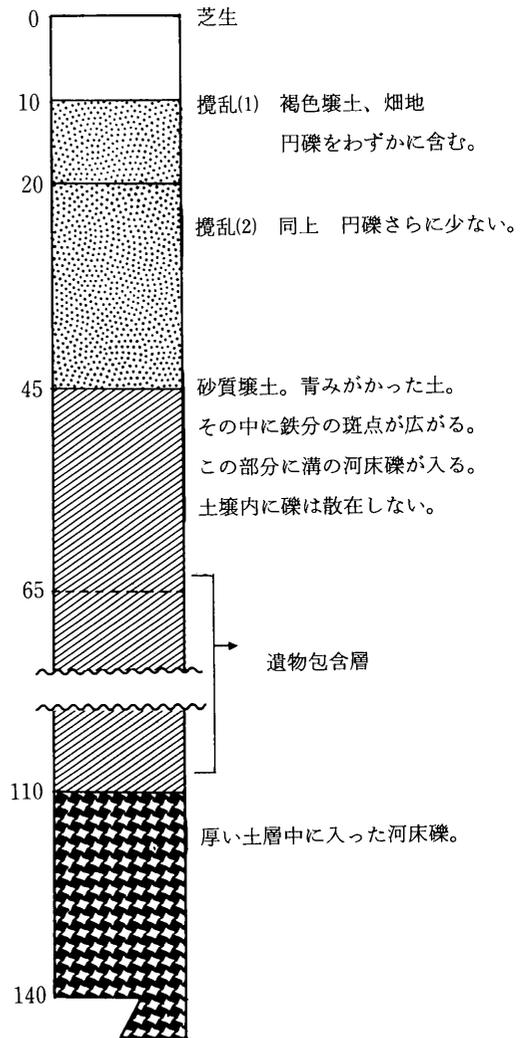
1 溝は②—④間に始まり、④以降まで継続する。

2 溝は②—④間に始まり、その間に埋没する。

3 溝は1 溝と同様。

4 溝は②—④間に始まり、④—⑤間まで継続する。

発掘の結果によると、この遺跡には6～7世紀に大きな集落が営まれたが、7世紀以後その姿がほとんどなくなっているといわれる。その原因のひとつに、大きな川の流れ込み、洪水等があげられるが、地形・地質上からは、集落の移動を見るほどの災害は考えられない。恐らく洪水ではなく、流れの機能の停止ではないかと考えられる。すなわち、源流の奈良井川が氾濫などにより、堆積状況が変化し、河道を移動させたものである。その結果源流からの水の供給が絶たれ、集落はより水便のよい場所へ移ったものと考えられる。実際にこの場所は近世から現代まで畑地で、水利には恵まれなかった。また平安時代以降、周辺の水便のよい扇状地扇端の場所に多くの郷里が営まれたり、導水の水便のよい場所へ移動していると思われる。前者に下平田郷・平田郷・平田里や二つ長・四つ長の地名が残る。平田本郷遺跡や小原遺跡は後者であろう。



挿図 基本土層（調査地東壁断面）

## 第2節 歴史的環境

出川南遺跡の周辺には原始・古代から中世にかけての遺跡が密集している。昨今の開発に伴って行なわれた発掘調査の成果に基づき、出川南遺跡周辺の遺跡について触れてみたい。

出川西、出川、高宮の3遺跡は本遺跡の北側に位置する。本遺跡に接するように展開しているのが、出川西遺跡である。南松本駅北西の市営住宅建設に伴う発掘調査（昭和61年1月）では、弥生時代中期の住居址1軒、同後期の土坑1基、古墳時代前期の溝1本、平安時代前期～中期の住居址3軒を確認した。特筆すべき遺物として平安時代の住居址から出土した土錘20個余がある。ここより西に所在する榑日穀製粉の工場建設立会い調査（平成5年）では、弥生～古墳時代にかけての遺構・遺物が発見されている。なかでも弥生時代の磨製石鏃とその未製品は貴重である。また同社近隣の旧ステンレス工場（現在の松本倉庫榑周辺）を造成した際に同時期の土器片が多量に出土している。国道19号線沿いの大型店建設に伴う発掘調査（平成5年）では、集落址は発見できなかったが、古墳時代前期（4世紀代）の配石墓を検出しており注目される。このほか周辺での開発行為に伴う立会い調査において、遺構・遺物を見ないものの暗褐色土を基本とする安定した地層が確認されており、この一帯が遺跡の立地に適した環境であったことを窺わせる。

出川遺跡は出川西遺跡の北側、JR篠ノ井線沿いに位置しており、平成元年には出川地区土地区画整理事業に伴って調査が行なわれた。確認された遺構は中世が主体であったが、弥生時代中期、古墳時代前期の土器を得ている。これらは調査区南側の遺物包含層からの出土であり、地形的に高い出川西遺跡からの流れ込みと考えられる。

高宮遺跡は国道19号線西側に位置し、平成5年に高宮・征矢野地区土地区画整理事業に伴う発掘調査を実施した。その結果、古墳時代中期の住居址3軒、合口甕棺墓などのほか、多量の高杯や白玉・管玉・勾玉、石製模造品を伴う土器集中区が確認され、湧水地に近接した祭祀遺跡であることが予想される。

次に南側に転じると、平田北、平田、平田本郷の3遺跡、さらに田川を越えて東側に竹瀝遺跡が存在する。まず平田北遺跡は古墳時代中期～奈良・平安時代であり、キッセイ薬品工業榑敷地内の立会い調査において、堅穴住居址と掘立柱建物址を確認した。平田遺跡は本格的な調査の手が入っていないので詳細は不明だが、過去に灰釉陶器の長頸瓶2個と椀・皿が各1個、土師器杯1個を伴う平安時代の墓址と思われる遺構を検出した記録がある。平成4年に調査された平田本郷遺跡は奈良～平安時代が中心の集落址で100軒近い住居址が検出されている。遺物には古墳時代中期の高杯や壺が含まれていたが、該期の遺構は確認されなかった。竹瀝遺跡については昭和60年に県営榑場整備事業に伴って調査されたのが最初である。この時は生蓮寺の北側で住居址2軒、掘立柱建物址2棟、柱穴群、水田址などが確認され、中世の遺跡であることがわかってきた。その後、昭和62年には個人住宅建設の際に工事立会い調査を行ない、弥生時代の遺物を得ている。平成6年度の竹瀝南土地区画整理事業に先立つ試掘調査では、弥生土器・完形の石包丁が出土しており、該期の集落の存在が予想される。

最後に田川の東側、中山丘陵の北端に弘法山古墳が位置する。昭和49年に調査され、3世紀末～4世紀初頭の築造であることが判明している。平畑遺跡は同古墳の北下に所在する。道路建設に伴う平成2年の調査ではわずか700m<sup>2</sup>であったが、弥生時代後期の住居址3軒、方形周溝墓4基、古墳時代後期の住居址1軒、中期古墳1基、奈良・平安時代の住居址31軒、平安時代の土坑墓3基などが検出された。遺物は土器のほか、弥生時代のガラス小玉、管玉、石戈、多頭石斧、古墳から引手金具、金環が出土した。また方形周溝墓と古墳は弘法山古墳の前後に位置付けられるもので、同古墳の成立課程を知る上で極めて重要な資料といえる。

# 第3章 調査結果

## 第1節 調査の概要

### 1. 調査の方法

出川南遺跡第4次調査地点は松本市双葉5番地20号一帯に位置する。範囲確認のための試掘調査では、開発予定地内に広く遺跡が分布することが確認されたため、発掘調査は基礎工事で掘削が行われる店舗部分を対象とすることにした。開発事業地の総面積は42936 m<sup>2</sup>で、このうち調査面積は14688 m<sup>2</sup>である。

調査にあたっては重機を使用して表土および攪乱土を除去し、その後人力による掘り下げを行った。測量にあたっては深志測量株式会社へ業務委託して、VIII系国家座標原点に基づいた測量用基準点を設置している。測量用基準点は45×45 mの大地区と9×9 mの中地区からなり、実際の測量にあたっては、さらに3 m方眼に区画設定したものを使用している。遺構測量図の北方位は真北であり、座標数字はVIII系国家座標である。

遺構番号については第1次調査からの継続を基本としたかったが、第3次調査分が未整理であるため、必ずしも継続番号にはなっていない。また、調査時に遺構としたが整理段階で遺構から除外したものがあり、該当する遺構番号は欠番として扱っている。

### 2. 遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構・遺物は下記の通りである。

#### ●出川南遺跡

遺 構 (数字は遺構番号)	遺 物
縦穴式住居址116軒 (7~124、欠番は15・32) 内訳 古墳時代113軒 平安時代3軒 掘立柱建物址21棟 (1~21) 溝址 11本 (1~11) 土坑 7基 (31~37)、柱列 2本 (1・2) ビット 多数 (ビット群として4群を把握)	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器 石器 (紡錘車、砥石、敲石、つき臼、編物用石錘) 石製品 (白玉) 土製品 (紡錘車、丸玉) ガラス製品 (小玉) 金属製品 (耳環、空玉、鉄鏃、釘、刀子、鎌、紡錘車 不明鉄製品)

#### ●平田里古墳群

遺 構	遺 物
第1号古墳 (古墳時代中期)	土師器・須恵器・埴輪 装身具 (滑石製白玉・ガラス製小玉) 金属製品 (鉄鏃、刀子、鋤・鍬、轡、鉸具、不明馬具)
第2号古墳 (古墳時代中期)	土師器、石製紡錘車
第3号古墳 (古墳時代)	土師器、鉄鏃

### 3. 成果

出川南遺跡は古墳・平安時代の集落遺跡であることが確認されたが、なかでも古墳時代後期の集落は現時点で松本平最大のものである。該期の集落構造や土器編年を解明するための良好な資料を得ることができた点が特筆されよう。平田里古墳群は中期後半～末に築造されたと推定される古墳群である。特に、第1号古墳は平地に築造された松本平の古墳の中では最大規模のものであり、周溝内から出土した多量の埴輪 (普通円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪) や、周溝内祭祀に使用された土師器・須恵器群は貴重である。これらは松本平の5世紀以降の首長墓の展開を考えていく上で重要な資料と位置づけられる。

## 第2節 遺 構

### 1. 古 墳

古墳は調査地の東側で3基が確認され、小字名をとって平田里古墳群と命名した。いずれも墳丘は既に削平されていたため、外部施設と埋葬施設の構造については確認することができなかった。

#### (1)平田里第1号古墳(第38・39図)

調査地の北東端に位置する。北と東側は調査区域外にかかり、周溝の北端部と南西部が攪乱のため破壊されている。そのため、周溝の幅が確認できるのは南東、北東、北西部だけである。周溝の残存部から推定される古墳の規模は周溝内側の先端では直径約24 m、周溝外側の先端では直径37～38 mである。

本墳は遺構検出の段階で周溝の覆土中に多量の埴輪破片が混入していることが判明したため、以下のような調査方法をとることとした。

まず、古墳の周溝部に土層観察用のベルト(土手)を放射状に5本設定した。さらに、土層観察を行ったラインを境界として、南側から反時計回り(左回り)に周溝を7区(第1～7区)に区分設定している。また、周溝内を1 m方眼に区画設定して、遺物を取り上げる際の最小区分とした。

**周 溝** 本墳の周溝は幅5.2～9.6 m、検出面からの深さ45～93 cmを計る。平均的な周溝幅は6.0～6.5 mであるが、北側に行くにしたがって広くなり、特に北東部分が最大幅となっている。底面は場所によって広狭と段差が認められ、一定していない。なお、東南部(1・2区)は底面の幅が4.2～5.0 mと比較的広く、後述する祭祀用土器群の分布との関連が推定される。また、西側(6・7区)は0.7～1.3 mと狭い。

なお、北東部と西側の周溝底面では深さ約20 cm程の落ち込み部分があり、底面の起伏が乱れている。これは墳丘の盛土の採取を兼ねた周溝の掘削が不均等に行われた結果と推定される。

周溝内の覆土は11層に分層されるが、基本的にはVI層の堆積を中層として、これを挟む上層(I～V層)、下層(VII～XI層)からなっている。このうちVI層は墳丘側により厚く堆積していること、多量の埴輪破片と中形礫を含む包含層で、植物の腐植による暗色化が認められることから、本層の堆積は埴輪と礫の転落を伴う墳丘崩落によるものと推定される。なお、埴輪は基底部から口縁部まで接合できたものがほとんど無かったことから、この墳丘の崩落は1本の埴輪がいきなり周溝内へ転落するような規模のものではなく、暗色化した土層から窺えるように、その崩落は徐々に進行したものと考えられる。

下層は古墳築造から墳丘崩落までに堆積したもので、A-A'・B-B'間ではVII・VIII層が周溝斜面と底面の一部に認められるだけであるが、D-D'・G-G'間ではIX・X層が斜面～底面全体に堆積しており、周溝の埋没過程に若干の差が認められる。上層は墳丘の崩落がひと段落した後に堆積が始まったもので、G-G'の土層所見から、周溝の埋没は徐々に進行したものと推定される。このことから本墳はかなりの期間にわたって周溝が残存していたと考えられる。

なお、VI層中の礫は埴輪と混在して出土しており、墳丘の崩落に伴って埴輪とともに周溝内に落ち込んだものと考えられる。礫は全体的に出土しているが、特に1・7区で多量に認められた。この礫群の性格については葺石があった可能性を考えたい。

**遺 物** 周溝内から埴輪・土師器・須恵器・鉄製品等が出土している。これらの遺物はVI層より下部で比較的まとまった状況で出土する傾向が窺える。このうち一括性の高い土器群が7箇所(A～G群)で認められた。

埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪の3種類が認められた。これらは完形に近いものが倒れ込んだものではなく、破片が周溝内に流れ込んだような状況で出土している。そのため、調査時には個体として

埴輪を捉えることができたのは僅かに1箇所（G群）だけであった。このことは、調査時には形象埴輪の鶏冠部分の出土で鶏形埴輪の出土は予想されたものの、水鳥・動物埴輪の存在は遺物接合の段階までわからなかったことが端的に示している。なお、各種埴輪の出土状況については遺物の項で述べることにする。

**A群（第40図）** 周溝の南東部（2区）に位置する。土師器の壺・高杯、須恵器の脚付壺・有蓋高杯・甕・甕が、底面直上から一括で出土している。重量のある脚付壺は脚部が正位で出土していたが、有蓋高杯を主とする土器群はバラバラな小破片と化していた。礫をほとんど混じえていない出土状況から意図的に破却した可能性が考えられる。これらは完形に近い個体が多く、周溝祭祀の土器群として考えられる。

**B群（第41図）** 周溝の南東部（2区）に位置する。土師器の高杯、須恵器の蓋杯・甕・甕・短頸壺が底面から15 cm上の覆土中から出土している。これらは底面一墳丘側斜面の変換点に沿って帯状に分布している。蓋杯の杯身、土師器の高杯脚部、短頸壺がほぼ同じ高さの正位で出土していることから、原位置を保っている可能性が高い。本群の器種構成から考えて、これらは周溝祭祀に関連する土器群として理解したい。

なお、本群南側の底面から3 cm上の覆土中から出土した甕(655)や蓋杯の一部は他の土器よりも低い位置から出土しており、本群には若干の時期差があることが考えられる。

**C群（第42図）** 周溝の南東部（2区）に位置する。須恵器の大形甕と甕各1個体が周溝底面から15～20 cmの覆土中から出土している。甕は上半部が胴部内側に落ち込んだ状況で出土している点、遺物が散乱せずにまとまって出土している点から、周溝底に意図的に置かれていた可能性が高い。

**D群（第41図）** 周溝の北東部（3区）に位置する。本群は土師器で構成され、杯・高杯・壺などが底面直上～6 cmの高さで出土している。高杯の脚部が倒れたり、倒立しているほか、破片が散乱している状況から原位置は失われていると考えられる。土器の器種構成からみて祭祀で使用された土器群の可能性が高い。

**E群（第40図）** 周溝の北西部（6区）に位置し、分布状況から2箇所に細分される。北西部では底面から20 cmの覆土中から、土師器の甕、須恵器の杯・甕が出土している。南東部は底面から10 cmの覆土中から、数個の礫と共に須恵器の甕の破片が散乱した状況で出土している。土師器は小破片が1点認められるだけである。本群は周溝の外側斜面の覆土中に位置し、器種構成に調理具(甕)が含まれていること、小破片で散乱する土器が多いことなどから、周溝の外側から廃棄されたものと推定される。

**F群（第42図）** 周溝の西側（7区）に位置する。土師器の壺、須恵器の杯・壺などが周溝の外側斜面の7～17 cmの覆土中から出土している。本群は遺物間の比高差が周溝の傾斜に対応していることから、意図的に置かれたものではなく、周溝外側から廃棄されたものと推定される。なお、本群がVI層中の大形礫とほぼ同じ高さから出土していることから、廃棄の時期は墳丘の崩落開始前後と推定される。

**G群（第42図）** 周溝の西側（7区）に位置する。朝顔形円筒埴輪がほぼ完形で1個体横倒しの状態で出土し、その下側には普通円筒埴輪の上半部2本が潰れていた。周溝の内側斜面に3 cm(口縁側)～13 cm(底部側)の傾斜をもって出土した状況から、墳丘から完形に近い状況で朝顔形埴輪が転落したものと推定される。

上記の土器群のうち、A～C群はTK23～47形式に併行する時期の須恵器を主体とし、古墳の築造時期に近い祭祀用土器群と理解される。しかし、底面からの出土高からA群とB・C群には若干の時間差があった可能性も考えられる。D群は6世紀後半と推定され、古墳築造後も祭祀が断続的ではあるが継続されたものと理解したい。

このほかに、土器が比較的集中して出土している箇所が見られる。このうち、南・南東遺物集中区の中期後半の土器は周溝祭祀に伴う可能性が高い。また、北東・北西・西遺物集中区と、南・南東遺物集中区の外寄り周溝から出土した後期の土器は、周溝内へ廃棄された土器群である可能性が高い。

土器以外の遺物では周溝南側の底面直上から轡、南東部から鉸具・鏃、北東部から刀子、北西部から刀子・馬具の一部、鋤頭が出土している。このうち完形に近い轡は出土状況から周溝内に置かれていた可能性が考えられるが、他の遺物については古墳に伴うものか、周溝に遺棄されたものかは特定できなかった。

**時期** 周溝祭祀の主体となるA～C群の須恵器(TK23～47型式併行)と、南遺物集中区から出土した先行する須恵器(TK208型式)の編年観から、本墳の築造時期は幅をもたせて5世紀後半～6世紀初頭と捉えておきたい。

#### (2)平田里第2号古墳(第37図)

調査地の東側、第1号古墳の南西にほぼ隣接する。北側が攪乱で破壊されているため、南側の周溝の一部が確認できたにすぎない。

**周溝** 周溝は西側が長1.6m、幅0.8m、深さ21～23cm、東側が長2.5m、幅0.8m、深さ10～27cmである。残存部から推定される古墳の規模は墳丘の直径が約7m、周溝を含めた直径は8.5mの円墳である。周溝は南側で途切れているが、近～現代の建物基礎によって攪乱されているため、完周するのか、土橋部をもつものかは不明である。

**遺物** 東側周溝の底面から6cmの覆土中から石製紡錘車が1点、東側周溝底から土師器の壺が正位で出土している。

**時期** 本墳の築造時期は出土土器から古墳時代中期と推定され、第1号古墳に先行する可能性がある。

#### (3)平田里第3号古墳(第37図)

調査地の東側、第2号古墳の南側4mに位置する。本墳は断続する4本の周溝から構成されている。

**周溝** 断続する周溝から推定される古墳の規模は、墳丘の直径が11.9～12.1m、周溝を含めた直径が13.8～14.1mの円墳である。周溝は北側が長1.8m・幅0.8m・深さ19～21cm、東側が長3.2m・幅1.8m・深さ37～48cm、南側が長3.5m・幅1.1m・深さ35～38cm、西側が長6.0m・幅0.9m・深さ22～35cmである。このうち東側の周溝は、幅と深さが他と比べて大きい点で特異である。なお、比較的水平的な遺構検出面でのこのあり方は、周溝に深浅や広狭があった可能性を窺わせる。

**遺物** 南側周溝の西端では底面から6cm浮いて鉄鏃が出土している。東側周溝では底面から30cmの覆土中から土師器の甕3个体(ほぼ完形が2个体)が一括で出土している。この甕は本墳に伴うものではなく、周溝内に廃棄された土器と考えられる。

**時期** 周溝覆土から出土した土師器の編年観(出川南4段階)から、本墳の築造時期は7世紀後半以前と理解されるが、現時点では中・後期の幅の中で大きく捉えておきたい。

## 2. 住居址(第5～36図)

竪穴式住居址が116軒見つかっている。時代別の内訳は古墳時代後期が113軒、平安時代が3軒である。以下では、時代別に住居の概要を述べるにとどめる。なお、各住居址の平面形、規模、面積、主軸方向、カマド(位置・構造)については、一覧表(第3表)を作成しているので参照されたい。

(1)古墳時代の住居址 調査地のほぼ全域に分布しているが、特に1溝～3溝の西側にかけての北寄りに集中している。しかし、北東側は集落に先行して築造された古墳群を意識して避けたのか、住居址の分布が希薄である。

**平面形** 住居の平面形は大きく4つに分類した。その内訳は、方形44軒(42.3%)、不整または隅丸方形28軒(26.9%)、長方形22軒(21.2%)、不整または隅丸長方形10軒(9.6%)である。このうち約3割を占める長方形

系の住居址は長辺が東・西壁になるものが大半であり、長辺が南・北壁になるものは11・73住だけである。このことはカマドが東または西壁に設けられていることに関連し、調理（台所）空間を確保するための工夫が働いている。なお、長方形系に分類した住居址の約8割は、長辺が短辺よりもわずかに長いだけの方形に近いものである。意図的に長方形を指向したと推定されるものに22・23・45・66・73・93住があり、支柱穴から推定される桁と梁は明らかに長方形を呈している。

**規模** 住居の規模は1辺の長さで床面積から5つに大別される。

大形：1辺7 m以上、床面積40 m<sup>2</sup>以上（25・33・86・105・110・114住）

準大形：1辺6.0～6.5 m、床面積30～35 m<sup>2</sup>（36・39・48・57・78・97住）

中形：1辺4～6 m、床面積15～20 m<sup>2</sup>前後

準小形：短辺が約3 m、床面積10 m<sup>2</sup>未満（73・26・68住）

小形：短辺が3 m未満、床面積8 m<sup>2</sup>未満（7・12・40・71・72・104住）

これらは特定地域に集中することなく分散し、おそらくは大～小形住居が数軒と掘立柱建物がひとつの単位を構成していたと考えられる。

**壁・床** 遺構検出面は砂質の黄褐色土である。壁高は10～30 cmと浅いものが多い。なお、調査区東壁の土層観察から確認された98・99住は40 cm以上あることから、本来はもっと深いものと推定される。床面は中央部またはカマドの手前が強く締まっているものが一部で認められた。また、35住では部分的に黄白色の粘土を貼っていた。周溝は31・38・77・96住に見られるが、いずれも一部の壁際を巡っているだけである。間仕切り溝と推定されるものは62・77住で認められた。62住は南壁と支柱穴を区画しており、77住は北西隅を方形に区画している。

床面に炭化した建築材や焼土面が観察されたことから焼失住居と判断したものが10軒（7・8・9・25・33・43・49・56・66・77住）見つかった。このうち、25住は炭化材から桁・梁、垂木の配置状況が窺えるほか、カマドの反対側に位置する壁際で平行する炭化材が確認されており、入口施設と考えられる（第45図）。

**柱構造** ピットの配置関係から、60軒以上の住居址で4本支柱の構造であることが確認されている。本遺跡では他の柱構造は認められなかった。調査区外にかかったり、別遺構に切られてしまって柱構造が不明なものも、おそらくは同様の柱構造が採用されていたと考えられる。なお、住居の大半はカマドの袖よりも内側に梁または桁が位置する柱構造であるが、住居の四隅に柱穴を配置して、広い居住空間を確保した住居址が7軒（12・29・47・77・82・108・120住）認められる。なお、46住の柱穴（P<sub>1</sub>）内から完形の杯が出土している。ピット 柱穴以外に、住居に伴う多数のピットが検出されている。しかし、その性格は不明なものが多い。このうち、62・77住ではカマドと反対側の壁際中央に2基の小さなピットがあり、入口に関連する施設と考えられる。また、ピット内から壺類が出土した住居址が4軒（27・35・66・78住）ある。このうち、27・35・78住ではピットがカマドの脇に位置し、66住もその可能性があることから調理に伴う貯蔵穴の可能性が考えられる。

**カマド** 80軒の住居址でカマドが確認されている。カマドの設置位置は、北壁中央が1軒（69住）、東壁が11軒（7・24・25・27・31・42・51・73・77・95・101住）、西壁が65軒、東・西両壁が3軒（29・30・46住）である。壁中央に位置するものが大半であり、南・北寄りに設置されるものは少数である。

本遺跡のカマドは袖・天井部の構築材（粘土、石組・粘土）と袖基部の地山の削り出しの有無によって4種類に大別される。

その内訳は、粘土カマドが7軒（29住例は2基あるうちの旧カマドであるため、別構造の可能性もある）、地山削り出し・粘土カマドが45軒、石組カマドが6軒（7・30（新）・31・35・69・95住）、地山削り出し・石組カマ

ドが23軒である。なお、石組構造のカマドのうち14・31・44・49・69・74住では天井石が残存していた。

上記のことから、本遺跡では粘土構造のカマドの占める比率が高いといえよう。なお、調査時の所見で火床内とその周辺に礫が認められなかった場合に粘土カマドと判断したが、住居廃絶時に破壊されたり、構築材が持ち出された石組カマドが含まれている可能性もあるので、実際には粘土構造のカマドの比率は若干低くなると考えられる。なお、特殊な構造のものとして、35住のカマドでは右袖が石、左袖が円筒形土器で構築されていた（第46図）。

カマド内に土器の甕がほぼ完形で遺存していた例は3軒（13・28・69住）で確認されている。13住では2個体の甕が入子の状態で出土したほか、28・69住では甕1個体がカマド内に置かれた状態で出土している。このほかに、31・44・74住からも破片ではあるがほぼ1個体分の甕がカマド内から出土している。

**主軸方向** 主軸方向はカマドの位置によって決定されるため、本遺跡では東西に主軸方向をもつものが多い。このほかに、南東—北西(N-70°~78°-W)が9軒(11・13・21・23・74・91・96・97・100住)、北東—南西(N-106°~124°-W)が8軒(26・29・46・48・56・59・79・80住)、南西—北東(N-56°~80°-E)が3軒(27・29・46住)認められる。特異なものでは、7住(N-130°-E)、北壁にカマドをもつ69住(N-5°-W)がある。

**遺物の出土状況** 土器はカマドのある側から集中して出土している。良好な出土状況が確認された住居址としては、14・23・25・27・33・36・44・74・82・122・124住があげられる。これらは一般的に、カマド内と袖脇に土器の甕、カマド周辺に杯・鉢の食器類、住居の隅には壺・甕などの貯蔵具が置かれる傾向が窺える。なお、石製のつき白が44住のカマドの左脇から原位置を保った状態で出土しており、調理具と推定される。

装身具としては、土製丸玉が2軒（74・87住）、滑石製白玉が2軒（8・23住）、耳環が2軒(27・64住)、空玉が1軒（49住）から出土している。このうち、74住はカマド内から丸玉3点が出土しており、カマド祭祀との関連が推定される。また、8・23住もカマドの袖付近からの出土であり、同様の可能性がある。

農工具としては、鎌、刀子、紡錘車、編物用石錘、砥石がある。鎌は4軒（35・43・114・116住）、刀子は3軒(46・66・110住)、砥石は11軒（9・30・33・46・49・55・77・78・95・110・123住）から出土している。紡錘車は土・石製の紡輪と鉄製の紡軸からなる。紡輪は9軒（8・11・30・33・46・49・51・64・124住）、紡軸は4軒（11・78・87・105住）から出土している。これらはカマド周辺から出土する傾向が認められるが、105住では主柱穴（P<sub>3</sub>）の脇から9本の紡軸がまとまって出土している。

編物用石錘は11軒（11・17・33・34・49・50・55・77・82・87・110住）から出土している。カマドとは反対側の壁隅からまとまって出土する傾向がある。なお、77住は石錘の出土地点に接するようにして2本の間仕切り溝があり、作業に関連する遺構の可能性はある。

武器としては、鉄鏃が9軒の住居址（16・17・33・56・87・88・100・107・111住）から出土している。

**集落変遷** 本遺跡の集落は出土土器の編年観（出川南1～4段階）から、4期の変遷が窺える。各段階の住居址の内訳は22頁を参照されたい。集落の初現は6世紀後半（1段階）で、古墳群の西・南側に4軒が確認されている。2段階になると10軒以上に集落規模は拡大する。3段階以降も住居軒数は順次増加し、7世紀後半（4段階）には、20軒以上からなる集落域は4溝の西側まで拡大する。しかし、その後は集落は別所に移動したと推定され、7世紀末から平安時代に至るまで本遺跡では住居址が確認されていない。

## (2)平安時代の住居址

3軒が確認されている。これらは調査地の北西寄りで検出されている。住居の時期は出土土器から108住が8世紀末～9世紀前半（5～6期）、94住が9世紀前半～中頃（6～7期）、103住が10世紀代と推定される。このうち、108・94住は4本主柱で東壁にカマドをもつもので、継続して居住された可能性がある。なお、108

住からは「花」銘の墨書土器5点が出土しており注目される。

### 3. 掘立柱建物址

本遺跡の建物址はすべて方形または長方形を呈する側柱式であり、21棟（遺構番号1～21）が確認されている。個々の詳細については一覧表（第4表）を参照されたい。

建物址の時期については遺構の性格上、まとまった遺物の出土がなく明確にはしえなかったが、古墳時代後期の集落に伴うものと考えられる。建物址の分布は分散傾向にあることから、数軒の竪穴式住居を伴ってひとつの単位を構成していたと考えられる。なお、2棟が重複・近接する建物址（2・3建、10・11建、13・14建、19・20建など）が比較的多いが、屋根の軒幅を考慮すると同時存在の建物とは認められないので、時間的前後関係があったと推定される。おそらく建物址は、一定期間にわたって構築場所が規制されていたものと推定される。建物址の構造は桁・梁の柱間が同数で方形を呈するものが16棟（1間－8棟、2間－5棟、3間－3棟）を占めている。特殊な建物址として、底をもつ2建、棟持ち柱をもつ21建があげられる。

### 4. 土坑・ピット

土坑・ピットは調査期間の関係で十分な調査を実施していない。これらは古墳時代後期に属するものと考えられ、当時の集落景観を考える上で重要な遺構であるが、その性格を明らかにすることはできなかった。

土坑は7基（遺構番号31～37）を検出している。ピットは4地点で集中箇所を捉え、ピット群1～4（個々のピット番号は付けていない）として調査している。なお、明確な柱配置を捉えることができなかったが、ピット群1は2棟の、ピット群2は1棟以上の掘立柱建物址の存在が予想される。

このほかに建物址にはならないが、ほぼ等間隔で連続する、柱痕を伴うピットを柱列（遺構番号1・2）として捉えている。古墳時代の集落に伴う可能性が高いが、性格は不明である。

### 5. 溝址

溝は11本（遺構番号1～11）を検出しているが、詳細な平面測量、土層観察は実施できなかった。溝と住居との切り合い関係をみると、古墳時代の住居址よりも古い5溝、新しい3・6～8溝、平安時代の住居址よりも新しい4・10溝がある。また、2溝は39住よりも新しいが、他の古墳時代の住居には切られている時間関係にある。このうち1～5、9溝は方向性、土層観察から自然流路と考えられる。これに対して、6～8溝は人工の溝と推定されるが、このうち方形に区画された6・7溝は比較的新しい時期の遺構と推定される。また、10溝は現代に掘削された溝である。

本遺跡で特に注目されるのは1・4溝である。これらは古墳時代の住居が溝と距離を置いて建てられていることから、集落の存続期間は溝が完全に埋没することなく、集落を区画する流路として機能していた可能性が考えられる。このことは4溝に伴うと推定される氾濫原が住居址を切っていることから検証される。なお、集落と溝との存続関係については前章に詳述されているので参照されたい。

### 6. その他の遺構

第2次世界大戦に伴う軍需関連の工場施設の基礎部分が多数見つかっている。これらについても現在では把握できない建物遺構として捉えるべきものである。しかし、実際の調査時には攪乱扱いをせざるを得ず、平面測量だけを行っている。一部遺漏はあるものの、これらについては平面図に掲載している。

## 第3節 遺物

### 1. 土器 (第47～103図)

#### (1)古墳時代前期の土器

古墳時代後期の遺構内や検出面からは少数だが古墳時代前期を主体とした遺物が出土している。それらの分布傾向をみると調査区東半部に比較的集中し、近在に該期の遺構が存在する可能性が高い。出土品の状況は悪く断片的なものが多いが、当遺跡は弘法山古墳に近く、同墳出土品と近似するものもあり、重要な資料と言えよう。以下、器種・器形毎に遺物の概要を記すこととする。

**壺** 3点を図化した。54は二重口縁壺の口縁部破片で、大きく開く口縁部形態である。内外面ミガキを施し、薄手で精良なもの。3はやや粗い胎土で厚手である。外反する口縁の端部は外向きに面をつくり、棒状浮紋貼付後、櫛描列点紋を施す。口縁部内面には同工具で矢羽状に列点紋を施紋している。35は底部片で体部が大きく収約し、上げ底の小径の底部に至る。このほか、断片のため図化できなかったが、弘法山古墳出土土器に近似したパレススタイルの壺が存在する。

**台付甕** 脚台部の53は内湾気味の脚部下端に面を有し、内外面ともハケ目調整を行う。

**甕** 25は櫛描紋を施す小形品で、張りの強い体部、外反する口縁部を呈する。頸部の簾状紋を挟んで上下に波状紋を施す。26は外反する口縁端部を上方につまみ上げる。55は張りの強い体部に直開する口縁部が取り付くもので、口縁端部は細く仕上げる。ハケ目調整がなされる。

#### (2)古墳時代中期の土器

第1・2号古墳出土土器の大半が該当する。以下器種分類を行った後、土器群の位置付けをしたい。

##### ①器種・器形

土師器杯・高杯・壺類・甕、須恵器杯・杯蓋・高杯・甕・子持甕・脚付壺・壺・甕が存在する。

##### 【土師器】

**杯** 3点(636・683・684)出土している。いずれも短く外反する口縁部、丸底の形態で、636は頸部がしまり、壺とした方がよいかもしいない。口縁部は短く外反し、内外面ミガキを行う。

**高杯** 杯部は2段成形でA・B2種の形態が認められる。Aは杯底部が水平かやや斜位に直開した後鈍い稜をなして屈折し、内湾気味に大きく口縁部が開くもの(637・640・641・663)で、内外面縦位にミガキを行う。Bは杯底部が大きく内湾気味に開き、口縁部が直立気味のもの(644・645・666)。口縁部と底部の接点は明瞭な稜をなし、内外横位にミガキ調整、645では内面に黒色処理を行っている。

脚部はa～cの3形態が認められる。aは2段成形により、緩く開く柱状部に直開する裾部が取り付くもの(635・642・646～648・663)、bは一段成形で外反して開く短い形態のもの(633・634・644・666)、cは須恵器高杯を模倣したもので直開する脚端部を外方に肥厚させ、三角形透かしを3単位穿つもの(645)である。

杯部と脚部の形態には強い親縁性があり、杯部Aと脚部a、杯部Bと脚部b・cが組み合う。

**直口壺** 1点、口縁部のみ出土している(661)。

**壺** 二重口縁壺の口縁部1点(662)と外反口縁の壺1点(639)が出土している。また唯一第2号古墳の出土品として直口縁の壺(715)が出土している。

**甕** 2点(638・685)が出土している。685は小平底、球形の体部に、くの字状に外反する口縁部が取り付

くものである。口縁端部は面取りし、体部上～中位を左上がり、下位を縦位ないし右上がりにはハケ調整する。

#### 【須恵器】

**杯・杯蓋** 杯身5点(652～654・664・665)、杯蓋6点(625・626・649～651・711)が出土している。杯身の形態は654のみ偏平な底部に立ち上がりの長い口縁部が付く形態でやや古相を呈するが、他は全て底部中央が下方に張り出し、口縁部の立ち上がりも短く内傾するものである。654も含めて口縁端部は内傾して凹面や段をなし、底部の回転ヘラ削りは体部中位までしか及んでいない。

杯蓋も天井部がドーム状に高く張り、回転ヘラ削りは稜近くまで及んでいない。稜はつまみ出しが弱く鈍い。端部は内傾して段ないし凹面をなしている。

**有蓋高杯** 杯・脚部11点(599・613～615・618～624・712)、蓋12点(596～598・607～612・616・617)が出土している。蓋杯に脚を取り付けた形態である。杯部・蓋とも蓋杯と同形態を呈する。脚部は外面にカキ目を施し、透かしは3方である。599のみ古相を呈し4方透かして、脚端部の形状が丸い。蓋のうち596・598のみ立ち上がりが長く偏平な天井部形態を呈する。口縁端部は丸くおさめるか、平坦な面に仕上げる。天井部のヘラ削りも広く、全体に古相を帯びる。あるいは壺の蓋かもしれない。

**無蓋高杯** 1点出土している(667)。体部中位の稜は鈍く突出し、外反する口縁部は端部を丸く仕上げる。脚部は長円形の小さな穴を3単位下方に設ける。

**甗** 4点が出土している(629・655・656・659)。体部はいずれも上部の張る形態で、孔部位置に沈線・波状紋・列点紋等を、それ以下にはカキ目を施す。口縁部は大きく開き、659がやや体部径を下回るものの、ほぼ口径と体部径を等しくする。口縁端部は凹面または段をなし、屈折部の稜は弱い。

**子持甗** 非常に珍しい形態で、少量の破片から推定復元したものである(600)。本体は大型甗の形態をなし、肩部に短頸壺形の小さな壺が6単位前後載ると考えられる。脚台は付加されないらしい。口縁部形態は不明だが、小さな壺と同じ直口縁か屈折口縁であろう。わずかに残存する頸部下端には波状紋が施されている。体部最大径付近に沈線と丁寧な波状紋帯があり、やや上方に孔が穿たれている。

**脚付壺** 有蓋短頸壺に脚台を付加したもので、大小2点が出土している(628・631)。631は小形品で、4方透かしの脚台を有する。壺部には列点文が施紋される。蓋は杯蓋に比べ立ち上がりが長く、平坦な天井部をなす。628は大形品で、壺部外面は加飾されずタタキ目を残す。脚台は半ば沈線化した突帯により上下2段に画され、各段交互に三角形透かしを3単位、および2条の波状紋を配する。蓋は631同様長く直な立ち上がりで平坦な天井部を特徴とし、口径に比して高いものである。

**壺** 657・658の2点が出土する。657は小形の短頸壺である。658は肩の張る体部に外反する口頸部が取り付く広口の形態である。口縁端部は幅広の面をなし、頸部は鈍い突帯に画された2段の波状紋帯を配する。体部は最大径部に波状紋・沈線・列点紋からなる文様帯を置く。内外面の叩き目痕はナデ消される。

**甗** 2点を図化呈示した(632・660)。いずれも強く外反する口縁部と上下に拡張された広い端面を特徴とし、632では口縁直下に鈍い突帯を巡らせる。660の体部は上位が張り、内面の当て具痕はナデ消しされる。

## ②土器群の時期

本項のまとめとして古墳時代中期土器群の位置付けを行っておきたい。

まず第1号古墳は遺物出土状況から該当土器群は4つに分かれる。A群～C群、および南遺物集中区がそれで、前三者は高い一括性の窺えるものである。ではそれぞれの間には時間差が存在するのであるか。各群から満遍なく出土している須恵器に着目すると、A・B群では須恵器蓋杯・高杯に高く張る天井部、鈍い

稜、端部の内傾面ないし段、狭いへら削り等共通した特徴が認められ、ほとんど差がない。陶邑古窯址群の編年〔文献4〕に照らせばこれらの大半はTK23～47型式の特徴を表し、群間での接合関係が存在することから時間的に近接するものとみなされる。C群は杯類を欠くが、やはりA群との接合関係があり、甗の形態はA群のそれに比較してやや古相を帯びるものの大きな違いは認められない。また、3群の周囲から出土した須恵器類（664・665・667等）もTK47型式の特徴を示しており、各群に大きな時間差は認められない。

次に土師器類を見ると、A群およびA～C群周囲からの出土品のうち、高杯A aは杯部の稜が弱く、脚部も低くなっている。黒色処理を伴った新たな形態の高杯Bが組成に加わっていること等からみて、笹沢浩氏による土器編年〔文献3〕のIV期古段階に位置付けられ、伴出する須恵器の編年から6世紀初頭の年代が与えられよう。北東遺物集中区の杯・甗もほぼ同時期であろう。

一方、南遺物集中のグループはどうか。出土遺物が少なく一括性も認定しにくい。土師器を欠くためA～C群との比較も困難だが、597を除く須恵器蓋や高杯脚部に古い様相が認められる。須恵器から見る限りにおいてはTK208型式に併行しA～C群に先行するものの、土器群全体の位置付けは困難である。

最後に第2号古墳出土土器だが、遺物が壺1点のみ時期比定は難しいが、口縁部形態、やや下膨れの器体、精良な胎土と入念な調整等の特徴から笹沢編年のIII期、あるいはそれ以前に位置付けておきたい。

### (3)古墳時代後期の土器

出土遺物の主体をなすものである。住居址、古墳等から出土したもののうち600点余りを図化提示した。これらは住居址の切り合い関係や内容から見て相当の時間差を有する可能性が高い。従ってここでは器種器形について概観、分類を行った上、器種器形の型式変遷と組み合わせの観点から細分を試みることにする。

#### ①器種・器形

土師器杯・鉢・高杯・壺類・横瓶・甗類・甗、須恵器杯・杯蓋・鉢・甗・壺類・瓶類・甗等が見られる。

##### 【土師器】

杯 形態的にA～Sの19種に分類される（第1表）。器形によっては更に法量から細別できるもの（杯A～C、算用数字で細別）、部分的な形態差から細別できるもの（杯I・J、英小文字で細別）がある。これらは大別するならば体部に明瞭な稜ないし段を有するもの（杯I～O）と、中途半端な鈍い稜を有するもの（杯P～R）、さらに稜を有さないもの（杯A～H）となる。多分に視覚的な特徴で分類を行っているため、あるいは不適切なものや誤認もあるかもしれない。

次に後の操作に必要と思われる特徴的な器形として杯I・J・Sを取り上げる。

まず、杯Iであるが、逆台形の形態と内面の段を特徴とする形態で、典型的な形態をI a、内面の段が見られず、形態も丸みを帯びたものをI bとした。金鑄場遺跡での所見〔文献7〕から、I aからI bへの変遷が考えられるが、出土量が少ない。

杯Jは当該期に最も一般的な杯形態の一つで出土量が豊富である。口縁部の形態に3種を認めることができる。a形態は口縁部が長く立ち上がるもので、他に比較して深い形態である。量的に少ない。b形態は稜内外や口縁部の屈曲が著しいもので、a形態と共に薄く丁寧に仕上げられる。c形態は稜や口縁部の屈曲が弱いもので、仕上げの手法も前二者に比較すればやや雑である。これらはa→b→cと形態変遷した可能性があり、後に検討を加えたい。

杯Sは1点のみの出土だが(222)、椀形の形態、他と異なる橙色で薄く緻密な胎土、内面の放射状暗紋等、

畿内における飛鳥時代の杯の特徴を備え、胎土から見て恐らく同地方より持ち運ばれたものと考えられる。

**鉢** 杯に比較して口径、器高の大きいものを鉢とした。口縁部が外反するもの(104・321・500他)、短くくびれるもの(76・411・449・477他)、稜を有するもの(211・572他)等がある。

**高杯** 杯部形態に4種が認められる。A：椀形のもの(259・346他)、B：口縁部が外反するもの(518)、C：内面下端に段を有するもの(163・390・478・675他)、D：外面に稜を有するもの(134・334他)、である。

**壺** 頸部の収約の強い形態Aとあまりしまらない形態Bがある。Aには直口縁のa(203・204・681他)と外反口縁のb(94・228・686他)、頸部のくびれが緩やかで縦長な体部のc(149・230・704他)があり、Bでは口径に比して体部径の大きいa(208・318・377他)、口径と体部径のほぼ等しいb(272・386)、口径が体部径を上回るc(499・680)が認められる。

**小形壺** やや扁球形の器体で頸部のくびれが強いA(135・423・676)、球形の器体に短い口縁部の取り付くB(102・327・368他)、頸部がくびれないC(112・117)、無頸のD(115・116・156・496他)がある。

**横瓶** 珍しい形態で、1点のみの出土である(227)。成形手法はロクロを用いないものの須恵器のそれとほぼ同様で、全面にヘラミガキを施して仕上げている。

**把手付壺** 1点のみ出土した(483)。一般的に鍋とされる形態で角状把手を有していたものと考えられる。

**甕** 形態・調整技法からA～Cの3種に大別される。Aは最も主体的に見られるもので、内外面をヘラ調整し体部の張る形態である。体部の張り方に各種あり、器体中位の張るa(98・341・543他)・b(8・56・95・143・150・339・438・464・575・586他)・c(97・214・299・376他)、器体上位が張るd(34・127・151・408・440他)に細別される。a～cは器体の張りの強さから便宜的に区別したもので、aは張りが強くcは弱い。B(24・168・176・231・340他)は体部が張らない筒状の器体を有するものである。Cは器面調整に刷毛状工具を用いるもので、形態はAに準ずる。体部はc(69・175・262・445・573他)とd(32・243・412・441・587他)の形態が認められる。

千鹿頭北遺跡での分析によれば〔文献5〕、a→b→c→dの体部形態の変化、さらにA→Bへの調整技法の変化が指摘されている。

**小形甕** 甕A・Bを縮小した形態のA(22・82・347・502・580・583他)、同様に甕Bと相似形のB(426・427・503他)の他、体部が球形のC(68・432・433・469他)、器高が低く頸部の収約しないD(42・58・244・295・296他)、台付のE(582)、外来系のF(514・553・595)等が存在する。

小形甕Fはいずれも球形で丸底の体部、外面のハケ目、他と異なる胎土に特徴を見出すことができる。524・595は胎土が近似し淡黄褐色を呈する。553・595は外反する口縁端部を上方につまみ上げ、内面調整は595がナデ、593は横位にハケ目を施した後下半部にヘラ削りを行っている。これらは該期の近畿地方の甕によく見られる特徴で、胎土も在地のものとは異なることから当地域より搬入されたものの可能性が高い。

**甗** 穿孔部のあり方から3種に分類できる。A(33・505他)は直線的に外開し、ミガキを徹底する。底板はなく、体部下端にさな受けの孔が存在する。大小の法量が認められる。B(43・191・362・462他)は小形品で、丸底または小平底の中央に小孔を穿つ。C(421・422・691他)も丸底ないし平底の小形品だが、多孔である。

**円筒形土器** 1点のみ出土した珍しい形態である(213)。全形は不明だが、楕円形の筒状を呈する。内面には粘土紐の積上げ痕と指押え痕が顕著に残され、外面には縦位のミガキが施される。あるいは第1号古墳に関わる形象埴輪の一部の可能性も残されるが、他に住居址からの埴輪の出土がなく後期土器に含めた。

#### 【須恵器】

**杯** 古墳時代に通有の蓋杯をA、古墳時代終末以降、古代に一般化する無台の杯をBとする。杯Aは23点存在する。大半は底部に回転ヘラ削り調整を行い、口縁端部は丸か尖り気味に仕上げ、面取りや段を有する

ものはない。一方口縁部の立上り方にはバリエーションがあり、立ち上がりが高く直立気味の a (196・695・708)、逆に短く内傾気味の c (234・331・401・489)、中間的な b (11・12・15・70・80・364・455・588・694・699・701) に細別可能である。須恵器生産地の研究成果から a → b → c と型式変遷をすることが判明している。

杯 B は 2 点のみの出土で (28・696)、箱形の器体、回転ヘラ削りを施し、やや突出気味の底部をなす。この形態は古墳時代終末期に杯 A と入れ代わるように出現することが判明している。

杯蓋 杯 A と組み合わせる A 14 点、杯 B と組み合わせる B が 1 点存在する。杯蓋 A も杯同様、天井部に回転ヘラ削りを行うが、立ち上がり天井部の境界の処理に次の 3 種が認められる。a (4・197・267・465・698) はつまみ出しにより明瞭な稜を作り出すもので、b (158・233・255・275・313) は鈍い稜かまたは沈線状によるもの、c (319・380・399・693) は立ち上がりから天井部へ稜等を介さず緩やかに移行するものである。杯と同様、大局的な流れとしては a → b → c と変遷することが知られている。

蓋 B (434) は内面に返りを有するもので、偏平な形態である。返りは下方に突出し、つまみの形状は欠損のため不明である。杯の変遷と同様、蓋 A と入れ代わって出現する形態である。

高杯 杯部形態に 5 種が認められる。杯 A を杯部にもつ A (226)、杯蓋 A c を杯部とした B (418)、碗形で口縁部が外反し、体部に 2 条の沈線を付す C (18・162・402・456)、小径の箱形で腰部に稜を有する D (302・365)、外開する形態で中位に 1 条の稜または沈線を有する E (105・200・235・435) である。量的には E が多い。

脚部形態は不明なものが多いが、杯 E に長脚 2 段透かしのものが認められる。

鉢 いわゆるすり鉢形の形態が 1 点出土している (108)。

甕 細頸で長く大きく開く口頸部、肩部の沈線紋を特徴とする。孔部は器体に直接穿孔を行うもの (198・689) と、上向きに張り出させた後穿孔するもの (273・413・414・452) の二者があり、前者が古相と考えられる。

壺類 短頸壺 (195・470)、直口壺 (144・274)、広口壺 (159・437) の 3 種が存在する。短頸壺は小形品である。

提瓶 環状の把手を付すもの (199)、把手がなく長頸で球形に近い体部を有するもの (709) が存在する。

甕 広口で外反口縁のもの (77・205・206・207・542・574) が一般的だが、頸部が強くしまり直口縁をなすもの (700) も認められる。前者には大小の法量が存在するようである。

## ②器種・器形の組み合わせとその時期

各遺構から出土した土器群を比較し、その組み合わせと前後関係を把握したい。各遺構、特に住居址出土資料については、ここでは出土状況の区別なく住居廃絶前後の様相を示す一層位資料として扱うこととする。また、時間等の制約上、図化遺物のみ観察の対象としている。

第 5 表 (別表) に主要な器種・器形の実測個体数を遺構別に示した。器種を土師器杯・甕、須恵器杯に限定したのは、出土量が多く、多様な形態を含み、時間的な指標となるものと考えたからである。

まず、出土量が多く形態差が多様な土師器杯 J のあり方に注目したい。杯 J は a ~ c の細別形態があり、互いにあまり共伴していない。これが時間差に起因するのか検証するため、既に前後関係の明らかな須恵器杯・杯蓋との関係を見たい。第 2 表に土師器杯 J と他器形の共伴件数を示した。須恵器杯・杯蓋と土師器杯 J が共伴する事例が少ない中で敢えて傾向を捉えるなら、土師器杯 J a と須恵器杯 A・杯蓋 A、土師器杯 J c と須恵器杯 A c・杯蓋 A c に親縁性を認めることができよう。また須恵器杯 A b・蓋 A b はその中間的な在り方を示している。このことから、杯 J は a → b → c と変遷するものと捉えられよう。他の器種・器形との関係はどうか。土師器杯 I a が杯 J a に、I b が杯 J b・J c と伴う頻度が高く、須恵器杯と同様、杯 J の前後関係を裏付ける。そのほか、杯 M・N が J a に伴わず、杯 R が杯 J c にのみ伴う点等を指摘できる。

第1表 古墳時代後期土師器杯分類観察表

器形	法 量 (口径×器高cm)	形態の特徴	手法の特徴	実測図No.
杯 A	A1: 6.8~8.4×3.2~4.9 A2: 10.6~15.8×5.6~7.6 A3: 10.6~15.2×3.8~5.8 A4: 12.4~16.2×3.2~3.6	丸底。体部・口縁部は内湾気味に外開する。深い形態(A1)程口縁部の内湾度が大きい。底部は厚手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ、(黒色処理)	A1:27・301・366 A2:185・316・517 A3:5・9・14・38・60・72・75・88・99・100・146・154・186・256・325・345・351・353・389・417・476・546・576・577 A4:178・310・335・538
杯 B	B1: 7.4~7.6×5.8・3.7 B2: 11.0~14.8×5.6~6.9 B3: 11.0~13.1×3.6~4.6	丸底。形態的には杯Aと似るが、口縁端部を外方につまみ出し、深いもの(B2)が多い。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ、(黒色処理)	B1:26・398 B2:220・283・305・420・539・559・560 B3:210・219
杯 C	C1: 10.7~14.0×3.1~4.8 C2: 10.9~19.2×5.3~7.9	丸底。杯A・Bと形態的に似るが、口縁部を外反させる。C1は厚手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ	C1:29・180・181・183・217・428・566・568 C2:7・160・236・344・361・419・548
杯 D	12.6~16.2×5.4~7.4	丸底。腰の張る深い形態で、口縁部を短く外反させる。厚手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ、(黒色処理)	221・224・239・284
杯 E	15.2×6.6	丸底。半球形の体部、短く外折する口縁部を有する。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ、黒色処理	223
杯 F	11.4~14.2×4.0~5.0	やや平底気味の底部から直線的に浅く開いた後、口縁部を短く上方につまみ上げる。厚手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・(ヘラナデ)→横ミガキ	153・174・397
杯 G	7.2~14.2×4.5~5.1	平底。内湾気味に体部・口縁部が立上る。	外面:口縁部横ナデ・底部ナデー(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデー(横ミガキ)	280・303・354・590・669
杯 H	8.2~10.6×3.0~6.3	平底。体部・口縁部は直線的に外開する。厚手。	外面:口縁部横ナデ・ナデ 内面:横ナデ・ナデ	85・87・124・161・252・253・300
杯 I	11.2~19.2×3.8~5.2	直線的に大きく開く体部と平底気味の底部をなす。内面屈折部に稜を有する。内面に稜の明瞭なa、不明瞭なbがある。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ、黒色処理	Ia:128・188・192・671 Ib:109・114・129・173・429・682・697
杯 J	10.0~16.0×2.8~6.7	丸底ないし平底気味。口縁部と底部の境界外面に稜を有する。稜の位置は低く、浅い底部をなす。口縁部は屈曲して内湾気味に外開するが、以下の3形態に細別される。 a:長く外開するもの。 b:屈曲が強いもの。 c:屈曲が弱く直線的。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデー横ミガキ	Ja:179・184・187・190 Jb:111・157・171・209・264・279・294・314・343・358・359・360・367・416・431・471・473・512・557 Jc:107・110・132・218・320・383・415・447・448・458・495・545・558・601・668・707

器形	法 量 (口径×器高cm)	形態の特徴	手法の特徴	実測図No
杯 K	8.0~16.2×5.4~7.0	丸底で深い形態。器体上位に稜があり、口縁部は内傾・内湾。 角状の把手を付加するもの1点あり(459)。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデ→横ミガキ	51・212・304・459・520
杯 L	11.1×4.1	丸底で浅い器形。かなり上位に稜があり、口縁部は短く内傾。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデ→横ミガキ	556
杯 M	9.6~14.4×3.7~5.3	丸底ないし平底気味。器体中位に稜を有し、外反する口縁形態をなす。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→ミガキ 内面:横ナデ・ナデ→横ミガキ、(黒色処理)	37・66・106・245・322・450・474・511
杯 N	12.1~13.0×3.7~4.5	丸底ないし平底気味。器体中～上位に稜があり、口縁部は内湾しつつ外開。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデ→(横ミガキ)	86・172・324・451
杯 O	12.5~18.6×?	丸底ないし平底気味か。大きく開く器体上位に稜があり、口縁部は外反。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデ→横ミガキ、黒色処理	13・189・225・278
杯 P	11.4~12.2×3.8~4.0	平底気味で浅い形態。器体中位および下位に鈍い稜があり、口縁部は外反。厚手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→横ミガキ 内面:横ナデ・ナデ→横ミガキ、黒色処理	130・131・254
杯 Q	11.6~17.0×4.2~4.5	平底気味で腰の張る浅い形態。器体中位に鈍い両があり、口縁部は直立気味。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ 内面:横ナデ・ナデ	123・147・247
杯 R	11.0~13.6×3.9~5.0	丸底。器体中位に不明瞭な鈍い稜を有し、口縁部は外反。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ→(横ミガキ) 内面:横ナデ・ナデ→(横ミガキ)、(黒色処理)	36・52・91・379・382・550・547
杯 S	17.6×5.5	丸底。体部は内湾しつつ大きく開く。口縁端部を短く外方につまみ出す。薄手。	外面:口縁部横ナデ・底部ケズリ 内面:横ナデ→放射状暗紋 胎土:橙褐色を呈し非常にきめ細かく精良	222

次に、土器群の中には杯Jが見られないものが存在する。たまたま組成から欠落した可能性もあるが、杯類を多く有しながら存在しない事例もあり、こうした土器群が杯Jを伴う群と時間的關係をもって存在する可能性が高い。第2表には正確さを期するため少なくとも杯を2点以上含む土器群16例について示した。この中には当然たまたま杯Jが欠落していただけのものも含んでおり、傾向を探りにくいのが、須恵器杯にAaが見られず、逆に新しい形態の杯Bが伴っていること、杯Iとの關係が希薄なこと、杯Jcを伴う土器群と共に杯Rが顕著なことの他、土師器甕においては新しい形態といわれる甕Adや甕Cが組成に加わっており、杯Jを伴う土器群より新しいものと解釈される。

このように、土器群には4つの類型が存在し、須恵器を尺度に前後關係が明らかになった。ここに、これらの類型を段階として捉え、その指標を再度示すと以下のようなになる。

第2表 土師器杯Jと他器形の組み合わせ一覧

分類	件数	土 師 器																				須 恵 器																																															
		杯										甕										杯				杯蓋																																											
		A	A1	A2	A3	A4	B	B1	B2	B3	C	C1	C2	D	E	F	G	H	I	Ia	Ib	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	A	Ab	Ac	Ad	B	C	Cc	Cd	A	Ab	Ac	B	A	Ab	Ac	B																							
Ja	3	5	0	1	3	1	1	0	0	1	4	3	1	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	3	0	0	1	0	0	0	2	1	1	0	0	2	1	1	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0											
Jb	17	14	0	25	12	25	9	0	0	33	25	38	13	0	0	0	0	0	17	40	0	0	0	0	40	0	0	0	5	0	11	0	0	13	0	0	0	9	50	8	0	0	14	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
Jc	11	3	0	0	3	0	3	0	2	1	3	1	2	2	0	1	0	0	4	1	3	1	1	3	2	1	2	0	7	0	6	0	1	3	1	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
J無	18	8	0	0	12	0	27	0	29	33	19	13	25	50	0	25	0	0	33	20	43	20	100	33	50	20	67	0	63	100	11	0	22	0	14	38	8	0	0	4	0	0	14	0	14	0	0	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
		43	50	25	48	25	45	100	57	0	19	25	13	25	0	25	40	86	8	0	14	60	0	11	25	20	33	50	38	0	22	40	22	27	29	13	23	33	20	9	0	8	14	50	14	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

- 1 段階 土師器杯 J a、I a、須恵器杯 A a・杯蓋 A a 等を伴う。
- 2 段階 土師器杯 J b・I b・M・N、須恵器杯 A b・杯蓋 A b を伴う。
- 3 段階 土師器杯 J c・I b・M・N・R、須恵器杯 A c・杯蓋 A b・A c を伴う。
- 4 段階 土師器杯 J・I を伴わない。土師器杯 R、土師器甕 A d・C（特に C d）、須恵器杯 A c・B、杯蓋 A c を伴う。

最後に他の器種・器形のあり方や遺構の切り合い関係等を踏まえ、住居址出土土器群の時期別分布を示すならば以下のようなろう。

- 1 段階 7・8・11・33住
- 2 段階 30・35・46・47・49・50・55・58・63・64・77・87・105住
- 3 段階 14・18・25・27・36・42・56・66・68・69・74・80・82・93・95・96・114・115住
- 4 段階 12・13・16・23・24・26・28・29・38・44・51・57・62・71・72・78・110・120・123・124住
- (1～2 段階) 10・19・20・34・48・60・65・83・84・90・106・107・113・116住
- (1～3 段階) 76・79住
- (2～3 段階) 54・81住
- (2～4 段階) 17・45・67・92住
- (3～4 段階) 39・118住

### ③出川南遺跡における古墳時代後期の土器編年

これまでの操作で得られた4つの段階について、それぞれの土器様相を捉えなおし、本遺跡における土器編年を提示、その年代観についても示しておきたい。

#### 【出川南 1 段階】

この段階は古墳時代後期の居住開始時期にあたり量的には少ないものの、第33号住居址より良好な一括資料が得られている。また第1号古墳の西遺物集中区出土品には本段階の須恵器類が伴う。

**土師器** 食器類は杯 I a・J a・O等の有稜杯に加え、碗形の杯 A・B・C等を主体とする。鉢や高杯も組成に加わるものと考えられる。煮炊具では小形甕・甕・甌が見られ、甕では体部の張るA類を主体に少量のB類が伴うと考えられる。貯蔵形態では土師器小形壺・壺が見られる。

**須恵器** 食器類では杯 A・杯蓋 A・高杯等が伴うが、組成に占める量は少ない。杯・蓋類は立ち上がりや稜のしっかりしたa類が主体となる。高杯は長脚2段透かしで、杯部の稜もしっかりしている。貯蔵具では甌・壺類・提瓶・甕が存在する。甌は口縁部や孔部の手法に、提瓶は把手に古い特徴を残している。

#### 【出川南 2 段階】

この段階はあまり良好な一括資料に恵まれない。住居址の他、第1号古墳北東遺物集中区出土品に本段階

の須恵器類が含まれる。

**土師器** 食器類は杯 I・J に変化が見られ、前者は内面の段や器形の崩れた b 形態が多くなり、後者では口縁部が長く深い a 形態が消滅するようである。そのほか有稜杯には M・N 等新たな形態が加わる。鉢は頸部のくびれる B、他に高杯が少量見られる。煮炊具・貯蔵具は前段階とさほど変化は見られないが、甕 A では体部の張りの弱いもの (A c) が加わってくるようである。

**須恵器** 前段階と同様組成に占める割合は小さい。食器類は須恵器杯 A の口縁部立ち上がりが低くなり、杯蓋においても稜が不明瞭となってくる。貯蔵具類では甕・壺類が見られるが、甕の孔部は外方に突出する。

#### 【出川南 3 段階】

25・36 住等、資料的に豊富である。第 1 号古墳では北東遺物集中区出土品がこの段階の他、北西遺物集中区にも遺物が見られる。

**土師器** 食器類では有稜杯 I・J・M・N が見られ、杯 J は口縁部の屈曲が鈍くなる (c 類)。杯 M・N は前段階より稜を増す。他の形態では杯 A の深い形態 (A2) が見られなくなり、体部に鈍い稜を有する杯 R がこの段階から組成に加わっている。煮炊具は甕 A に体部最大径を上位に有する d 形態が加わり、甕 C が小数見られる。その外甕、小形甕も多く存在する。貯蔵具では壺類が豊富である。この段階には杯 S や小形甕 F 等、近畿地方より搬入された土器が見られる。

**須恵器** 食器類は杯 A の口縁部の立ち上がりが更に低くなり、呼応して杯蓋も稜を消失した A c が組成に加わる。高杯は各種の杯形態が見られる。貯蔵具類は良好な資料が出土していない。

#### 【出川南 4 段階】

23・51 住等で比較的良好な資料が得られている。第 1 号古墳南遺物集中区・北西遺物集中区や第 3 号古墳ではこの段階に下る遺物が出土している。

**土師器** 食器類では有稜杯が少なくなり、特に杯 I・J は姿を消す。杯全体の量も減少する傾向がある。煮炊具は甕 A のほか、ハケ目調整を施す甕 C が顕在化する。両者とも体部上位の張るものが多くなり、特に甕 C に顕著である。小形甕 A や甕は減少している。貯蔵具類も量を減らすようである。

**須恵器** 食器類は須恵器杯 A c、杯蓋 A b・A c の他、杯 B や杯蓋 B が出現する。杯 B は口縁部の外傾度が小さく、また杯蓋 B は内面の返りが下方に突出する古い形態である。量的にも非常に少ない。高杯 E には体部の稜が沈線化したものや鈍いものが見られる。貯蔵具類は壺・甕類が出土している。

#### 【各段階の位置付けと年代観】

松本平における古墳時代後期の土器編年はその資料蓄積のなかったこともあり、直井雅尚氏による千鹿頭北遺跡の土器編年〔文献 5〕が提示されているのみである。近在地域では坂野和信氏による諏訪市金鉢場遺跡出土資料の編年〔文献 7〕、また全県の視野からは長野県史所載の笹沢浩氏の編年〔文献 3〕等が存在する。ここでこれら既存の編年との対比をすると、出川南 1～4 段階はおおむね笹沢編年の古墳時代 4 期新段階～5 期新段階に相当する。また出川南 1～3 段階と坂野編年の金鉢場 I・II 期、直井編年の古墳後期 1～3 段階と出川南 3・4 段階がそれぞれ対応しよう。

次に各段階の年代観について。出川南 1 段階に伴出する須恵器、特に良好なセットの 33 住出土品は立ち上がりの大きい扁平な形態の杯、稜の明瞭な杯蓋、環状の耳を付す提瓶、甕等の特徴から東海の光真寺窯 (東山 44 号窯) 期〔文献 1〕、陶邑古窯址群の TK43 型式〔文献 4〕に併行するものと捉えられ、6 世紀後半～末の年代が与えられよう。一方下って出川南 3 段階に帰属する 36 住から出土した土師器杯 S (222) は、藤原宮編年〔文献 6〕に照らせば、その特徴から〔杯 C〕に相当し、傾向指数 31 の法量は飛鳥 II 段階に相当する。

しかし口縁部外面のミガキの省略等新しい傾向も窺え、飛鳥Ⅱ～飛鳥Ⅲの古い段階、7世紀半ばに位置しようか。出川南4段階は須恵器杯Aが依然残ること、杯Bや高台付杯、返りの消失した蓋が見られないか非常に少ないこと等から一般的な年代観に照らして7世紀末以降には下らないものと解釈される。

このことから、出川南遺跡1～4段階は古墳時代後期、6世紀後半～7世紀後半の年代に位置付けられよう。ただし、各段階の絶対的な時間幅は必ずしも等しいものとは言えない。

西暦	出川南遺跡	笹沢1988	金鑄場遺跡	千鹿頭北遺跡
550	出川南1段階	IV期新段階		
	出川南2段階	V期古段階	金鑄場Ⅰ期	
650	出川南3段階	V期新段階	金鑄場Ⅱ期	
	出川南4段階			古墳後期1段階 古墳後期2段階 古墳後期3段階

#### (4)平安時代の土器

本遺跡においては平安時代の遺構・遺物は希薄で、3棟の住居址から遺物が出土しているにすぎない。以下、長野県埋蔵文化財センター分類・編年〔文献2〕に基づいて遺構毎に記述を行う。

第94号住居址 黒色土器A杯A 1点(490)、須恵器杯A 1点(491)、須恵器壺 1点(492)が出土している。資料が少なく判然としないが、須恵器の形態から7期前後に位置付けられよう。

第103号住居址 灰釉陶器椀(510) 1点のみ出土している。12～14期に位置付けられようか。

第108号住居址 黒色土器A杯A 3点(528～530)、土師器甕B 2点(535・536)、須恵器杯A 2点(526・527)、杯蓋B 2点(531・532)、長頸壺 1点(533)、甕D 1点(534)を図化呈示した。土器様相から見て5～6期に位置付けられる。なお、須恵器・黒色土器の体部側面に「花」の墨書が施されている。

#### 〈参考文献〉

- 1 荻野繁春 1981 「7・8世紀代の須恵器編年—美濃国・尾張国—」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
- 2 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書』4 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 3 笹沢 浩 1988 「古代の土器」『長野県史』全1巻(4) 長野県史刊行会
- 4 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』
- 5 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 6 直井雅尚 1989 「古墳時代後期の土器」『松本市千鹿頭北遺跡』 松本市教育委員会
- 7 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所
- 7 坂野和信 1976 「古墳時代後期土器の時期区分」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—』長野県教育委員会

## 2. 埴輪(第104図～116図)

(1)概要 平田里第1号古墳の周溝内から円筒埴輪(普通円筒・朝顔形)・形象埴輪が出土している。これらの総出土量は700.3kgを計るが、未調査区があることを考えれば、おそらくは総重量1t前後の埴輪が墳丘に樹立していたものと推定される。単純に埴輪1本当たりの重量を7kg(接合復原した円筒埴輪の重量は約6～7kgである)と仮定した場合、本墳には140本前後の埴輪が存在していたことになる。本書ではこれらのうち円筒埴輪78個体、形象埴輪20個体を図化提示している。

(2)図示の方法 本墳の埴輪は口縁から底部まで復原できたものはほとんどない。また、残存部でも完周しないため透孔の単位が特定できないもの、製作時に生じた器形の歪みが大きいもの、凸帯が剝落したりうねりが激しいものなどが多くある。上記のことから埴輪の図化にあたっては拓本を併用した実測法は用いずに、復原実測で行っている。実測図は透孔部分を図上正面としたため、実測にあたっては残存部を本来の位置から移動させたり、反転させたりしたものが多くある。また、できるだけ多くの資料を提示することを目的とした

ため、透孔が欠失している埴輪も図化の対象としている。凸帯の大半は図上復原ができないため、凸帯貼付けに伴うヨコナデの範囲だけを表現しているものが多い。こうした制約から、本書の実測図が個々の埴輪がもつ情報をすべて表現できていないと言いが、別表（第5表）の埴輪観察表と写真図版を参照しながら総合的に埴輪を理解されたい。

### (3)円筒埴輪（第104～112図）

**概観** 普通円筒と朝顔形の2種がある。口縁部の形態はバラエティーに富み、透孔と共に分類の指標となっている。凸帯は9割以上が器面から剥落しており、同一個体で円筒部と凸帯が確認できたものはほとんどない。しかし、凸帯貼り付け時の横ナデ痕から、本墳には1段凸帯と2段凸帯が確認されている。いずれも粘土紐を器面に巡らせてから断続する横ナデで接合しているが、この凸帯が水平に付けられることはほとんどなく、一周するまでに大きなうねりが生じているものが多い。凸帯の断面は不整な台形・長方形、フ字状など多岐にわたっている。なお、図示していないが布目痕(ナデの原体?)のある凸帯の破片2点が出土している。

透孔は1段凸帯では凸帯の下側に、2段凸帯では凸帯間に2～3単位で穿孔される。透孔の形は円形(不整な円または楕円形)と方形(台形または長方形)の2種類があり、前者が大半を占めている。後者は孔の間隔に長短が認められるほか(12)、凸帯の上下に透孔が穿孔されているもの(21)があり特異である。特徴的なものとして小形で不整なハート形透孔がある。これは上方から時計回りで穿孔しようとしたが、切抜きの始点よりも終点付近が高くなったため、始点に合わせて右下がりに工具を動かして穿孔したため生じたものである。この透孔は普通円筒の特定器種にのみ認められる。

底部は安定性を意図したためか、最下部を肥厚させているものが少数ではあるが認められる。また、底面に植物圧痕(葉ではなく、茎の部分)がしばしば観察される。

内面調整については輪積み法による製作時の指頭圧痕がほとんどの個体で観察される。通常はその後に、ハケ目またはナデ(指ナデと板状工具を使用したナデの2種類がある)調整が施される。調整の方向は向かって左上がりの斜位が大半で、部分的に縦位・横位で施されている。

外面調整は1次調整のみのタテハケが大半で、板状工具を使用したナデも僅かに認められる。確実に2次調整が施された埴輪は確認できなかったが、器面から剥落した凸帯の下側ヨコナデ部分にタテハケが認められるものが3点あり、2次調整が施された埴輪も一部はあったと推定される。

なお、48は粘土紐の継目(外高一内低)関係から下半部と判断して図化したが、凸帯の位置が低い点と底部内面がナデ調整されている点から、上半部である可能性がある。この場合、48は「倒立技法」<sup>(1)</sup>で製作されていることになるが、本墳の埴輪の中では他に例はない。

本墳の埴輪は1段凸帯の存在、口縁部・透孔・凸帯の多様な形態、凸帯のうねりや剥落などから、斉一性を欠いた稚拙な印象を受ける。これらが特殊な事例かどうかは資料の増加を待って再度検討したい。

**形態分類** 本墳の円筒埴輪は口縁部と透孔のあり方からA～I種の9種に分類される(挿図参照)。

**A種**：1凸帯2段。口縁部は凸帯から直線的に立ち上がり、上端部で最大径となる。小さな円形透孔が2単位に穿孔される。ハート形の透孔は本種だけに認められる。(2・4・5・6・18・23・27・31・37・38・41・42・65・67)

**B種**：1凸帯2段?。口縁部は凸帯からゆるやかに外反して、口縁端部で最大径となる。透孔の形態・単位は不明である。(28・32・43)

**C種**：1凸帯2段。口縁部は短く外反し、その内面には横ハケが施されるものが多い。筒状にまっすぐ立ち上がる細身タイプ(17・60・63・69)と凸帯から上方が僅かに内傾する太身タイプ(10・24・29・39・44・64・66)がある。比較的大形の円形透孔が2単位または3単位(60)に穿孔される。

D種：1凸帯2段。口縁部は凸帯から上方がいったん内傾した後に緩やかに大きく外半する。比較的大形の楕円形透孔が胴部最大径の部分に2～3単位に穿孔される。(19・33・36・55・58・62・68)

E種：2凸帯3段。筒状にまっすぐ立ち上がった後に、口縁部は屈曲して直線的に外開する。円または小形楕円形の透孔が2単位に穿孔される。(1・9、他に35・47も可能性)

F種：2凸帯3段。上段凸帯までは内傾するが、その上方から口縁部は大きく外反する。楕円形透孔が多く、2単位または3単位(56)に穿孔される。(20・26・34・56・59、他に25・40・45・46も可能性)

G種：1凸帯2段(61)と2凸帯3段(14)がある。底部上方で最大径となった後に、上段凸帯まで徐々に減幅するため下ぶくれの形態を有する。口縁部は大きく外開すると推定される。楕円形透孔が3単位(14)に穿孔される。なお、61の口縁下部には凸帯が巡らされていた可能性がある。(14・61・70)

H種：2凸帯3段。上段凸帯まで僅かに内傾し、その直上で外開するが口縁部の形状は不明である。台形または長方形透孔が3～4単位に穿孔されていると推定される。なお、21では上段凸帯の上下に透孔が穿孔されている。(3・12・21)

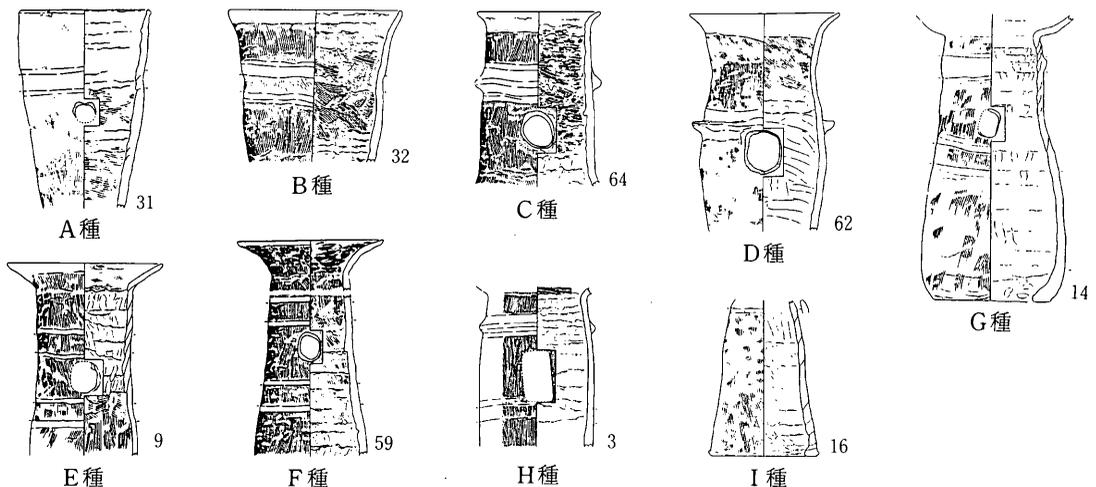
I種：凸帯・段数は不明。底部が最大径となるため、徐々に減幅して先細りした器形を呈する。残存する最上部が口縁様に丸味を帯びていることから、形象埴輪の基台部の可能性がある。(16)

このうち、A～C種が普通円筒埴輪、D～H種までが朝顔形埴輪と推定される。なお、この分類には製作工人の作風ないしはクセがある程度反映されている可能性を指摘しておきたい。本墳の透孔は不整な形態をとるものが多いが、ハート形透孔はA種だけに限られている。このことは、ある工人が特定の埴輪しか作らなかった可能性を示唆するものと考えられる。本墳の円筒埴輪についてはより細かい視点での類型化が必要であり、今後の課題としてあげておきたい。

(4)形象埴輪(第112～116図) 形象埴輪の破片が相当量出土しているが、図化できたのは20点だけである。

異形埴輪(79) 円筒埴輪の一種とも考えられるが、口縁部が特異な形状を呈している。凸帯のかなり下側に小さな円形透孔が2単位に配置されている。口縁部は船首のように片側が先細りしており、この部分を正面とした場合、後ろ側が高くなり正面に向かって徐々に高さが減じているが左右非対称となっている。

動物埴輪(80～88) 鳥が5点、四足動物が4点出土している。鳥形埴輪には水鳥(80・84)と鶏(83)が確認されている。80は断片的ではあるが、全身と円筒部の上半が復原されている。円形透孔は前後に配置さ



挿図 円筒埴輪の形態分類

れていると推定される。84は頭部と推定されるが、刺突による目の表現は片側にしか見られない。83は指頭圧痕で成形された鶏の鶏冠部である。81は後頭部が剥落しているため鶏冠部の有無が不明ではあるが、80と比較して首が太く短い点で鶏の可能性が考えられる。82は鳥の尻尾部分で、円形透孔の一部が残存している。

四足動物と推定される埴輪は指頭圧痕で成形された耳・足の部分であり、種類を特定することはできない。85は左耳と推定される破片で、頭部との接合痕が観察される。87は下端を破損した右足部分で、僅かに湾曲した短足動物であることから犬や猪等の可能性が高い。88は左足首の部分で、爪先が破損している。86は長く直線的な左足部分で、87とは異質である。内部に黒色化した芯棒痕が観察され、植物質の芯棒に粘土を巻き付けて成形していることが窺える。なお、足裏部分には黒斑が認められる。

**樽形毬形埴輪(89)** 断片的な2個体から推定復原したもので、樽形毬を形象した埴輪と考えた。89-1は体部前面と右側の被蓋部に相当するが、口頸部は不明である。注口部には管を模した筒状土製品が連結されており、毬の使用時を表現したものと推定される。89-2は体部左側の被蓋部である。体部は横・斜め方向のナゲ調整が施されているが、被蓋部との接合部分は体部に直交する強いナゲ調整が行われている。

**その他(90~98)** 形象したものが特定できないものを一括して扱う。90・91は僅かに湾曲した方形・板状の破片で、器面にハケ目が観察される。鳥の尻尾部分に該当する可能性が高い。92は湾曲した板状を呈し、内側には本体から剥落した痕跡が認められる。動物(猪?)の立髪部分の可能性はあるが特定できない。93・94は円柱状を呈するもので、特に93は動物の脚部の可能性がある。95は指頭圧痕で凹凸が作り出された帯状のもので、湾曲していないことから凸帯の可能性はなく、動物または器材埴輪の一部を構成していたものと考えられる。96は部分であるため全体の形状は不明であるが、4本の沈線とその下側に低い凸帯が認められる。板状を呈することから動物埴輪よりは器材埴輪の可能性を考えたい。他に板状を呈する97・98がある。

**(5)埴輪の分布(第44図)** 埴輪は周溝の墳丘側斜面から底面にかけて多量に出土し、墳丘からの埴輪の転落をよく物語っている。円筒埴輪は周溝全体から出土しているが、特に周溝西部に集中している。種別による出土地点の偏りは認められない。形象埴輪は周溝の北西部(5・6区)と南部(1区)から出土している。南部からは四足動物の足と樽形毬が出土している。北西部からは鶏・水鳥・四足動物、不明埴輪がまとめて出土している。おそらくは墳丘の北西部に動物を中心とした形象埴輪の祭祀の場があった可能性が高い。

**(6)埴輪の年代観** 平田里第1号古墳の円筒埴輪の特徴は、黒斑と方形透孔の存在である。川西宏幸の埴輪編年<sup>(2)</sup>によれば黒斑はⅢ期までの指標となっている。しかし、長野県内では川西編年Ⅳ期まで黒斑が残ることは、矢島宏雄<sup>(3)</sup>や岩崎卓也<sup>(4)</sup>によって既に指摘されている。また、方形透孔は長野県内では森2号墳・土口將軍塚古墳など善光寺平の中期古墳で認められる。このうち森2号墳は出土した須恵器の編年観からTK216型式併行とされ、5世紀第Ⅱ四半期の築造と推定されているが、その埴輪は方形透孔を主としながら僅かに三角形透孔を伴っている。一方、本墳には三角形透孔は認められず、円形・方形透孔から構成されている点で、森2号墳よりは後出する要素が窺える。また、樽形毬形埴輪は天王檀古墳(福島県)<sup>(5)</sup>から出土しているが、古墳の築造年代は5世紀第Ⅲ四半期に位置づけられている<sup>(6)</sup>。これらのことから平田里第1号古墳の埴輪は5世紀後半代の中で位置づけることが妥当であると考えられる。

註1. 小栗明彦 「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号 國學院大学  
2. 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978  
3. 矢島宏雄 「3. 善光寺平の埴輪」『長野県史跡 土口將軍塚古墳』1987 長野市・更埴市教育委員会  
4. 岩崎卓也 「3 古墳時代の信仰と葬制」『長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物』1988  
5. 山崎義夫 「天王檀古墳の埴輪」『季刊考古学』第20号 1987  
6. 金井塚良一 「人物埴輪の伝播と河内」『古代を考える 東国と大和王権』1994

### 3. 石器・石製品（第117～120図）

古墳時代に属する紡錘車・砥石・敲石・つき臼・編物用石錘・白玉が出土している。

**紡錘車**（1～7） 7点が出土している。石質は結晶片岩が1点（1）あるほかは、滑石が選択されている。紡錘車の形態は最大直径が4 cm 前後の裁頭円錐形を呈するものが多いが、側面に稜をもつもの（5）も認められる。

器面に鋸歯文が線刻された紡錘車は4点あり、いずれも鋸歯文の内側は沈線が斜格子状に充填されている。この鋸歯文は3～5では側面と上面（紡いだ糸が巻かれていく直径が大きい側の面＝実測図では下面）に認められる。また、1は側面に鋸歯文が認められ、破損している上面にも鋸歯文があった可能性は高い。この側面の鋸歯文は1が11単位、3が7単位、5が8単位である。上面は使用による摩滅で鋸歯文が部分的に消失しており、単位の把握はできない。なお、3の上面にはほぼ真円の線刻が2周しており、紡錘車の設計・製作時にディバイダー（コンパス）状の工具が使用されていたことが窺える。

6は側面と上面に、鋸歯文が退化したと推定される綾杉文が数単位と不定形な文様が線刻されている。2・7は側面に鉄製工具（ノミまたは刀子と推定される）で削り成形した製作痕が明瞭に観察される。なお、2の上・下面には孔を中心とする同心円状の線状痕が観察され、製作痕または使用痕と推定される。また、7は平面が楕円形に近いことから、未製品の可能性が考えられる。

**砥石**（26～38） 13点が出土している。石質は凝灰岩と砂岩製が大半を占めており、粘板岩（34）とチャート（37）は各1点が出土している。これらは横断面が方形を呈する定形的な大形品（26・27・29）、扁平で片側に1孔を有する携帯用砥石（34）を除けば、いずれも自然礫の一部に砥面をもつ不定形な砥石である。このうち、36・38ではよく使い込まれた砥面が観察される。なお、28は楕円形の礫の1面に砥面をもつほか、側面には敲打痕が認められる。

奈良時代以降に通有な方形断面の定形的な砥石が少なく、自然礫を素材とする砥石が多いという本遺跡のあり方は、古墳時代中期の山影遺跡の砥石組成と共通しており注目される。

**敲石**（39） 57住から出土したもので、三角柱状の砂岩の両端に敲打痕が観察される。片側は敲打の衝撃で生じた剝離面の稜がつぶれているのに対し、もう一方では剝離はなく敲打による平坦面が形成されている。

**つき臼**（40） 44住から出土した大形品で、34.5×32.6 cmの不整円形を呈し、臼部の深さ12.6 cmを計る。カマドの脇に据えられた状況で出土していることから調理具と推定される。

**編物用石錘** 11軒の住居址から出土している。これらは住居址内から礫がまとまって検出されたため、編物用石錘として認識されたものである。このうち11住と110住では2群の石錘が確認されている。石錘は自然礫をそのまま素材としたものが多く、敲打または剝離によって紐掛け痕が作り出されたものは11・34・77・87住で計5点が確認されただけである。石質はほとんど砂岩で占められているが、チャート・礫岩・輝緑凝灰岩・安山岩・石英閃緑岩・花崗岩も僅かではあるが出土している。各住居址から出土した石錘の出土点数（完形品の点数）と完形品の平均重量は以下の通りである。

11住-9（8）点：242 g・6（6）点：313 g、17住-22（20）点：284 g、33住-9（6）点：281 g、34住-17（15）点：540 g、49住-8（7）点：418 g、50住-15（13）点：617 g、55住-10（9）点：551 g、77住-19（15）点：653 g、82住-6（5）点：342 g、87住-14（10）点：588 g、110住-34（30）点：451 gである。なお、110住は整理段階で2群の石錘を一括処理しており、分離することができなかった。

**白玉**（12～20） 8住から5点（12～16）、23住から1点（17）、第1号古墳の周溝内から3点（18～20）が出土している。石質はいずれも滑石で、表面には研磨による線条痕が明瞭に認められる。

その他 上記の定形的な石器・石製品のほかに、第1号古墳の周溝から黒曜石の石核1点が出土している。

#### 4. 土製品 (第117図)

古墳時代に属する紡錘車と丸玉が出土している。

**紡錘車 (8～11)** 4点が出土している。8は土師質の焼成で、側面にはヘラミガキが施されている。また、表面の一部に黒色の物質が付着しており、漆である可能性が高い。9は須恵質の焼成で、側面と下面はヘラケズリ、上面は孔の周囲に同心円状のユビナデが観察される。2点とも直径が4.5 cm 前後あり、石製紡錘車よりもひと回り大きい。10は土師質の焼成で、径7.9 cm を計る。全面にミガキ調整が施されている。11は土師質の焼成で、約1/4が残存している。

**丸玉 (21～24)** 74住から3点 (21～23)、87住から1点 (24) が出土している。23は穿孔後に両端が押圧されて生じた平坦面を有している。24は表面に黒色処理が施されている可能性が高い。

#### 5. ガラス製品 (第117図)

第1号古墳の周溝から小玉1点 (25) が出土している。色調は淡緑色を呈し、表面には孔軸に平行する気泡の触像が観察される。

#### 6. 金属製品 (第121～123図)

古墳時代に属する鉄製品49点を図化している。この他に調査時に遺物として取り上げた鉄製品があるが、実測不可能な小破片、器種・用途不明の破損品(近代以降の鉄製品が多いと推定される)が多いため割愛した。

##### (1)住居址出土の金属製品

**耳環 (1・2)** 27住と64住から各1点が出土している。いずれも鉄地に薄い銅板が被覆されている。1は金銅環であるが、2は鍍金が剥落しており不明である。

**空玉 (3)** 49住から1点が出土している。片側が残存し、鉄地金銅張りで金鍍金が僅かに観察される。

**鎌 (4～12)** 9軒の住居址から各1点が出土している。鎌身部は4点が確認されている。7・10は広根式で、鎌身断面は平である。前者は平面形が五角形を呈し、浅いが明瞭な逆刺が認められる。後者は平面形が三角形を呈し、鎌身と茎部の境が僅かにくぼむ程度で明瞭な逆刺は認められない。9・11は尖根式で、柳葉形の鎌身部の断面は片丸を呈し、逆刺は認められない。前者は篋被部長が約3.5 cm であるのに対し、後者は7.6 cm 以上を有する長頸鎌である。この他は篋被または茎部の破片である。なお、8は茎部が完存しており、茎部長4.3 cm を計る。

**釘 (13)** 93住から出土したもので、横断面が比較的厚いため釘としたが、鎌の茎部の可能性も考えられる。

**刀子 (14～16)** 14・15は茎部の破片で、後者には柄の木質部が残存している。16はほぼ完形で全長6.0 cm、刃部長2.2 cm、茎部長3.8 cm を計る。本資料は一般的な刀子と比較して余りにも刃部が短く、特殊な工具の可能性もある。茎部は木質部がよく残存し、外径1.7×1.3 cm の楕円形の貴金具が装着されている。

**鎌 (17～21)** 4軒の住居址から5点が出土している。本遺跡の鎌は刃先を右側に置いた場合、着柄のための折り返し部分が上にくる特徴がある。刃部は柄に対してほぼ直行しており、古墳時代中・後期に通有のものである。17・20・21は基部がほぼ同じ大きさで、使用に伴う研ぎの結果、いずれも基部の約3 cm 先から刃部の幅が小さくなっている。

**紡錘車 (22～33)** 4軒の住居址から12点が出土している。いずれも紡軸の部分のみで、11・78・87住は各

1点の出土であるが、105住からは破片にして9点が出土している。これらは石製または土製の紡輪と組み合わせて使用されたと推定される。22・31は軸の先端部であるが、他はいずれも両側が破損している。

**不明鉄製品 (34~36)** 34・35は36住から出土したもので、長4.0~4.3 cm、幅1.7 cmの木葉形の薄い鉄板の下半分を両側から折り曲げた鉄製品である。このうち34はほぼ完形で主軸を揃えた2点が錆着しているが、表・裏面に布目痕が観察されることから、布に包まれていたと推定される。用途不明ではあるが、折り曲げ部分は柄を装着するためのものと推定される。36は111住から出土した棒状の鉄製品で、U字形に折り曲げられた軸部の断面は円形を呈している。

### (2)第1号古墳出土の鉄製品

**鎌 (37~39)** 2区から3点が出土している。37は平刃・長頸の片刃鎌であり、38は柳葉形を呈する鎌身部と篋被部の一部が残存している。39は長頸鎌の篋被部の一部である。

**刀子 (40・41)** 40は3・4区ベルトから出土したもので、刃部端と基部を破損している。棟側は直線的で、小さいながらも明瞭な関が観察される。41は5区から出土したもので、両側を破損している。棟側は僅かな段差で関が認められるが、刃部側の関は不明瞭である。

**鋤・鍬 (42)** U字形を呈する鋤または鍬先の破片1点がトレンチ3から出土している。木質部をはめ込む耳部の片側部分である。本資料は覆土からの出土であるが、本墳に伴うものかは不明である。

**不明鉄製品 (43)** 排土から出土したもので、棒状の鉄製品である。J字状に曲がった片側は先端部が残存している。鎌の基部である可能性があるが特定はできない。

**馬具 (45~49)** 45は周溝南側から出土した鉄製楕円形鏡板付轡<sup>(註)</sup>である。引手は直角に近い屈曲を有している。鏡板は推定27個の円文(直径約2 mm)がほぼ等間隔に内側から打ち出されている。立聞は片側が残存し、長方形の立聞孔には鉤金具が残存している。鉤金具は長方形を呈し、6箇所<sup>(註)</sup>に鋌留めの痕跡が認められる。なお、片側に対応する鉤金具の一部(45-2)が伴出している。

46・47は2区から出土した用途不明の馬具で、同一個体と推定される。46は1本の鉄棒を中央から少しずらして折り曲げた後に数回の捻りを加えながら環を作り出すいっぽう、ずらした部分を折り曲げて片側にも環を作り出している。両側の環には遊環が装着され、その一方の遊環には、途中で湾曲する板状金具が連結されている。47は残りの遊環に連結されていたと推定される板状金具である。48は2区から出土した刺金を伴う鉸具である。49は6区から出土したもので、鉸具の一部と推定される。長方形に折り曲げられた鉄棒に2本の刺金が端部を折り曲げて接続されている。

### (3)第3号古墳出土の鉄製品

鎌1点(44)が出土している。鎌身部は僅かに側辺を欠くだけであるが、篋被部以下が破損している。広根式で、鎌身断面は薄い平である。逆刺は比較的深く、鎌身部の中央最下端には1孔が認められる。

註 坂本美夫 1985 『馬具』 ニュー・サイエンス社

## 第4章 調査のまとめ

今回の平田里古墳群・出川南遺跡の調査では、中期古墳と古墳時代後期を中心とする集落の一端を明らかにすることができた。特に、前者の調査は松本平の古代史の空白を埋めるものとなったが、新たな問題も提起している。そこで、最後に平田里古墳群の成果と課題、今後の問題点を掲げて本書のまとめとしたい。

**遺跡の名称** 今回の調査で確認された3基の古墳は新発見の遺跡であり、一帯の小字名「平田里」（法務局で所蔵する明治31年の土地台帳には「ヒッター」の記載がある）から平田里第1～3号古墳と名付けた。なお、1923年の『松本市史 上巻』に「出川の西方なる鐵道線路のスグ西隣邊にも二三の古墳ありたる由を傳ふ（其邊が昔水引明神のありたる遺址なり又近来多くの弥生式土器を發掘す）」の記載がある。これらが本古墳群に該当するかは明らかでないが、明治時代頃まではこの地域一帯に古墳の墳丘が残存していた可能性が窺える。

**築造年代** 第1号古墳の築造は周溝南側から出土した古式の須恵器の編年観と埴輪の年代観（特に、黒斑・方形透孔を特徴とする円筒埴輪と樽形臄形埴輪）から5世紀後半と考えたいが、最もまとまった状況で出土したA～C群の須恵器は6世紀初頭のものである。そこで、本墳の築造年代は5世紀後半～6世紀初頭の時間幅で捉えることしかできなかった。今後、埴輪の検討や遺物の出土状況の分析を通して年代を特定していくことが課題である。第2号古墳は周溝底から出土した土師器の壺の時期から、第1号古墳よりも先行して築造された可能性がある。この場合は本古墳群が小規模墳から大形墳へと移行した原因・過程の追求が課題となる。第3号古墳は時期の特定ができず、その性格は不明である。

**被葬者** 松本平では5世紀後半段階に古墳築造の画期があり、各地で小規模な古墳（平田里第2号古墳・宮瀨本村古墳・針塚古墳・平畑古墳・向畑古墳群など）が築造され始める。また、この段階以降の北部地域では桜ヶ丘古墳・桃仙園古墳（本郷）や開き松古墳（城山）など高所に立地し、甲冑を副葬品にもつ大形古墳が築造されている。第1号古墳の築造時期はまさにこの画期に位置するが、規模や埴輪を伴う点で小規模な古墳とは性格を異にする一方、他の大形古墳とも分布や立地を異にしている。松本平では中期以降の首長墓の展開が明らかでないが、今後は首長墓の特定、本墳や桜ヶ丘古墳に葬られた人物の性格解明が課題である。なお、本墳については南側の周溝底から出土した鉄製楕円形鏡板付轡を主体とする馬具の存在に注目したい。

**埴輪** 第1号古墳から円筒埴輪と形象埴輪が出土している。後者は人物埴輪こそ見られないものの、鶏・水鳥・四足動物等の動物埴輪が出土しており、県内でも貴重な資料となっている。また、形象埴輪は出土地点が限定されており、墳丘の北西部に埴輪祭祀の場が存在した可能性が窺える。

なお、松本平ではこれまで猫塚古墳（岡田）北側の畑地、岡田西裏遺跡で円筒埴輪の破片が出土している。また、(財)日本民俗資料館には旧・射撃場（沢村）出土とされる円筒埴輪の破片4点が所蔵されている。さらに、故・藤沢宗平は城山周辺で埴輪の破片を発見し、形象埴輪の破片と推定されるものがあったことを報告している（「大門沢川」『ふかし』第2号 1965）。これらは現存する古墳に伴わない断片的な資料であるが、今後は古墳に伴う埴輪資料の増加に期待したい。なお、上記の埴輪がいずれも北部地域からの出土である点は興味深い。

**結語** 本書は従来の松本市の報告書と比べて本文や図版の構成が変則になっている。これは限られた紙数の中で多くの情報を盛り込もうとしたもので諒とされたい。最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までの間、三井不動産株式会社、地元町会、発掘作業員、長野県教育委員会をはじめとする多くの方々からご理解、ご協力を賜りました。記して感謝の意を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対してより一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

第3表 住居址一覧表

単位：cm, m<sup>2</sup>  
面積欄の上段( )は現存値、下段は復元値

遺構No.	平面形	規 模		主軸方向	カマド形態			時期	新旧関係	備 考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
7	方 形	282×320×39	6.21	N-130°-E	石組	東壁中央	—	古墳	8住より新	焼失住居
8	方 形	584×572×13	(26.41)	不 明	不明			古墳	7住より旧	焼失住居 紡錘車・白玉
9	不 明	552×—×20	(18.27)	不 明	不明			古墳		焼失住居 砥石
10	方 形	468×472×8	18.94	N-88°-W	粘土地山	西壁中央	64	古墳	11・20住より新	
11	隅丸方形	560×544×28	(26.24)	N-73°-W	粘土地山	西壁中央	100	古墳	10住より旧	紡錘車・網物用石錘
12	隅丸長方形	280×344×13	7.91	N-80°-W	粘土	西壁北寄	—	古墳	5溝より新	
13	方 形 ?	(400×400×7)	— 19.54	N-75°-W	石組地山	西壁北寄	30	古墳		
14	不 整 隅丸方形	480×484×13	19.75	N-90°-W	石組地山	西壁中央	—	古墳		
15										欠番
16	隅丸方形	(430)×584×27	(21.82)	不 明	不明			古墳		鍬
17	方 形	560×580×20	28.50	N-82°-W	粘土地山	西壁中央	64	古墳		鍬・網物用石錘
18	方 形 ?	(390)×420×17	(6.82)	N-85°-W	石組地山	西壁中央	68	古墳	34土、5溝より新	
19	方 形	488×480×28	20.26	N-85°-W	粘土地山	西壁中央	—	古墳	116住より新	
20	長 方 形	368×312×9	(10.52)	不 明	不明			古墳	10住より旧	
21	方 形 ?	344×(354)×45	(9.82)	N-75°-W	石組地山	西壁中央	100	古墳		
22	長 方 形	340×468×16	13.32	不 明	不明			古墳		
23	長 方 形	424×548×21	19.71	N-70°-W	粘土地山	西壁中央	100	古墳		白玉
24	方 形	420×460×26	15.97	N-105°-E	粘土地山	東壁中央	84	古墳		
25	長 方 形	696×780×32	(42.17) 47.29	N-92°-E	石組地山	東壁中央	28	古墳		焼失住居

遺構No.	平面形	規模		主軸方向	カマド形態			時期	新旧関係	備考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
26	長方形	304×368×24	9.06	N-120°-W	粘土地山	西壁中央	44	古墳	9建より新	
27	隅丸方形	400×380×22	12.90	N-80°-E	石組地山	東壁中央	96	古墳	89住より新 9建より旧	耳環
28	方形?	300×(280)×29	(6.56)	N-85°-W	粘土地山	西壁中央	108	古墳	87・113住より新 6溝より旧	
29	長方形	348×468×29	13.81	新N-73°-E	石組・地山	東壁北寄	—	古墳	30住より新	
				旧N-107°-W	粘土	西壁南寄	68			
30	隅丸長方形	500×588×35	(22.44)	新N-85°-E	石組	東壁中央	100	古墳	29住、7溝より旧	紡錘車・砥石
				旧N-95°-W	石組・地山	西壁中央	—			
31	隅丸方形?	322×(308)×18	(7.87)	N-113°-E	石組	東壁中央	100	古墳		
32										欠番
33	隅丸方形	780×784×42	53.66	N-97°-W	粘土地山	西壁中央	58	古墳	6溝より旧	焼失住居、鎌・砥石 紡錘車・網物用石錘
34	不明	(80)×368×20	(2.17)	不明	不明			古墳	35住より旧	網物用石錘
35	長方形	416×562×33	20.59	N-90°-W	石組	西壁南寄	224	古墳	34住より新	カマド袖に円筒形土器 鎌
36	方形	576×608×39	30.27	N-90°-W	石組地山	西壁中央	120	古墳	114住、2溝より 新	
37	不整長方形	332×388×17	10.94	不明	不明			古墳	2溝より新	
38	不整 隅丸方形	568×534×29	25.66	N-90°-W	石組地山	西壁中央	—	古墳	39住、2溝より新	
39	方形?	(408)×648×17	(13.18)	不明	不明			古墳	2溝より新 38住より旧	
40	長方形	232×328×20	6.07	N-90°-W	石組地山	西壁南寄	88	古墳		
41	長方形	484×552×20	23.34	N-92°-W	粘土地山	西壁中央	68	古墳		
42	方形	408×424×15	14.94	N-98°-E	不明	東壁中央	—	古墳		
43	隅丸長方形	396×444×48	13.36	N-85°-W	粘土地山	西壁中央	184	古墳		焼失住居 鎌
44	隅丸長方形	492×560×22	24.23	N-95°-W	石組地山	西壁中央	40	古墳	114住より新	つき白
45	長方形	340×486×11	14.54	不明	不明			古墳	46住より新	

遺構 No	平面形	規 模		主軸方向	カマド形態			時期	新 旧 関 係	備 考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
46	長 方 形	440×500×20	(16.47)	新N-124°-W	粘土・地山	西壁中央	—	古墳	47住、2溝より新 45住より旧	紡錘車・砥石・刀子
			17.51	旧N-56°-E	不明	東壁中央	—			
47	方 形	(544)×(564)×20	(12.92)	N-90°-W	粘土 地山	西壁 中央	—	古墳	2溝より新 46住より旧	
48	長 方 形 ?	536×628×20	(21.80)	N-106°-W	粘土 地山	西壁 中央	64	古墳		
49	隅丸方形 ?	504×510×20	(20.21)	N-90°-W	石組 地山	西壁 中央	38	古墳	50住、6溝より旧	焼失住居、空玉・砥石 紡錘車・網物用石錘
50	隅 丸 方 形	532×556×17	(26.19)	N-90°-W	石組 地山	西壁 中央	—	古墳	49住より新 67住、6・7溝より旧	網物用石錘
51	方 形	460×476×16	(17.42) 19.06	N-95°-E	粘土 地山	東壁 中央	56	古墳	52住、2溝より新	紡錘車
52	隅丸長方形	356×(440)×22	(7.29)	不 明	不明			古墳	2溝より新 47・51住より旧	
53	方 形	328×364×23	(10.18) 10.52	N-92°-W	粘土 地山	西壁 中央	20	古墳		
54	隅 丸 方 形	476×492×32	20.59	不 明	不明			古墳	2溝より新	
55	隅 丸 方 形	608×560×22	(28.12) 28.70	N-86°-W	粘土	西壁 南寄	108	古墳	60住より新	砥石・網物用石錘
56	隅 丸 方 形	416×492×26	15.55	N-117°-W	石組 地山	西壁 中央	—	古墳	3溝より旧	焼失住居 鏝
57	隅 丸 方 形	628×624×25	(33.33) 34.17	N-93°-W	石組 地山	西壁 中央	100	古墳	61住より新	敲石
58	隅 丸 方 形	500×476×45	(20.72) 21.18	不 明	不明			古墳		
59	方 形 ?	364×—×10	—	不 明	不明			古墳		
60	長 方 形 ?	416×468×31	(9.17)	不 明	不明			古墳	14建より新 55住、3溝より旧	
61	方 形 ?	(144)×(452)×25	(4.81)	不 明	不明			古墳	57住より旧	
62	隅 丸 方 形	488×(492)×25	(19.48) 21.70	N-92°-W	粘土 地山	西壁 中央	—	古墳		
63	方 形	508×510×17	22.92	N-98°-W	粘土 地山	西壁 中央	10	古墳		
64	方 形	546×584×31	26.65	N-94°-W	粘土 地山	西壁 中央	56	古墳	65・115住より新 7溝より旧	耳環・紡錘車
65	方 形 ?	436×(344)×17	(10.79)	N-92°-W	粘土 地山	西壁	88	古墳	115住より新 64住より旧	

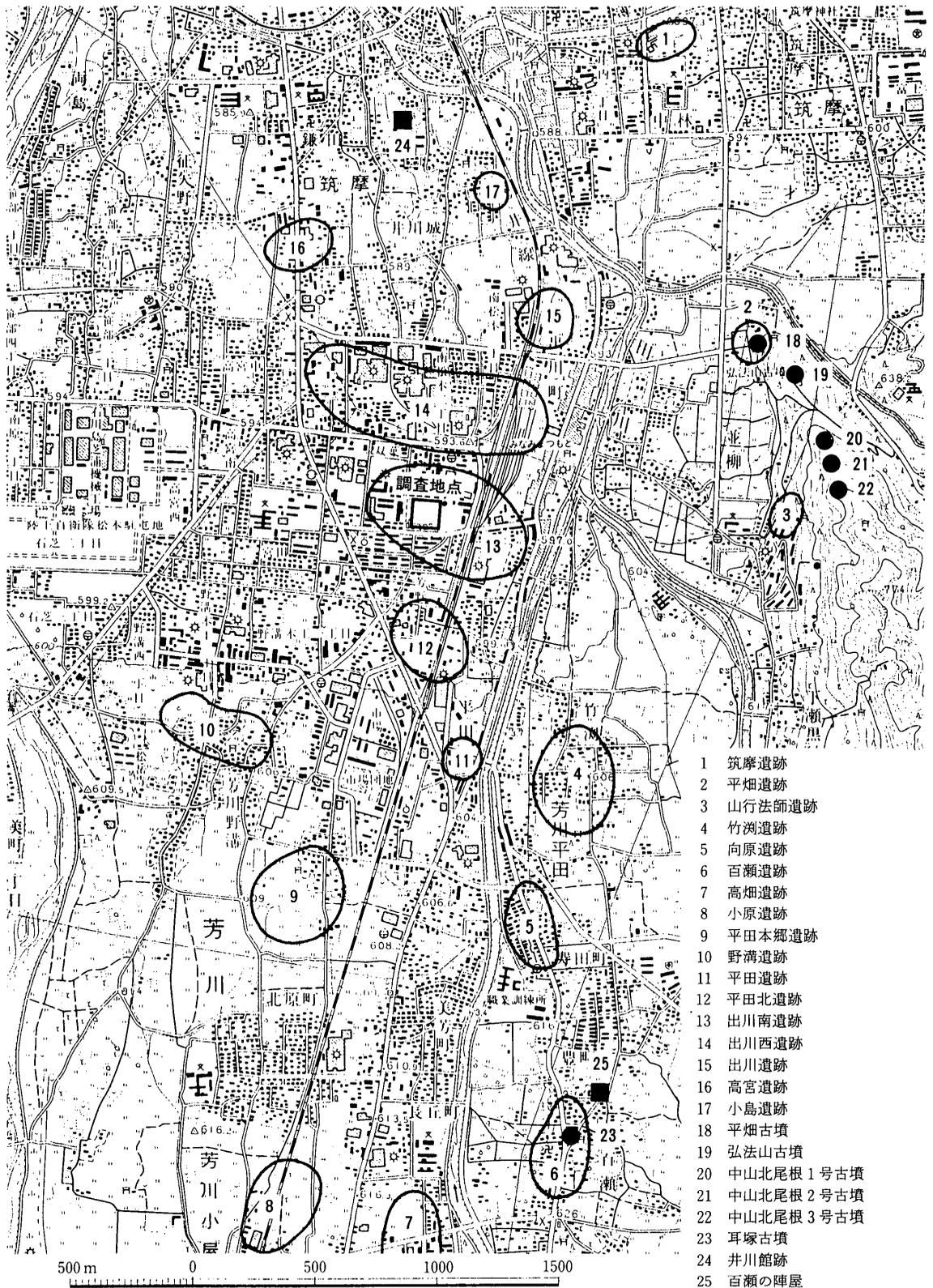
遺構 No.	平面形	規 模		主軸方向	カマド形態			時期	新 旧 関 係	備 考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
66	長 方 形	(368)×556×10	(18.01) 18.37	不 明	不明			古墳		焼失住居 刀子
67	方 形	520×504×23	(23.01)	N-83°-W	粘土 地山	西壁 中央	—	古墳	92住、7溝より旧	
68	隅丸長方形	308×376×22	9.63	不 明	不明			古墳	69住より新	
69	隅丸方形	408×(352)×28	(5.17)	N-5°-W	石組	北壁 中央	117	古墳	68住より旧	
70	方 形 ?	448×(356)×30	(11.87)	N-100°-W	粘土 地山?	西壁?		古墳		
71	長 方 形	280×344×10	(7.80)	N-77°-W	粘土	西壁 北寄	—	古墳	72住より新	
72	長 方 形	260×316×10	(6.68)	N-80°-W	粘土 地山	西壁 南寄	44	古墳	71住より旧	
73	長 方 形	376×304×31	(8.38) 9.80	N-115°-E	粘土 地山	東壁 中央	112	古墳	3溝より旧	
74	方 形	456×462×32	16.74	N-71°-W	石組 地山	西壁 中央	46	古墳	3溝より旧	丸玉
75	不 明	540×(130)×21	(5.49)	不 明	不明			古墳		
76	隅丸方形	456×480×18	18.54	N-84°-W	粘土 地山	西壁 中央	12	古墳		
77	長 方 形	386×496×18	16.76	N-90°-E	粘土 地山	東壁 南寄	32	古墳		焼失住居 砥石・網物用石錘
78	隅丸方形	622×590×20	(29.93) 32.04	N-99°-W	石組 地山	西壁 中央	—	古墳		紡錘車・砥石
79	方 形	412×424×15	15.01	N-114°-W	石組 地山	西壁 北寄	24	古墳		
80	方 形	424×428×18	14.79	N-123°-W	粘土 地山	西壁 中央	32	古墳		
81	隅丸長方形	380×(512)×10	(13.34)	N-95°-W	粘土 地山	西壁 中央	36	古墳		
82	方 形	502×532×16	(20.90)	不 明	不明			古墳		網物用石錘
83	方 形	380×408×15	13.53	N-87°-W	粘土 地山	西壁 中央	16	古墳	84住より新	
84	方 形	490×496×11	(21.85)	N-80°-W	粘土 地山	西壁 北寄	9	古墳	83住より旧	
85	方 形 ?	(144)×(368)×15	(4.53)	不 明	不明			古墳	86住より旧	

遺構 No.	平面形	規 模		主軸方向	カマド形態			時期	新 旧 関 係	備 考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
86	不 明	—×(706)×11	—	N-85°-W	粘土 地山	西壁 中央?	36	古墳	85住より新	
87	隅丸方形	492×528×40	(21.86)	N-88°-W	粘土 地山	西壁 中央	32	古墳	90・113住より新 28住より旧	丸玉・鍬・紡錘車 網物用石鍬
88	方 形 ?	(316)×(304)×25	(7.53)	N-90°-W	粘土 地山	西壁 中央?	36	古墳		鍬
89	不 明	(127)×(208)×8	(1.72)	不 明	不明			古墳	27住、9建より旧	
90	長 方 形	(348)×568×30	(3.80)	不 明	不明			古墳	87・113住より旧	
91	方 形 ?	(140)×(356)×42	(3.86)	N-73°-W	粘土 地山	西壁 中央	132	古墳		
92	方 形 ?	472×(172)×15	(7.14)	不 明	不明			古墳	67住より新	
93	隅丸長方形	370×516×33	16.34	N-83°-W	粘土 地山	西壁 中央	120	古墳		
94	方 形	388×394×17	12.70	N-100°-E	石組 地山	東壁 中央	56	平安	95住より新	
95	不 整 方 形	404×452×33	(10.48)	N-115°-E	石組	東壁 中央		古墳	94住より旧	砥石
96	方 形	476×508×23	20.59	N-78°-W	粘土	西壁 中央	116	古墳	118住より新	
97	方 形	588×624×19	32.54	N-70°-W	石組 地山	西壁 中央	24	古墳		
98	不 明	—×275×50	不明	不 明	不明			古墳		調査区東壁で土層確認
99	不 明	—×404×40	不明	不 明	不明			古墳		調査区東壁で土層確認
100	隅丸方形	404×416×24	(13.87)	N-70°-W	石組 地山	西壁 中央	16	古墳		鍬
101	不 明	————	—	不 明	粘土 地山	東壁 中央?	180	古墳		
102	方 形 ?	272×(108)×7	—	不 明	粘土?	西壁 中央	46	古墳		
103	方 形	232×264×8	5.17	N-88°-W	粘土 地山	西壁 中央	32	平安	4溝より旧	
104	方 形 ?	(184)×268×7	—	不 明	不明			古墳		
105	隅丸方形	658×738×11	43.80	N-93°-W	粘土 地山	西壁 中央	84	古墳		紡錘車

遺構No.	平面形	規模		主軸方向	カマド形態			時期	新旧関係	備考
		東西辺×南北辺×深さ	床面積		構造	位置	煙道(長)			
106	方形	352×366×11	11.13	N-82°-W	粘土地山	西壁北寄	110	古墳	107住より新	
107	隅丸方形	344×460×24	(10.95) 12.95	N-65°-W	粘土地山	西壁北寄	16	古墳	106住、37土より旧	鎌
108	不整形	450×460×26	19.26	N-85°-E	石組	東壁中央	32	平安	10溝より旧	
109	隅丸方形?	386×(122)×19	(3.77)	不明	不明			古墳		
110	方形	698×676×29	(28.64)	N-89°-W	石組地山	西壁中央	58	古墳	111住より新	砥石・網物用石錘刀子
111	長方形	352×468×45	14.82	不明	不明			古墳	110住より旧	鎌
112	隅丸方形?	536×(230)×18	(10.28)	不明	不明			古墳		
113	方形?	580×(560)×38	(7.79)	N-95°-W	粘土地山	西壁中央	68	古墳	90住より新 28・87住より旧	
114	長方形	804×932×20	(50.25) 67.53	N-90°-W	石組地山	西壁北寄	—	古墳	36・44住、柱列2より旧	鎌
115	不明	(348)×(144)×21	(3.70)	不明	不明			古墳	64・65住より旧	
116	隅丸方形	428×396×16	15.01	不明	不明			古墳	19住より旧	鎌
117	不整形長方形	400×480×15	15.94	不明	不明			古墳	13建より旧	
118	方形?	354×(322)×30	(9.76)	不明	不明			古墳	96住より旧	
119	方形?	334×(184)×28	(4.66)	N-87°-W	粘土地山	西壁中央	88	古墳		
120	長方形	340×396×36	10.86	N-103°-W	粘土地山	西壁北寄	74	古墳	8溝より旧	
121	方形?	(414)×(352)×25	—	N-98°-W	粘土地山	西壁中央	10	古墳		
122	方形?	(256)×568×17	(9.25)	N-100°-W	粘土	西壁中央	92	古墳		
123	隅丸方形	508×516×14	21.19	N-91°-W	粘土地山	西壁中央	36	古墳		砥石
124	不整形	504×476×23	19.55	N-95°-W	粘土地山	西壁中央	76	古墳		紡錘車

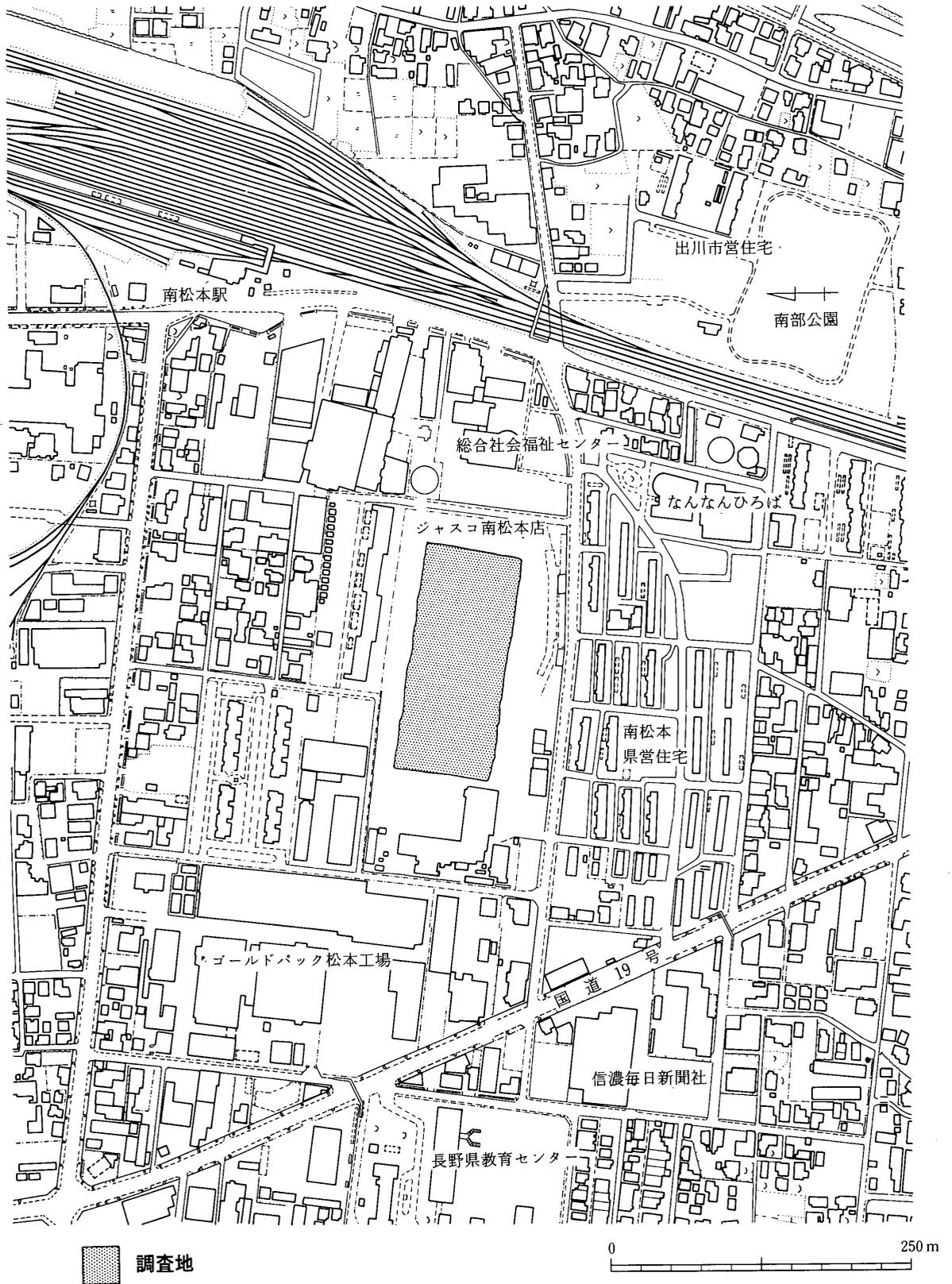
第4表 掘立柱建物址一覧表

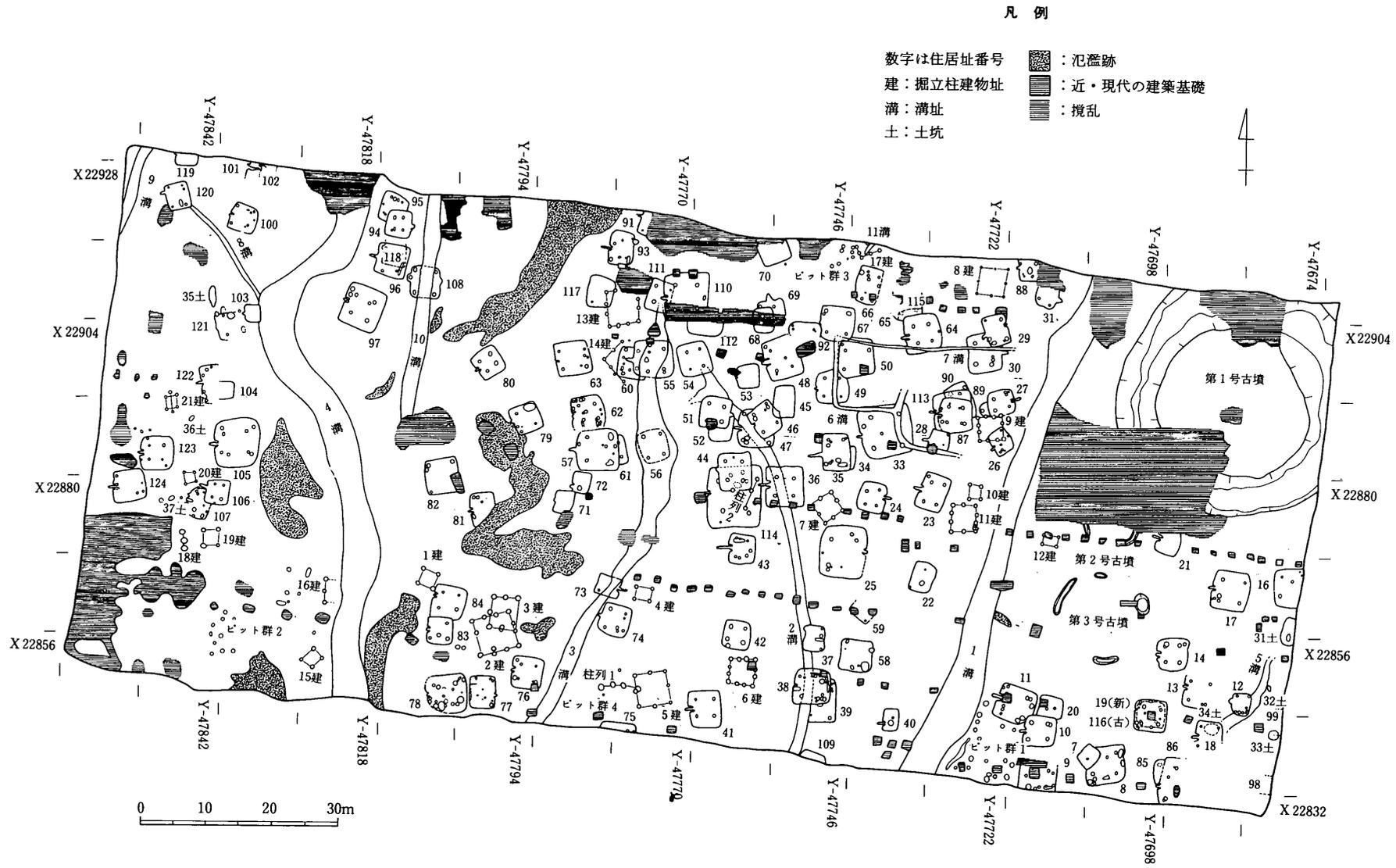
遺構No.	柱配置(間)	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方向	柱間寸法		新旧関係	備考
					桁(m)	梁(m)		
1	1×1	2.4×2.4	5.6	N-17°-E	1.8	1.8		柱痕
2	主3×1 庇3×1	6.1×3.5 5.8×2.0	20.8 11.6	N-15°-W	1.2~1.6 1.3~1.4	2.8 1.3	3建より新	庇付き建物
3	2×2	5.0×4.0	18.7	N-5°-E	1.5~1.7	1.1~1.4	2建より旧	柱痕
4	1×1	2.4×1.9	4.5	N-10°-E	1.8~1.9	1.2~1.4		柱痕
5	2×2	4.8×4.8	22.9	N-10°-W	1.7~2.2	1.7~2.0		柱痕
6	3×3	4.1×3.8	14.2	N-4°-E	0.5~0.9	0.4~0.7		柱痕
7	2×2	3.7×3.5	(12.0)	N-35°-W	1.0~1.3	1.0~1.2		柱痕
8	2×2	4.1×4.0	16.3	N-11°-E	1.6~1.8	1.5~1.8		柱痕
9	3×3	3.6×3.6	12.5	N-5°-W	0.5~0.9	0.4~0.9	27住より新 26住より旧	柱痕
10	1×1	2.1×1.8	3.6	N-5°-E	1.3~1.6	1.2		柱痕
11	3×2	4.0×3.8	14.3	N-5°-E	0.5~0.9	0.9~1.4		柱痕
12	1×1	2.3×1.5	3.2	N-10°-E	1.6~1.7	0.9~1.0		柱痕
13	3×3	5.3×4.9	(23.9)	N-4°-W	0.9~1.3	0.9~1.0	117住より新	柱痕
14	(2×2)	(3.9×4.5)	—	N-40°-W	1.1	1.4~1.5	60住より旧	柱痕
15	1×1	2.5×1.9	4.4	N-45°-E	1.5~1.9	1.4		柱痕
16	(2×—)	(3.6)×—	—	—	1.0~1.1	—	4溝より旧	柱痕
17	(2×1)	(3.1×1.7)	—	N-27°-W	0.8~0.9	1.2		柱痕
18	(2×—)	(2.4)×—	—	—	0.4~0.5	—		柱痕
19	1×1	2.4×2.4	5.6	N-4°-E	1.7~1.9	1.5~1.6		柱痕
20	1×1	1.8×1.7	2.4	N-8°-W	0.9~1.6	1.2~1.7		柱痕
21	1×1	1.9×1.6	3.1	N-8°-W	1.4~1.5	1.2~1.3		棟持ち柱・柱痕



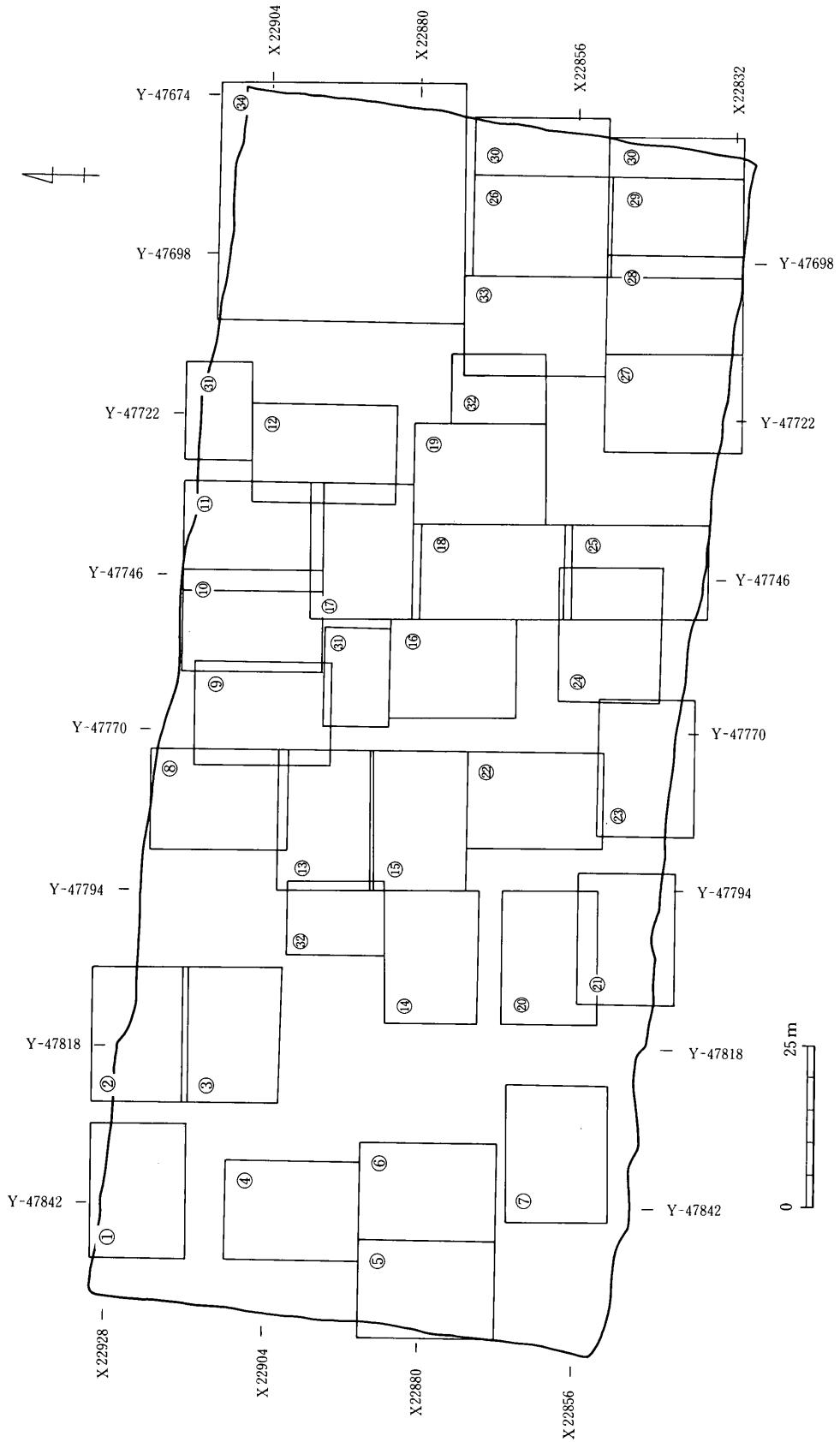
- 1 筑摩遺跡
- 2 平畑遺跡
- 3 山行法師遺跡
- 4 竹淵遺跡
- 5 向原遺跡
- 6 百瀬遺跡
- 7 高畑遺跡
- 8 小原遺跡
- 9 平田本郷遺跡
- 10 野溝遺跡
- 11 平田遺跡
- 12 平田北遺跡
- 13 出川南遺跡
- 14 出川西遺跡
- 15 出川遺跡
- 16 高宮遺跡
- 17 小島遺跡
- 18 平畑古墳
- 19 弘法山古墳
- 20 中山北尾根1号古墳
- 21 中山北尾根2号古墳
- 22 中山北尾根3号古墳
- 23 耳塚古墳
- 24 井川館跡
- 25 百瀬の陣屋

第2図 調査範囲

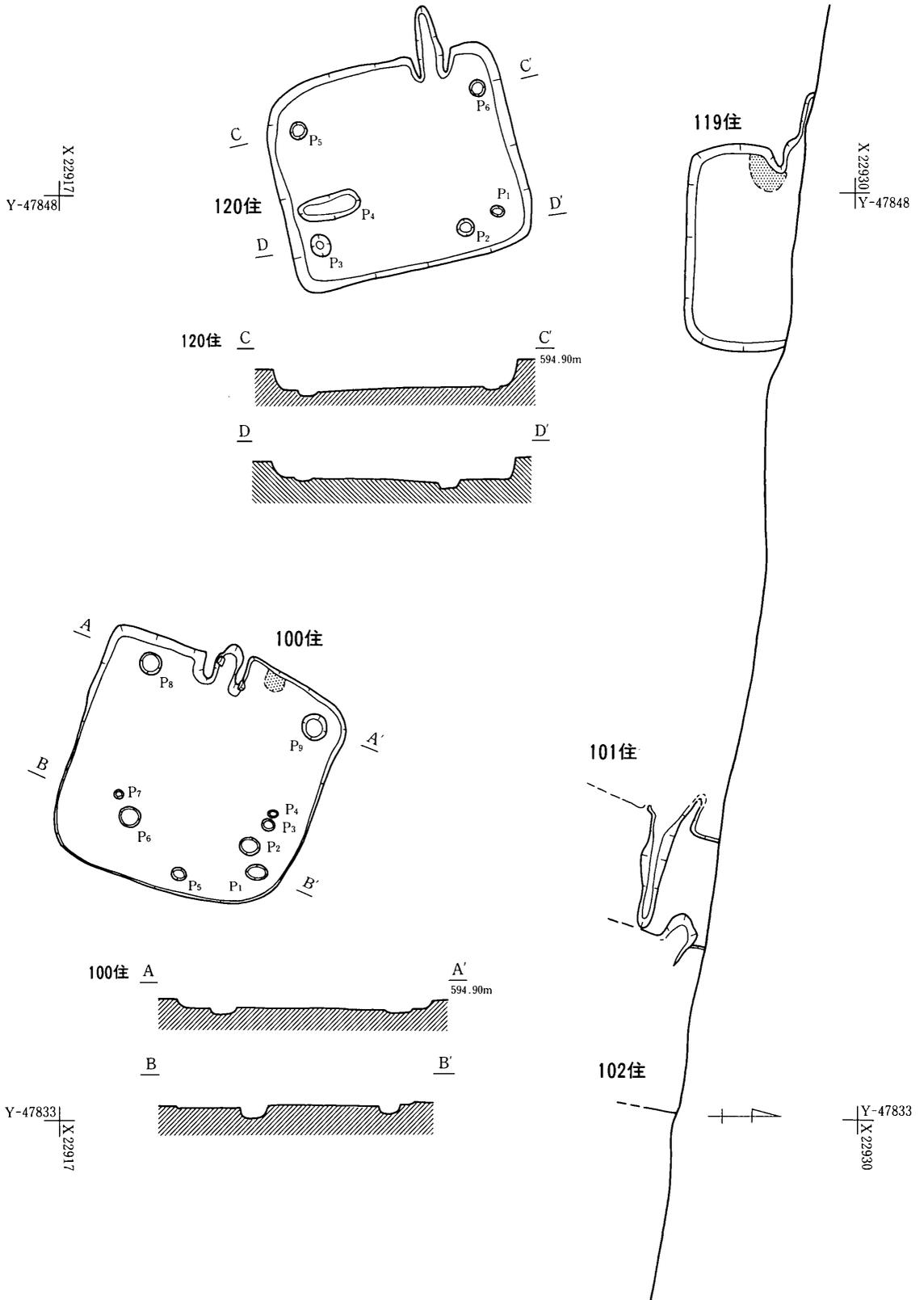


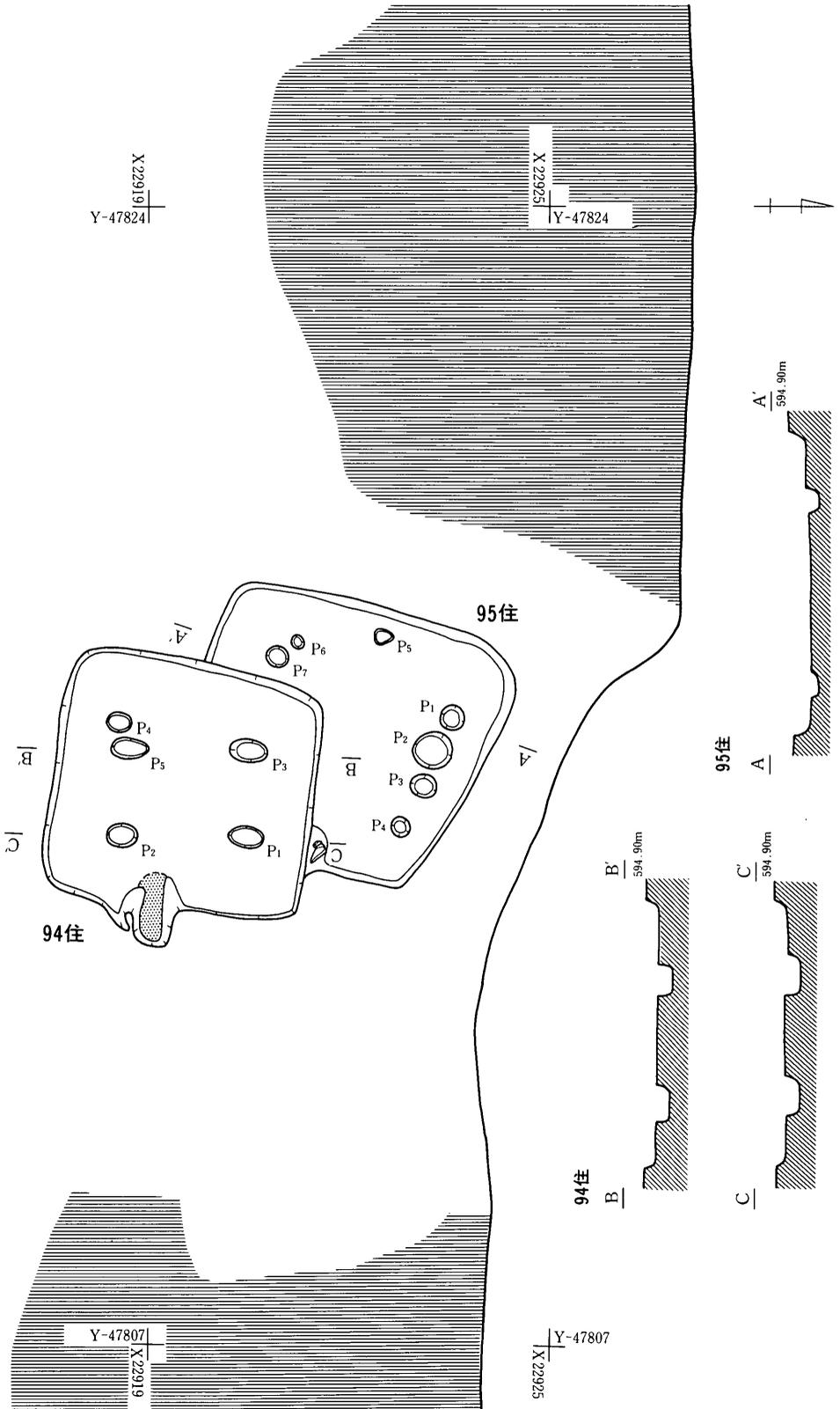






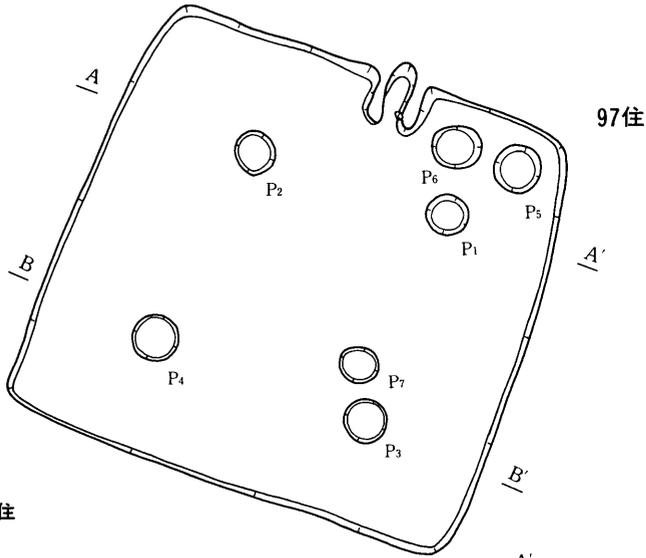
第5図 遺構実測図1





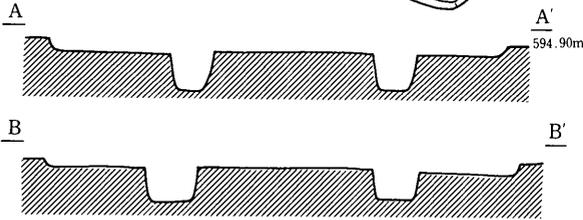
第7図 遺構実測図3

X22909  
Y-47826

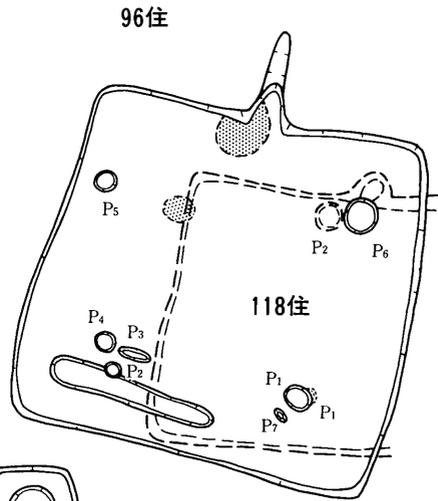


97住

97住



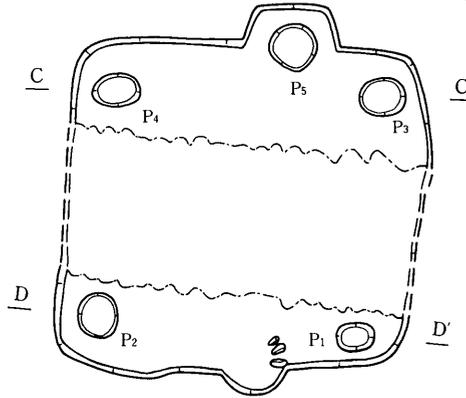
X22917  
Y-47820



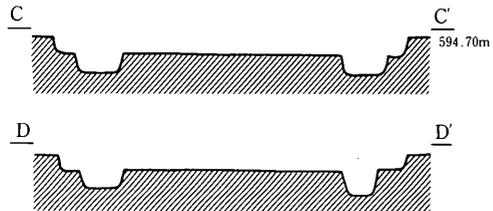
96住

118住

108住

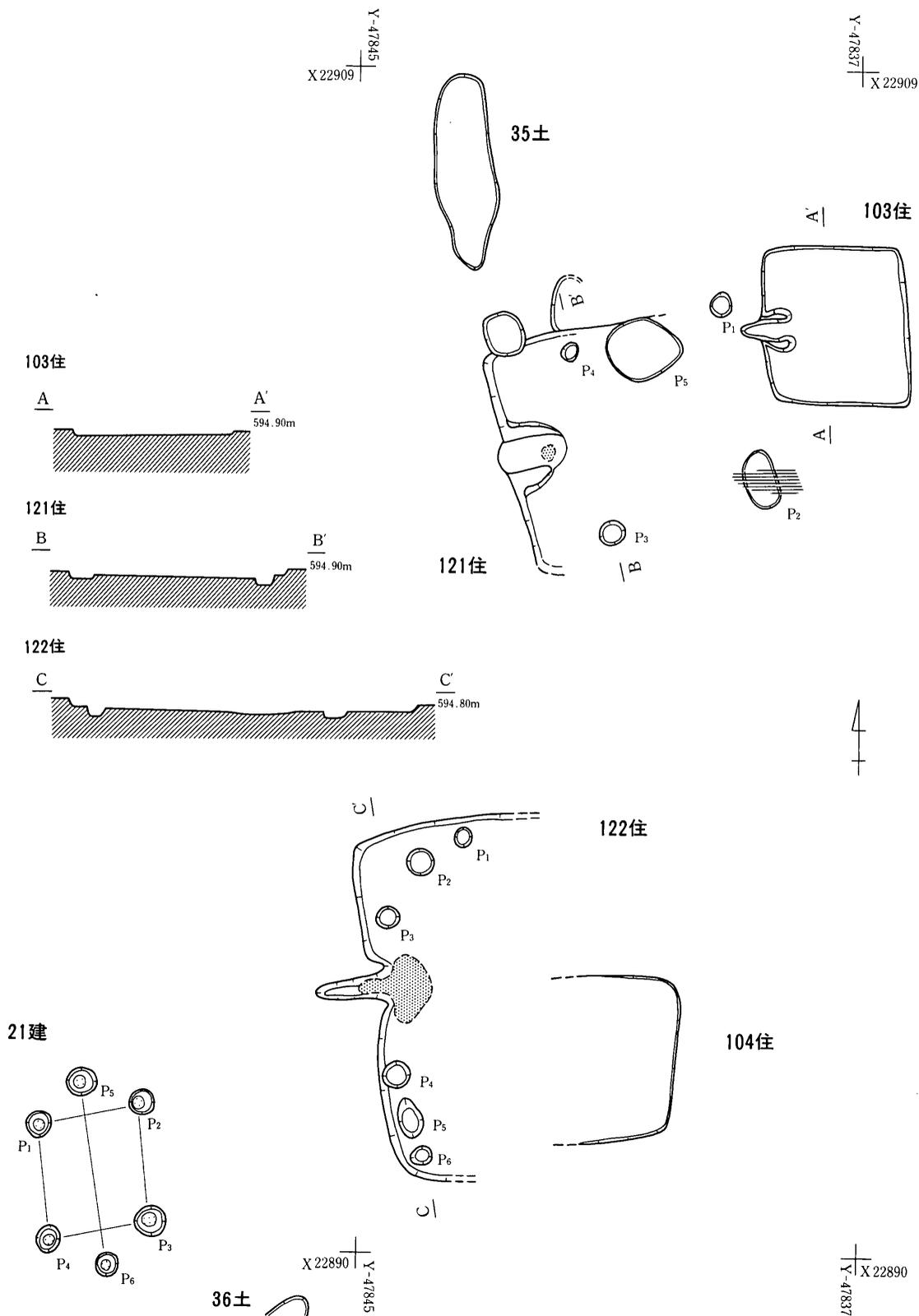


108住

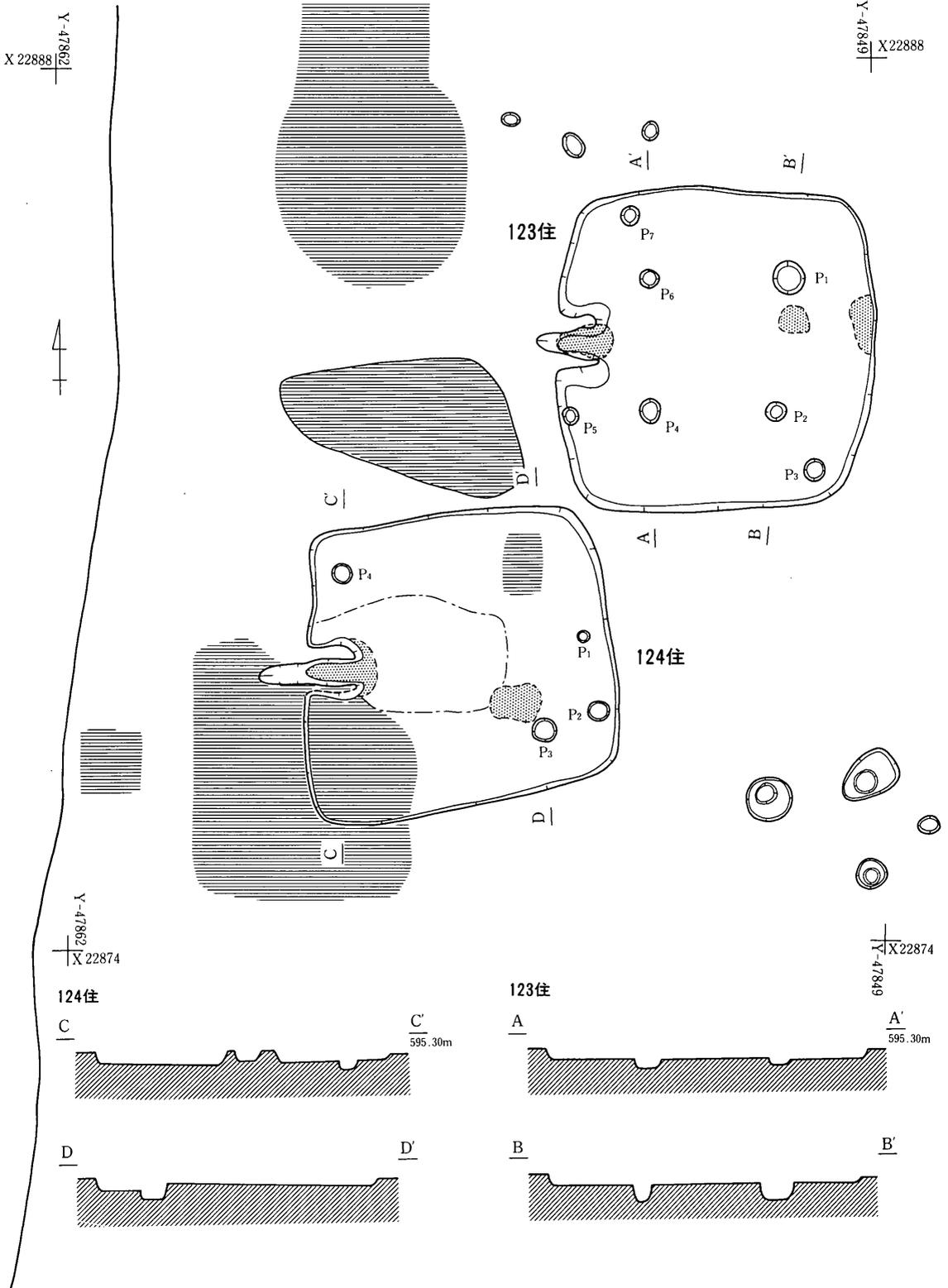


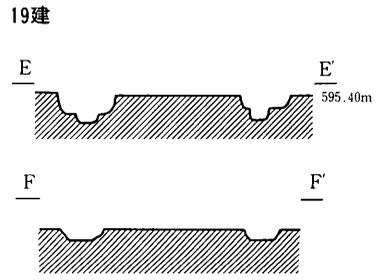
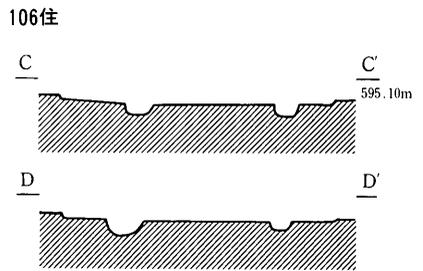
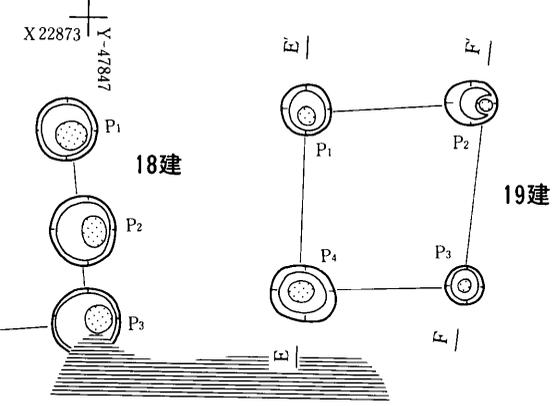
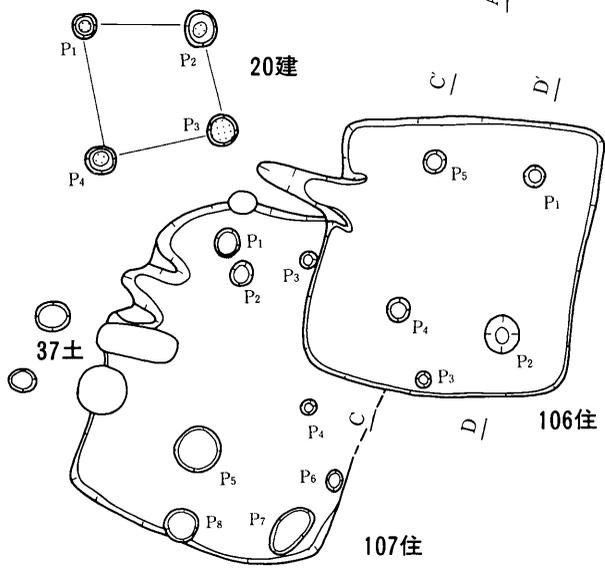
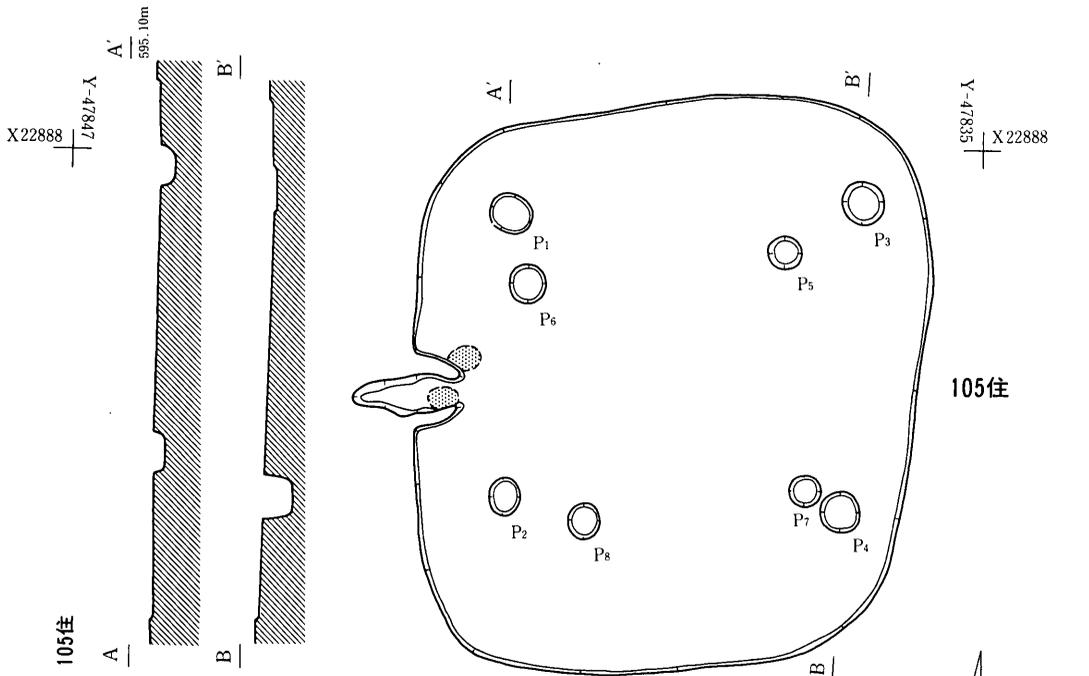
Y-47807  
X22909

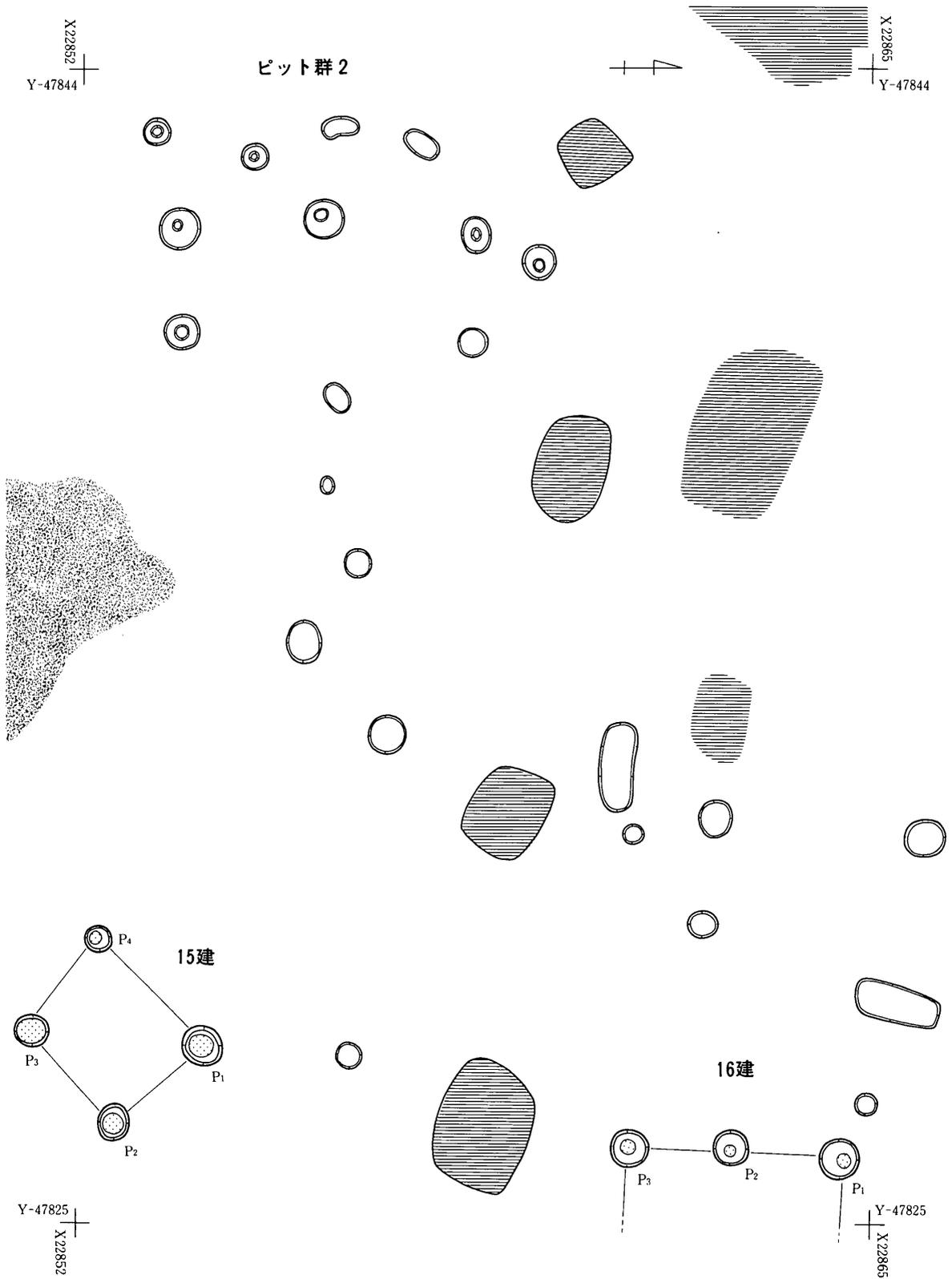
Y-47807  
X22917

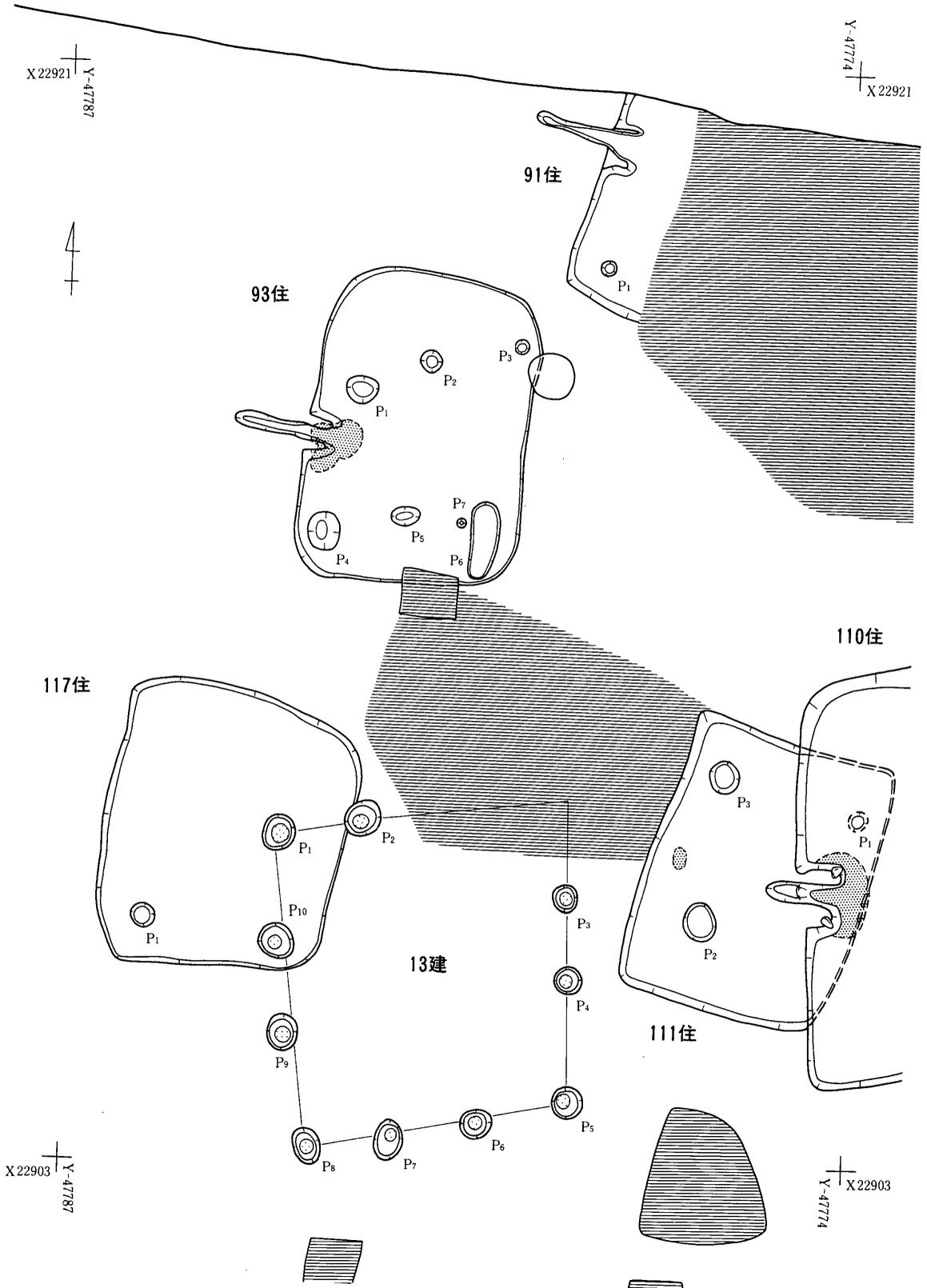


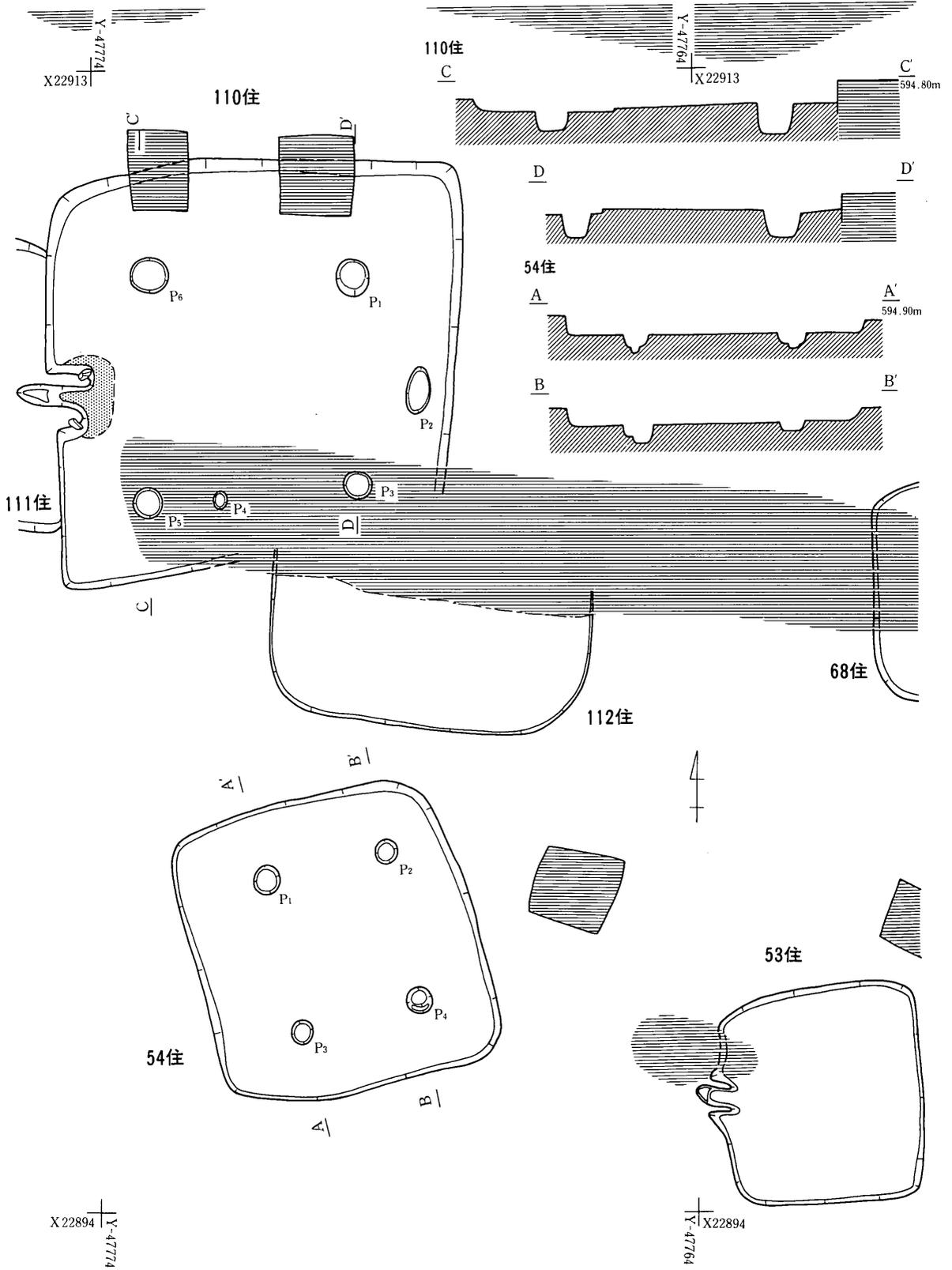
第9図 遺構実測図5

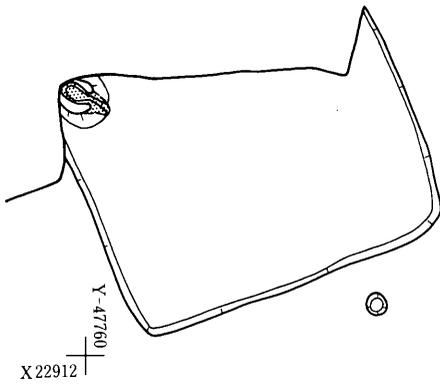






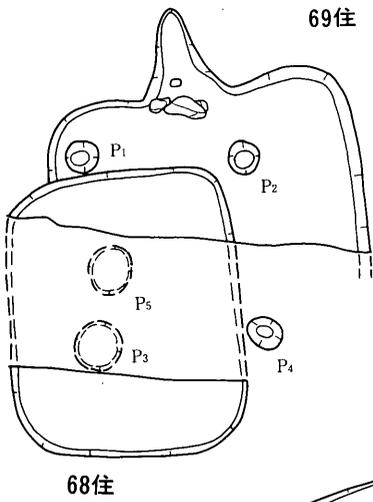
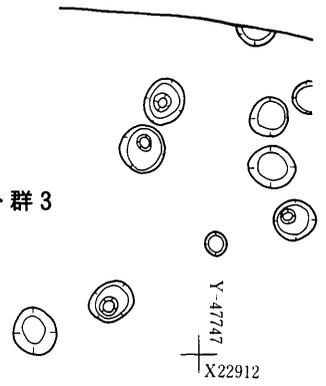






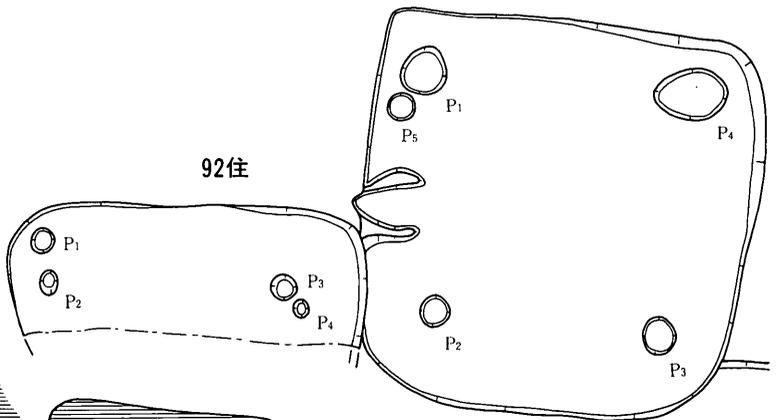
70住

ピット群3



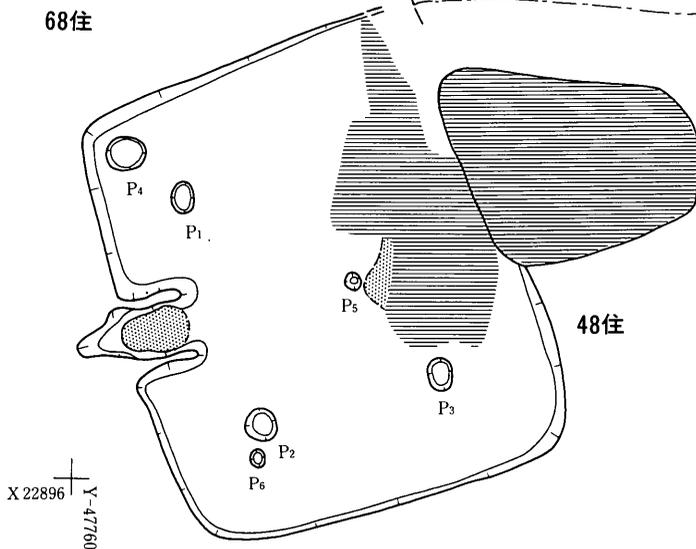
69住

67住



92住

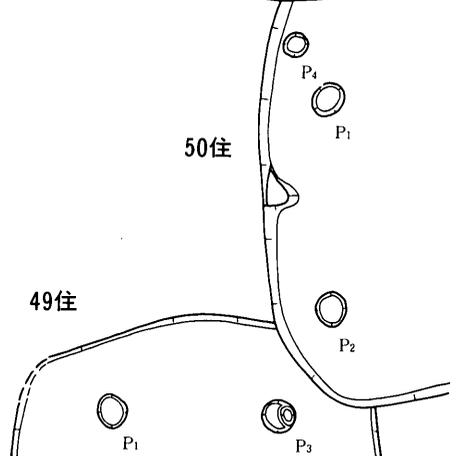
68住

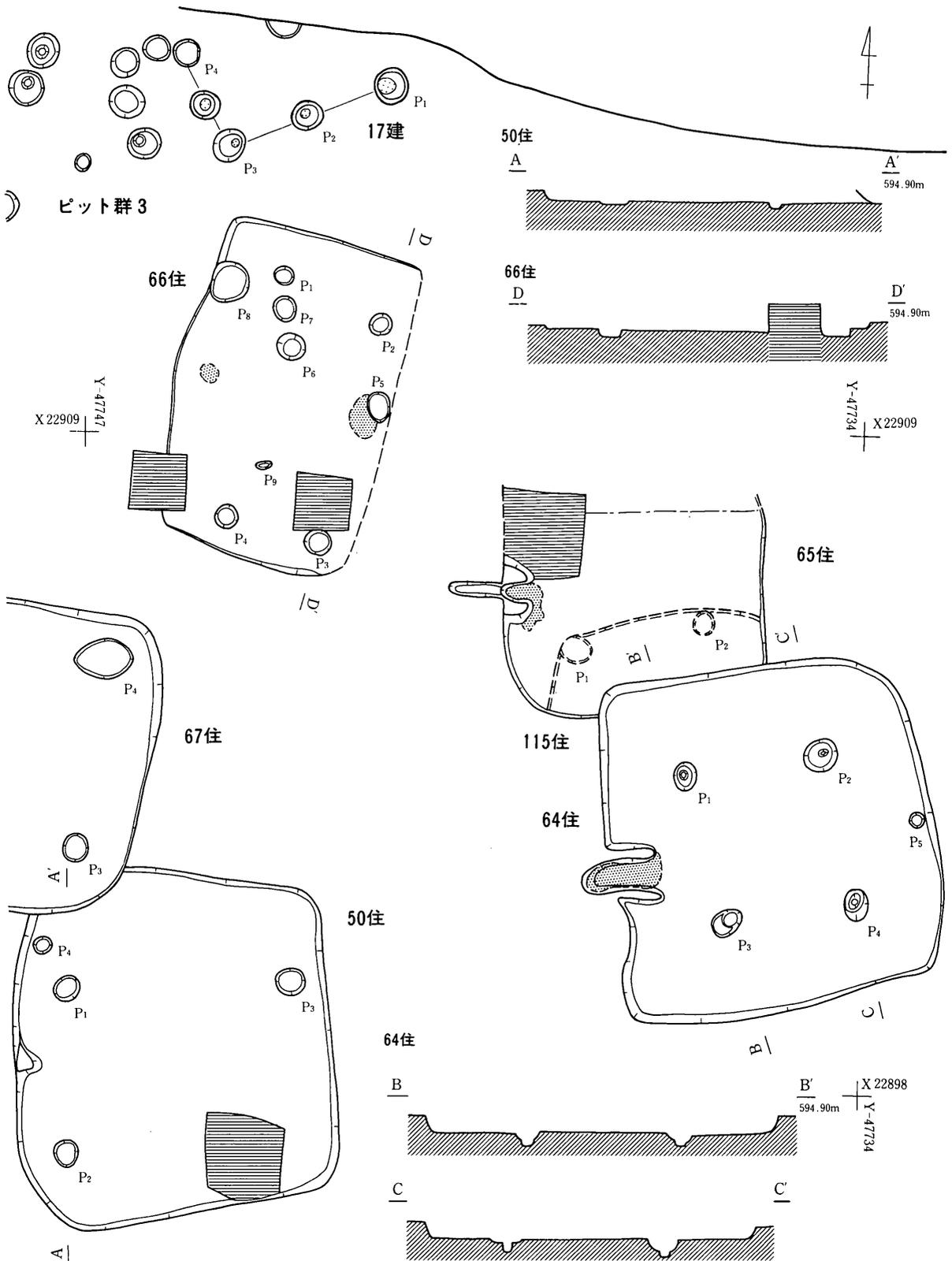


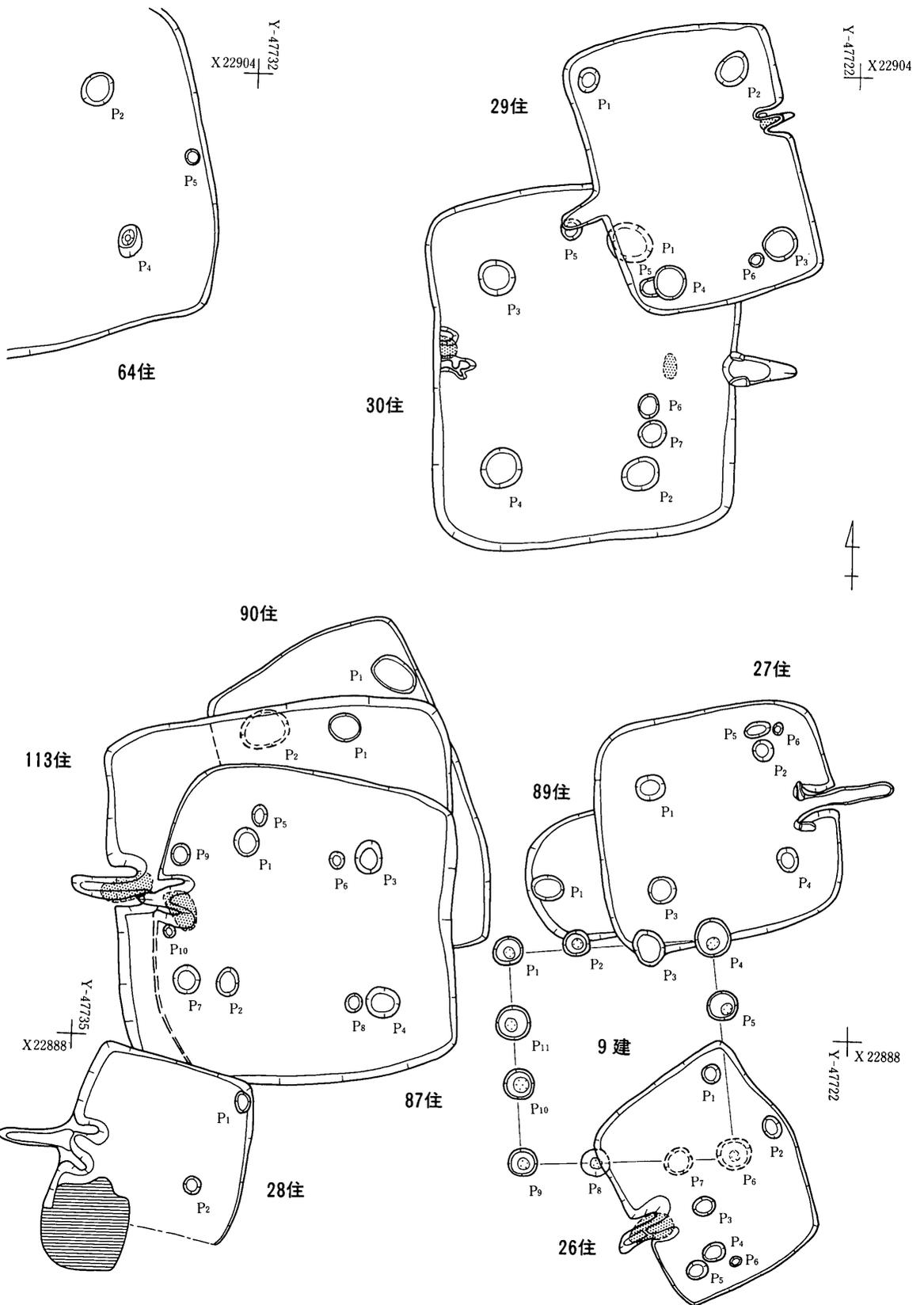
48住

50住

49住

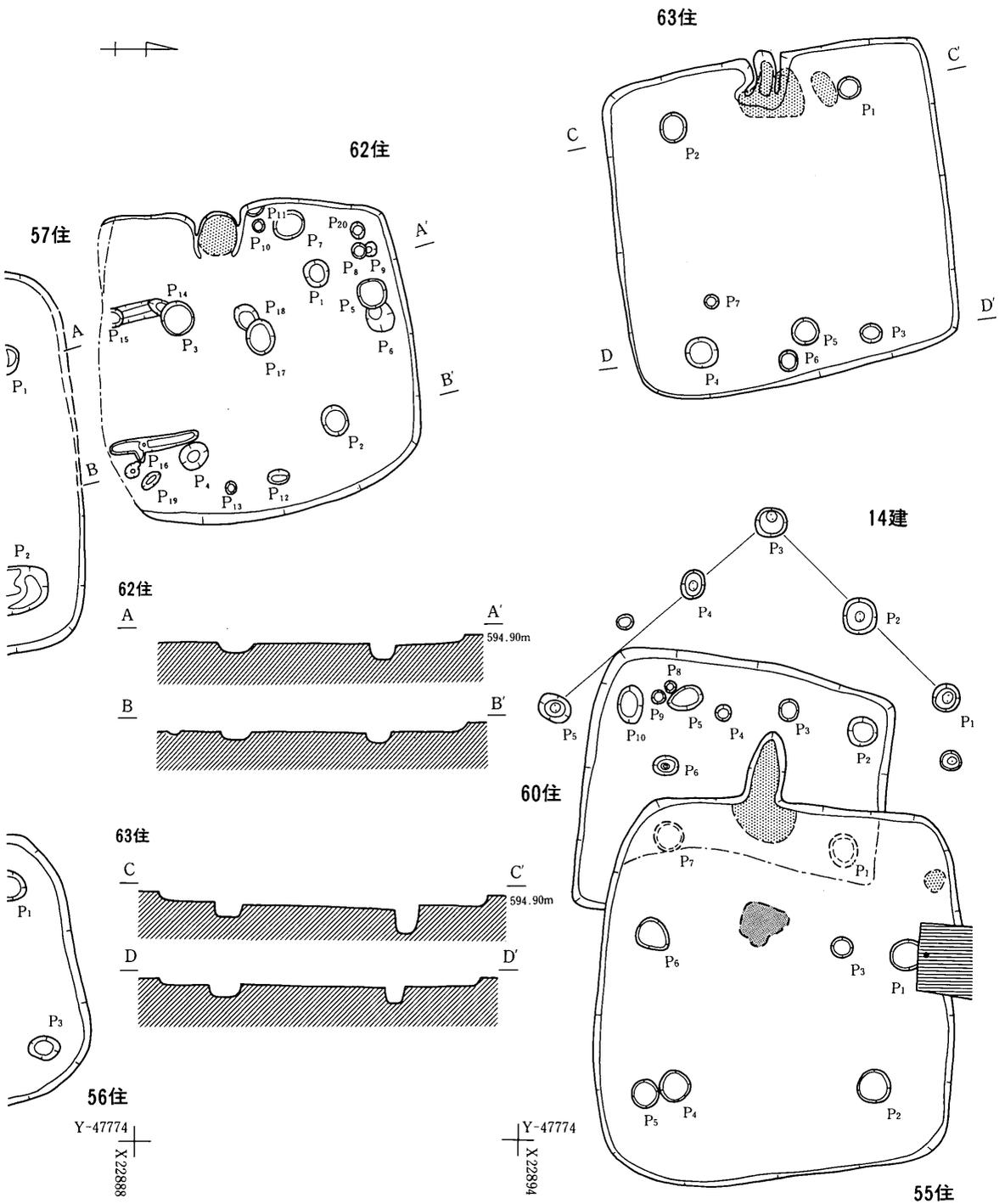






X 228888  
Y-47793

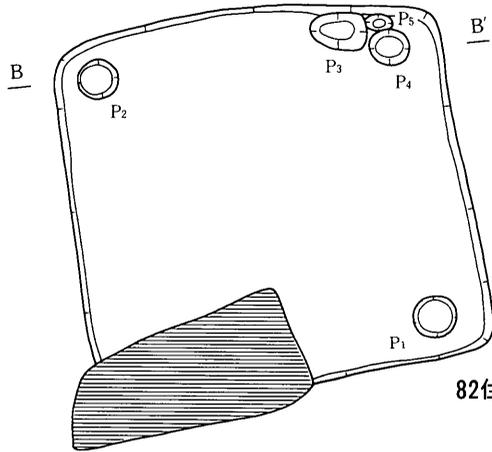
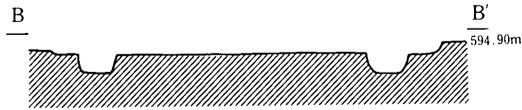
X 22900  
Y-47793



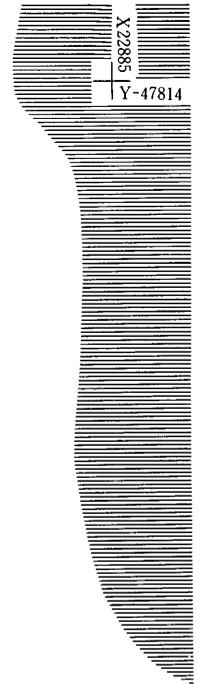
X 22873  
Y-47814



82住



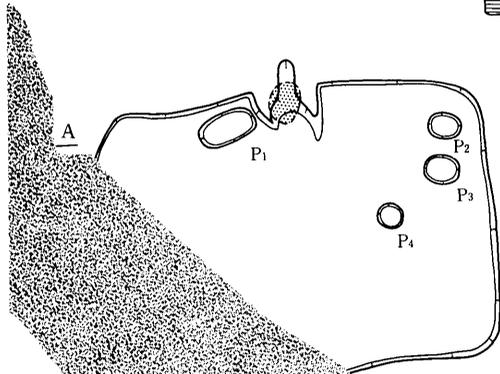
82住



81住

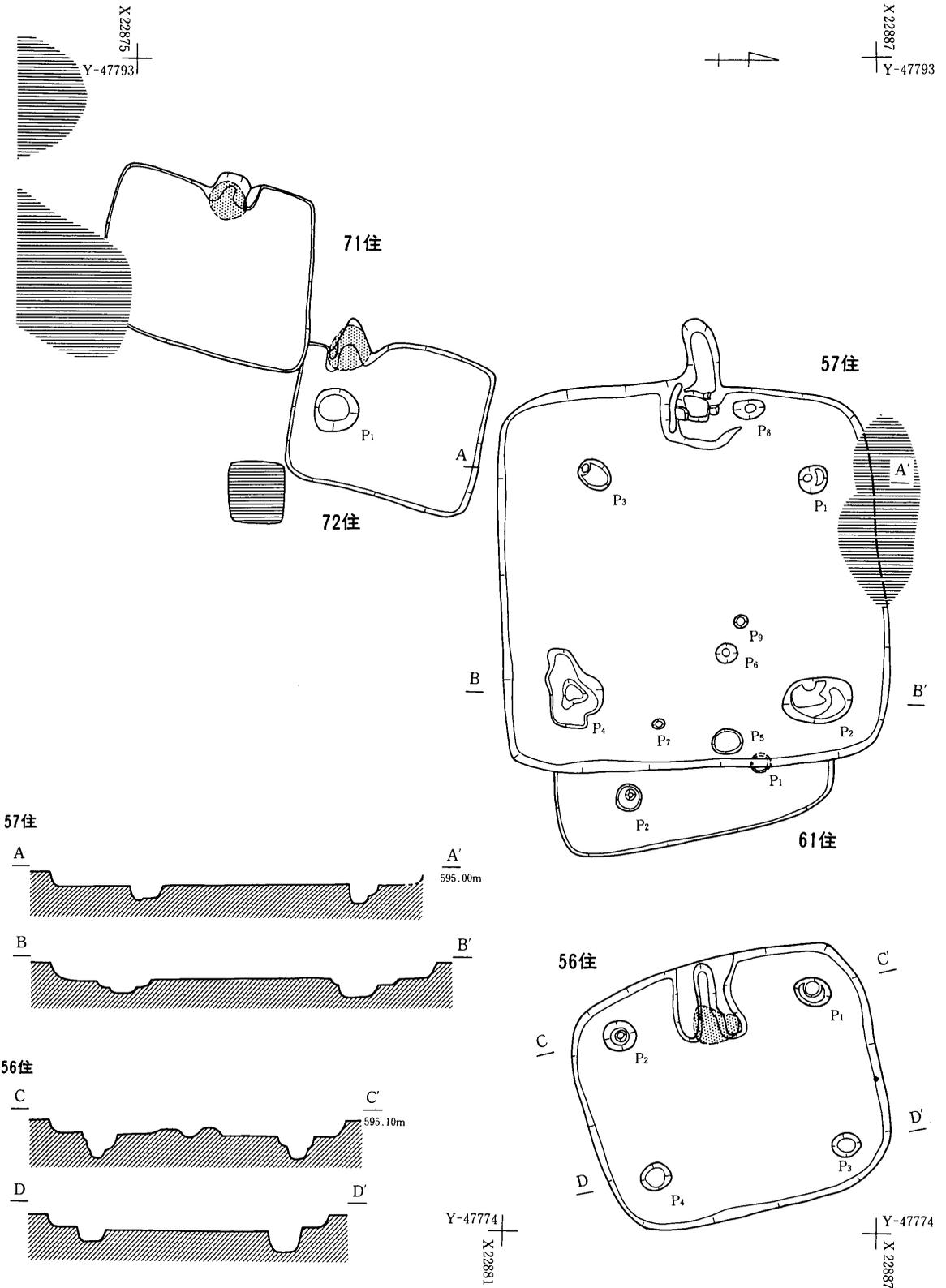


81住



Y-47795  
X 22873

Y-47795  
X 22885

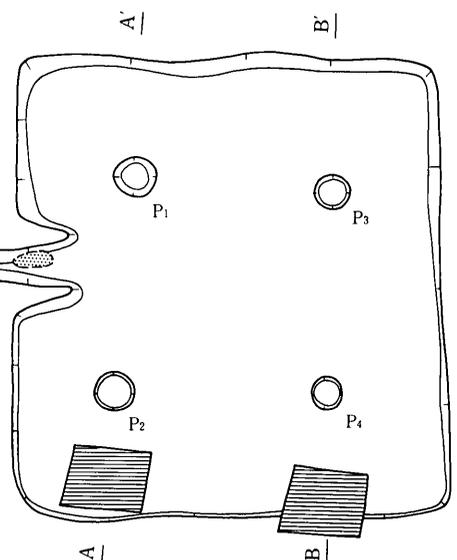
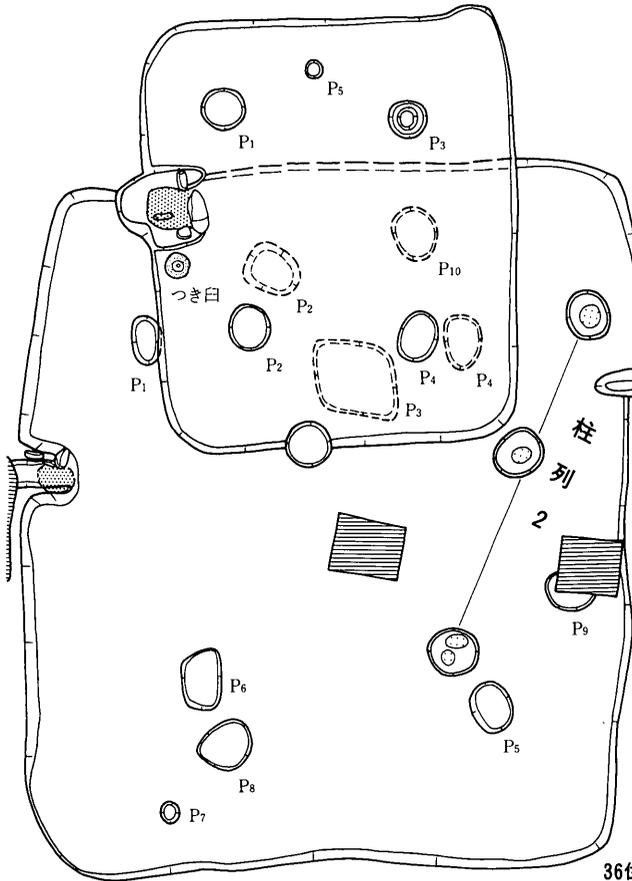


X22885  
Y-47767

X22885  
Y-47754

44住

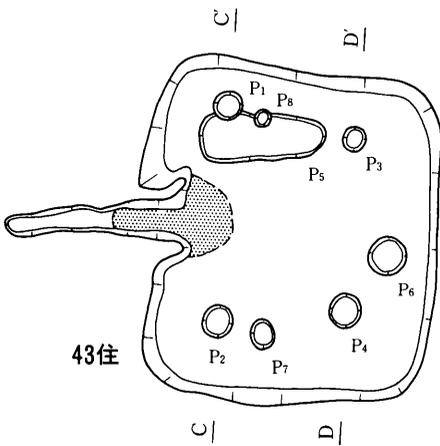
36住



X22875  
Y-47754

114住

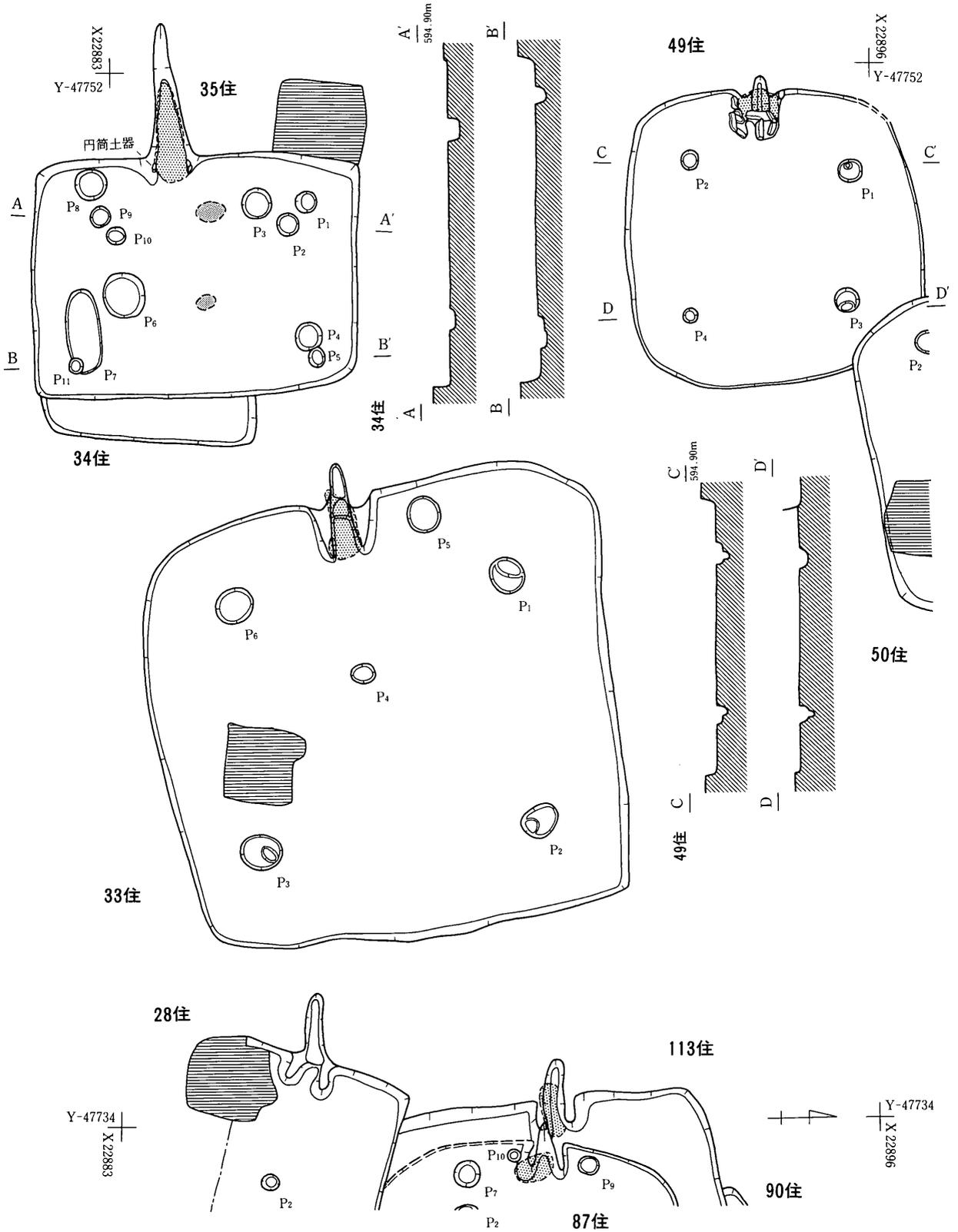
36住

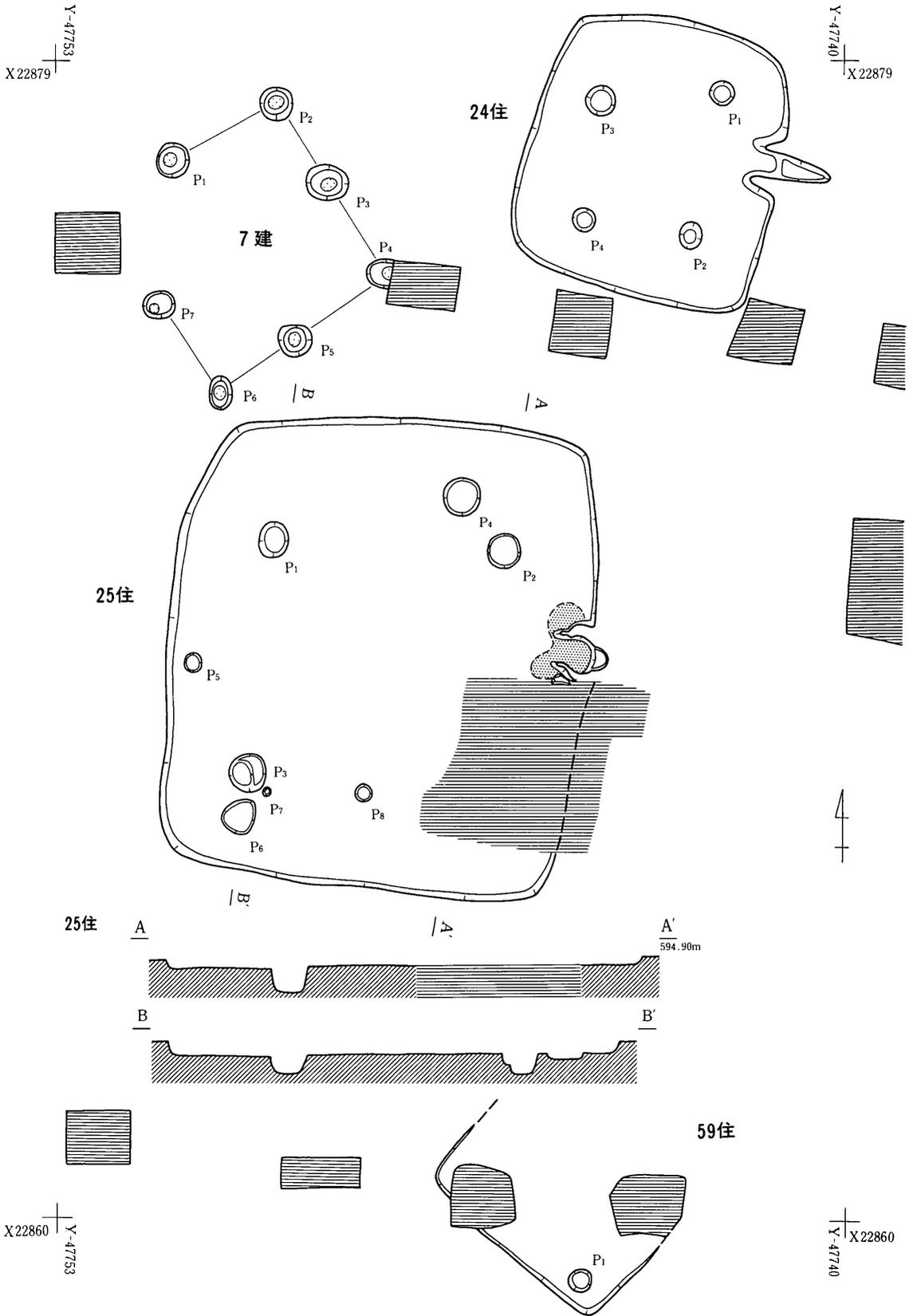


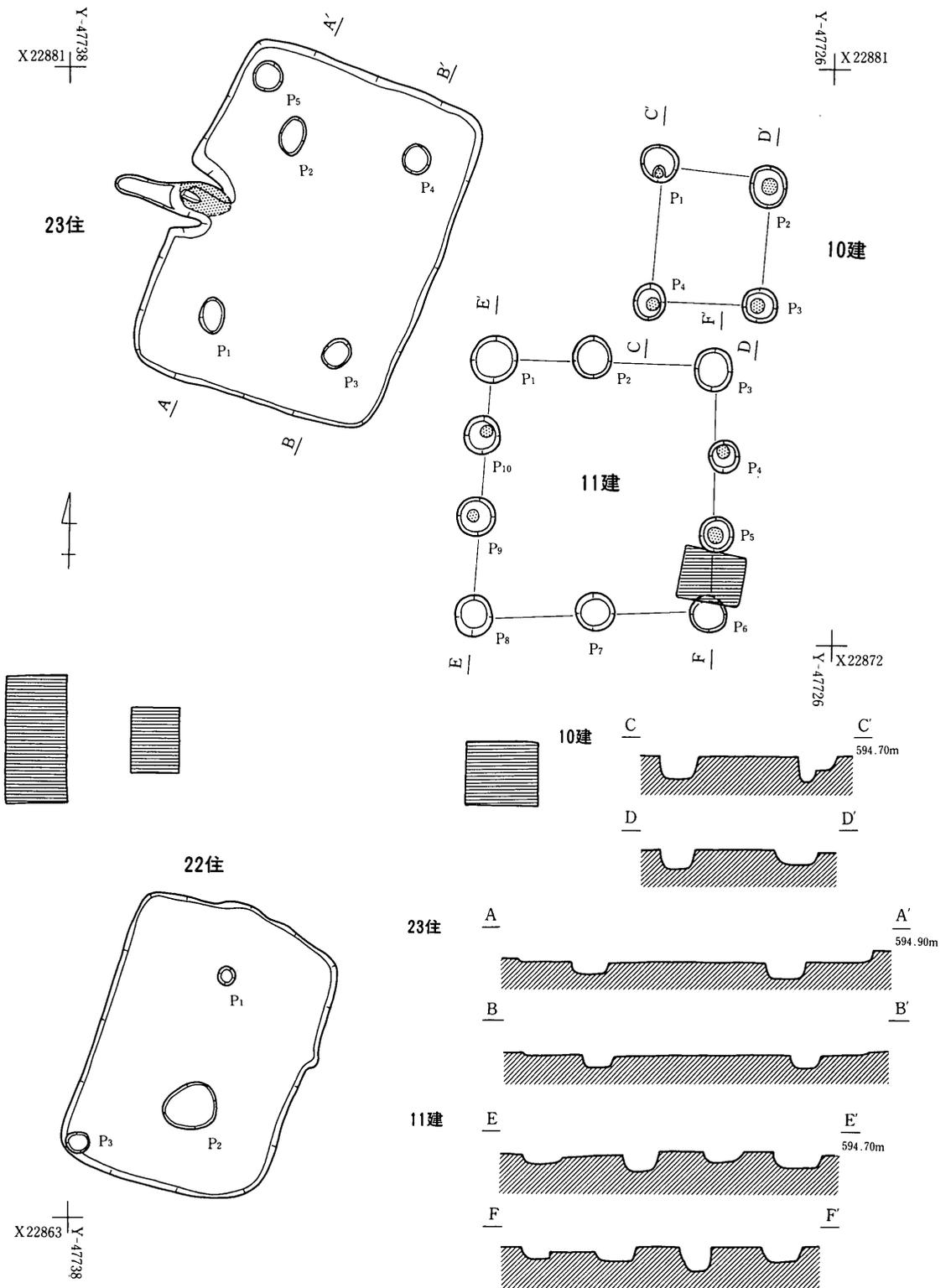
43住



X22867  
Y-47767

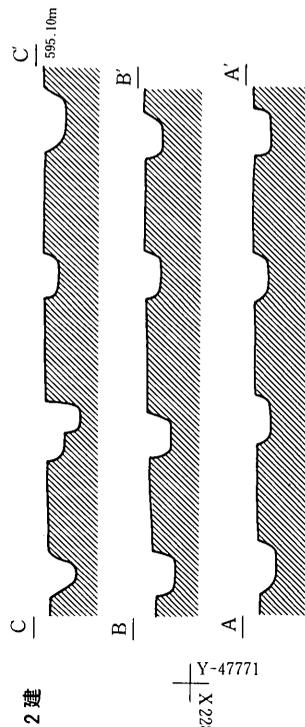
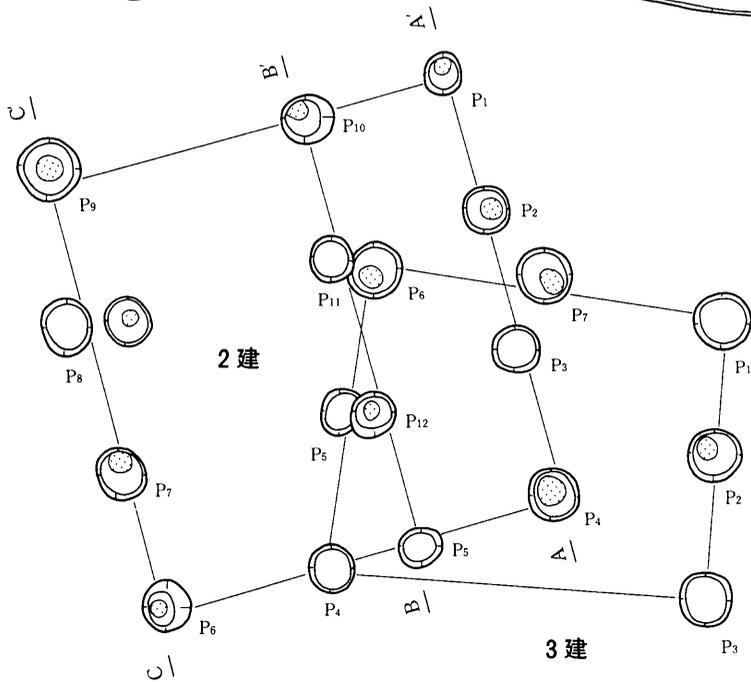
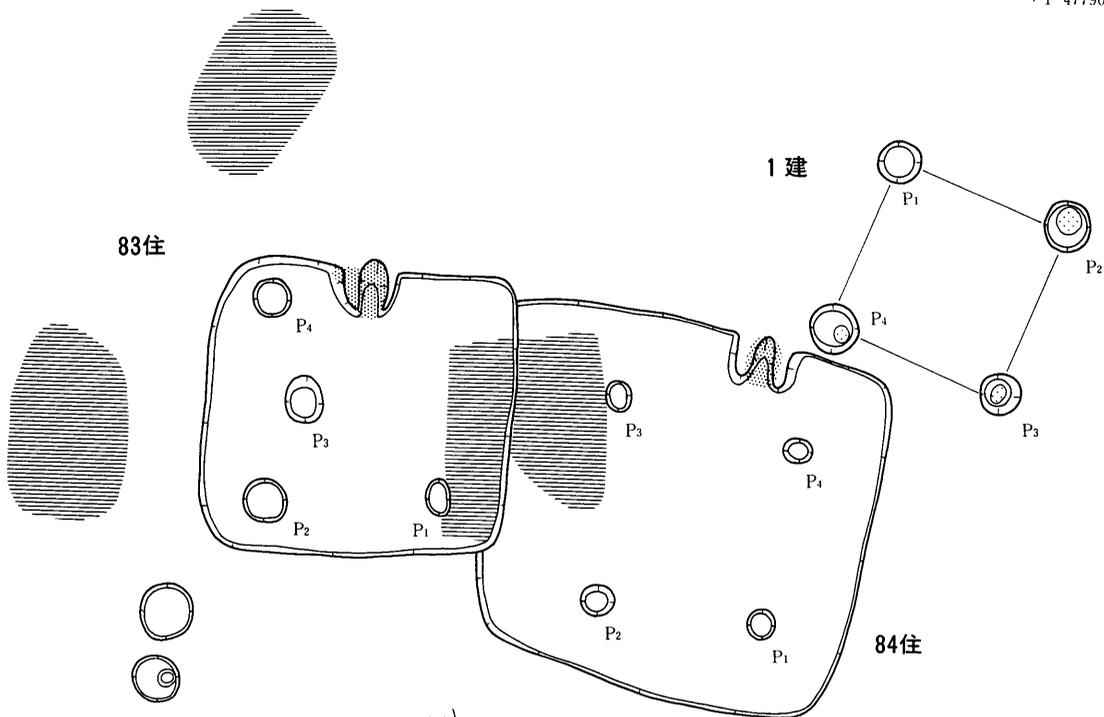






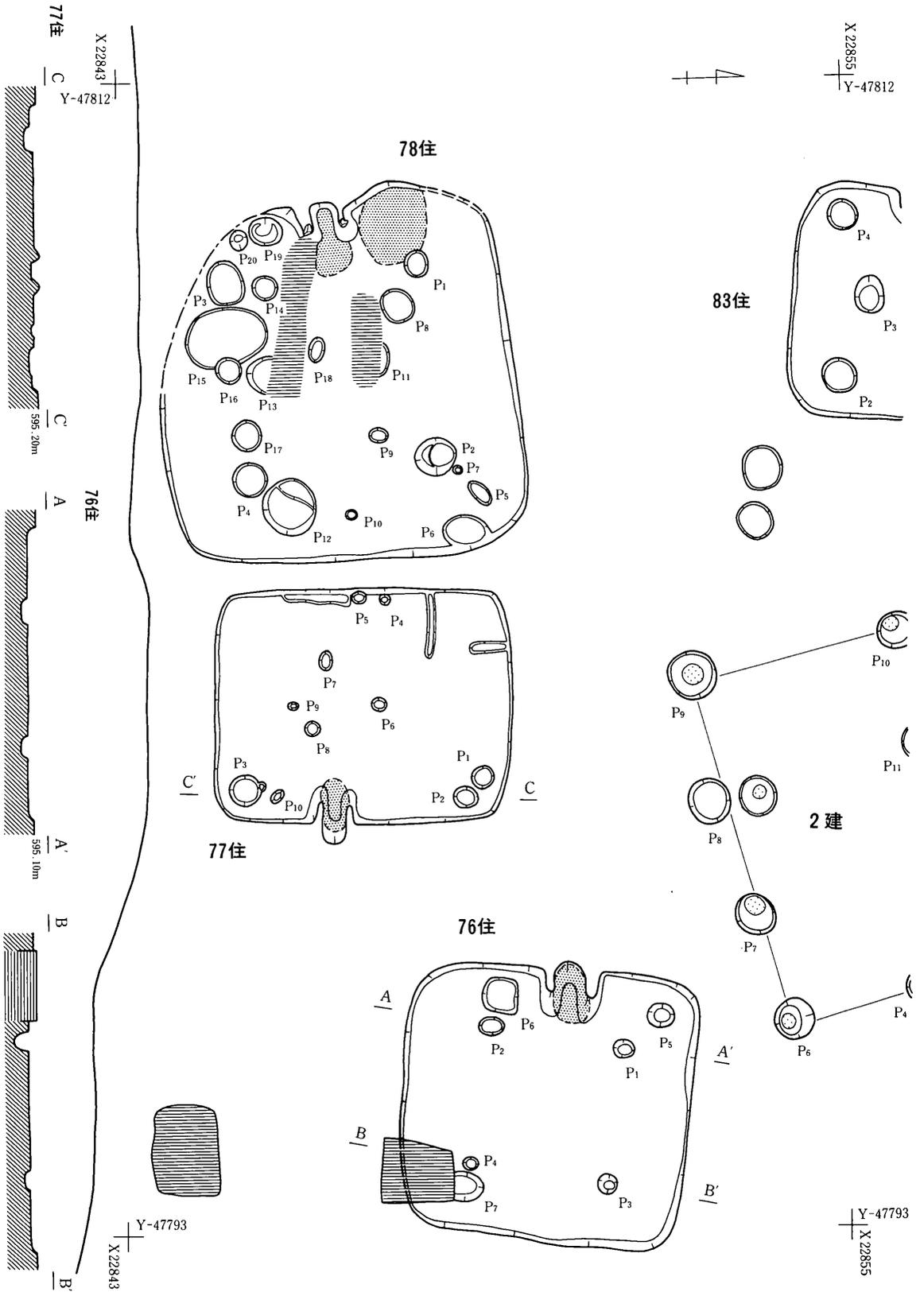
X22853  
Y-47790

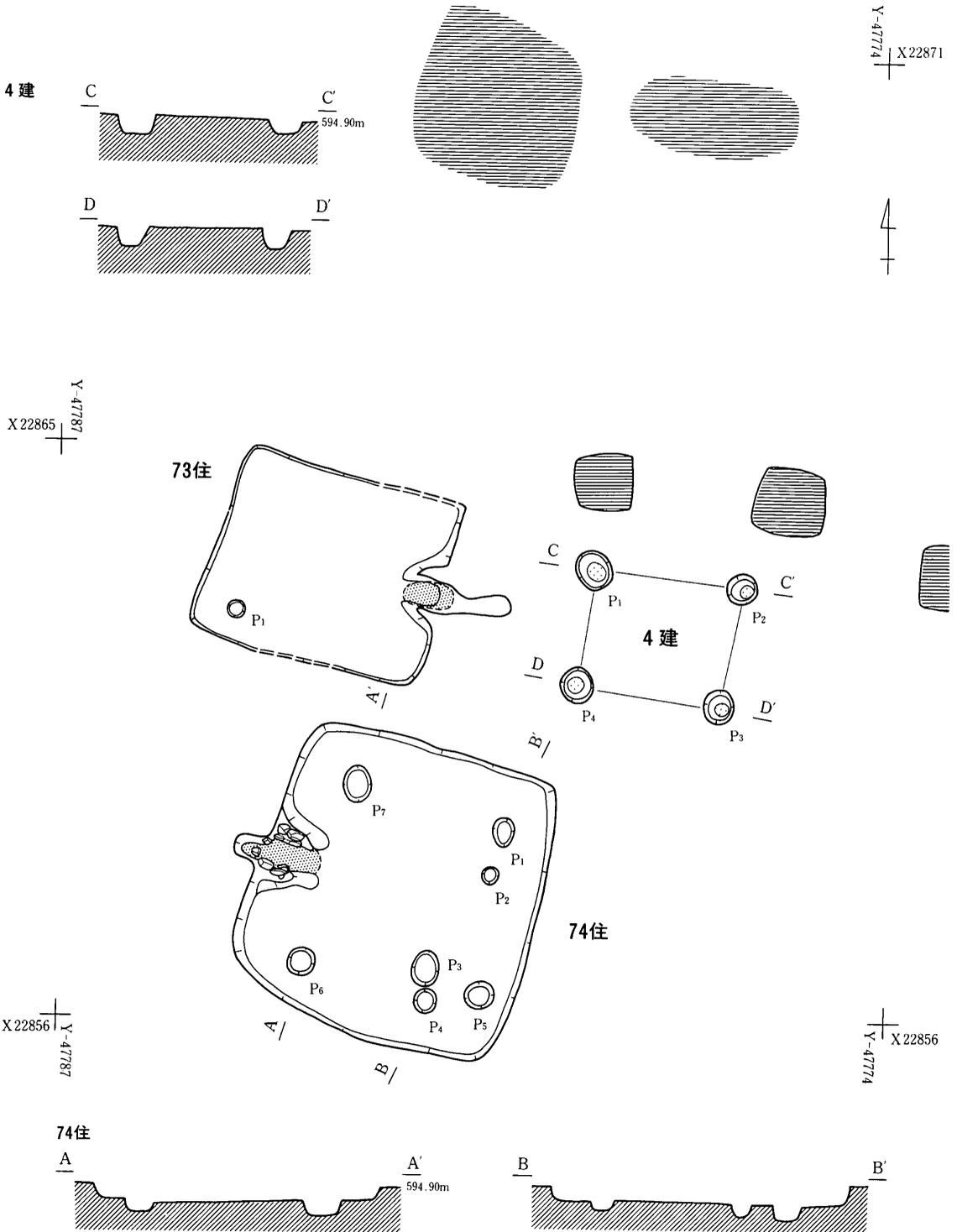
X22865  
Y-47790

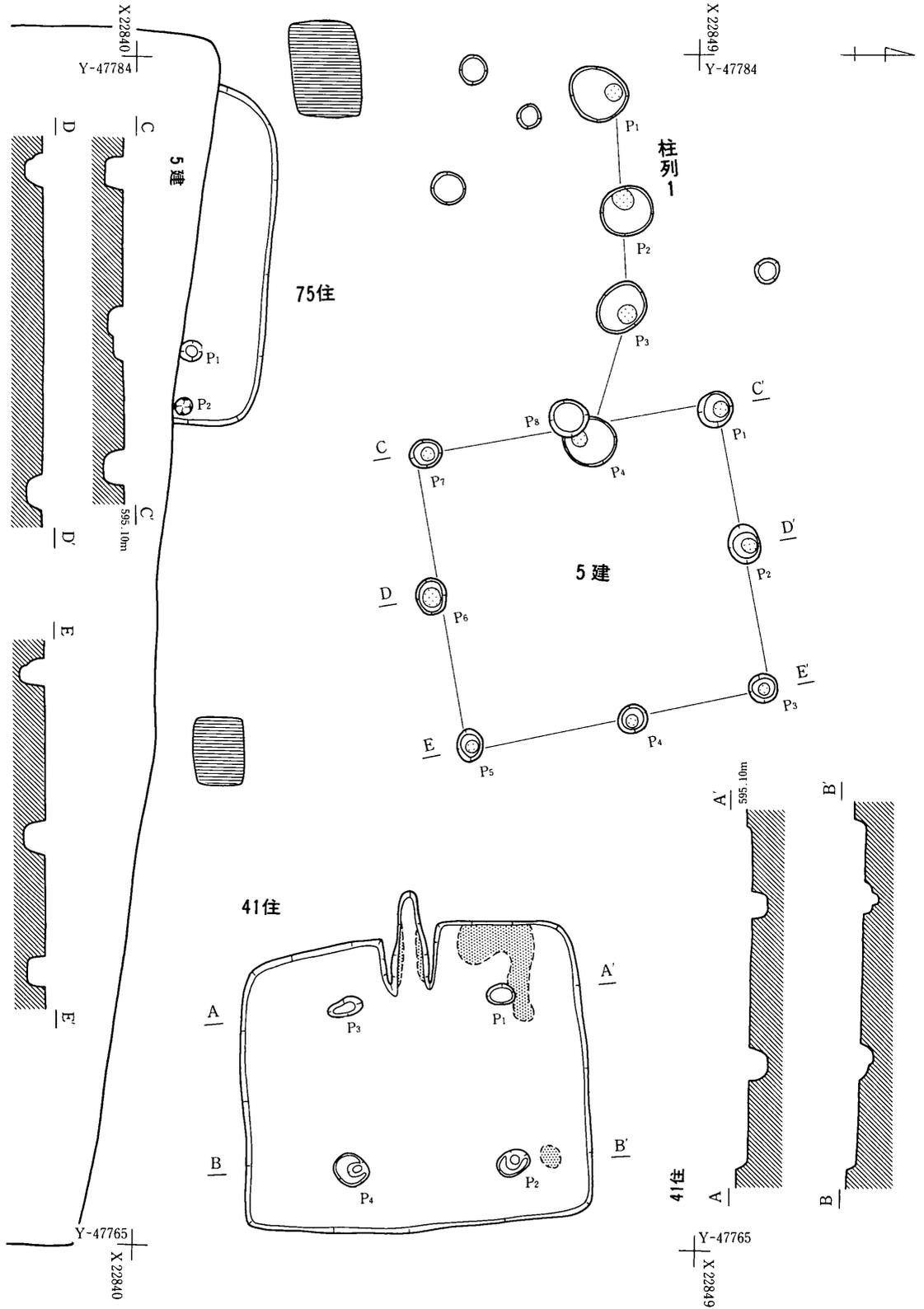


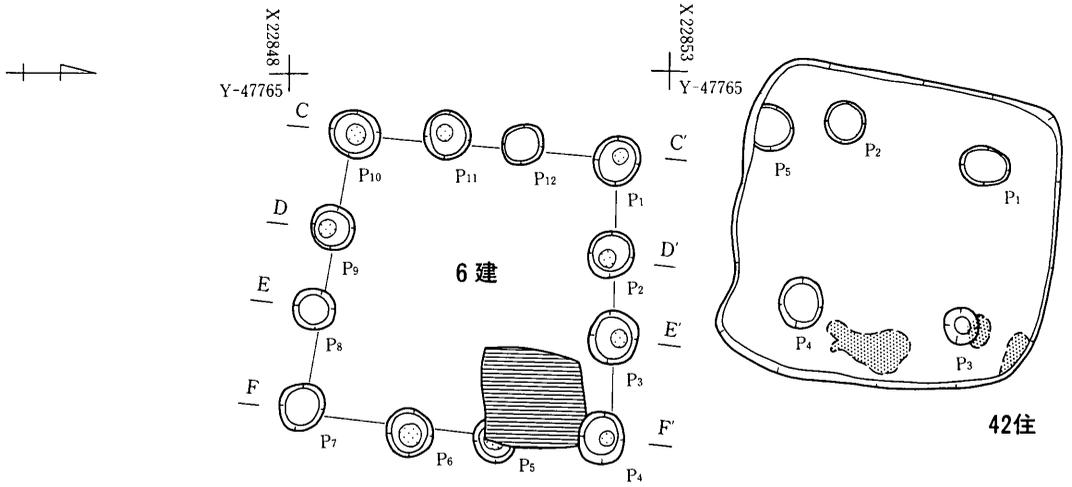
Y-47771  
X22853

Y-47771  
X22865

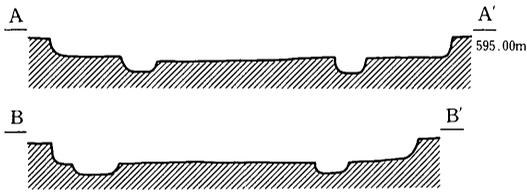




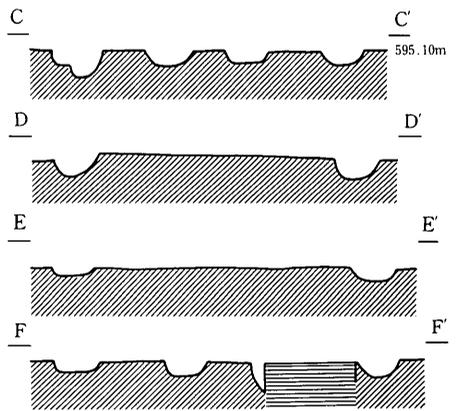




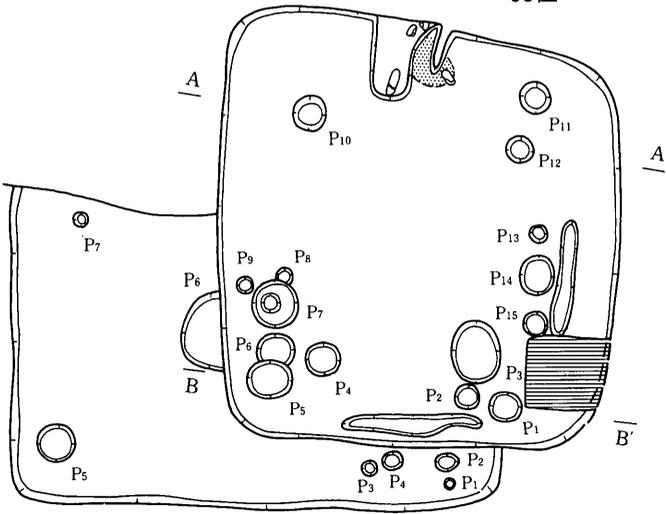
38住



6建

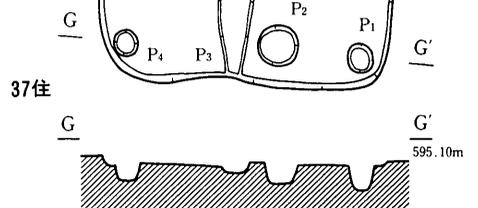


38住



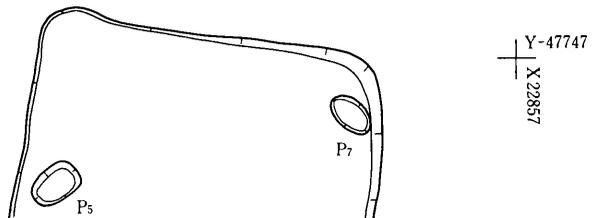
39住

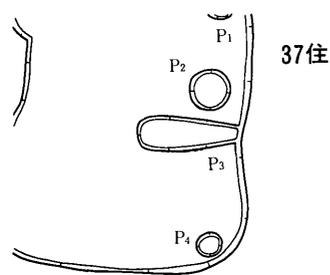
37住



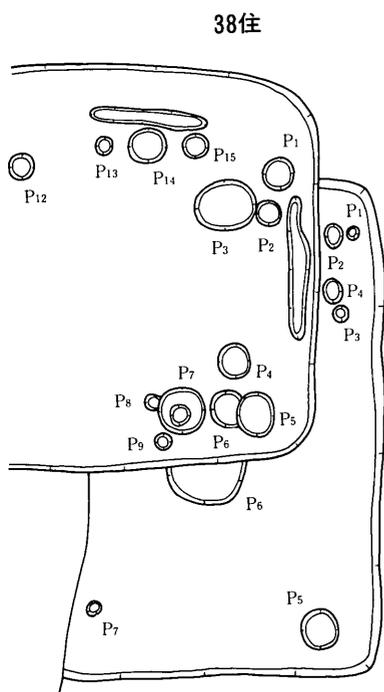
37住

58住

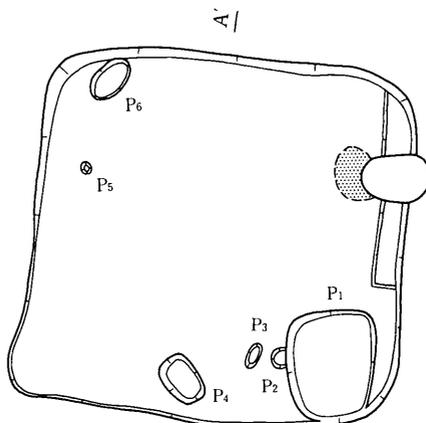




X 22852  
Y -47752

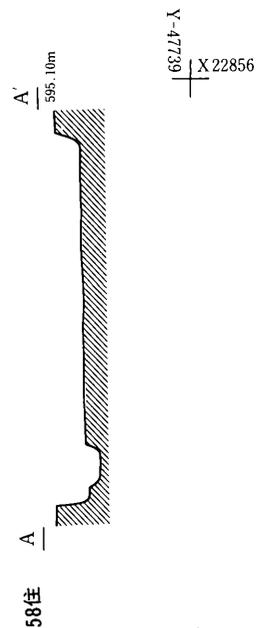


X 22842  
Y -47752

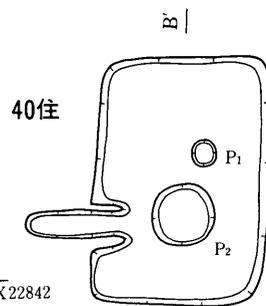


A /

A' /



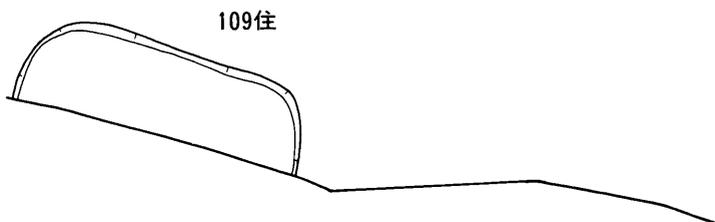
39住

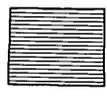
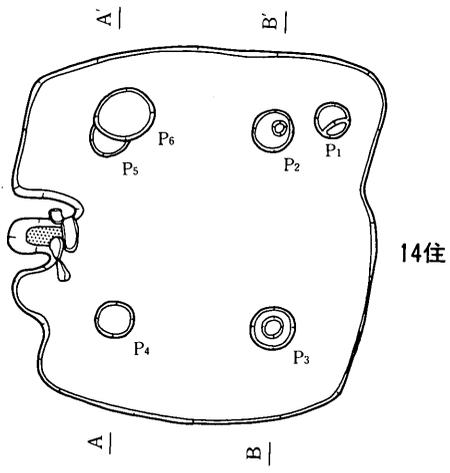
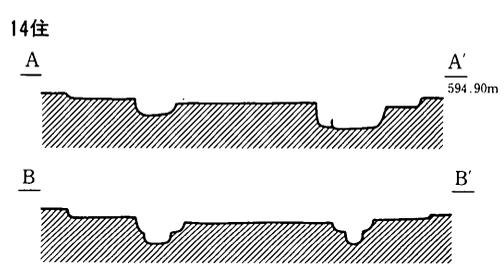
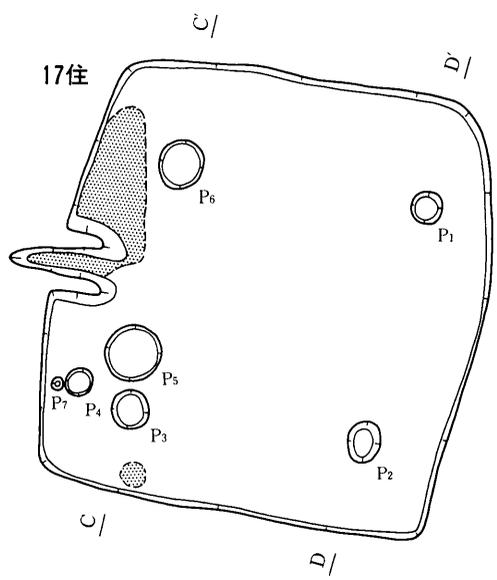
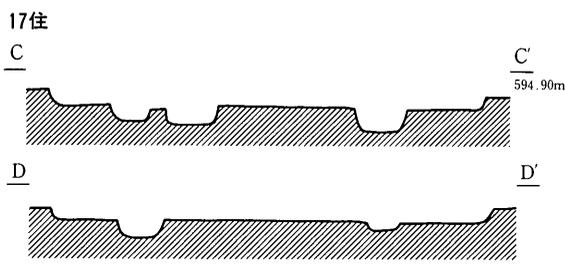
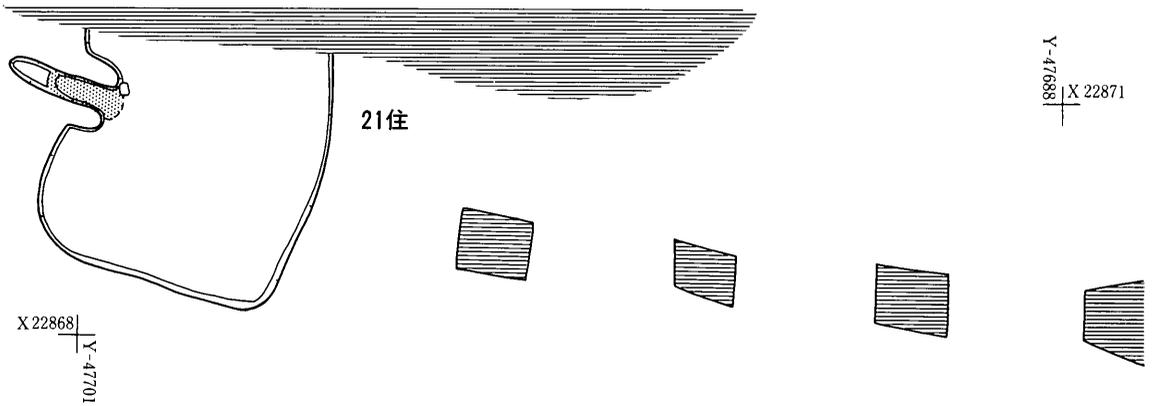


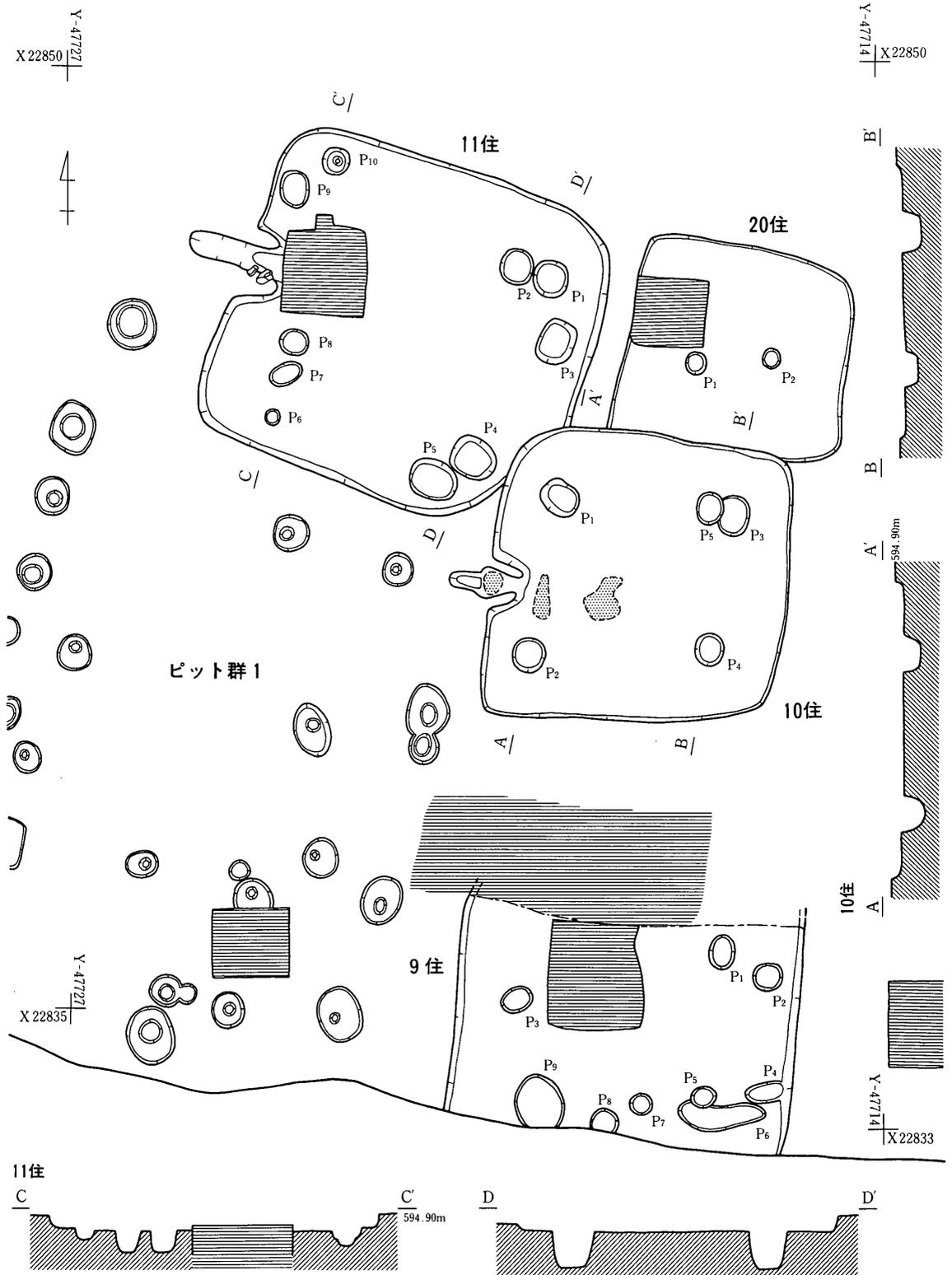
X 22842  
Y -47742

B /

B' /

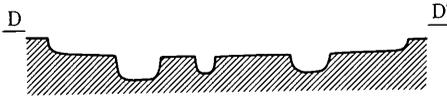




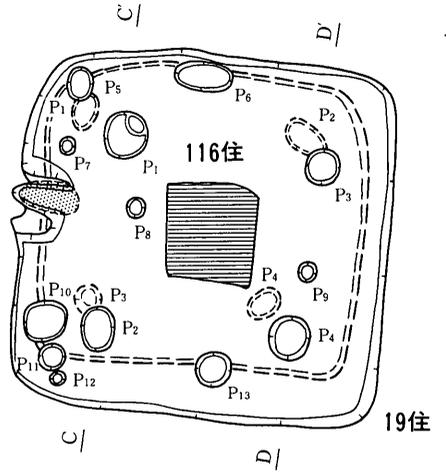


Y-47699  
X22850

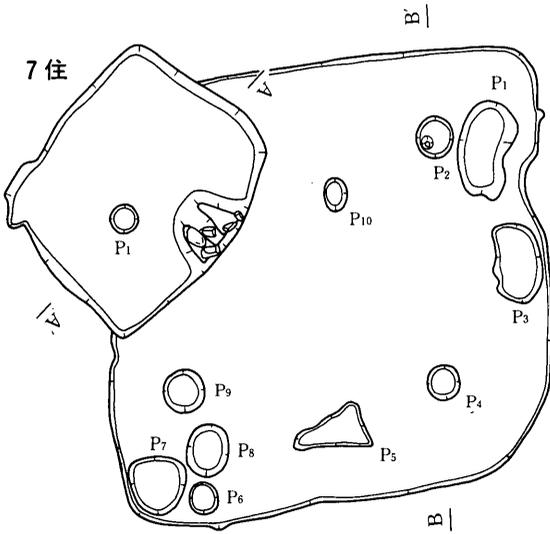
19住



Y-47712  
X22841

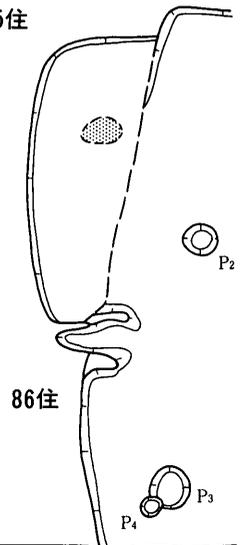


7住



8住

85住



86住

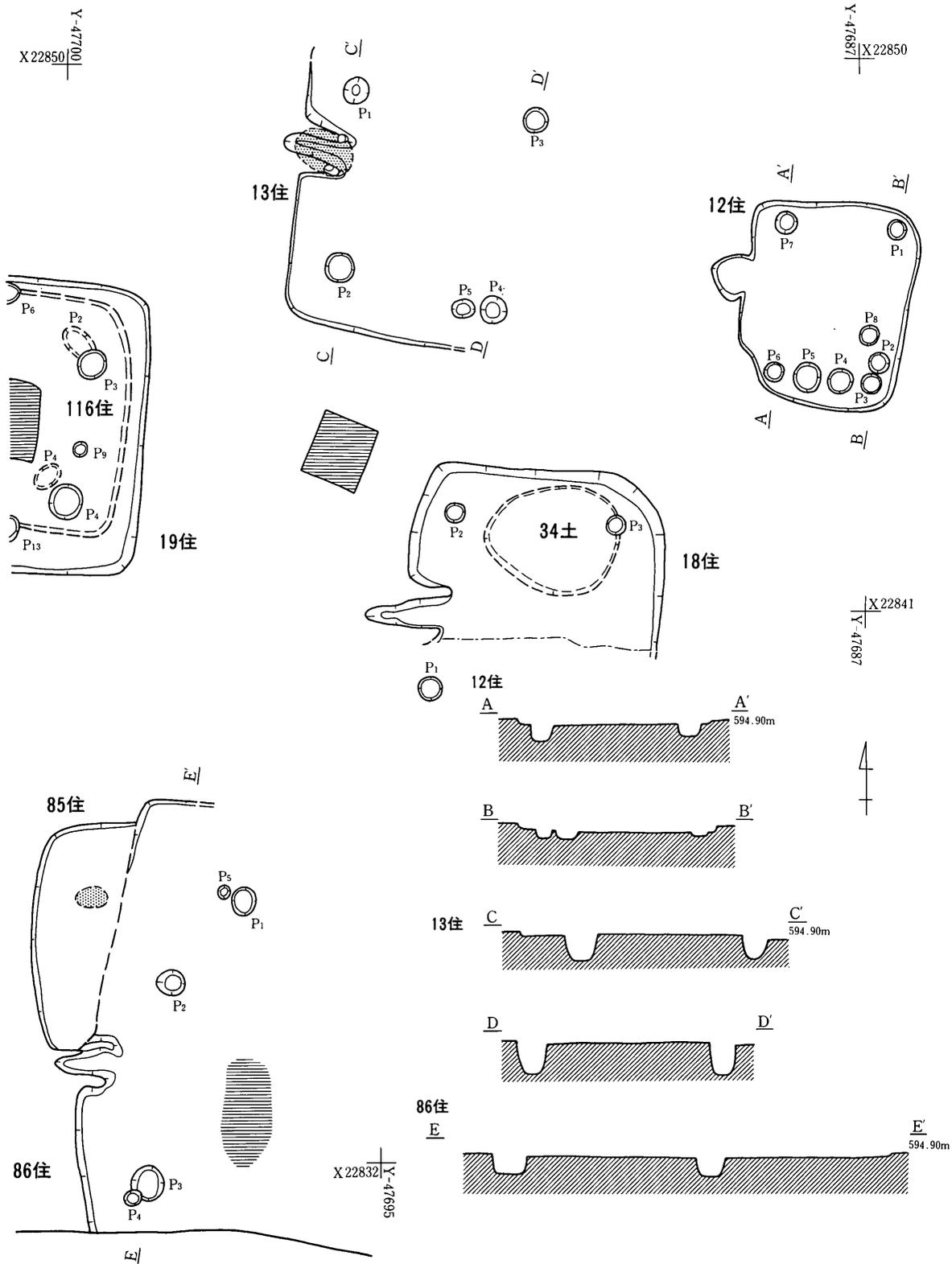
Y-47712  
X22831

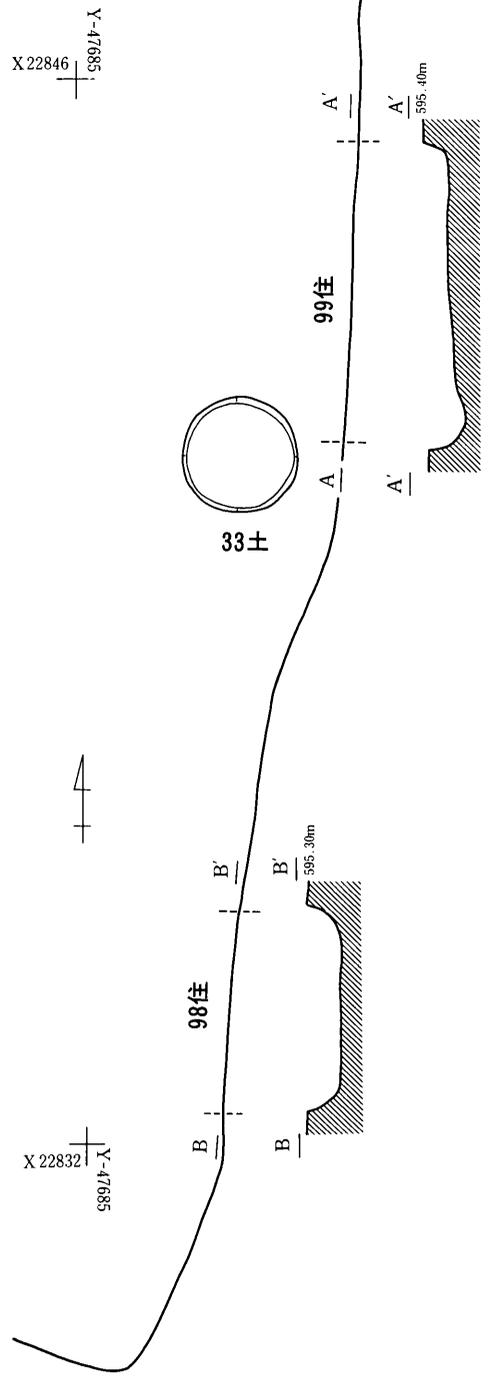
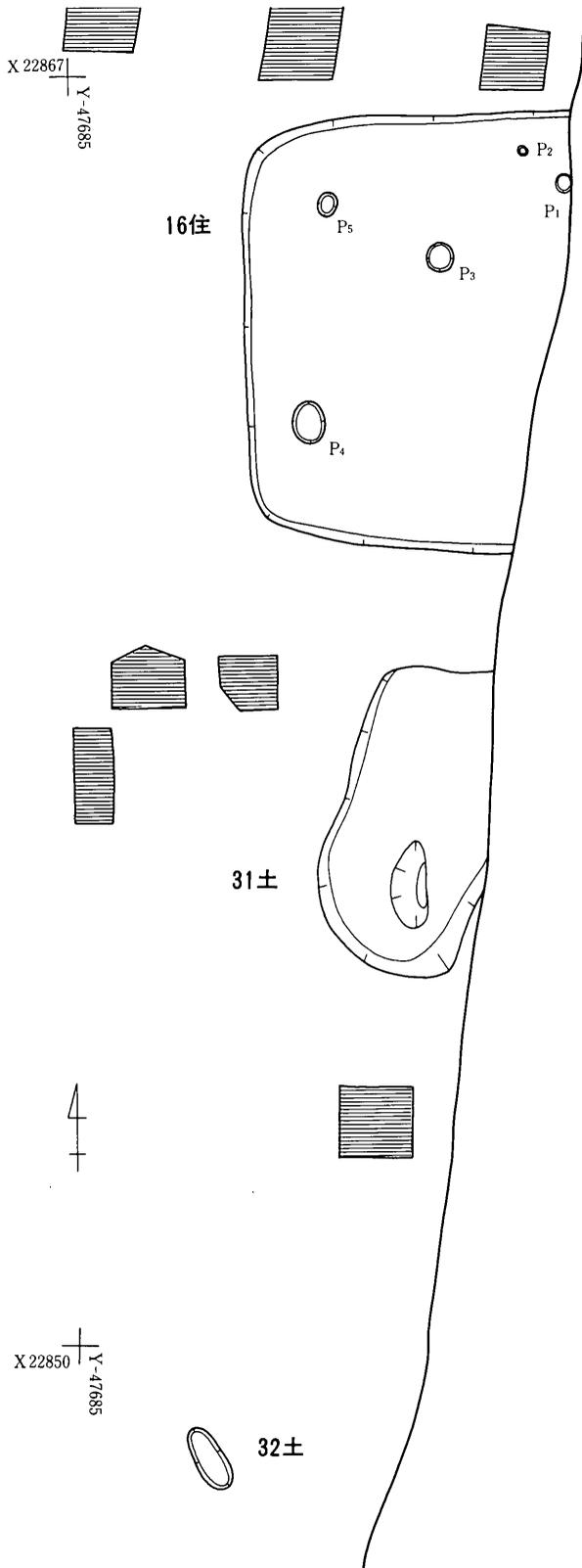
7住

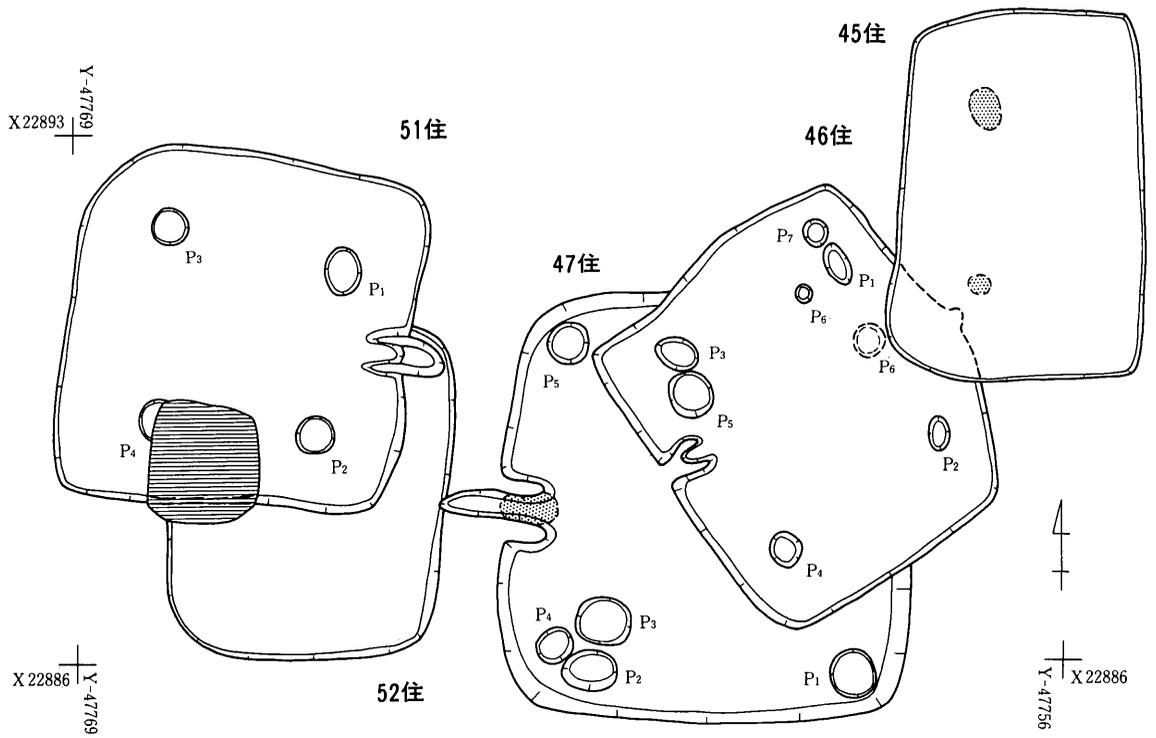
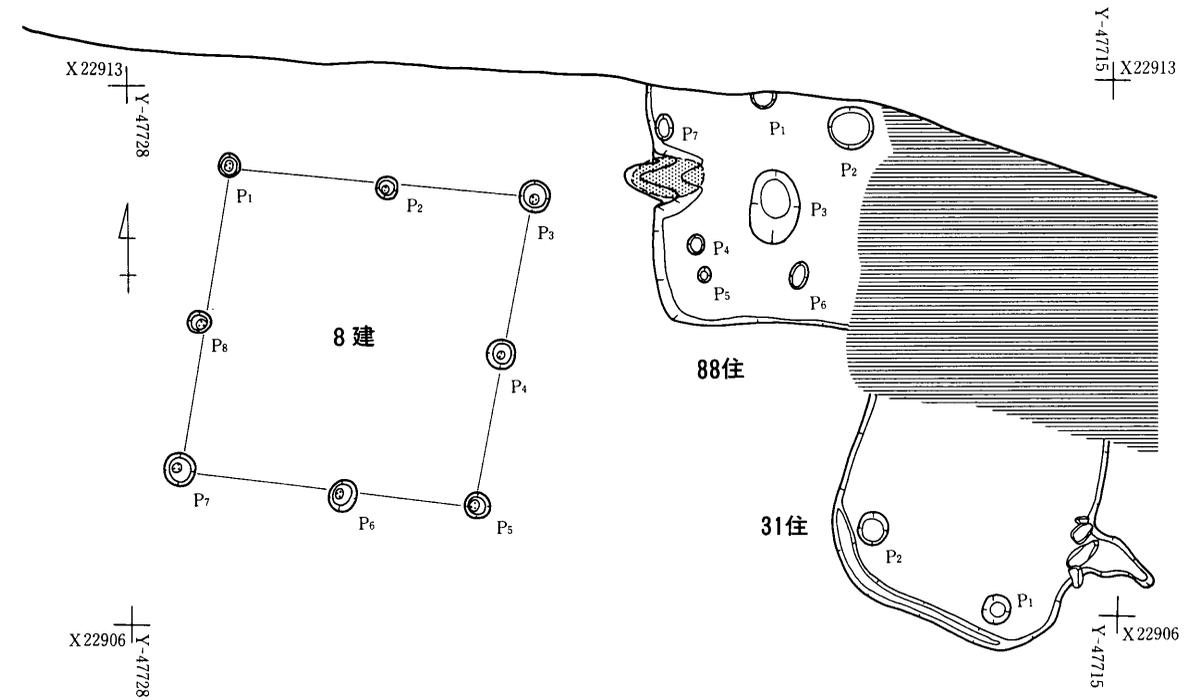


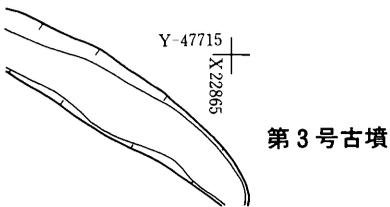
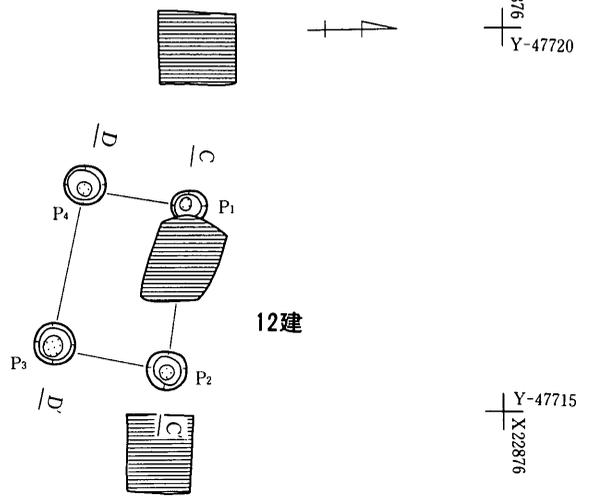
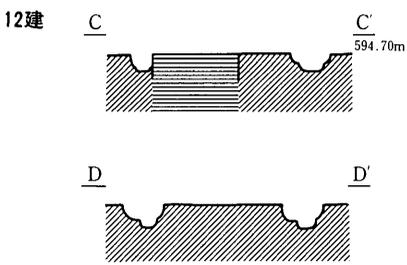
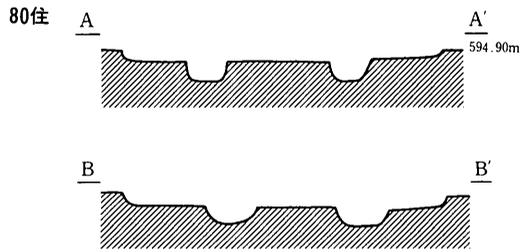
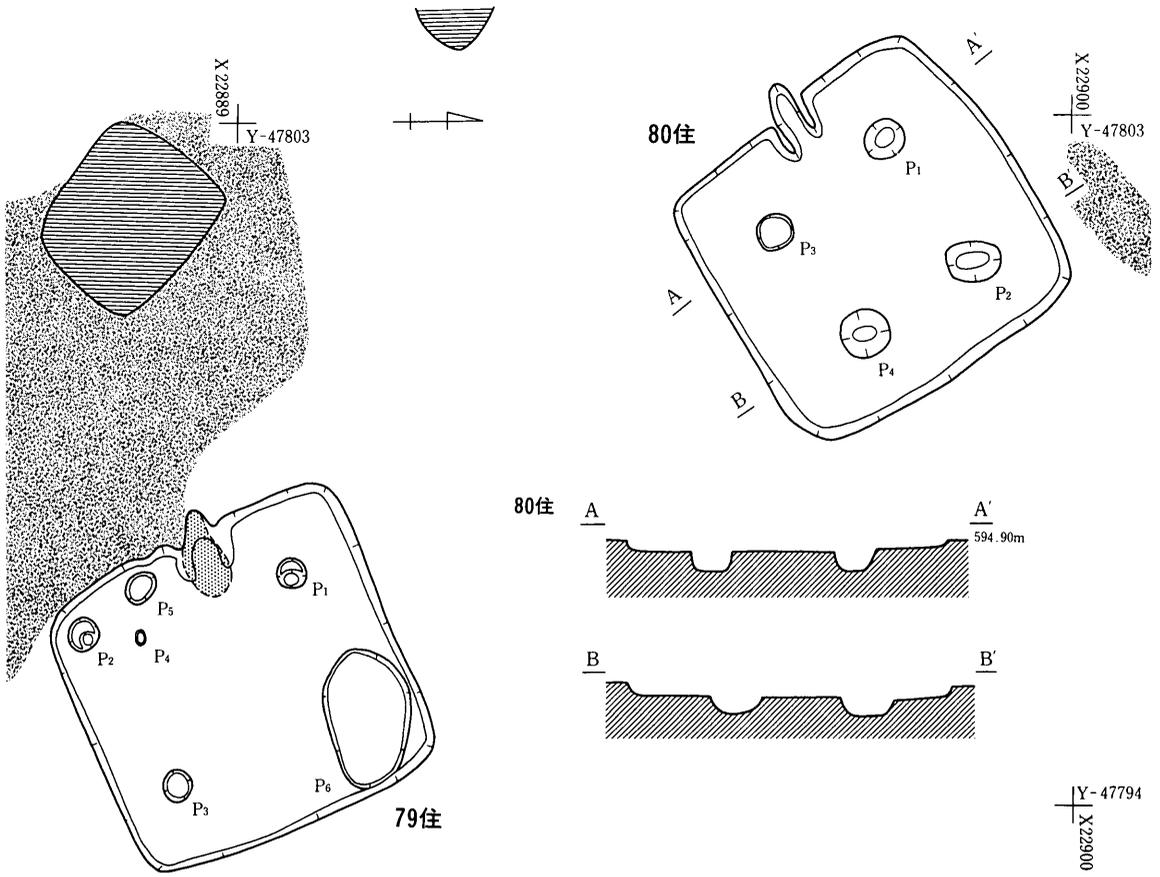
8住

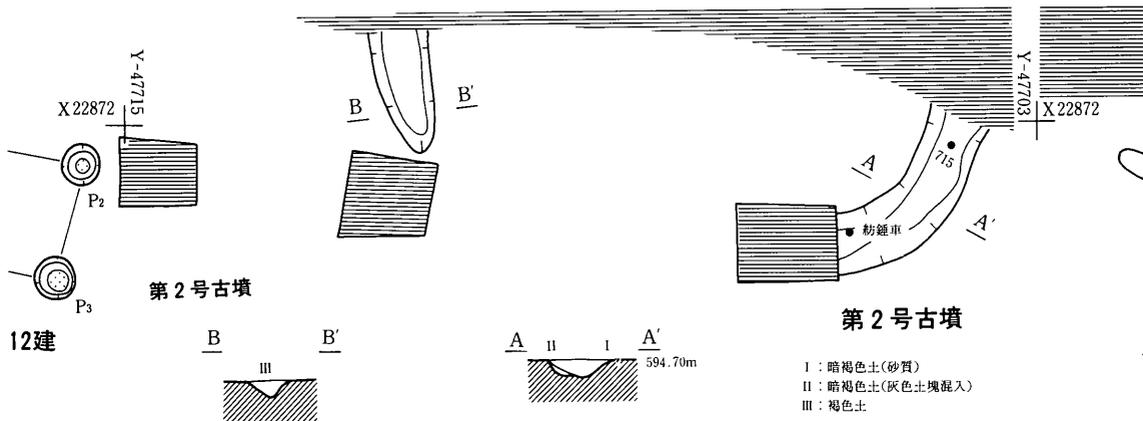




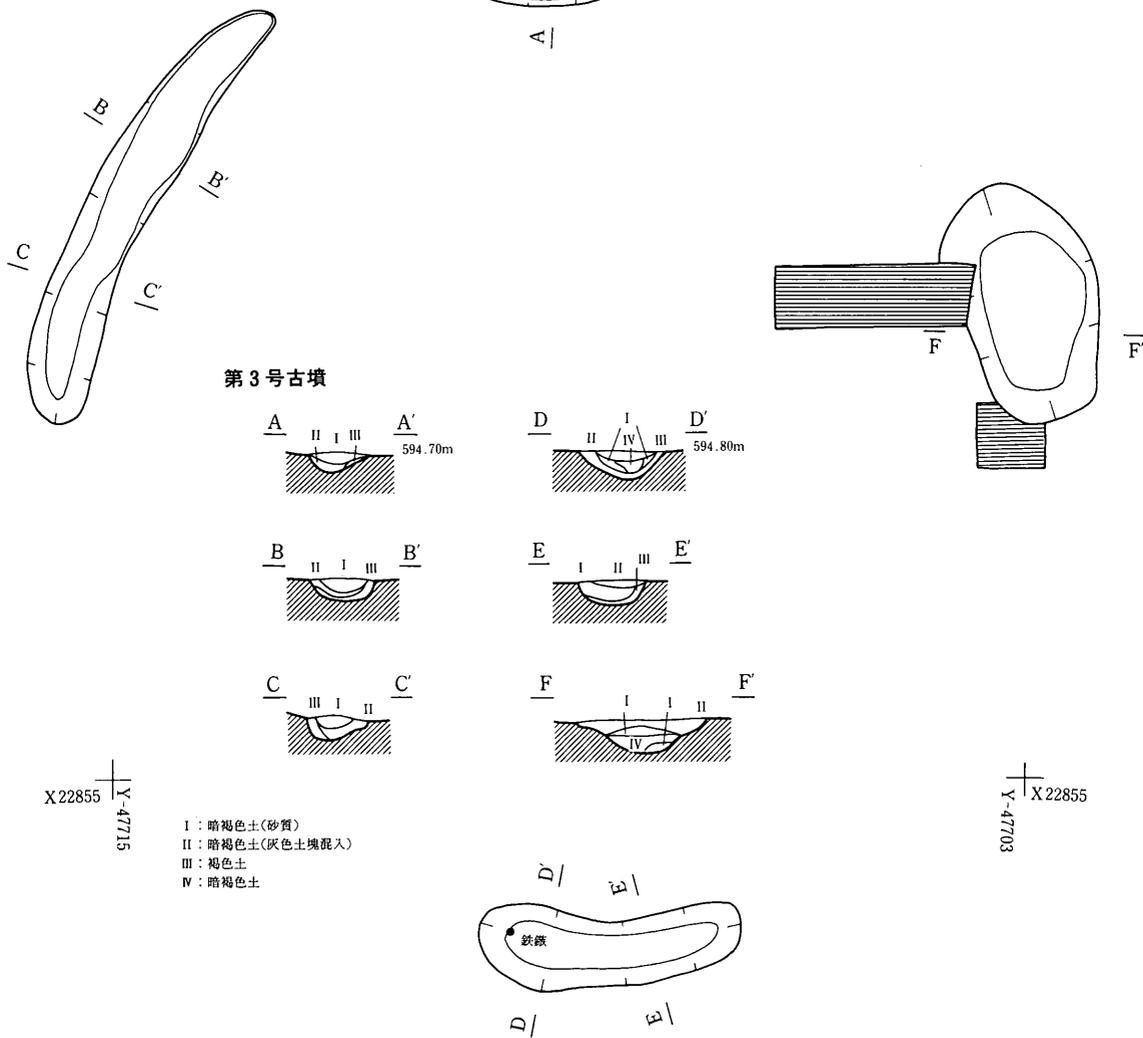






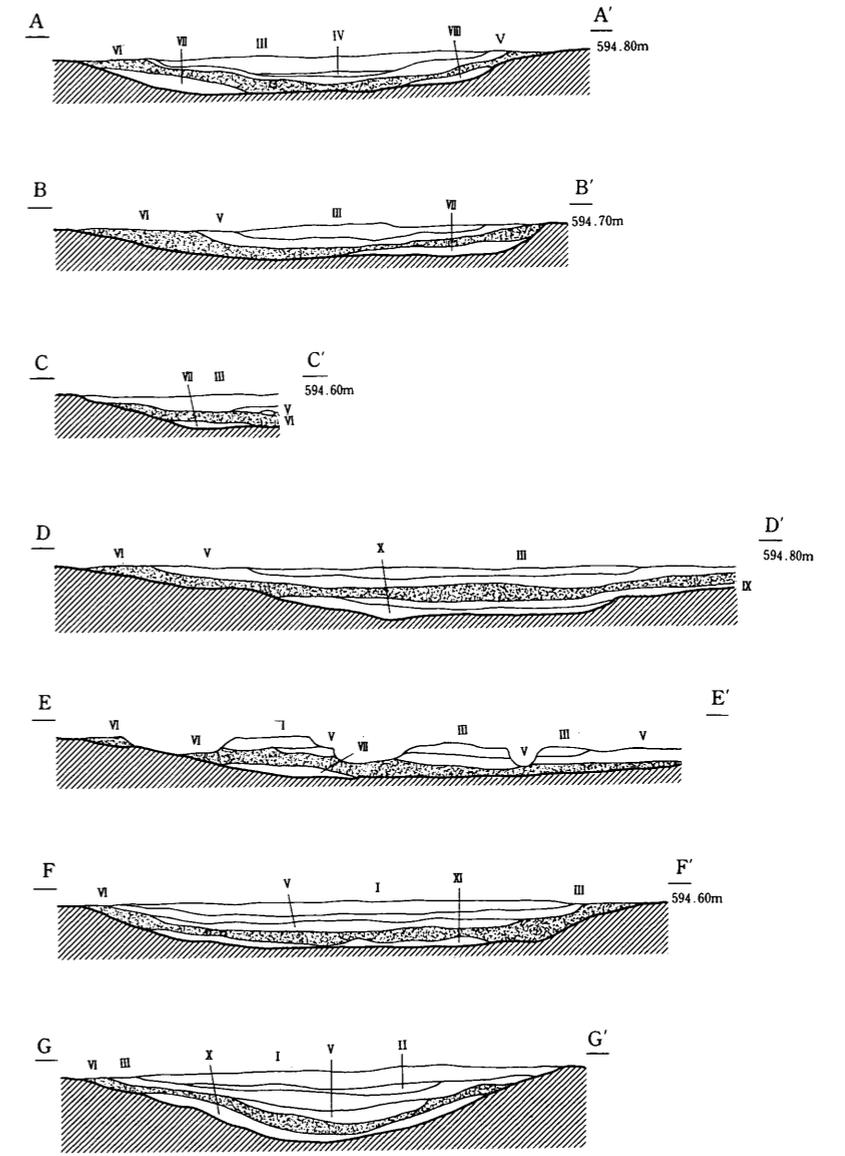
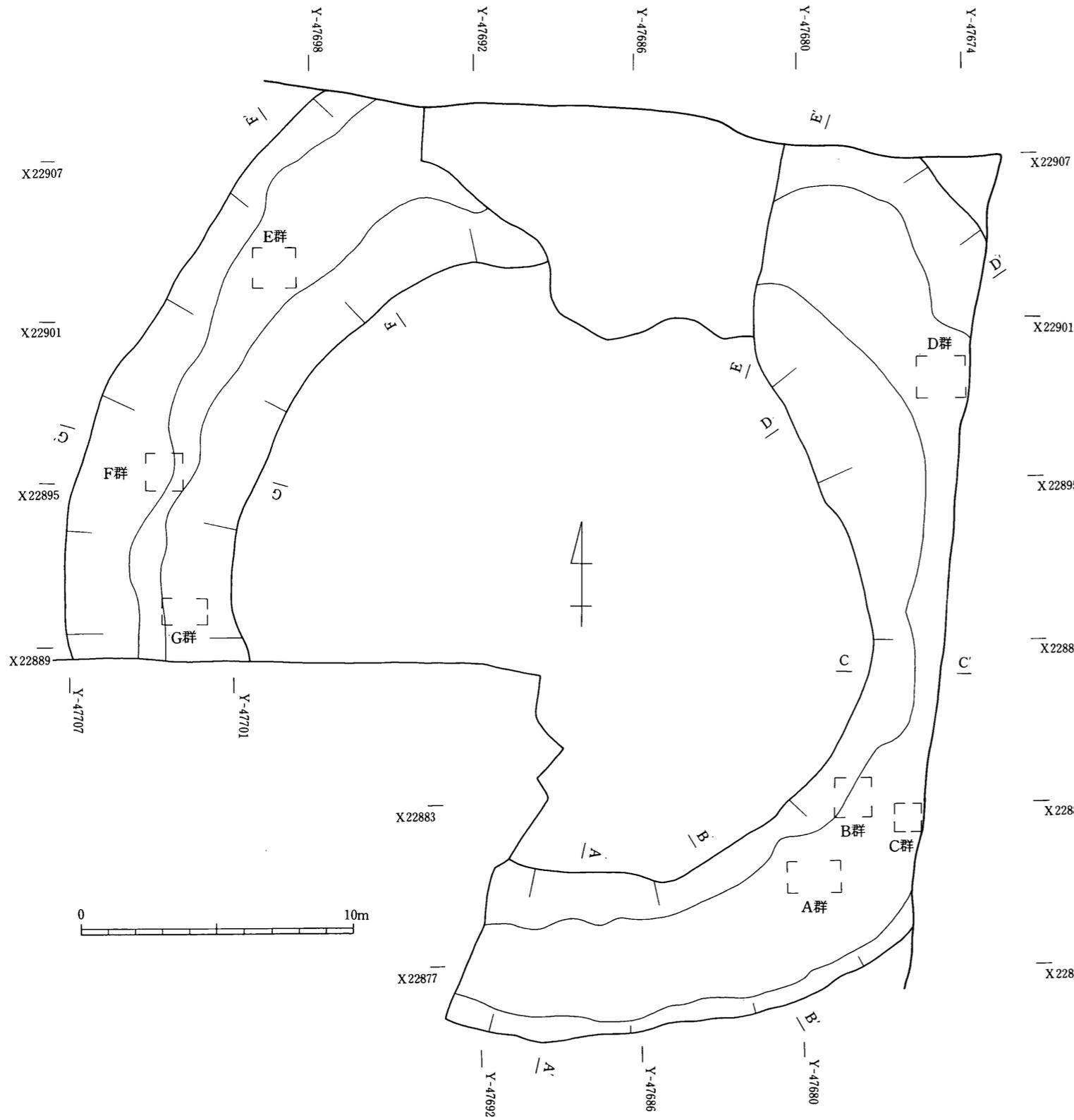


第3号古墳

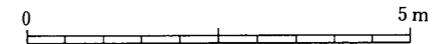




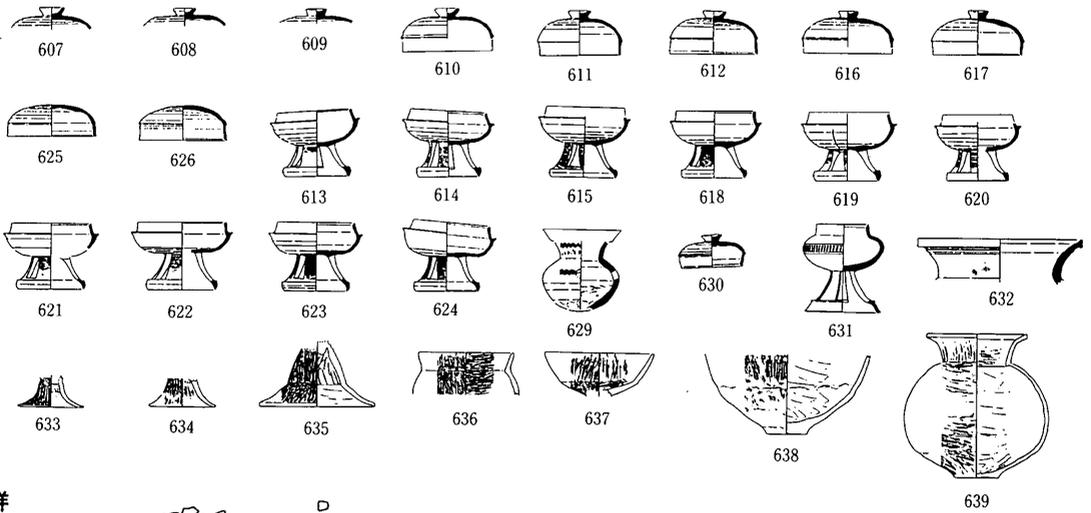
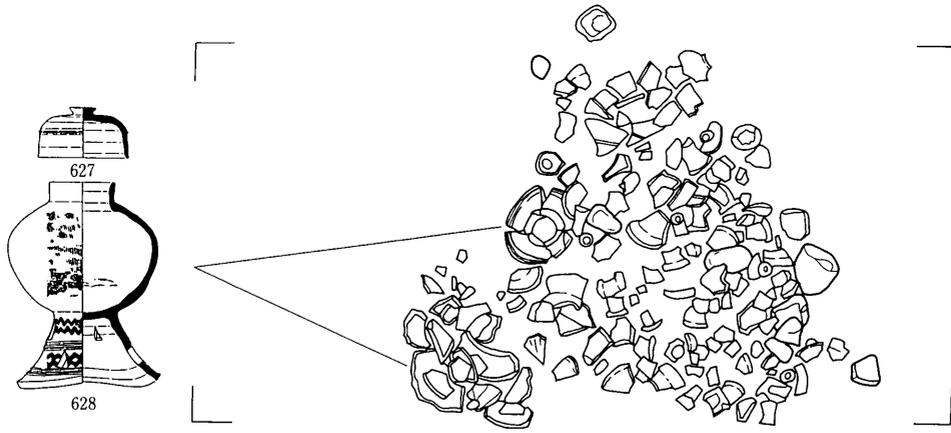
第39图 第1号古墳平面・土層図



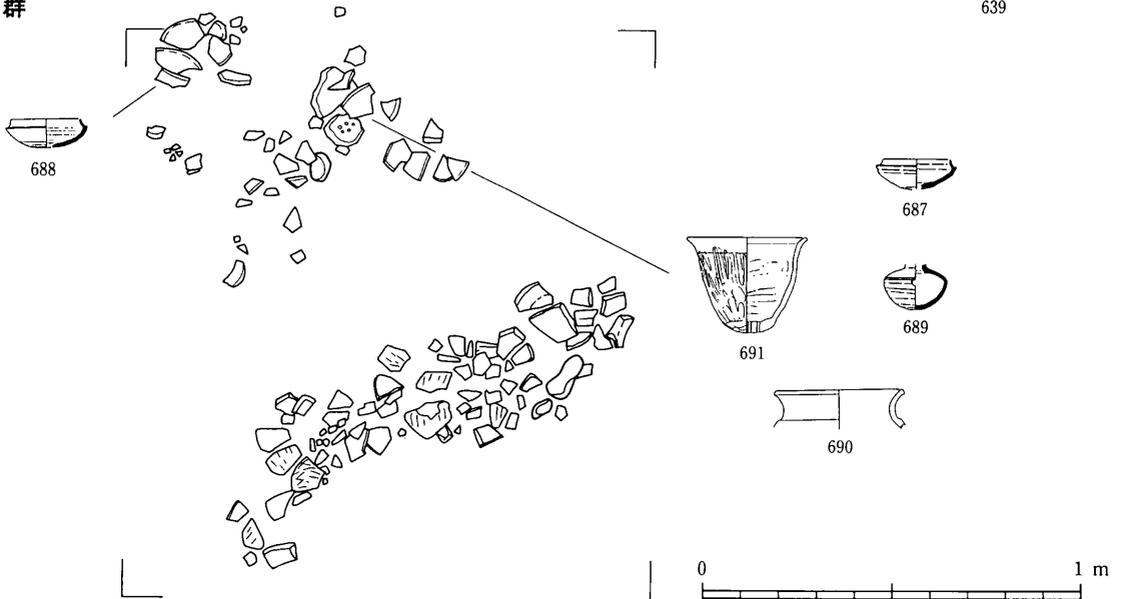
- I : 褐色土(鉄分微量混入)
- II : 黄褐色土(鉄分多量混入)
- III : 褐色土(灰色土塊混入, 鉄分多量混入)
- IV : 黄色土
- V : 明褐色土(灰色土塊多量混入)
- VI : 暗褐色土(埴輪・礫包含, 粘質)
- VII : 暗褐色土
- VIII : 黄褐色土(黄色土塊多量混入)
- IX : 明灰褐色土(灰色土塊多量混入)
- X : 暗灰褐色土(灰色土塊混入)
- XI : 茶褐色土(鉄分混入)



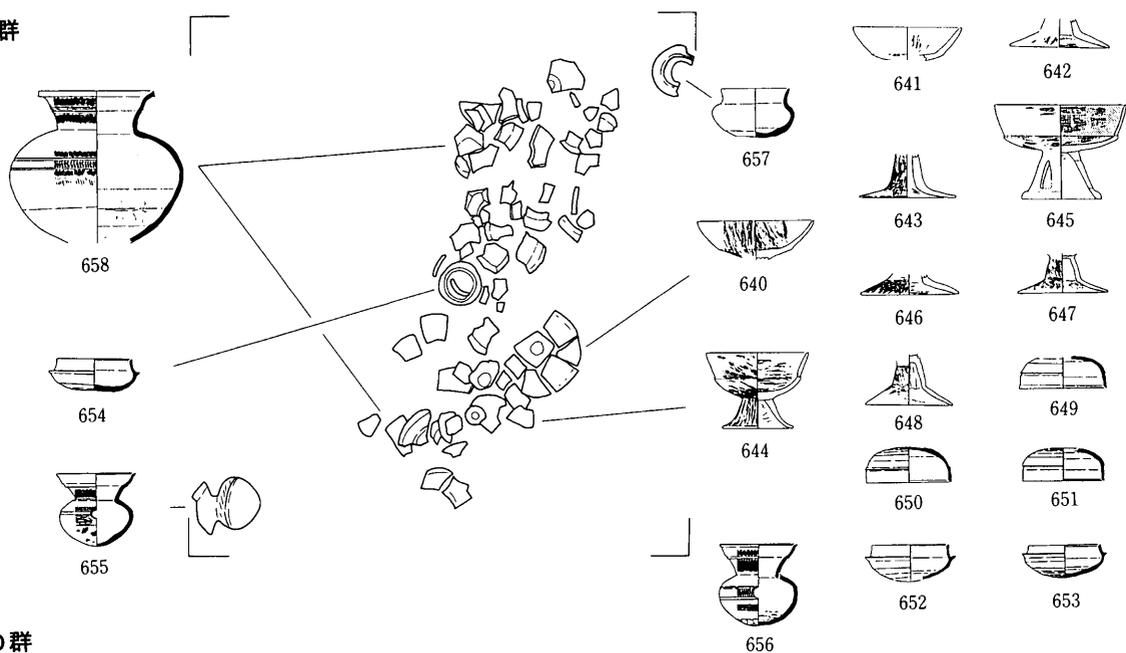
A群



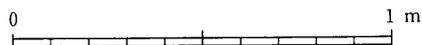
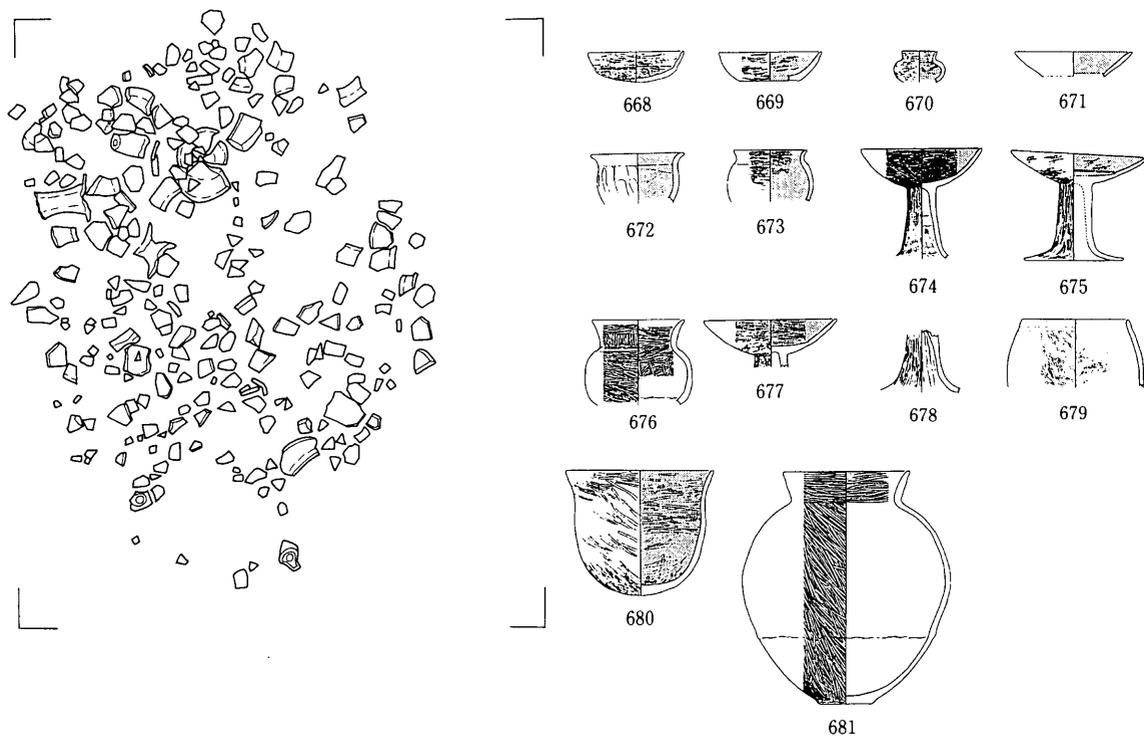
E群



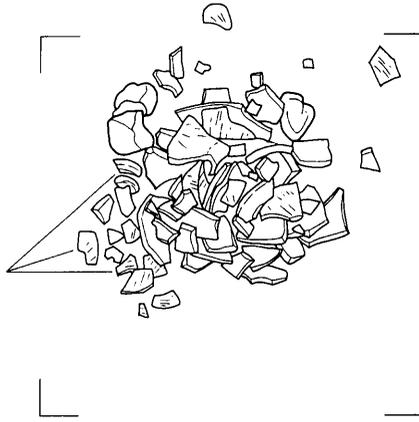
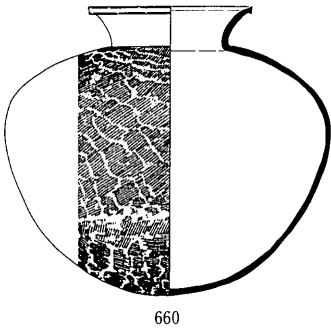
B群



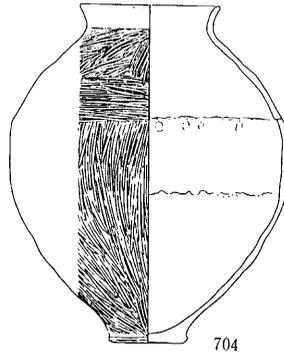
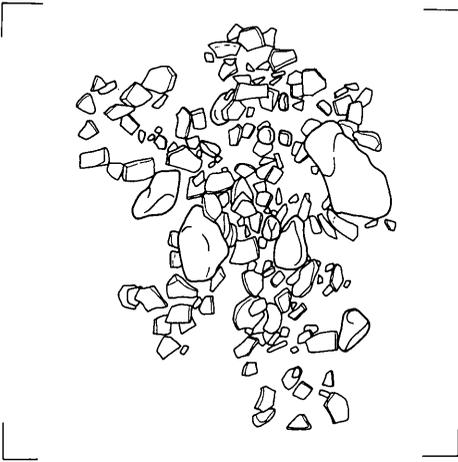
D群



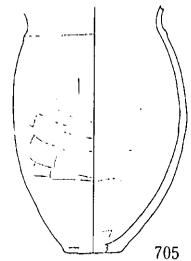
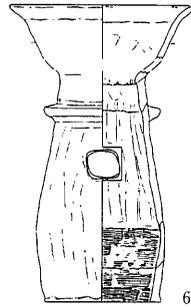
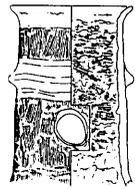
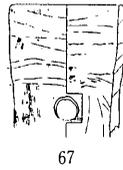
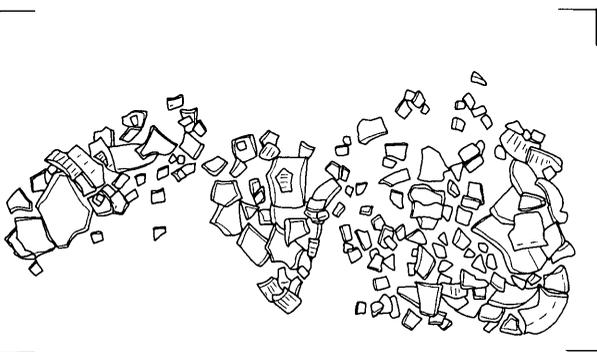
C群



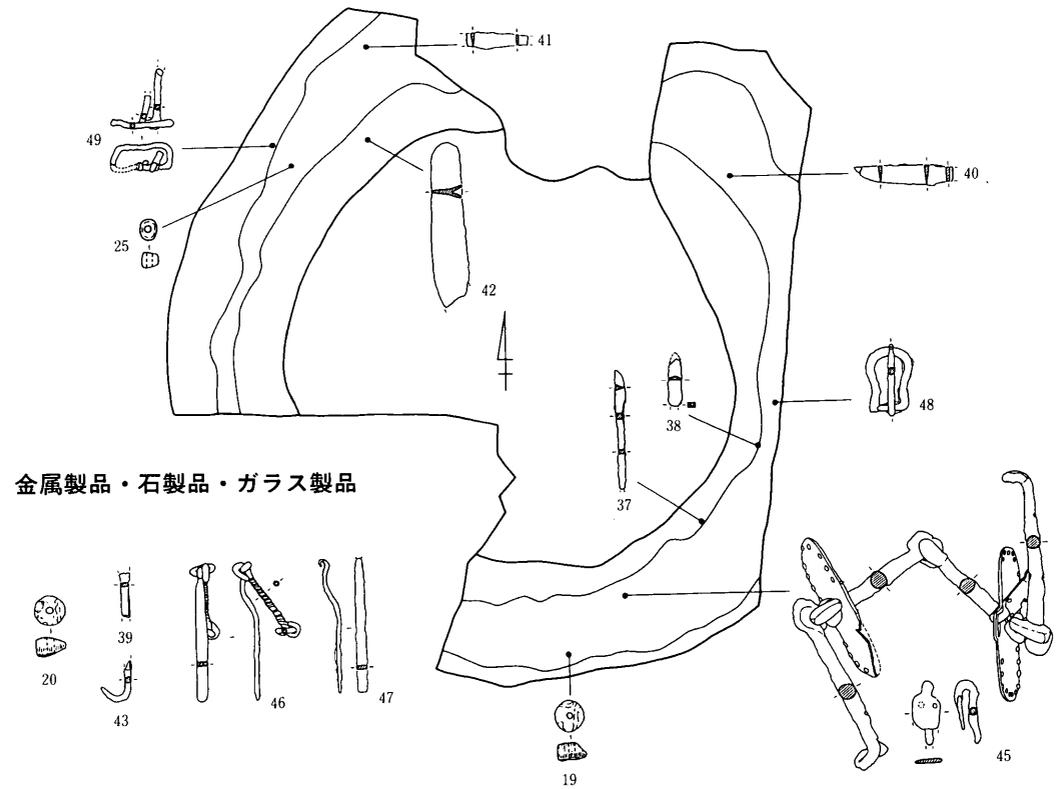
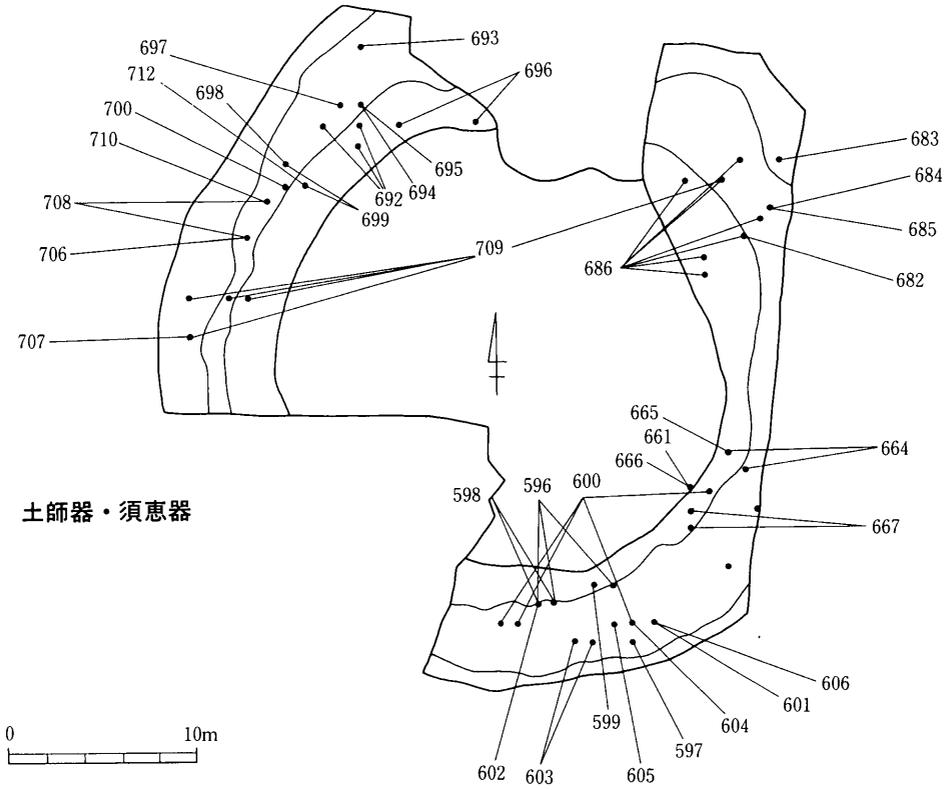
F群

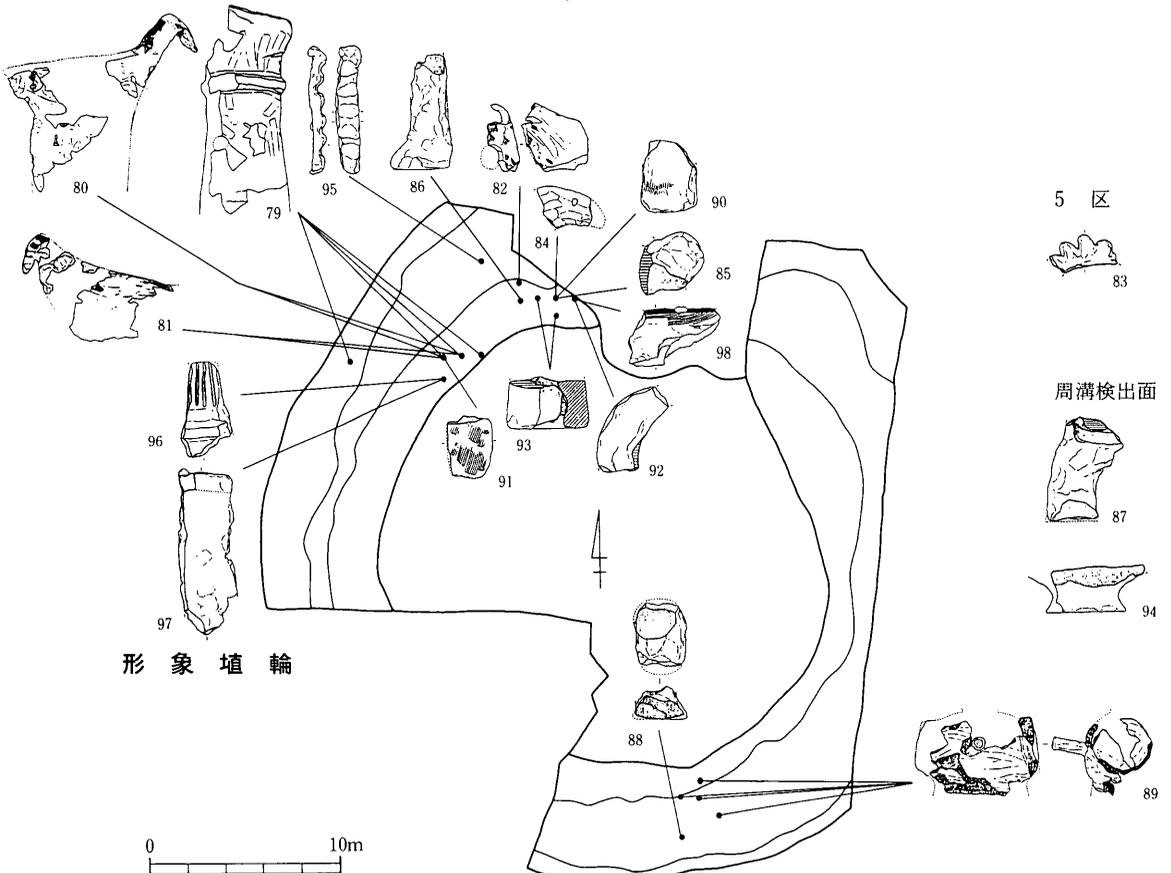
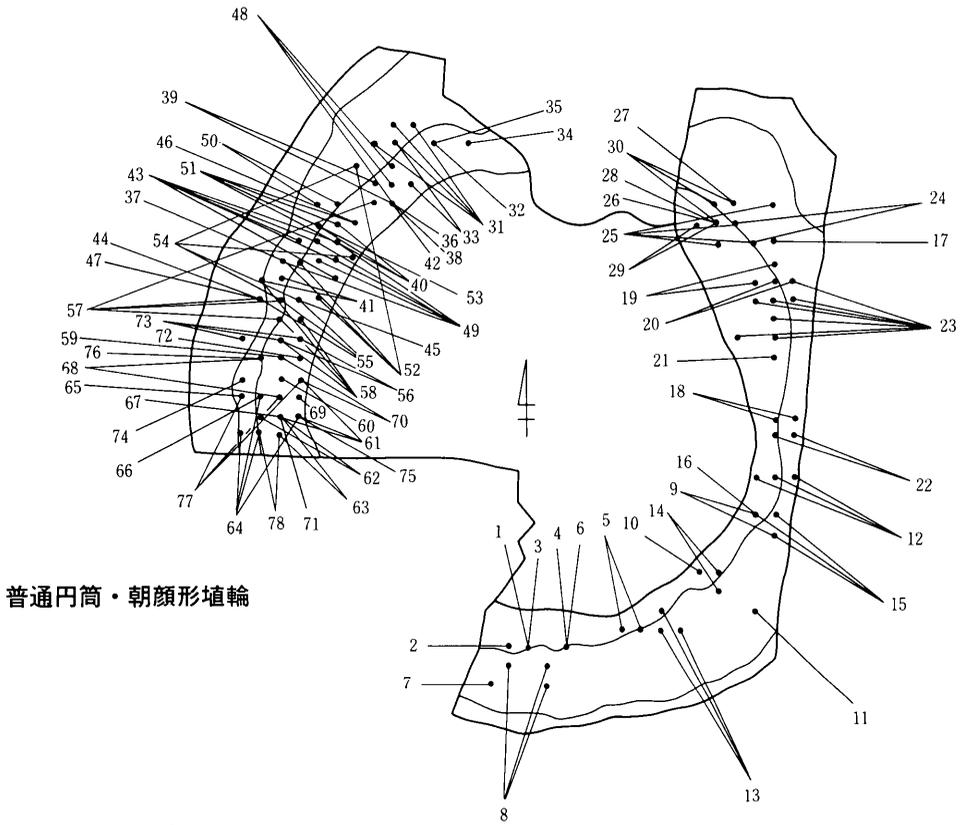


G群



第43図 第1号古墳遺物出土図4





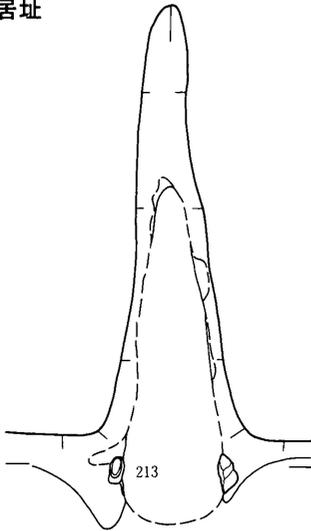
第25号住居址  
炭化材出土状况



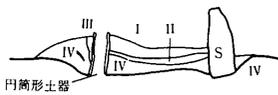
第33号住居址  
遺物出土状况



第35号住居址



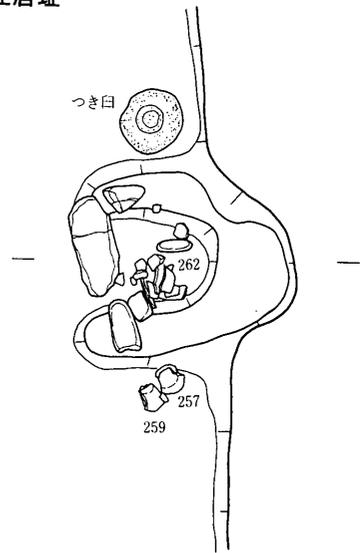
594.90m



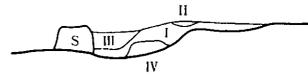
円筒形土器

- I : 焼土
- II : 赤褐色土
- III : 茶褐色土
- IV : 明褐色土

第44号住居址

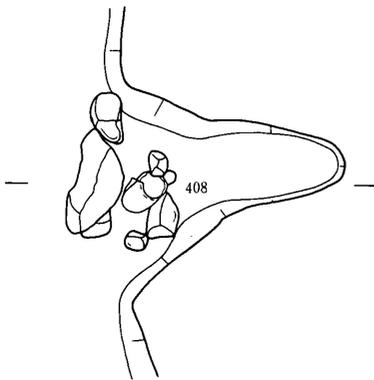


595.10m

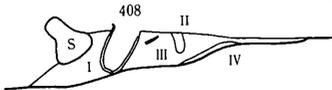


- I : 褐色土(焼土微量混入)
- II : 褐色土(焼土塊多量混入)
- III : 暗褐色土(焼土・焼土塊微量混入)
- IV : 褐色土(焼土混入)

第69号住居址

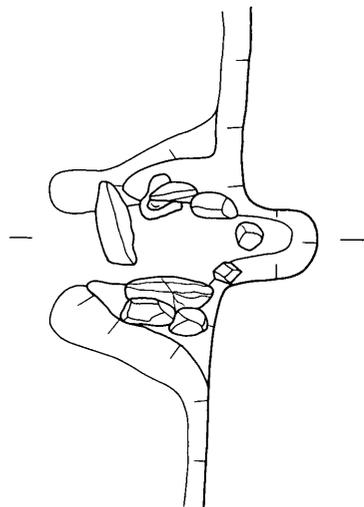


594.90m

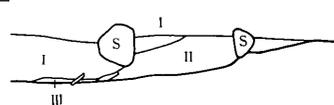


- I : 暗褐色土(灰色土塊混入)
- II : 黄色土
- III : 淡赤褐色土(焼土・焼土塊混入)
- IV : 明褐色土

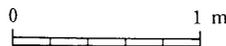
第74号住居址



594.90m

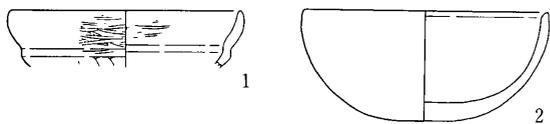


- I : 暗褐色土(灰色土塊混入)
- II : 暗褐色土(焼土塊多量、炭化物少量混入)
- III : 暗褐色土(炭化物多量混入)

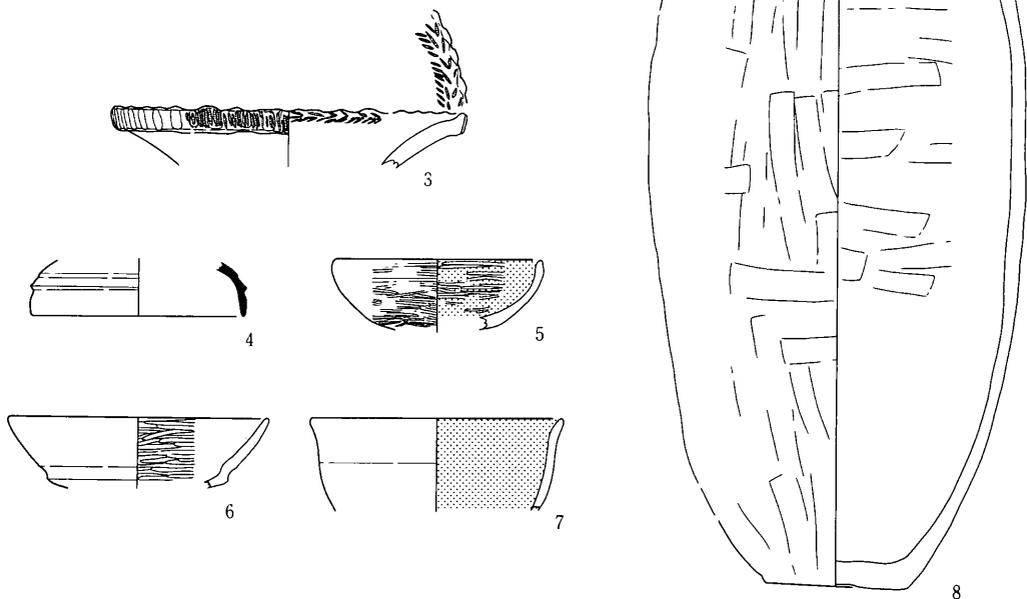


第47图 土器実測図 1

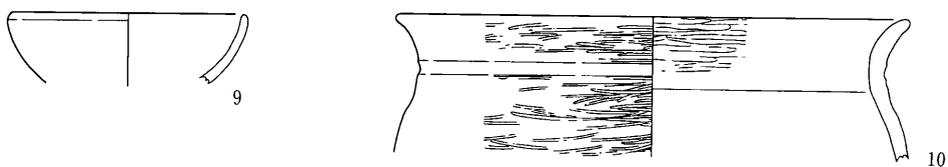
第7号住居址(1・2)



第8号住居址(3~8)



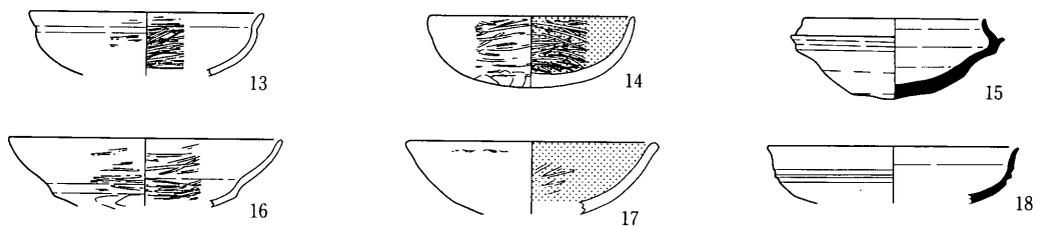
第9号住居址(9・10)



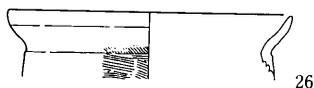
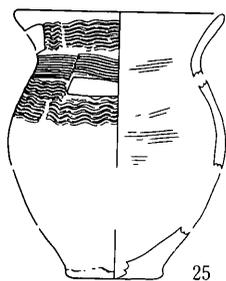
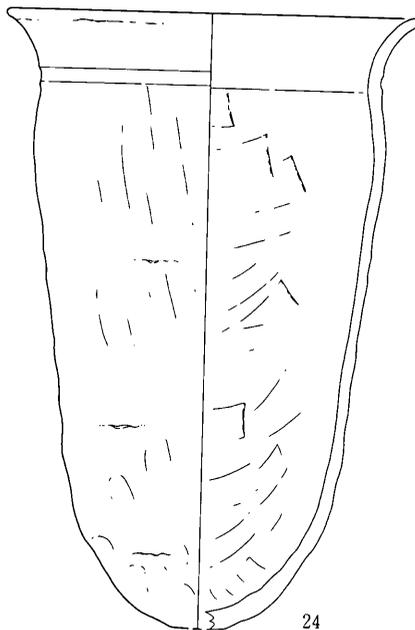
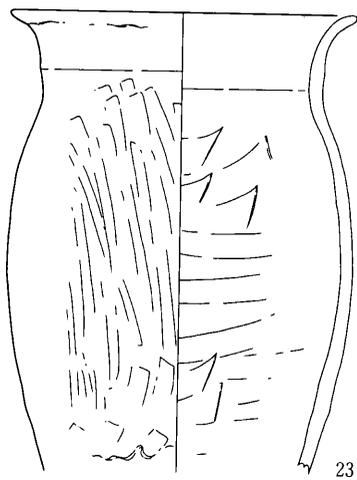
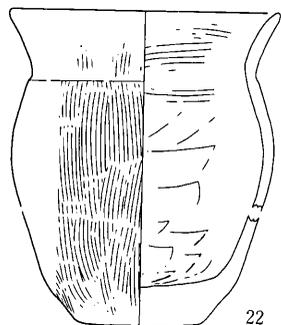
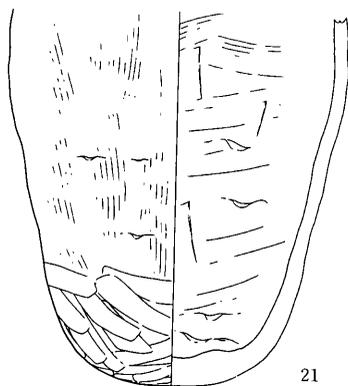
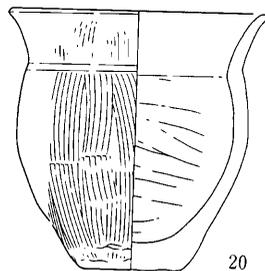
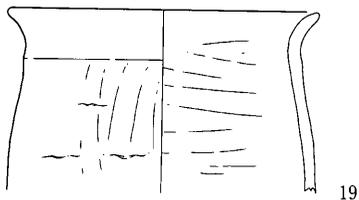
第10号住居址(11・12)



第11号住居址(13~26)



0 10 cm

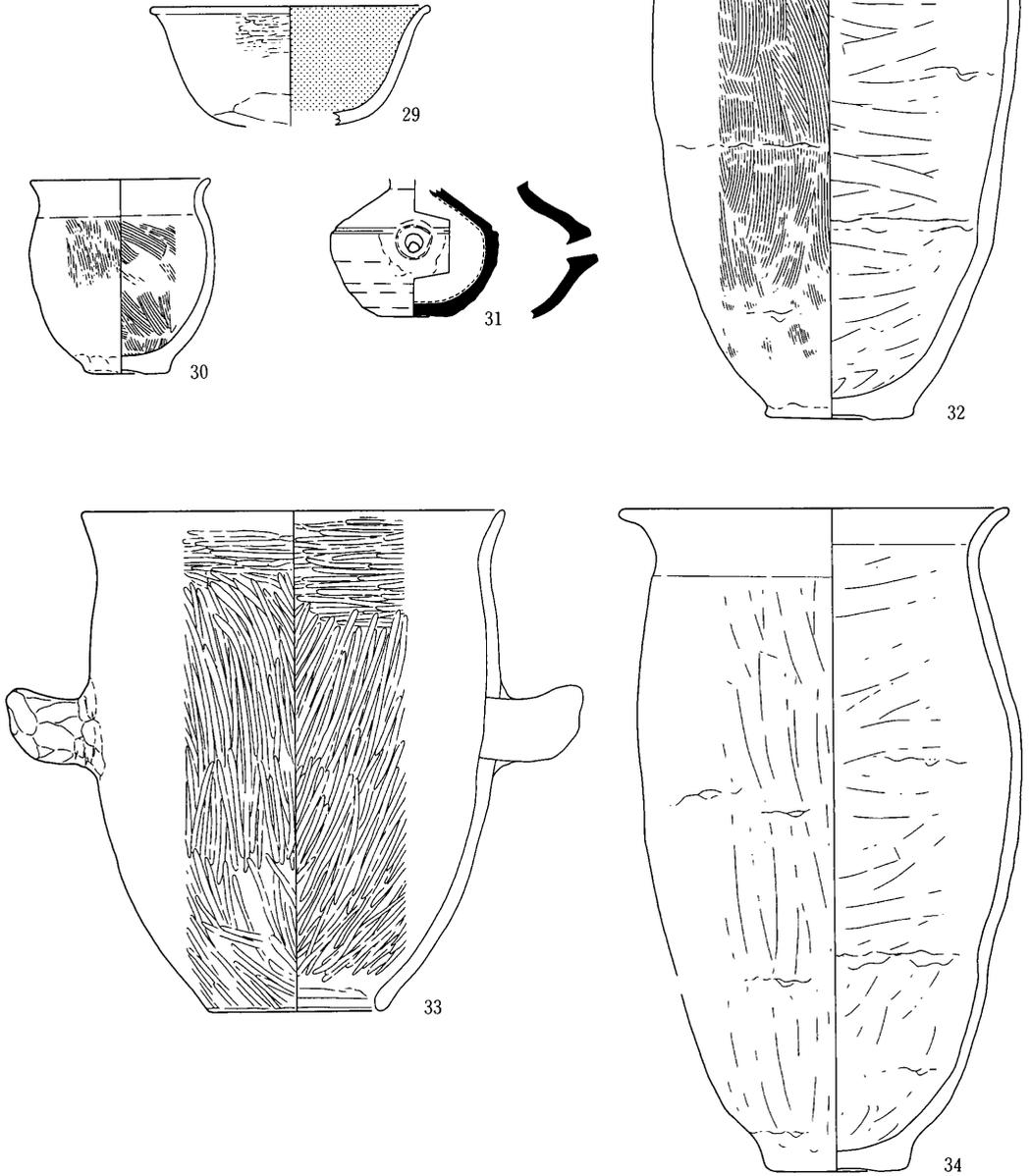


0 10 cm

第12号住居址(27・28)

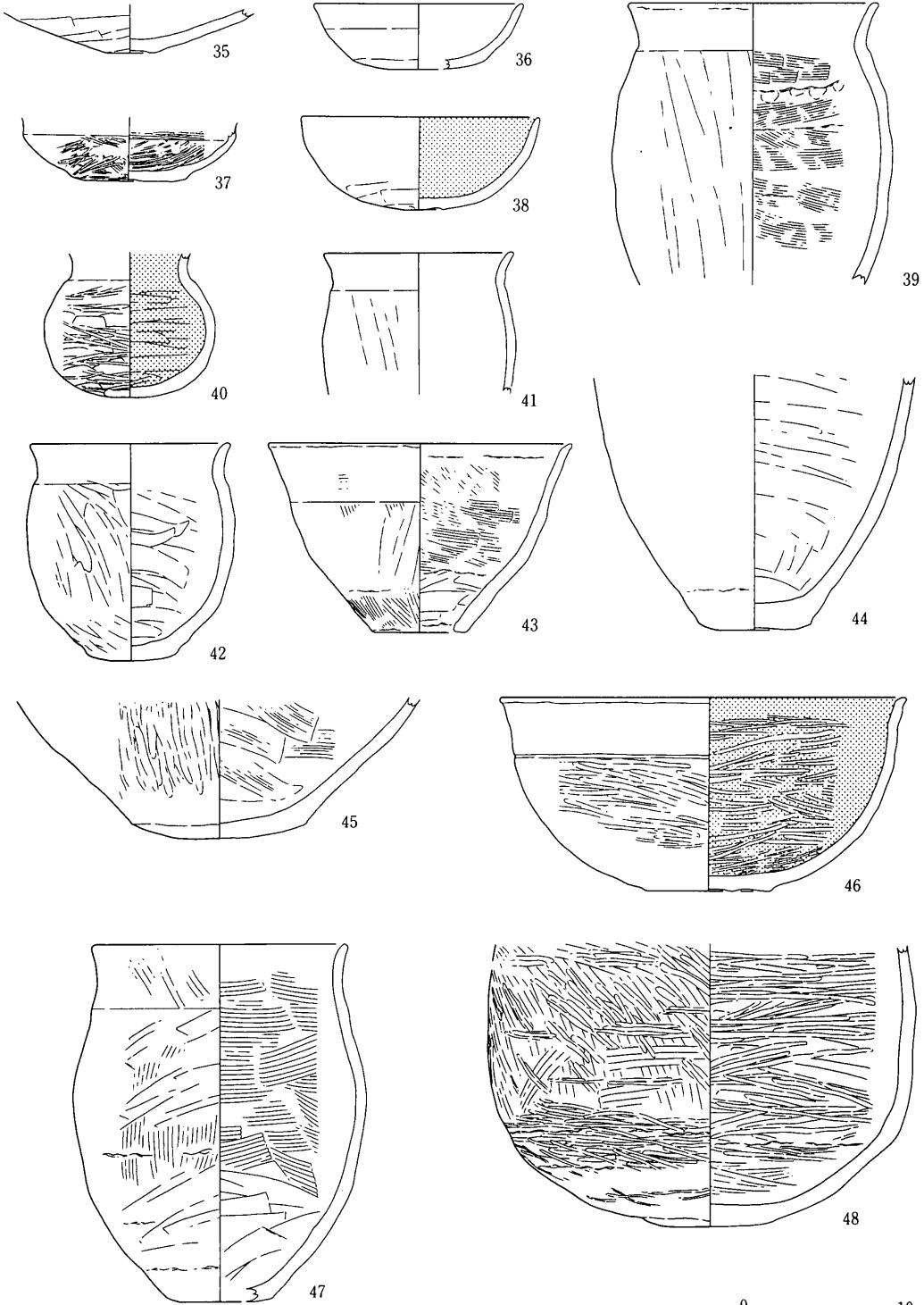


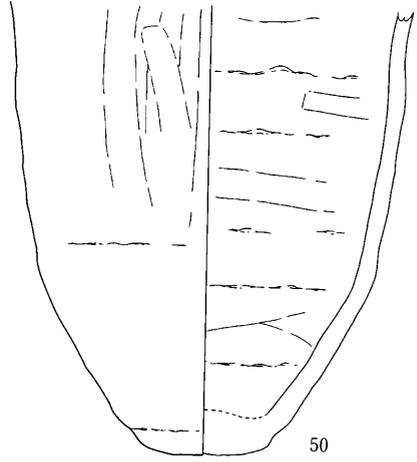
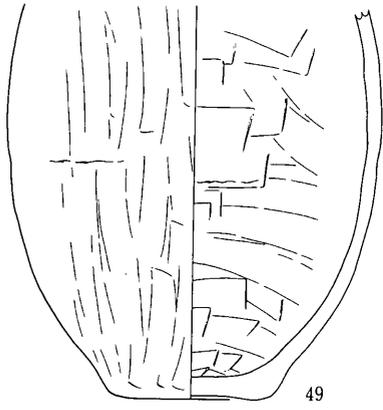
第13号住居址(29~34)



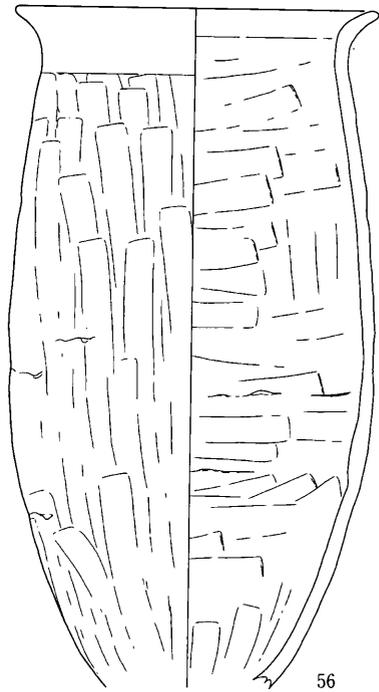
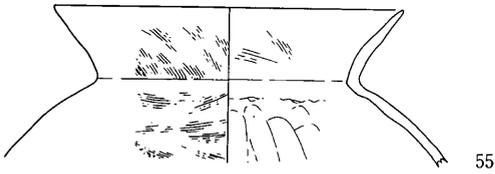
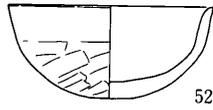
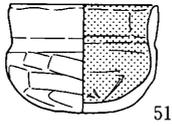
0 10 cm

第14号住居址(35~50)

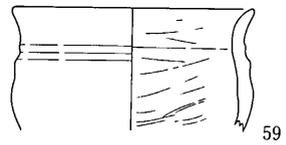
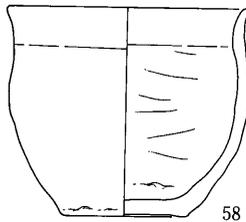
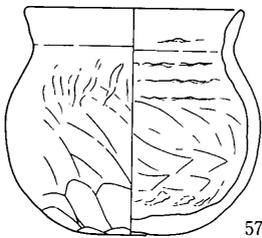




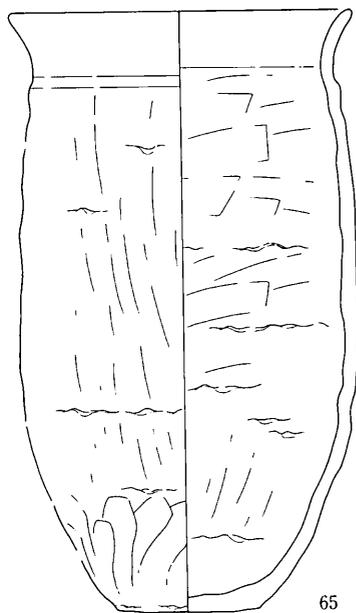
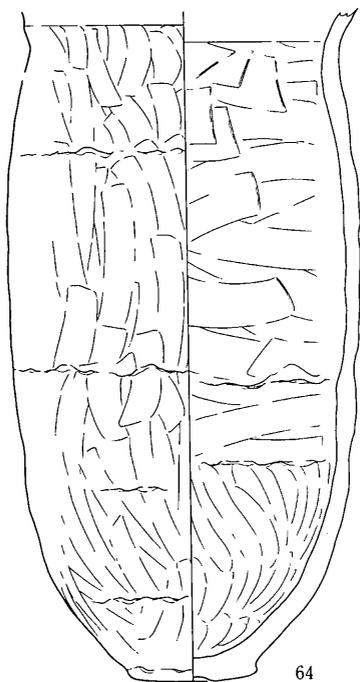
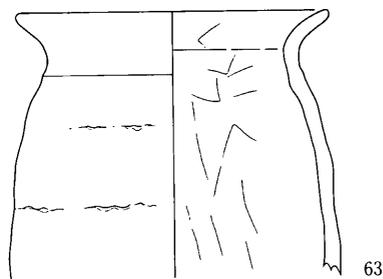
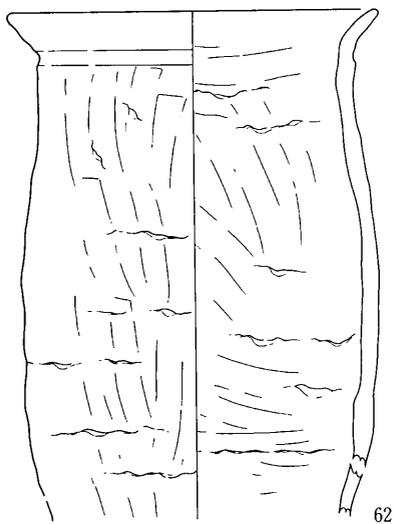
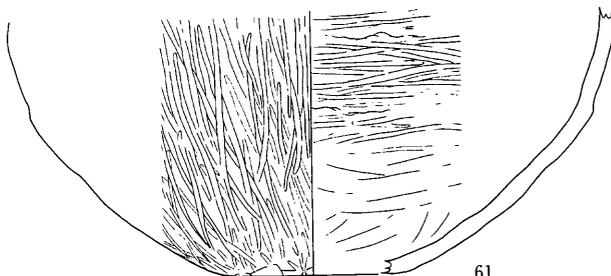
第16号住居址(51~56)



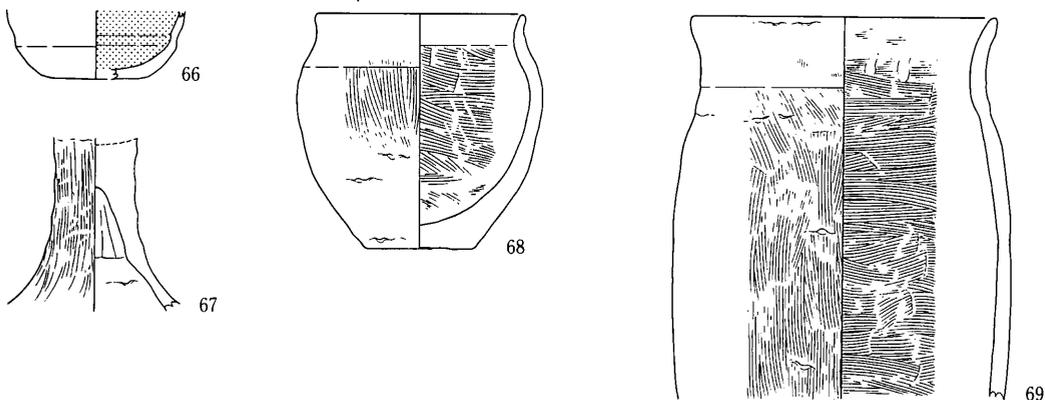
第17号住居址(57~65)



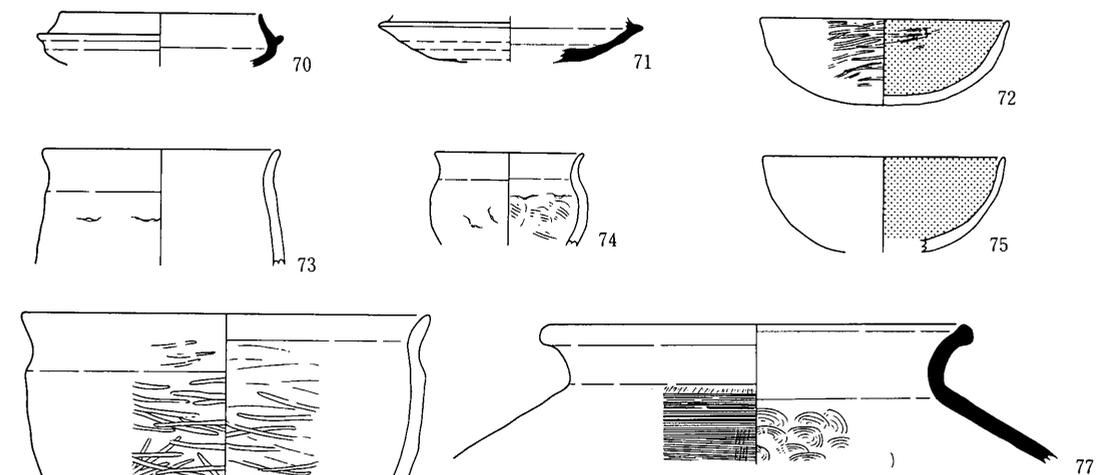
0 10 cm



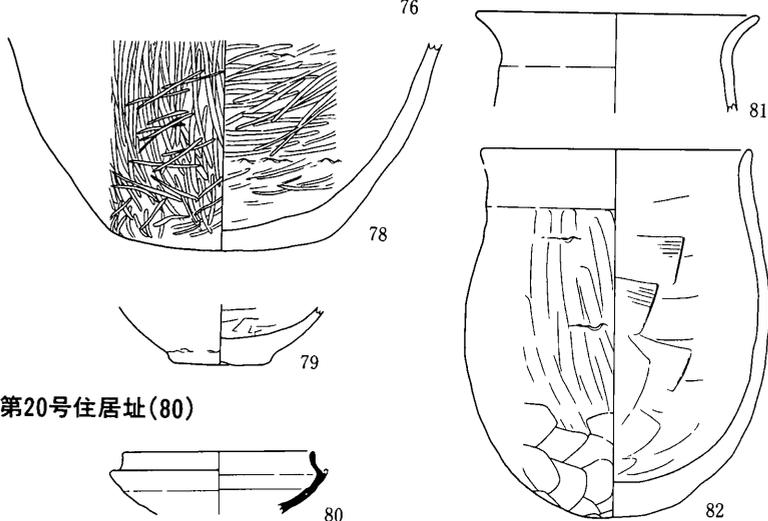
第18号住居址(66~69)



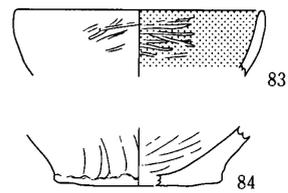
第19号住居址(70~79)



第21号住居址(81·82)



第22号住居址(83·84)

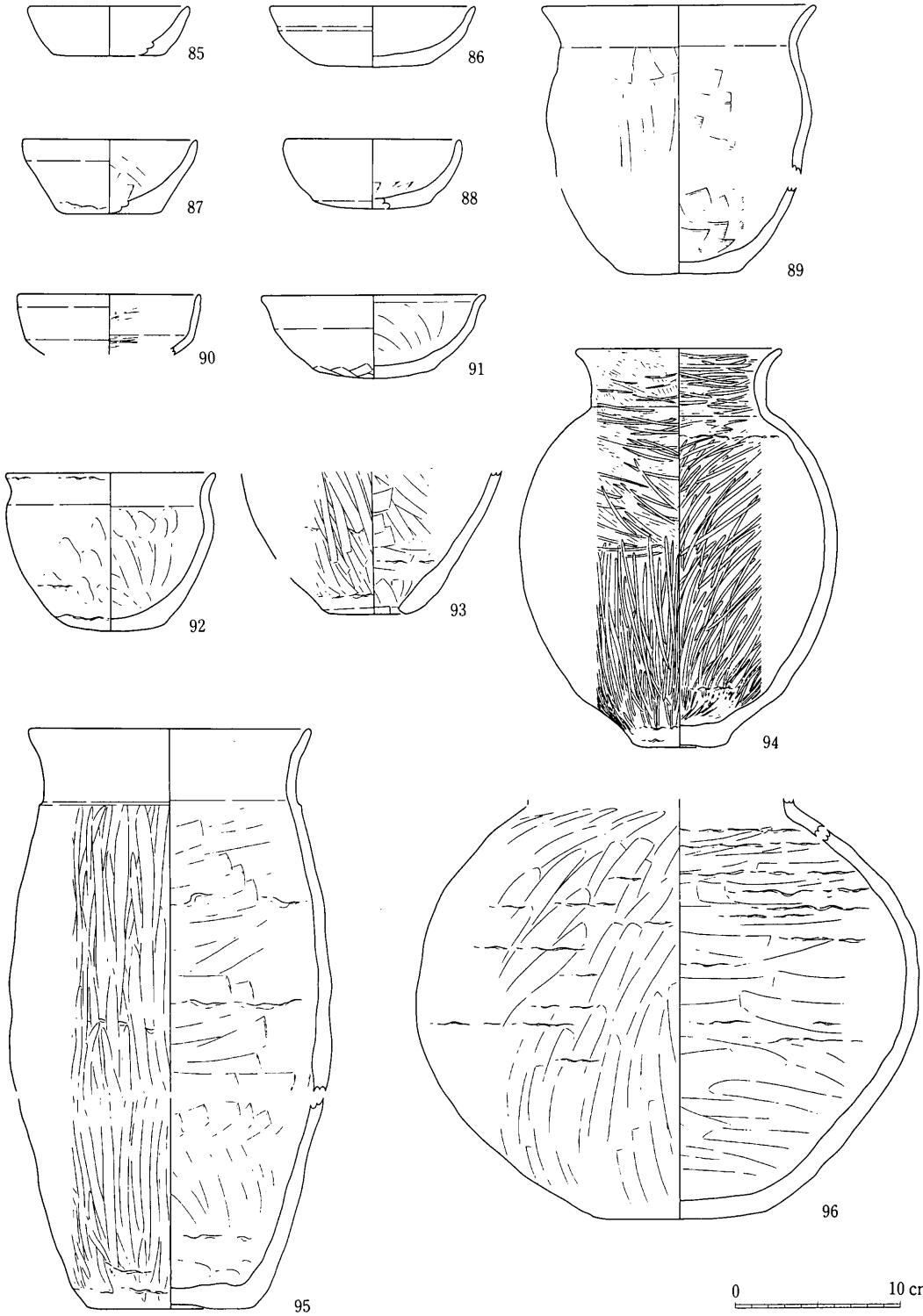


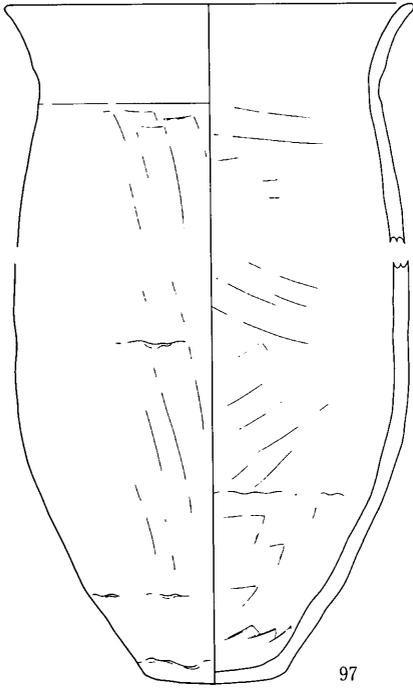
第20号住居址(80)



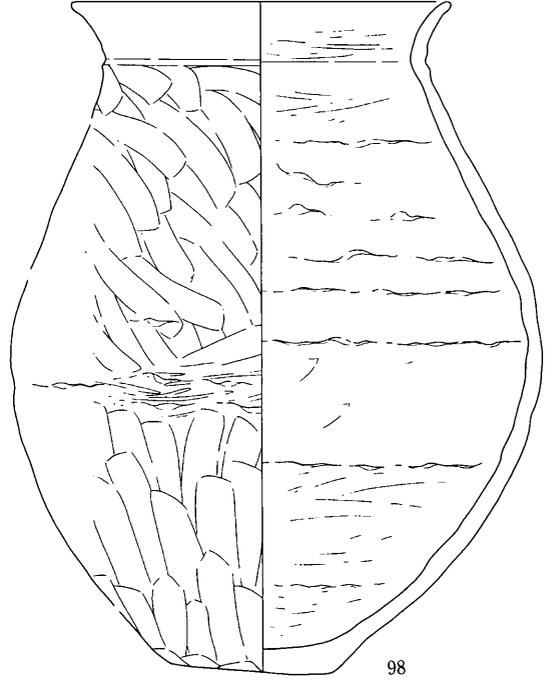
0 10 cm

第23号住居址(85~98)



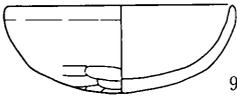


97

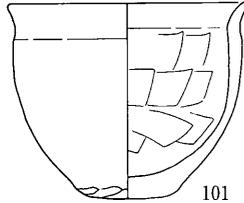


98

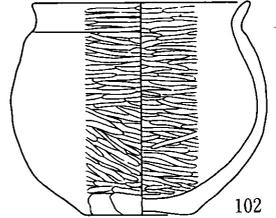
第24号住居址(99~104)



99



101



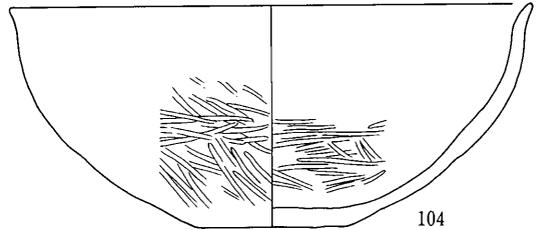
102



100

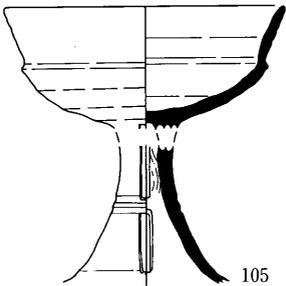


103

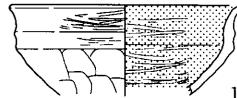


104

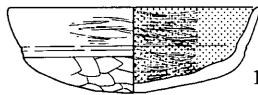
第25号住居址(105~121)



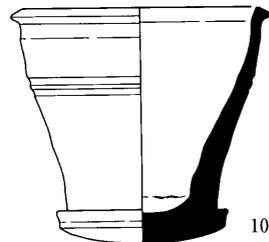
105



106

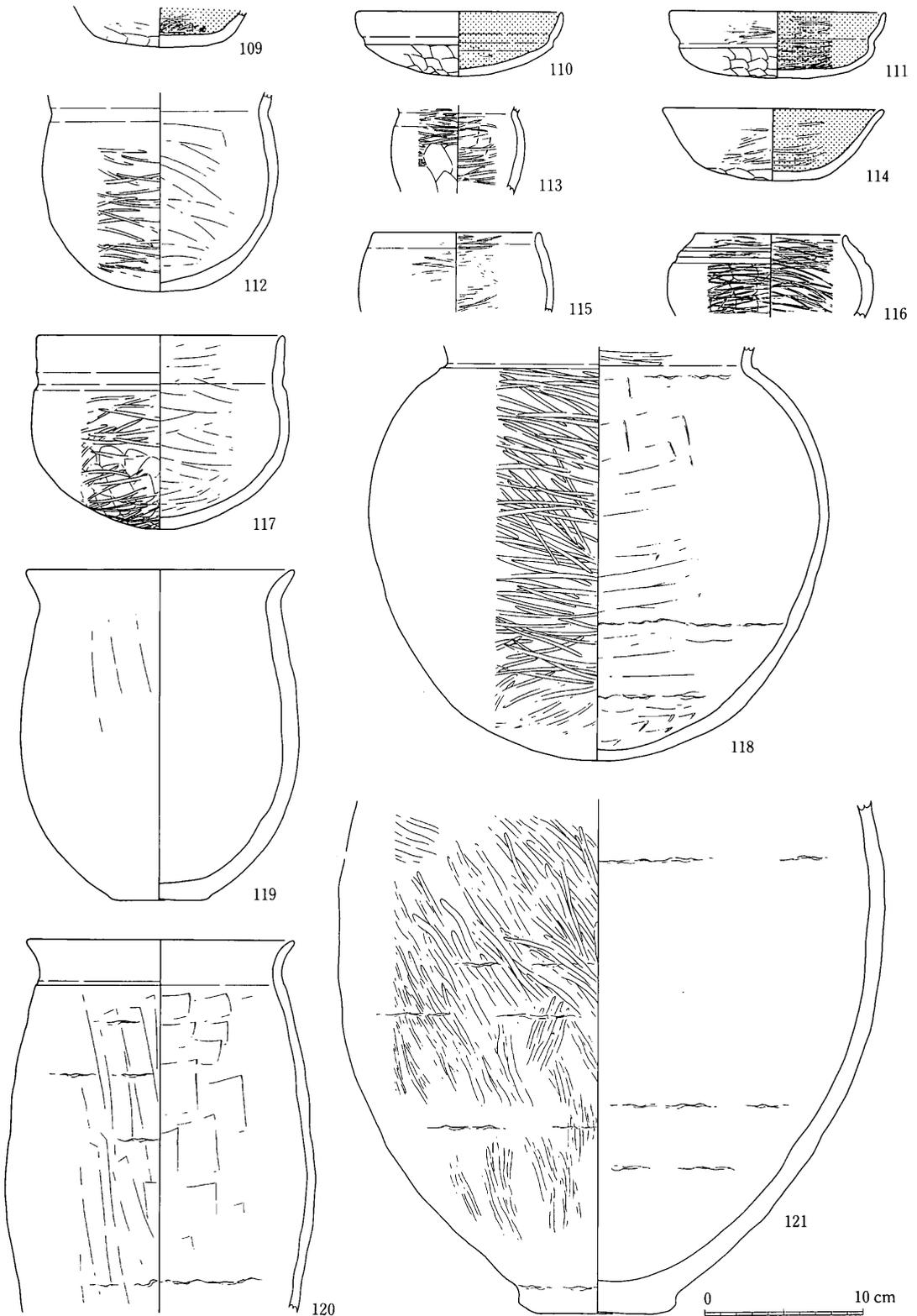


107

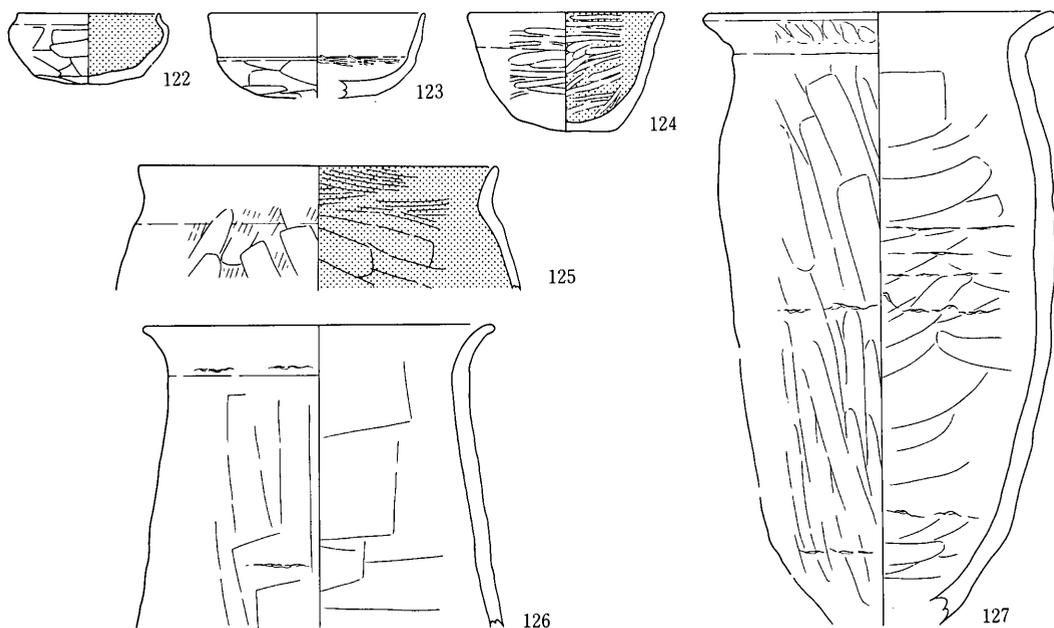


108

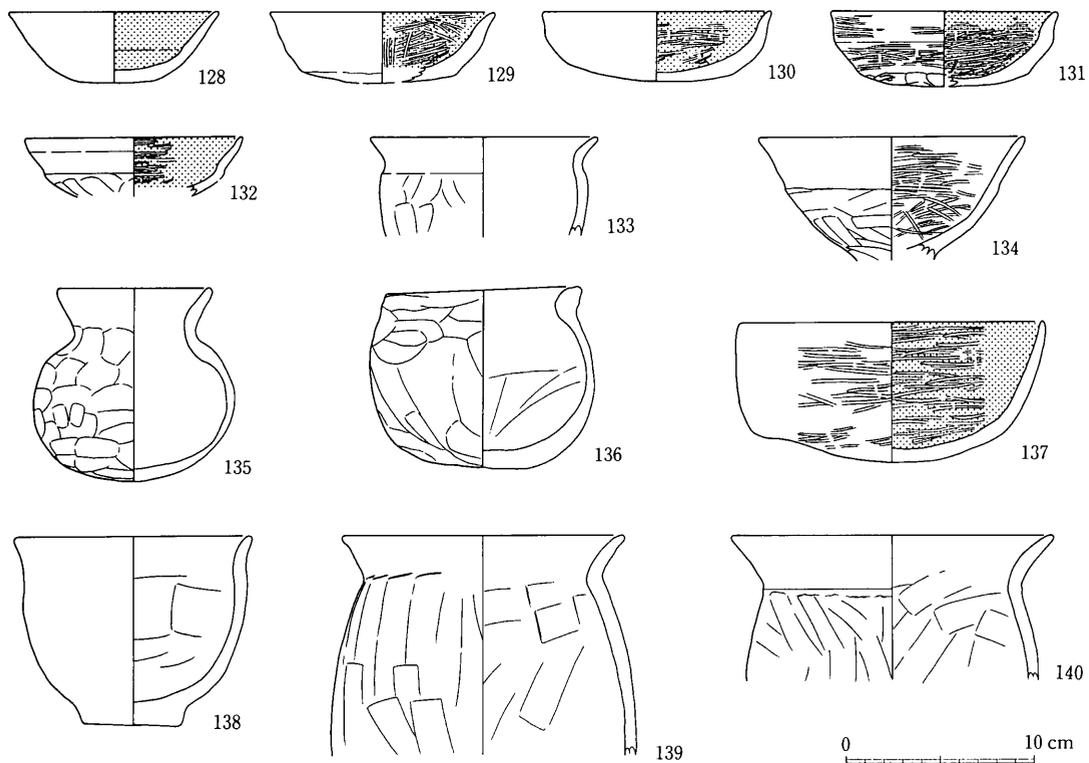
0 10 cm

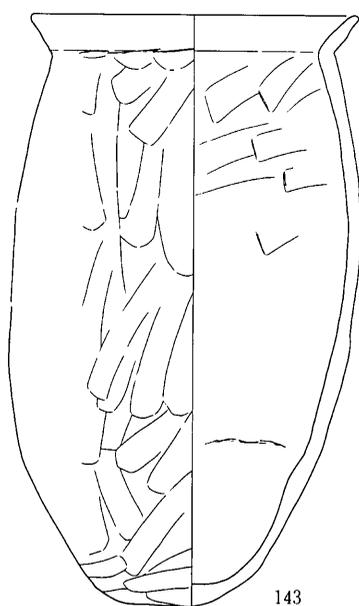
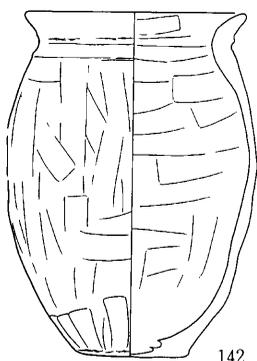
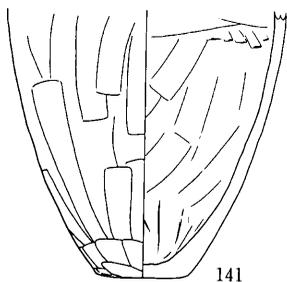


第26号住居址(122~127)

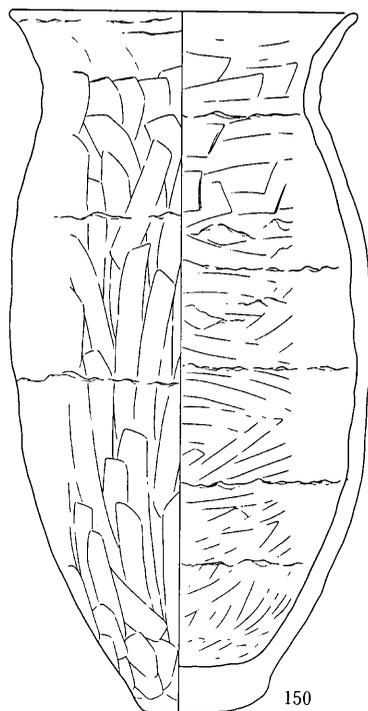
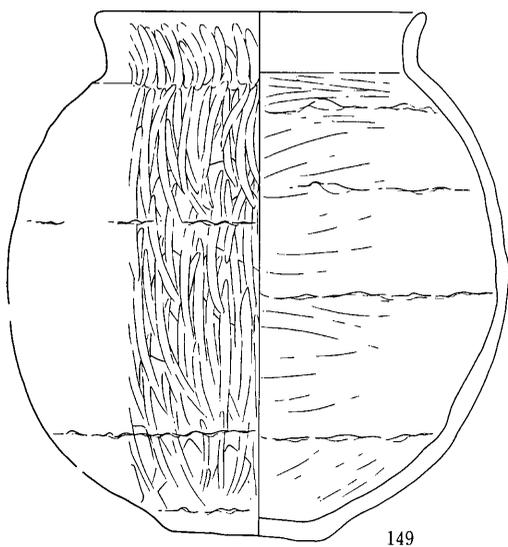
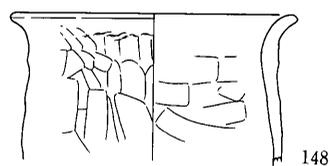
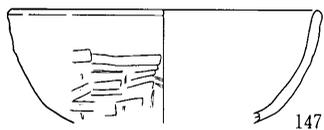
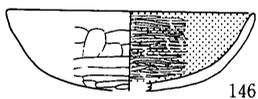
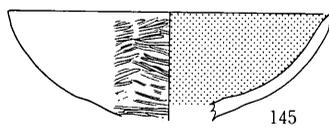
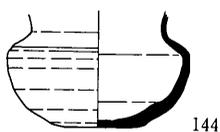


第27号住居址(128~143)



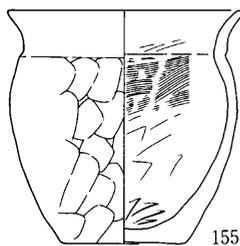
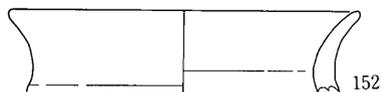
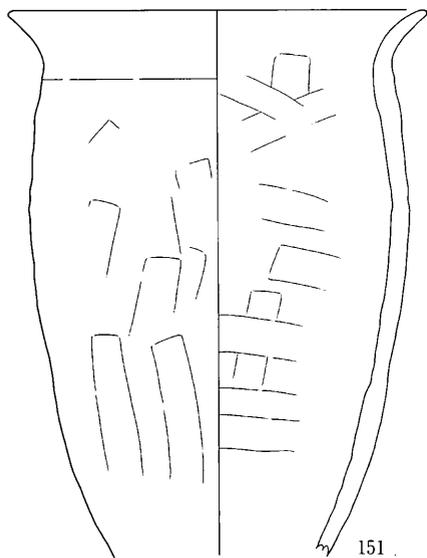


第28号住居址(144~151)

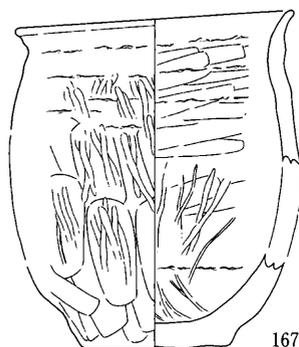
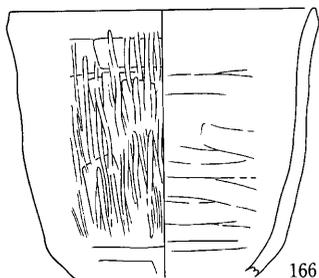
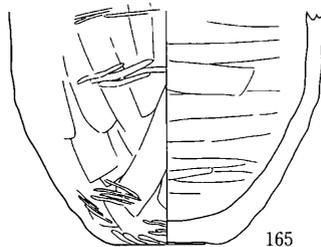
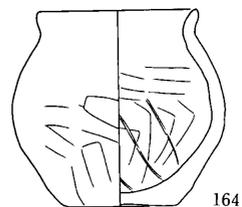
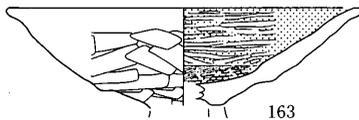
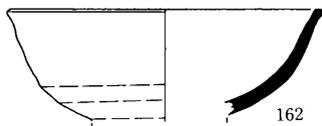
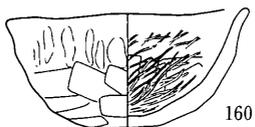
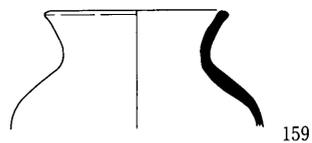


0 10 cm

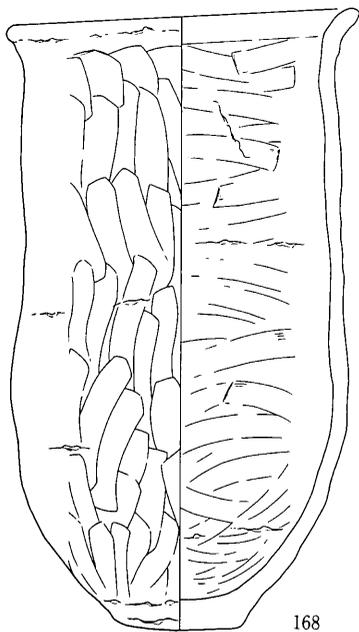
第29号住居址(152~156)



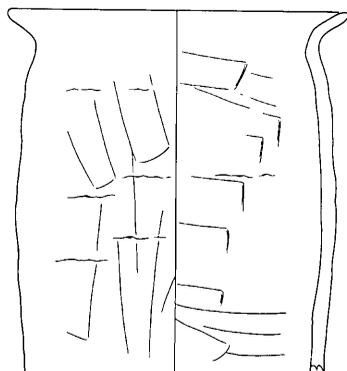
第30号住居址(157~170)



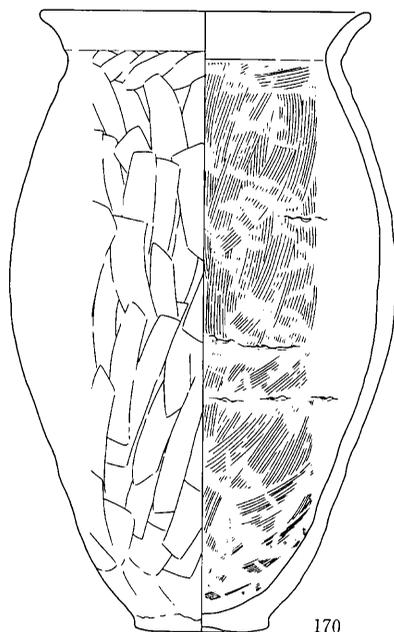
0 10 cm



168



169



170

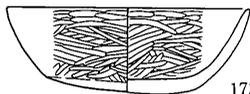
第31号住居址(171~177)



171



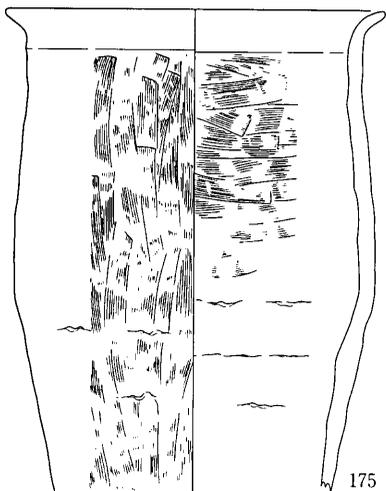
172



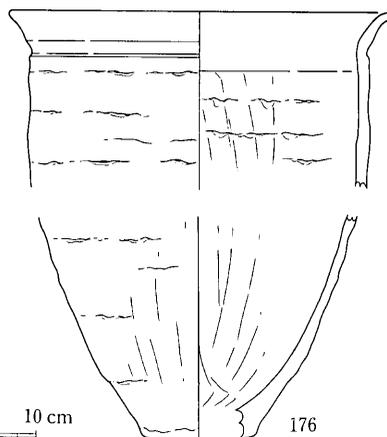
173



174



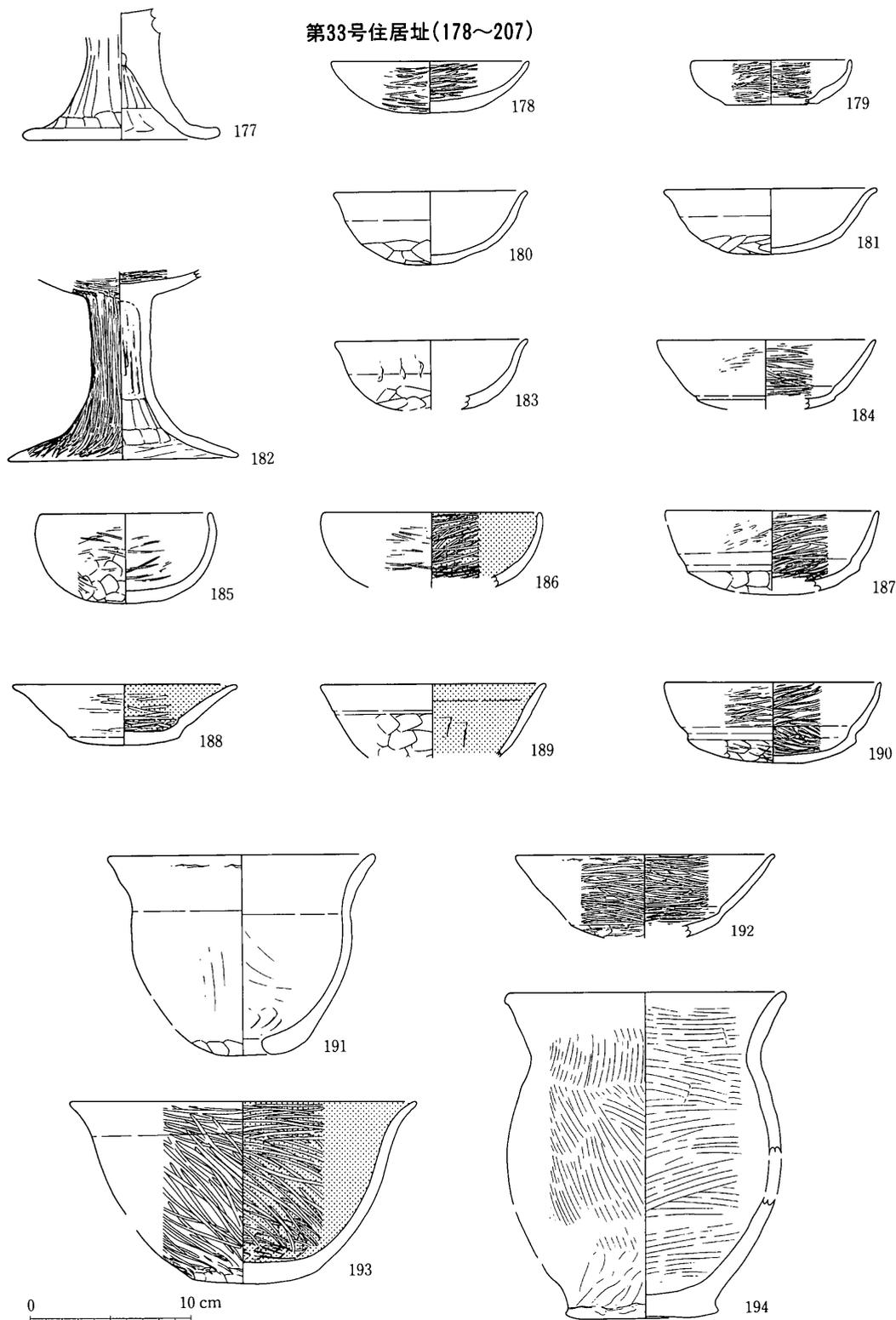
175

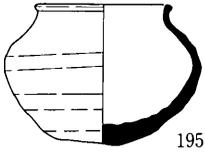


176

0 10 cm

第33号住居址(178~207)





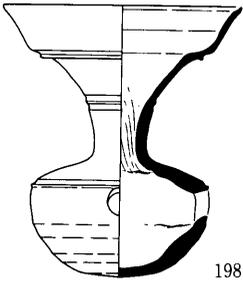
195



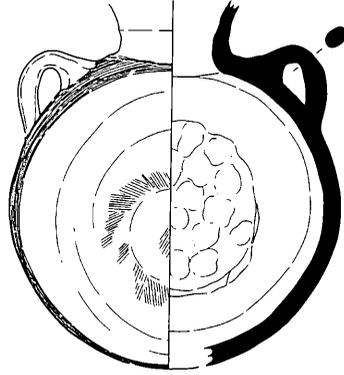
196



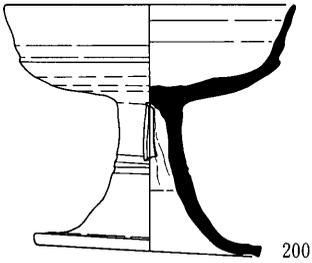
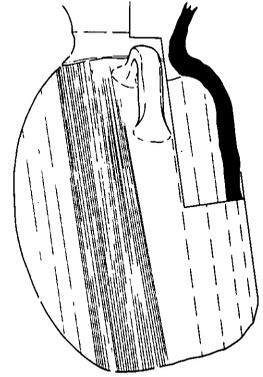
197



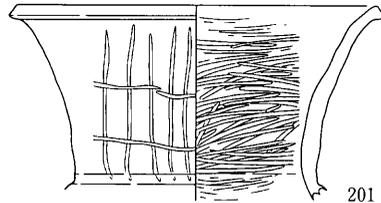
198



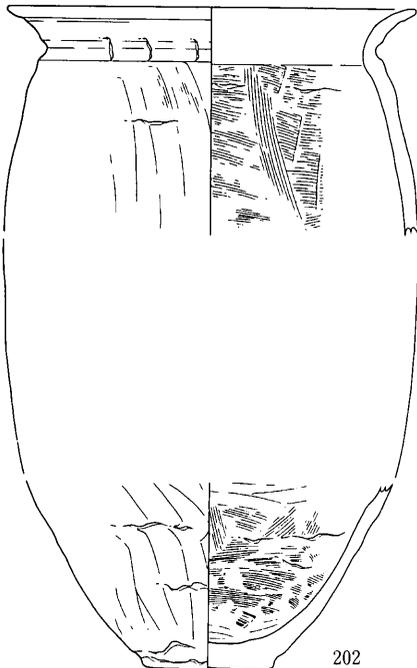
199



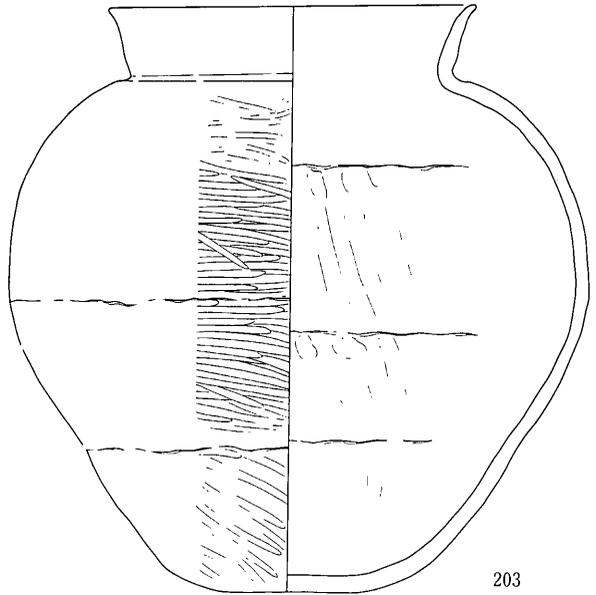
200



201

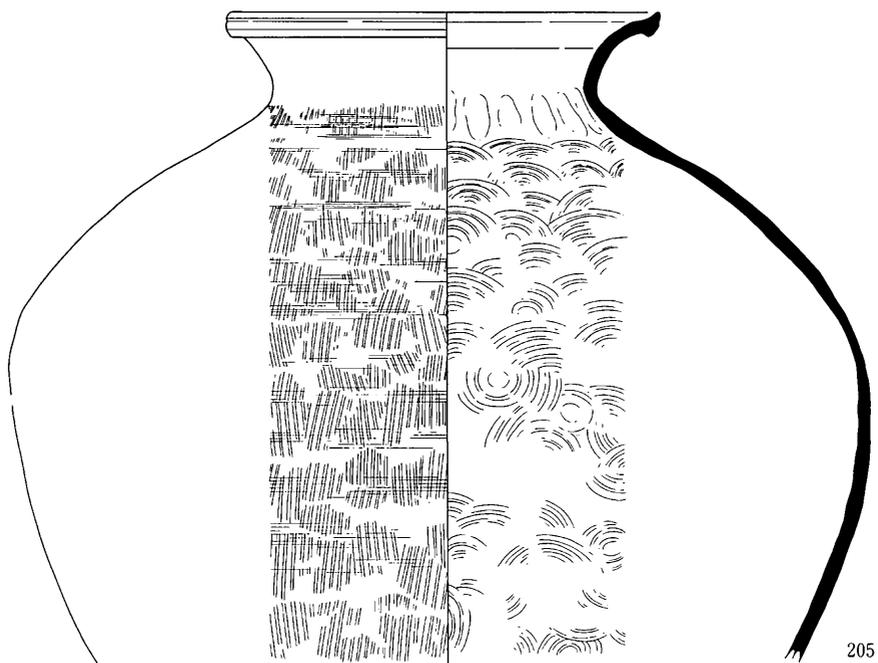
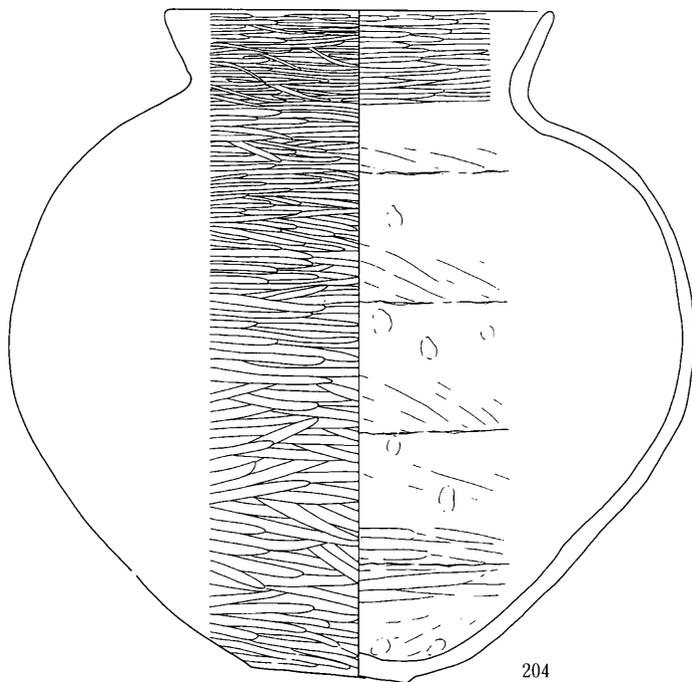


202

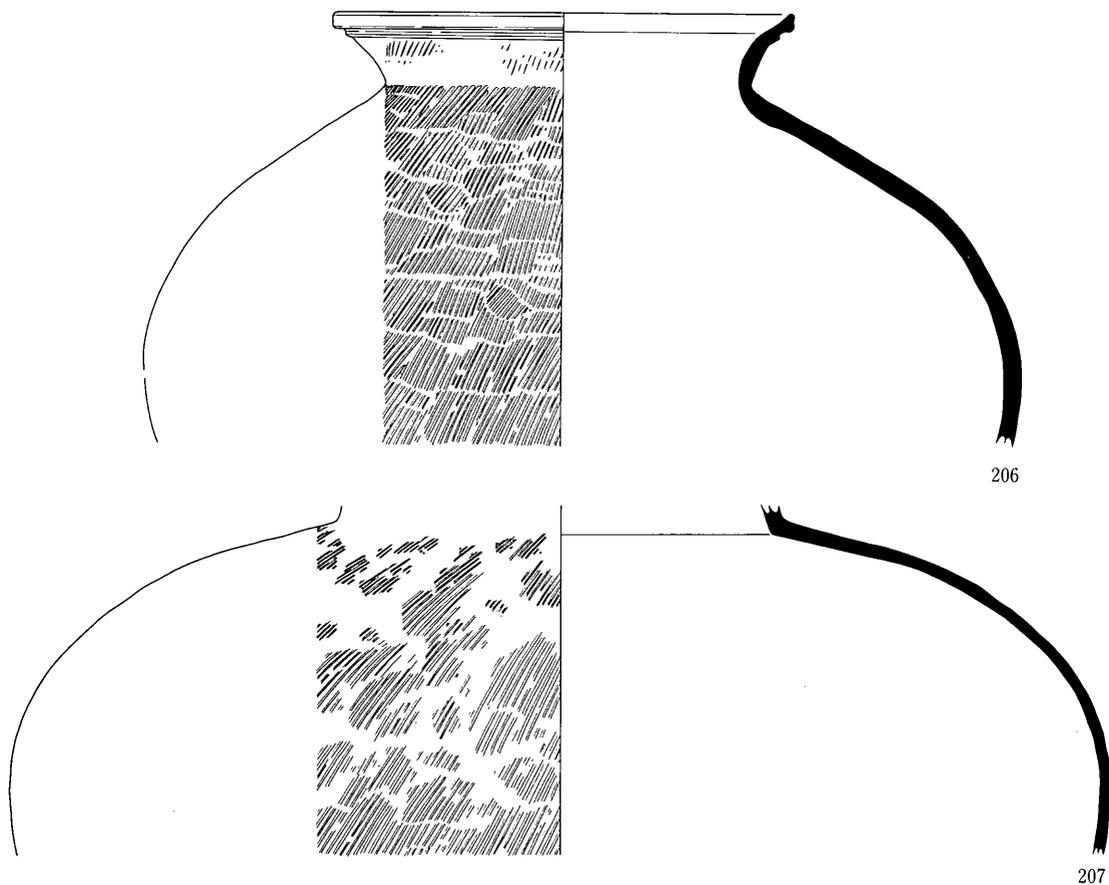


203



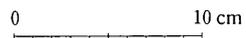
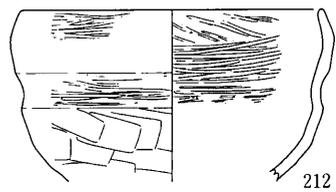
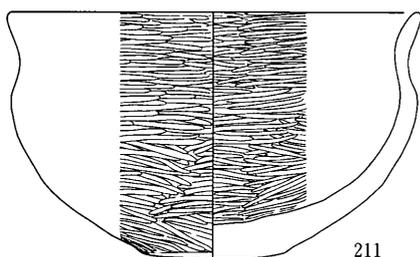
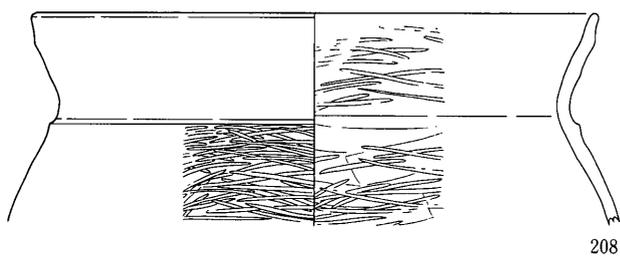


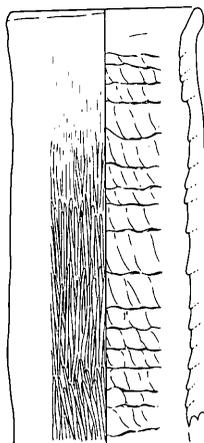
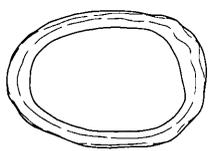
0 10 cm



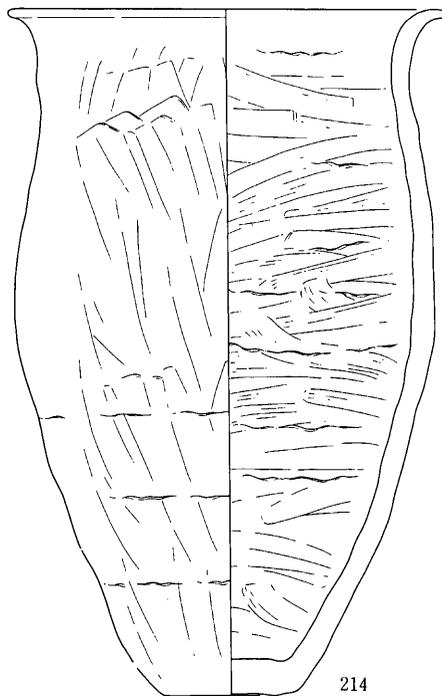
第34号住居址(208)

第35号住居址(209~216)

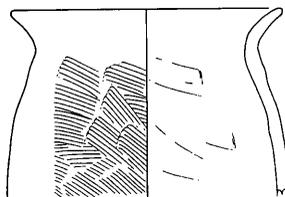




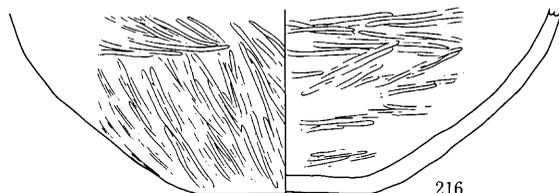
213



214

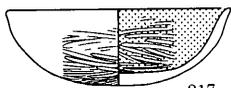


215



216

第36号住居址(217~231)



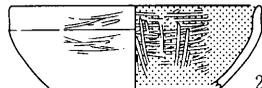
217



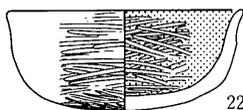
218



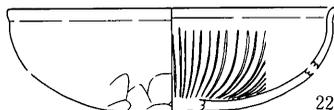
219



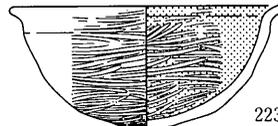
220



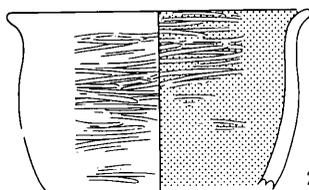
221



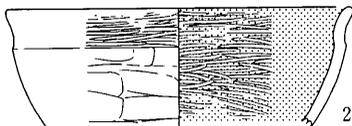
222



223



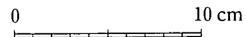
224

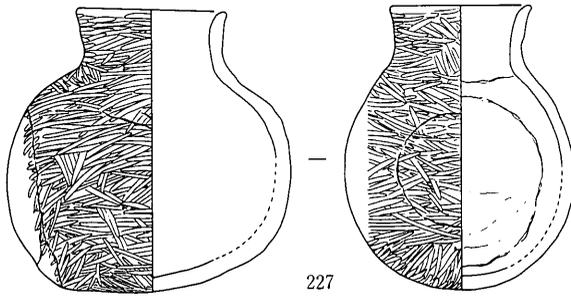


225



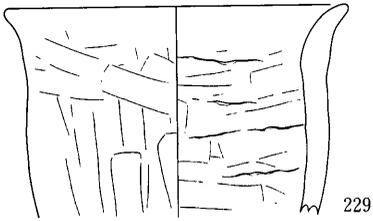
226



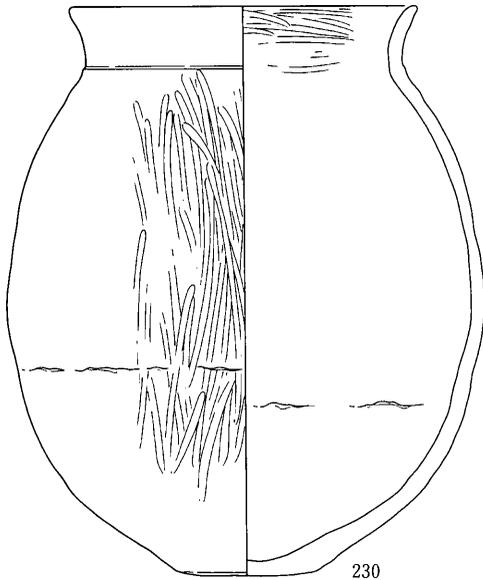


227

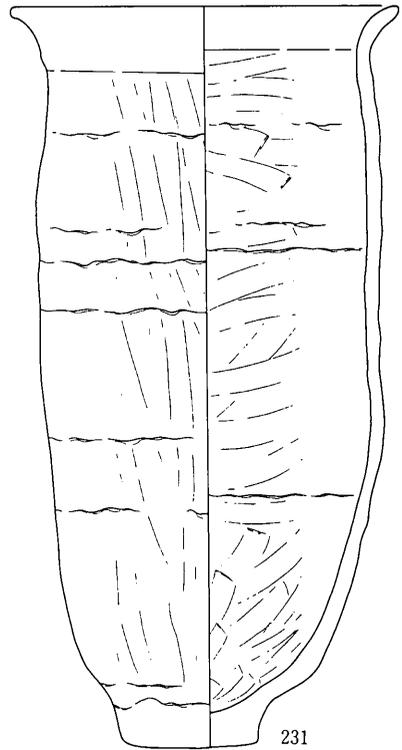
228



229

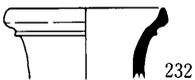


230

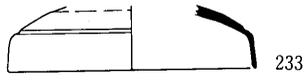


231

第38号住居址(232~243)



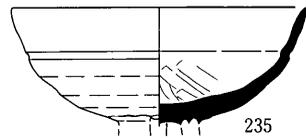
232



233

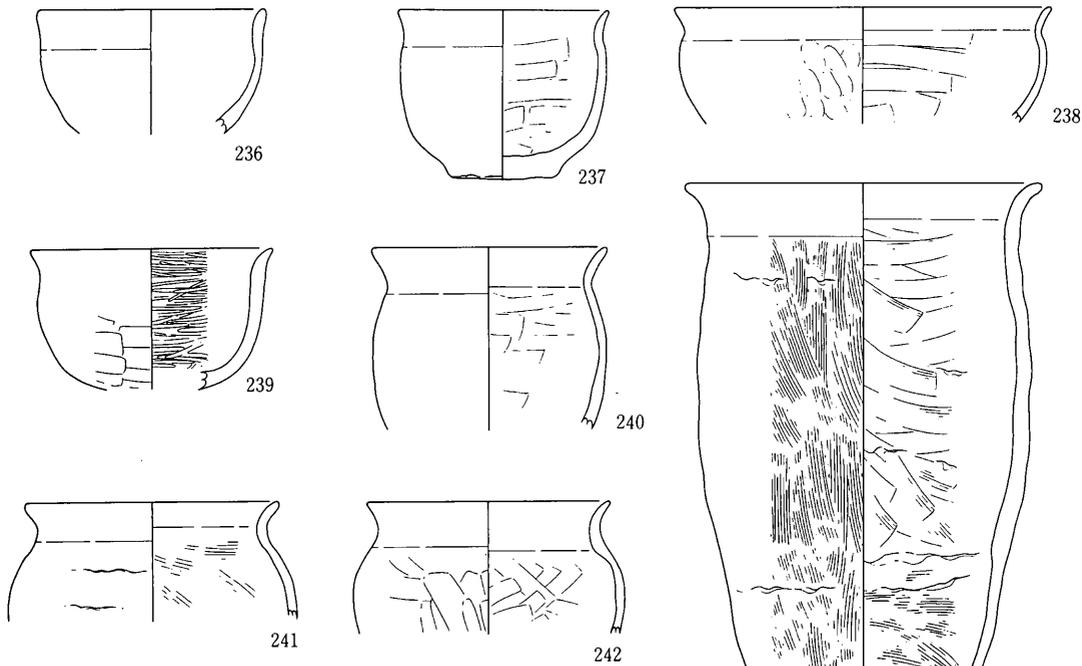


234



235

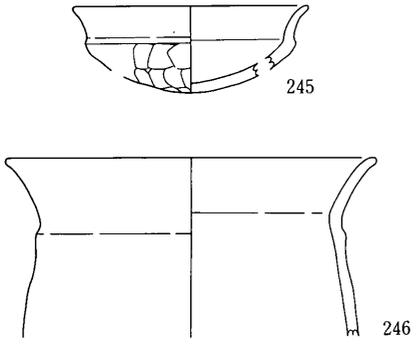
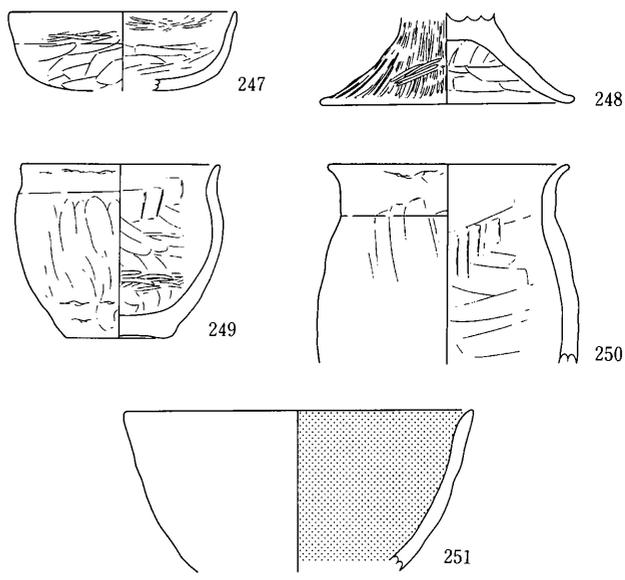
0 10 cm



第41号住居址(244)

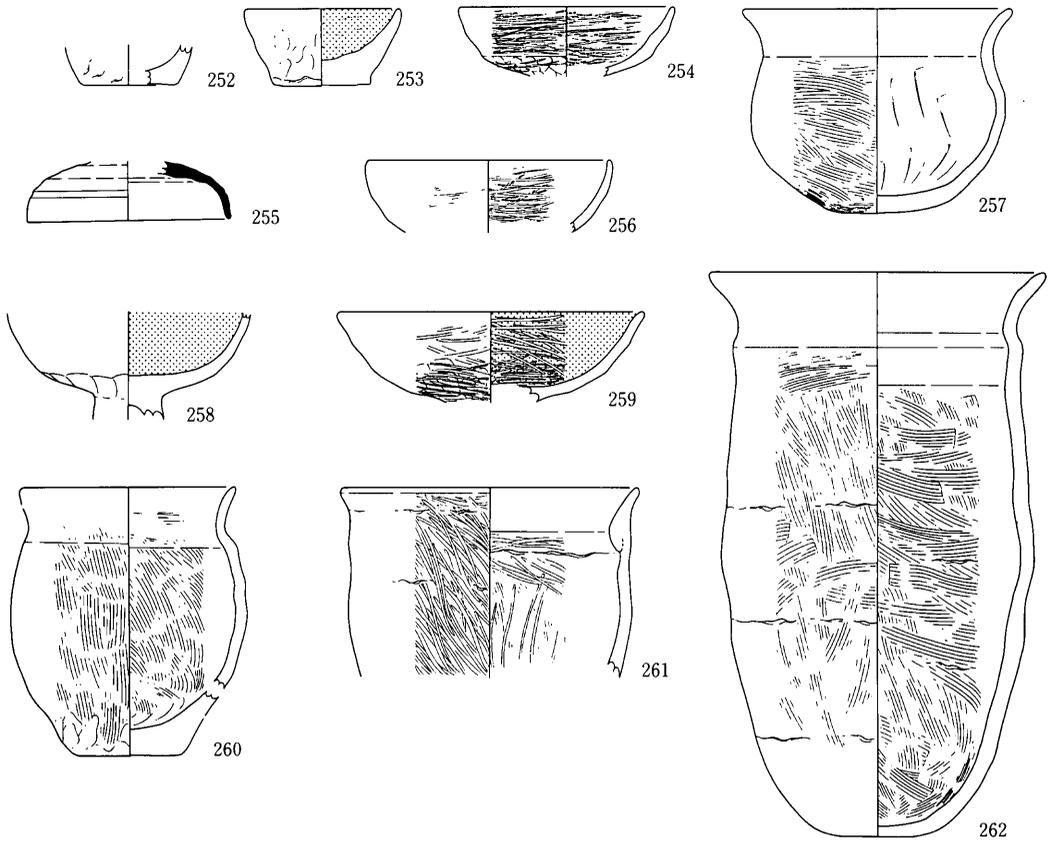
第43号住居址(247~251)

第42号住居址(245·246)

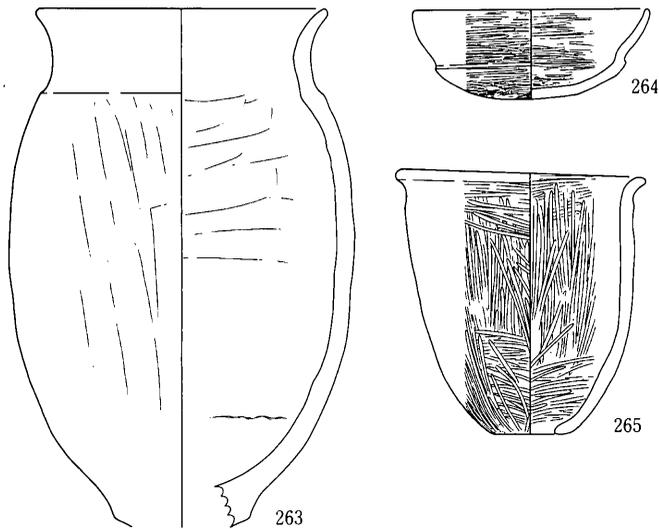


0 10 cm

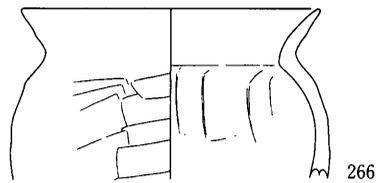
第44号住居址(252~262)



第46号住居址(263~265)

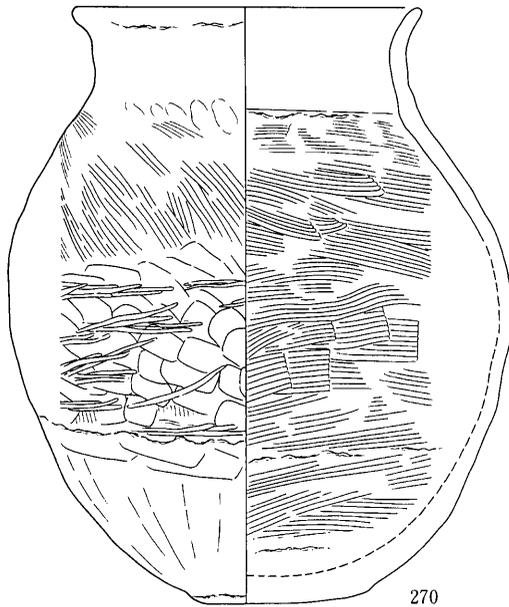
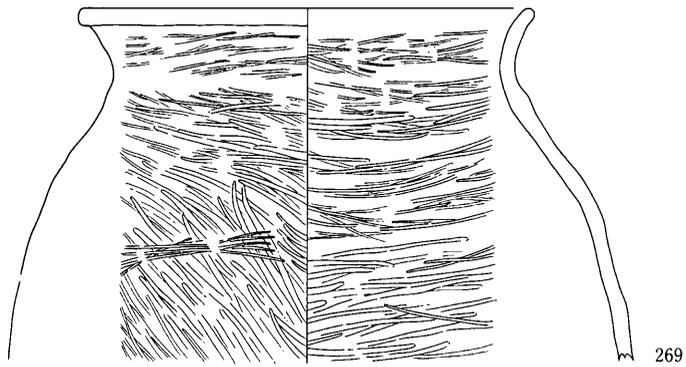
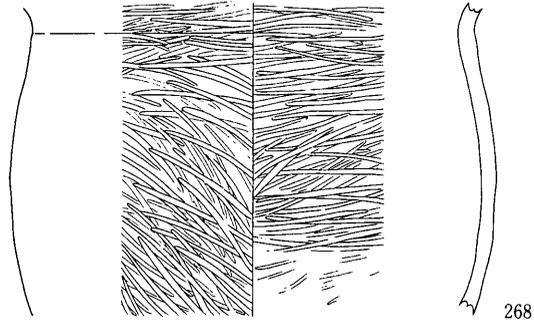


第47号住居址(266)

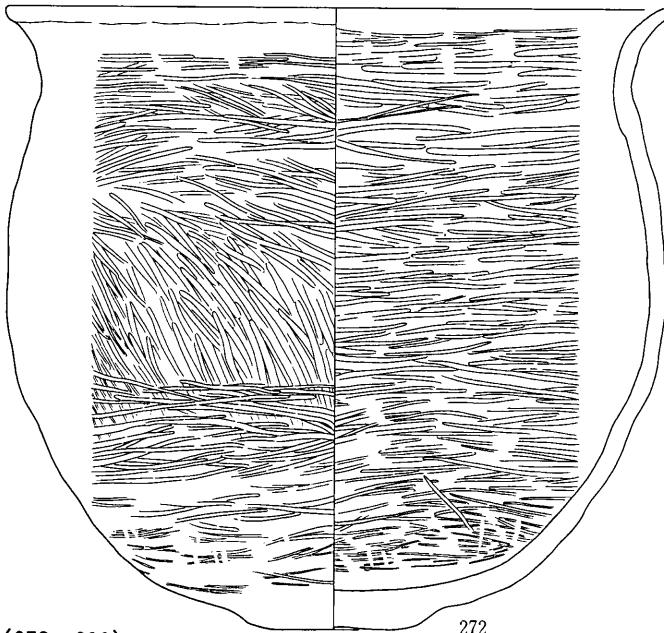
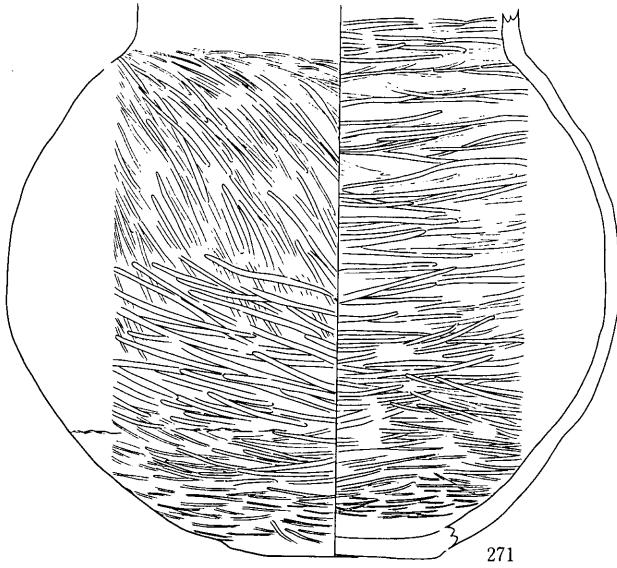


第48号住居址(267~272)

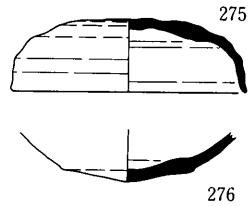
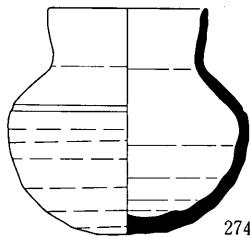
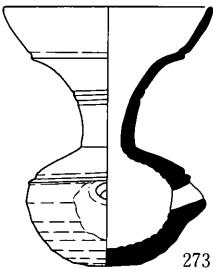




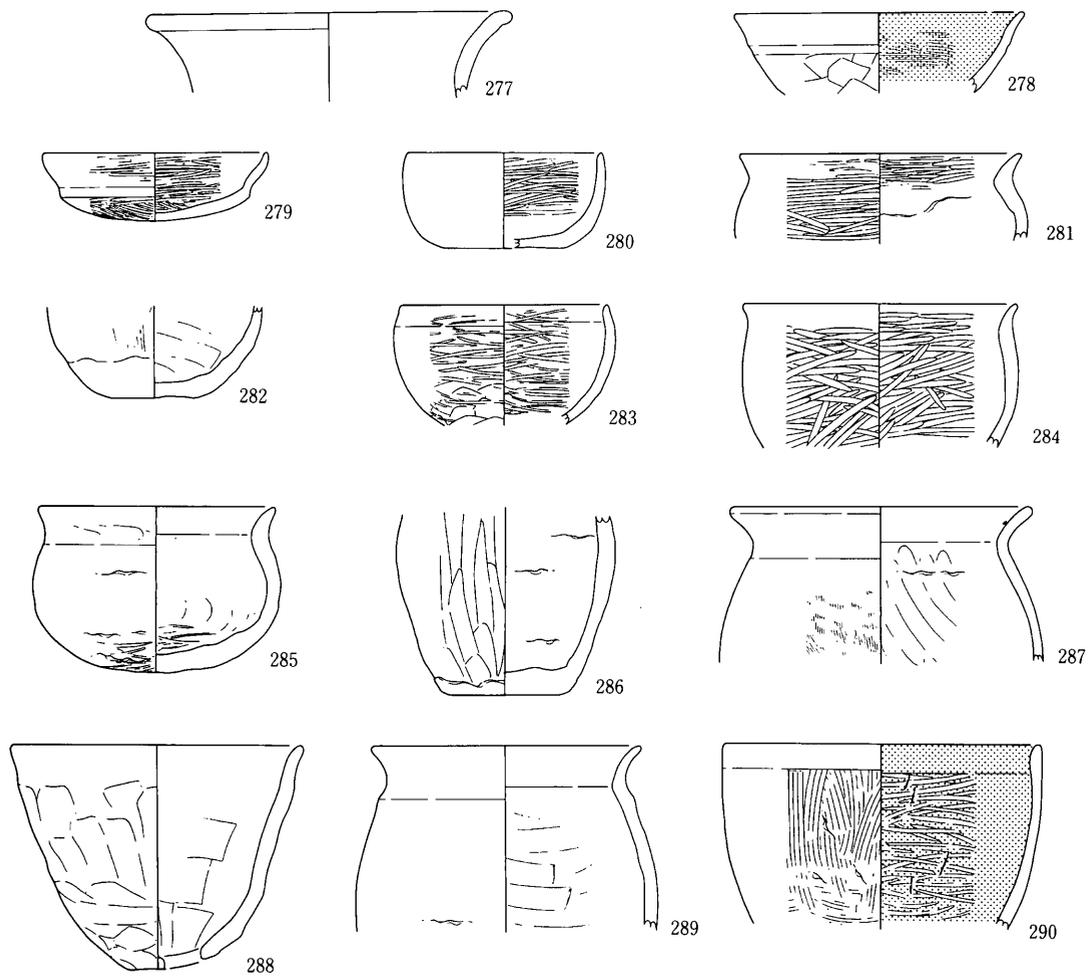
0 10 cm



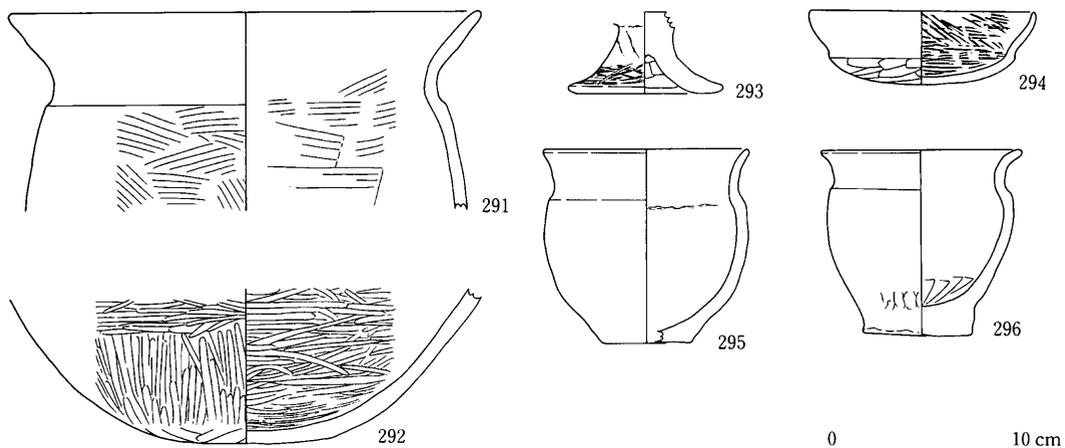
第49号住居址(273~290)

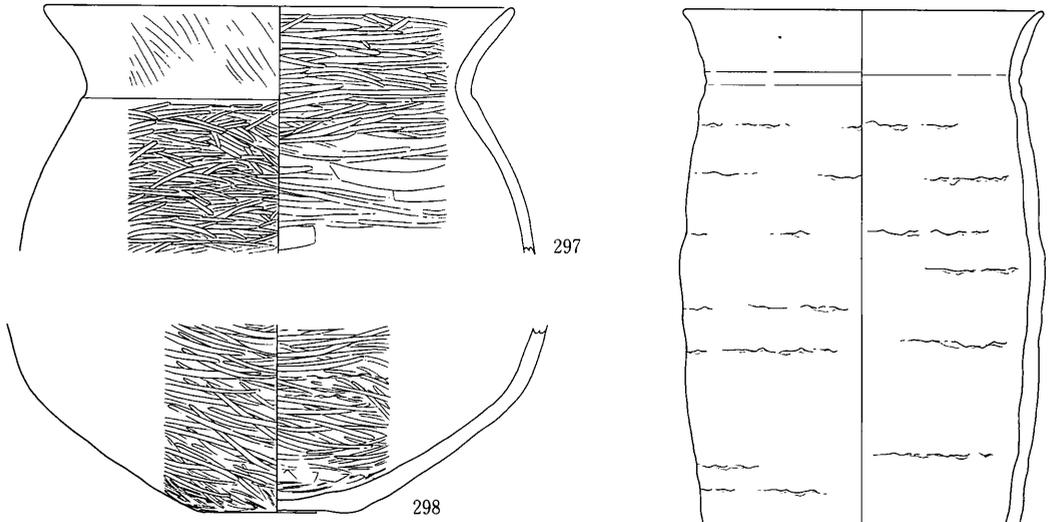


0 10 cm

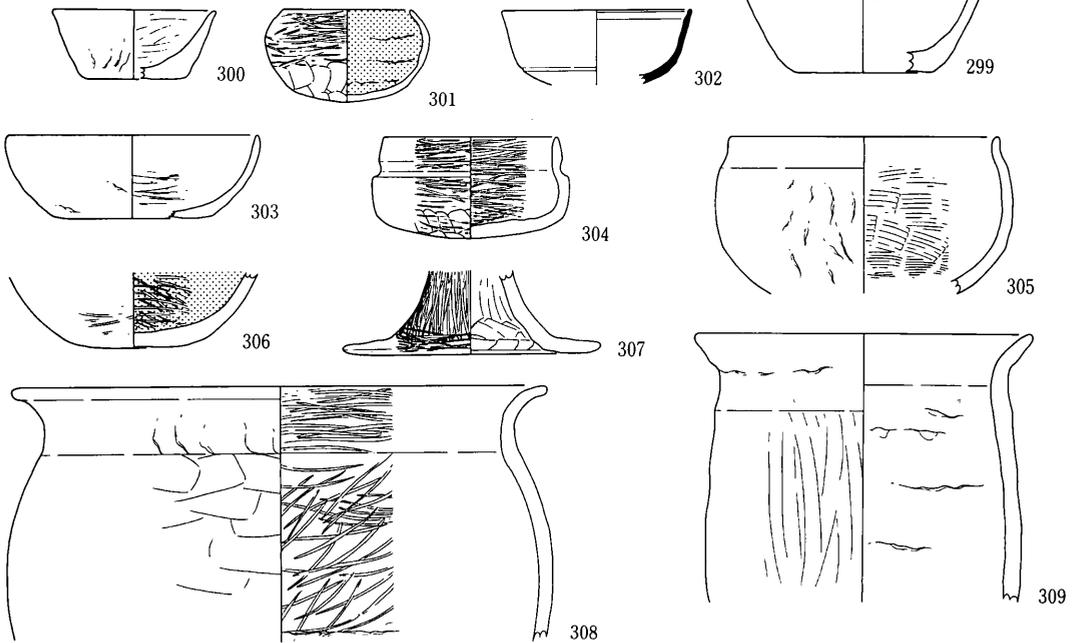


第50号住居址(291~299)

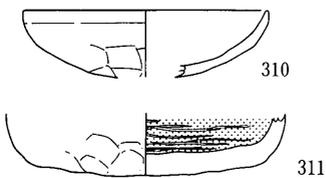




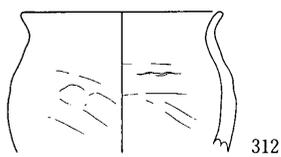
第51号住居址(300~309)



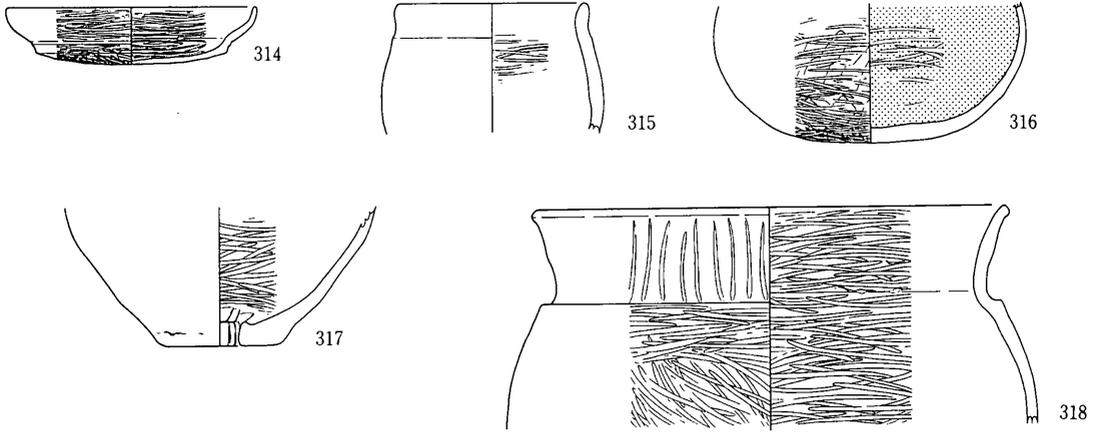
第53号住居址(310-311)



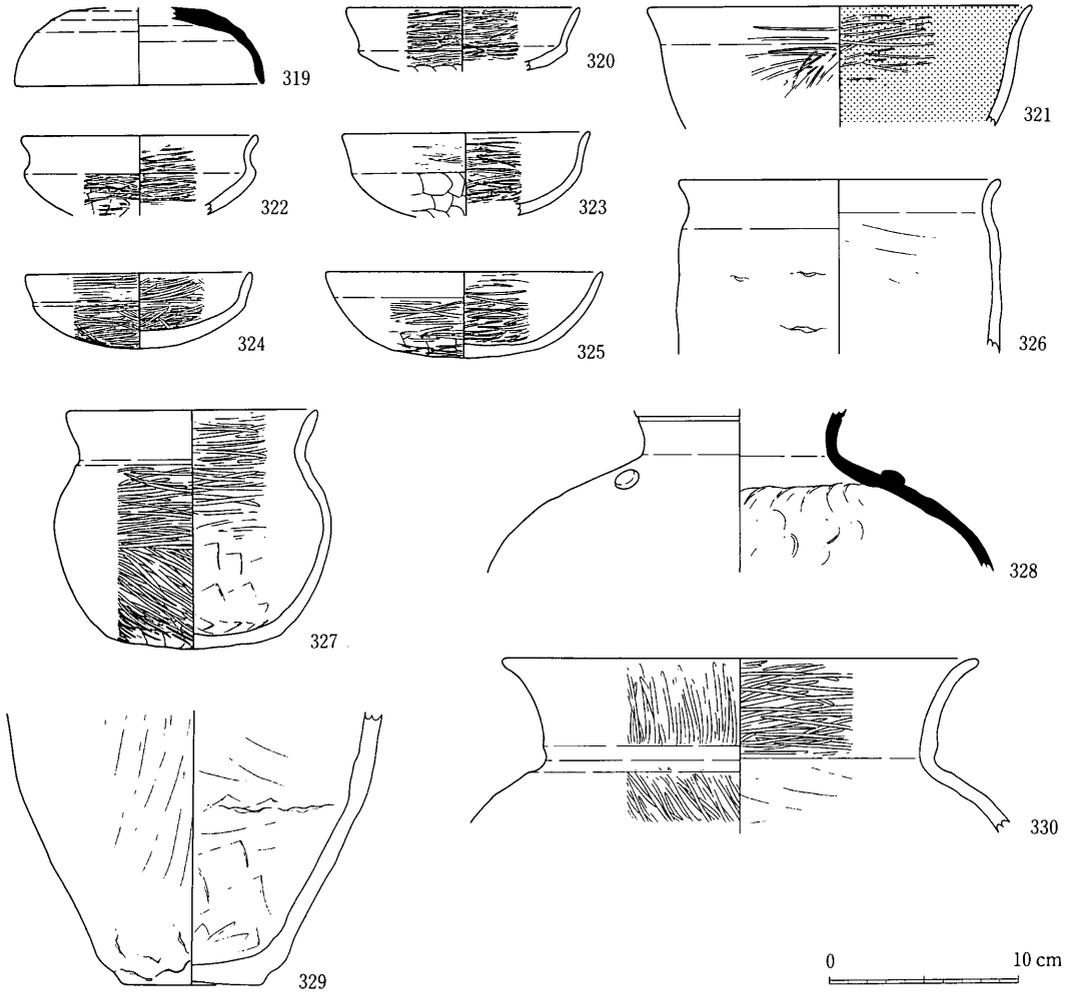
第54号住居址(312-313)



第55号住居址(314~318)

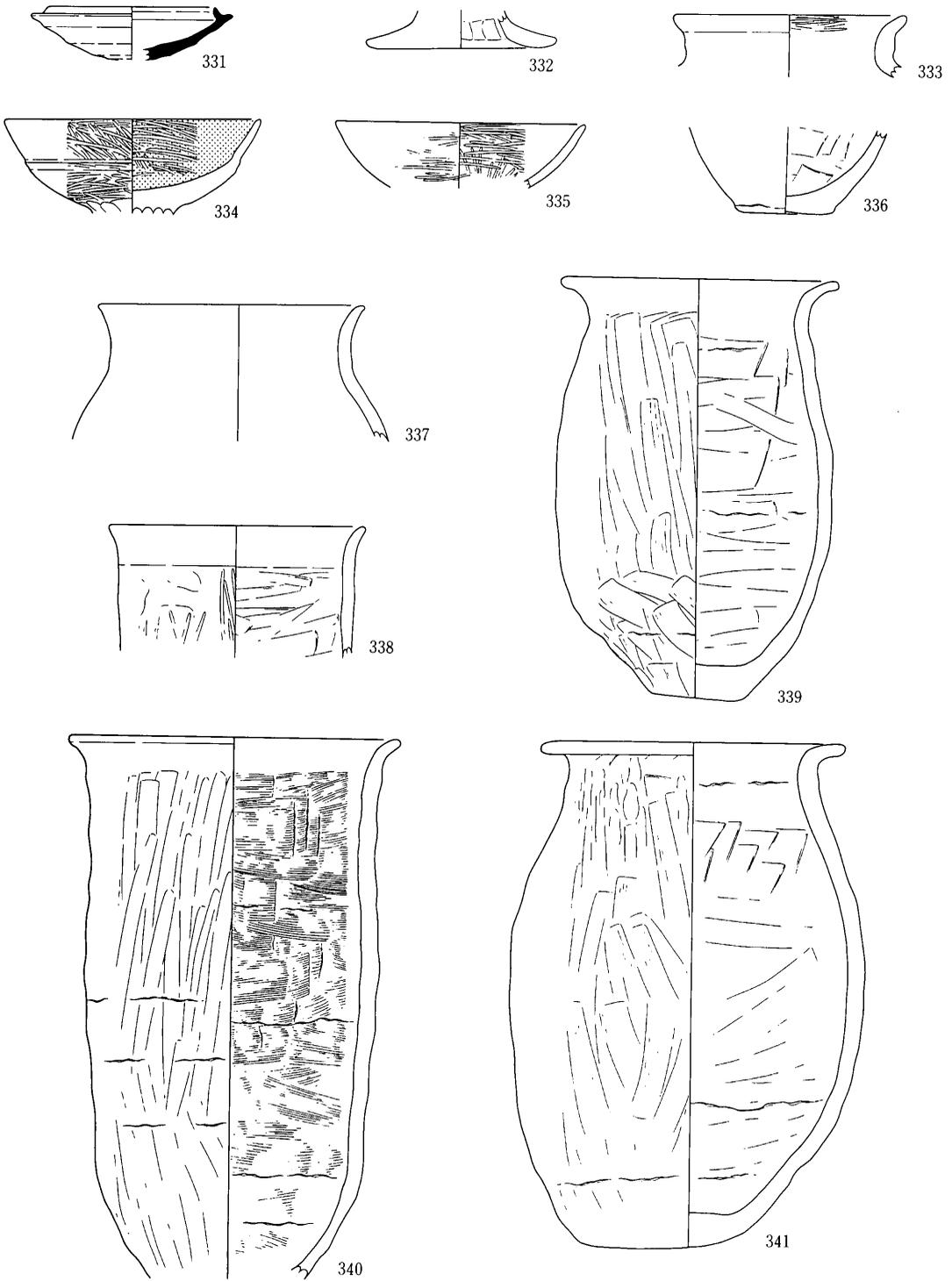


第56号住居址(319~330)



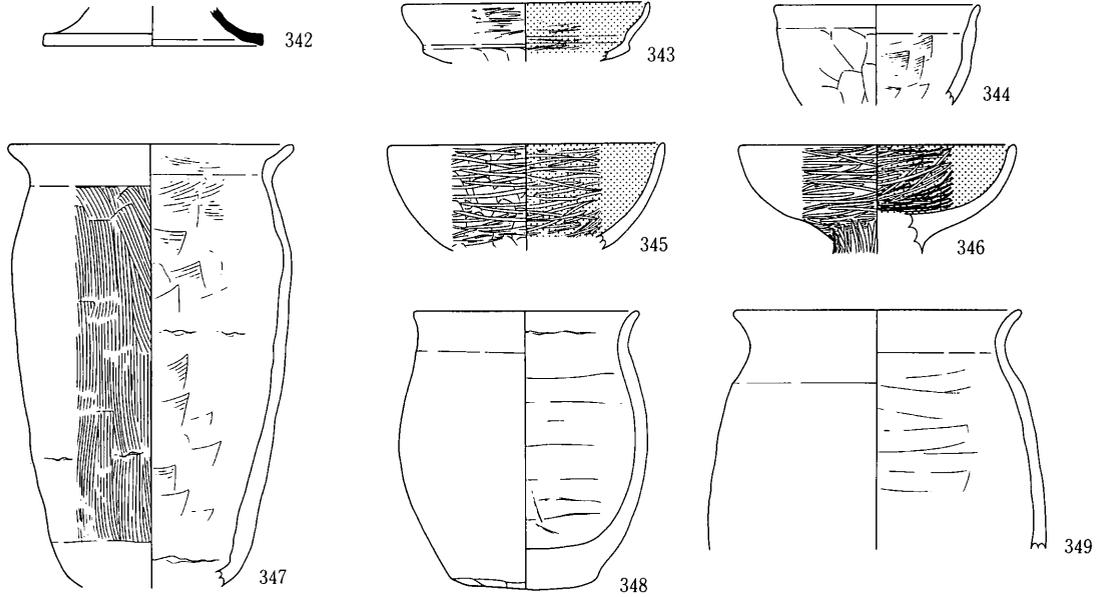
0 10 cm

第57号住居址(331~341)



0 10 cm

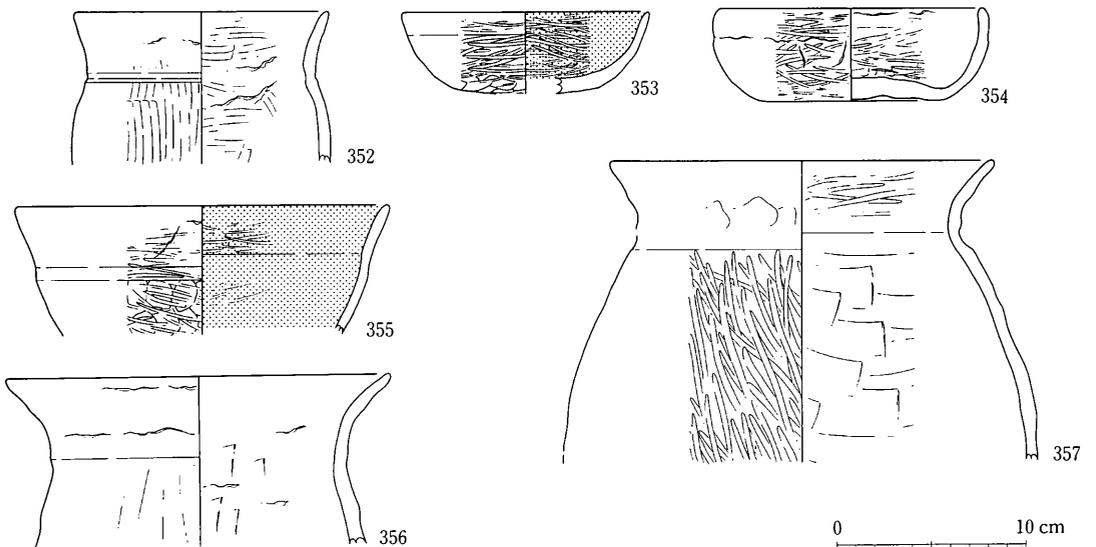
第58号住居址(342~350)



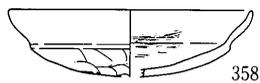
第60号住居址(351)



第62号住居址(352~357)



第63号住居址(358~363)



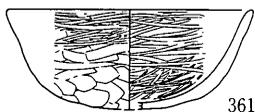
358



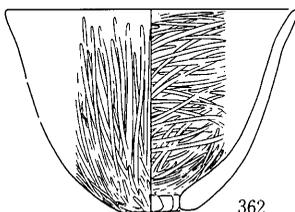
359



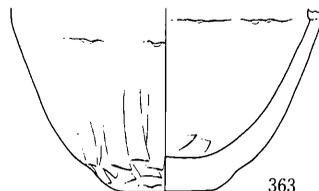
360



361

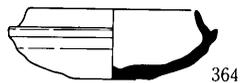


362



363

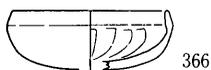
第64号住居址(364~377)



364



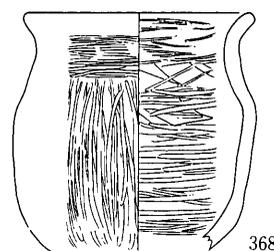
365



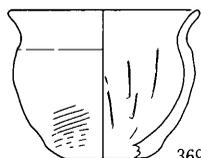
366



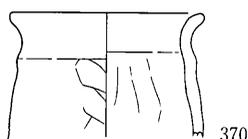
367



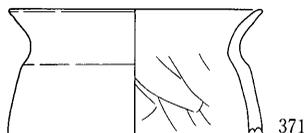
368



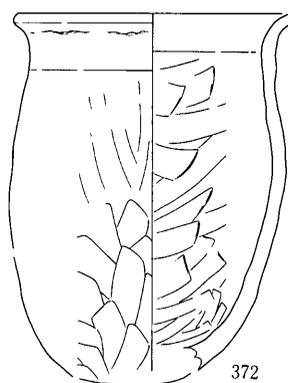
369



370



371



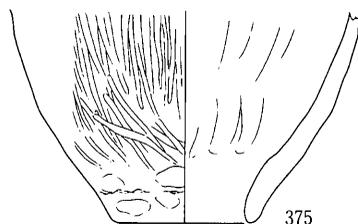
372



373

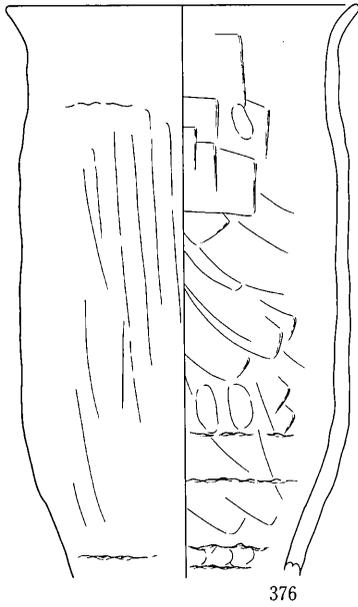


374

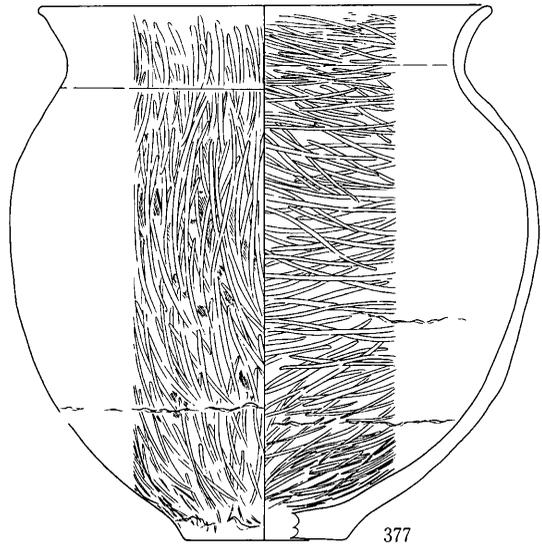


375

0 10 cm

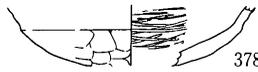


376



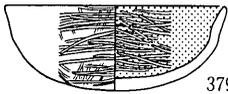
377

第65号住居址(378)

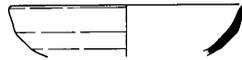


378

第66号住居址(379~388)



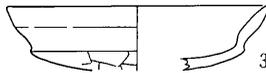
379



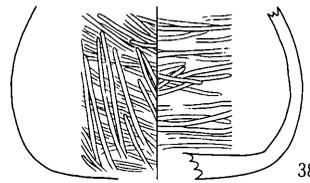
380



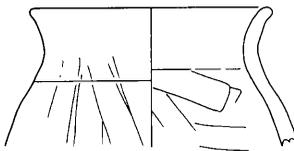
382



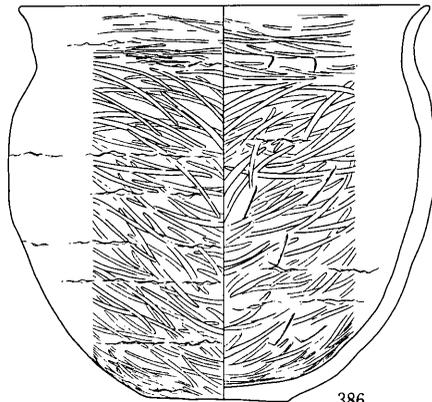
383



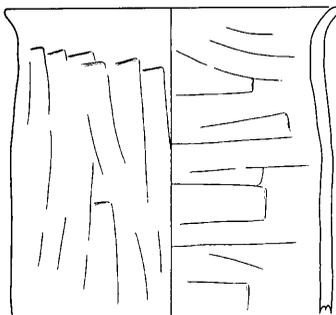
381



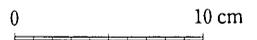
384

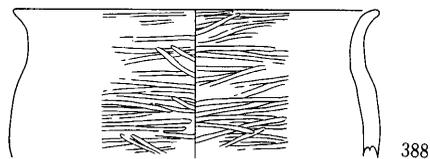
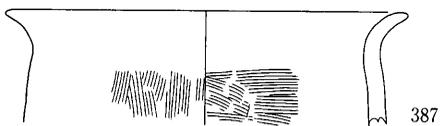


386

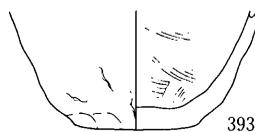
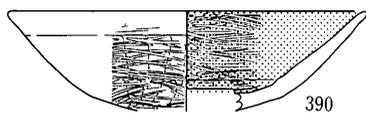
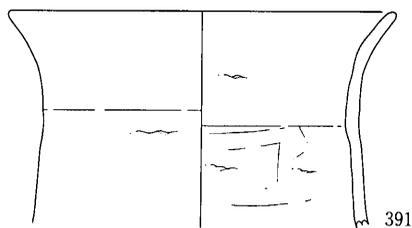
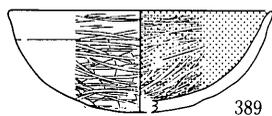


385

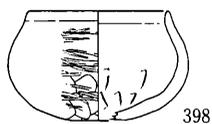
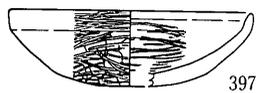
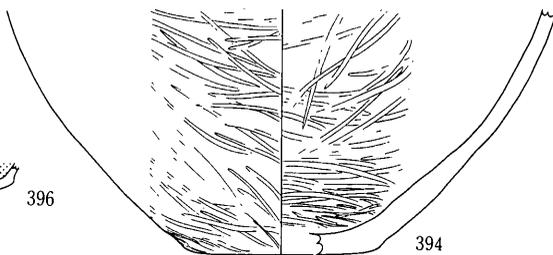
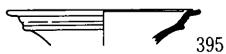




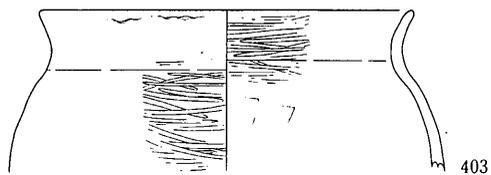
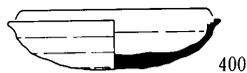
第67号住居址(389~394)



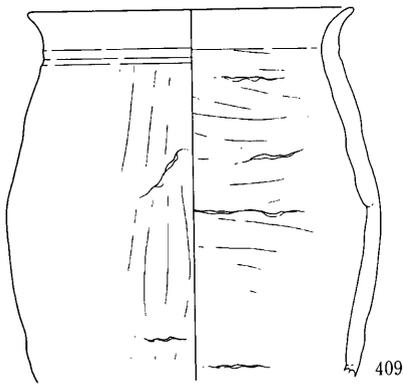
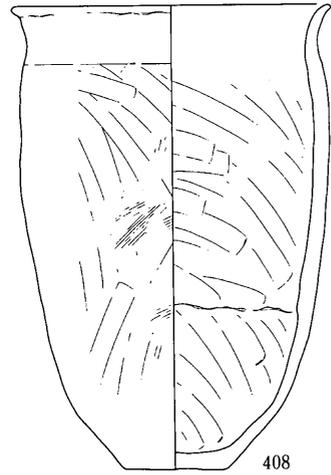
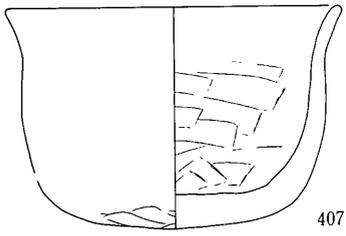
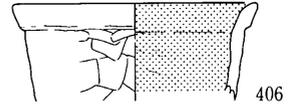
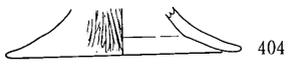
第68号住居址(395~398)



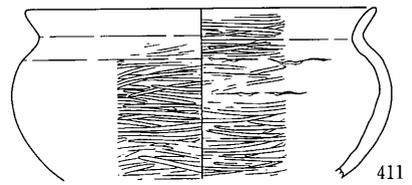
第69号住居址(399~409)



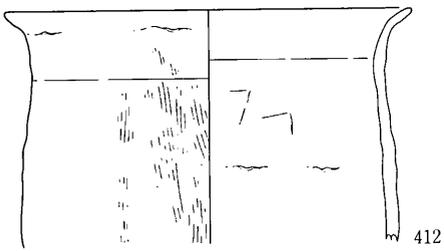
0 10 cm



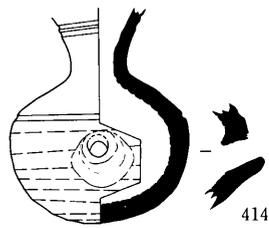
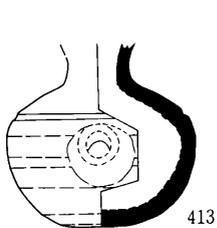
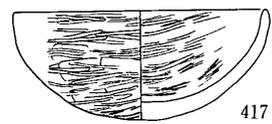
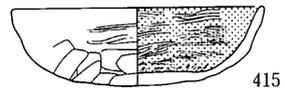
第70号住居址(410-411)

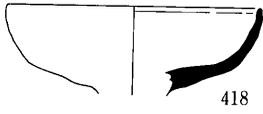


第72号住居址(412-414)

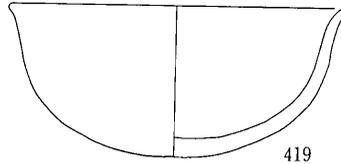


第74号住居址(415-424)

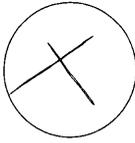
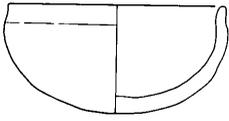




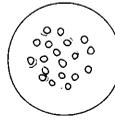
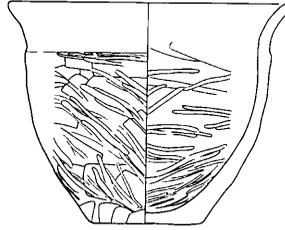
418



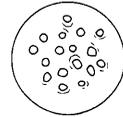
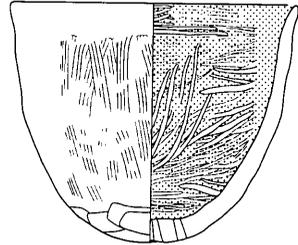
419



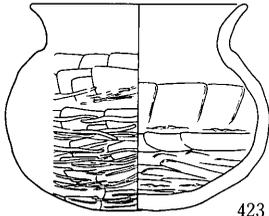
420



421

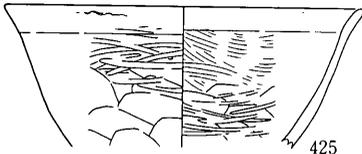


422

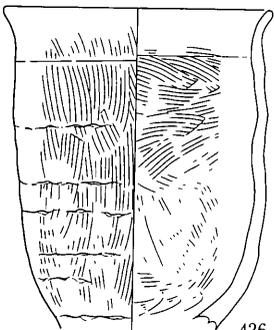


423

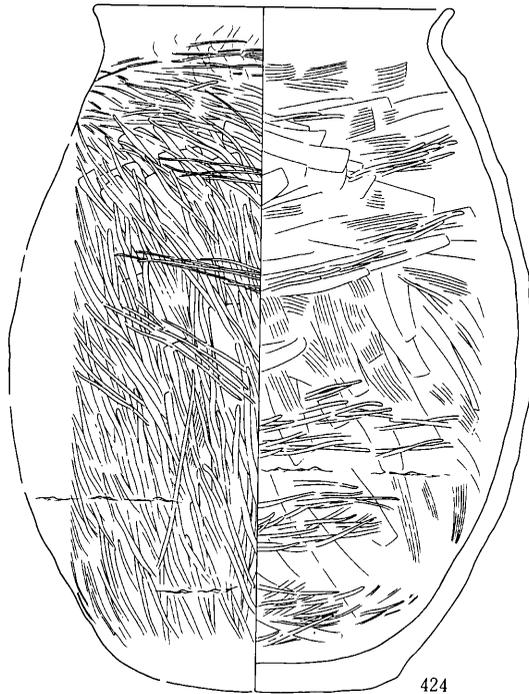
第75号住居址(425~427)



425

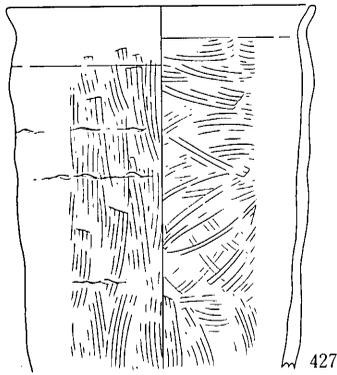


426

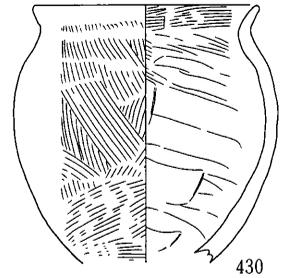
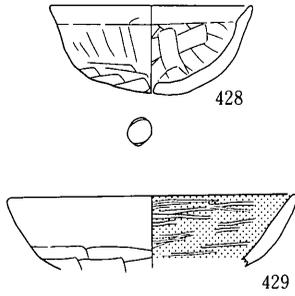


424

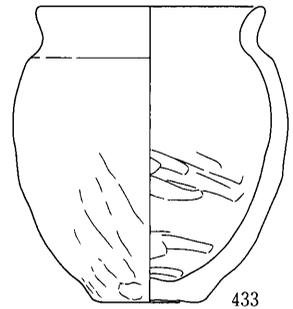
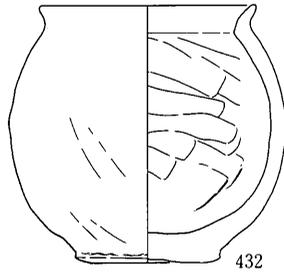




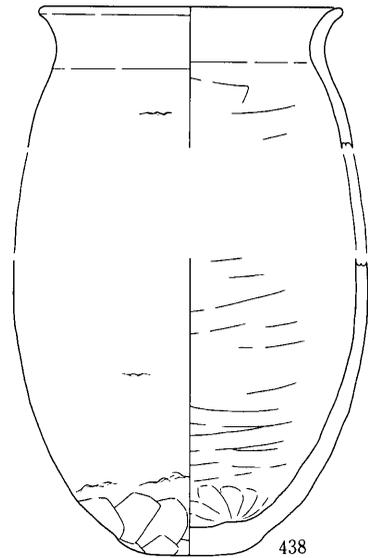
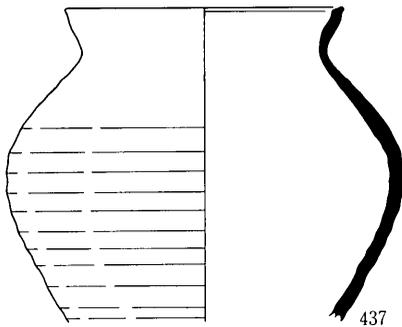
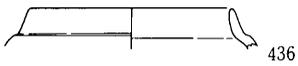
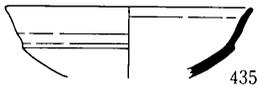
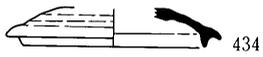
第76号住居址(428~430)



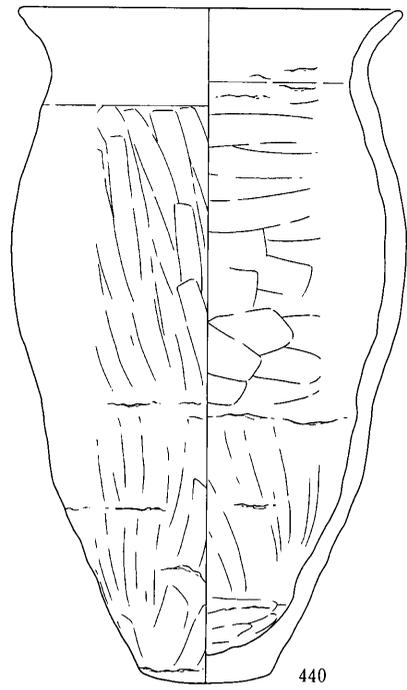
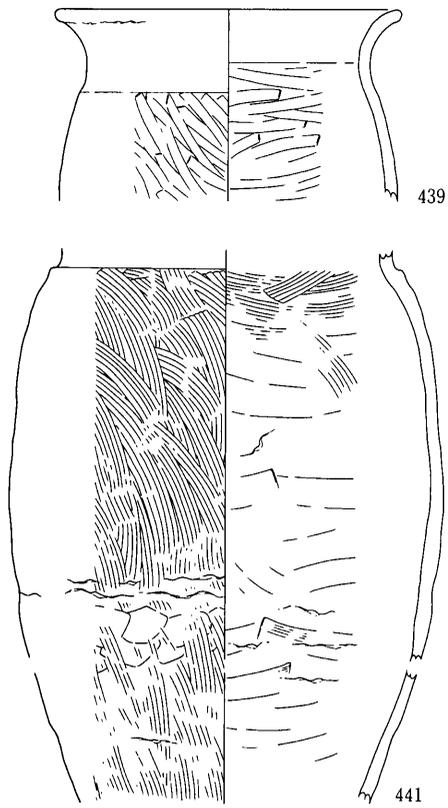
第77号住居址(431~433)



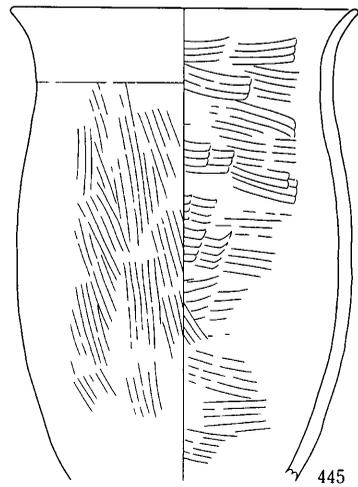
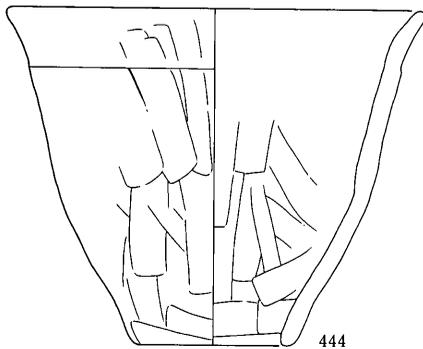
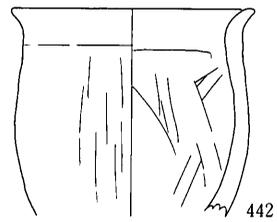
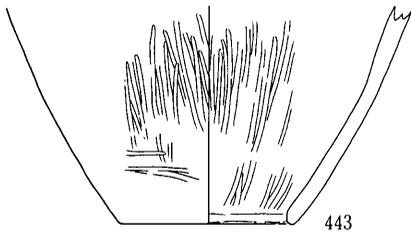
第78号住居址(434~441)



0 10 cm

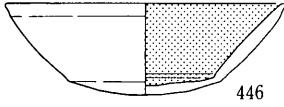


第79号住居址(442~446)



0 10 cm

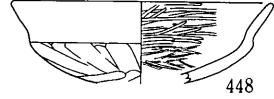
第80号住居址(447~454)



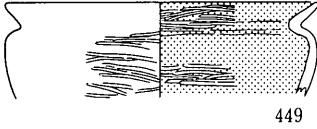
446



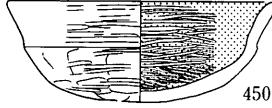
447



448



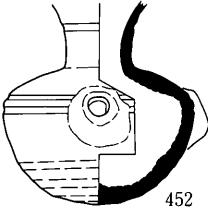
449



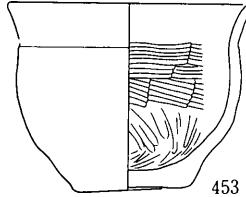
450



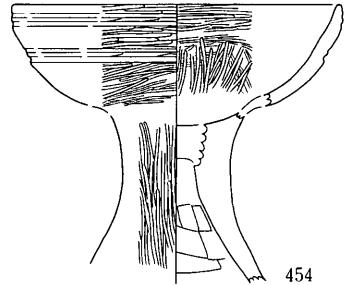
451



452

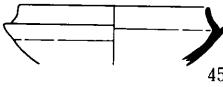


453



454

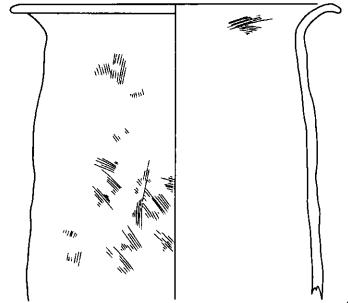
第81号住居址(455~457)



455



456

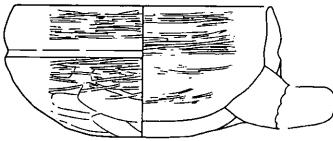


457

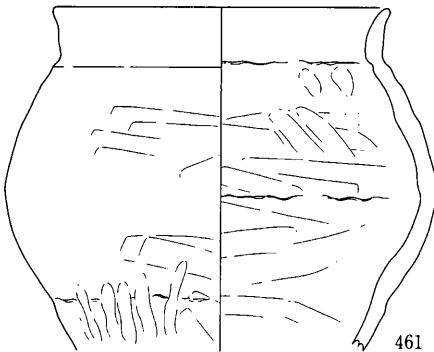
第82号住居址(458~464)



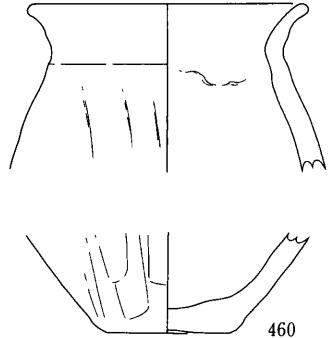
458



459

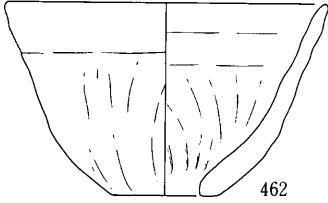


461

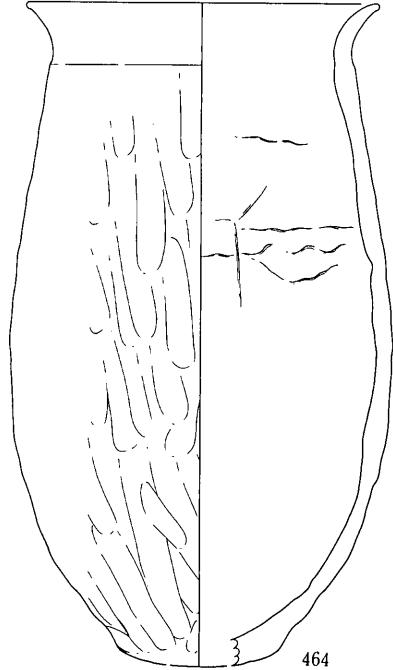


460

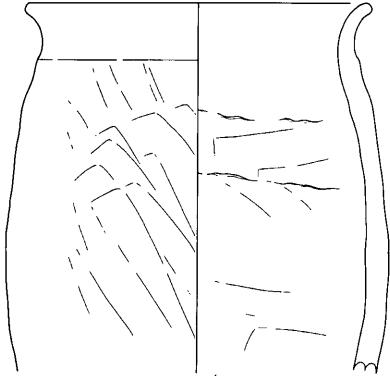




462

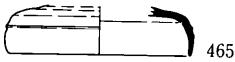


464

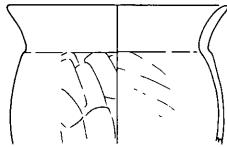


463

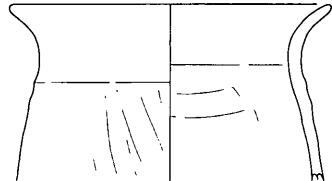
第83号住居址(465~467)



465

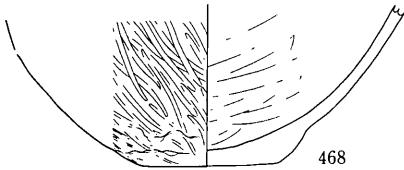


466



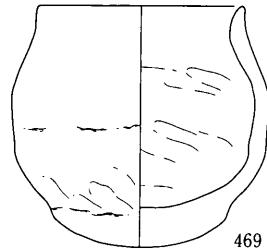
467

第86号住居址(468)



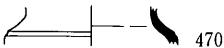
468

第84号住居址(469)

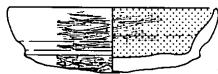


469

第87号住居址(470~483)



470



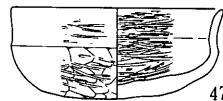
471



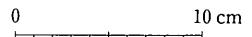
472

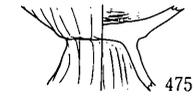


473

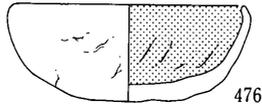


474

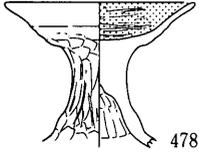




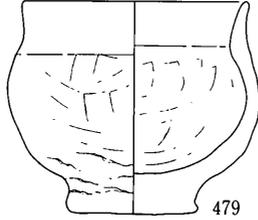
475



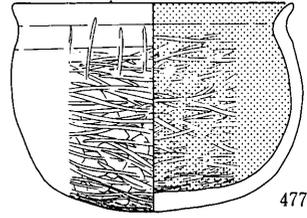
476



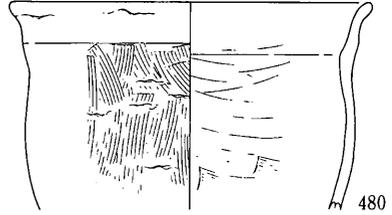
478



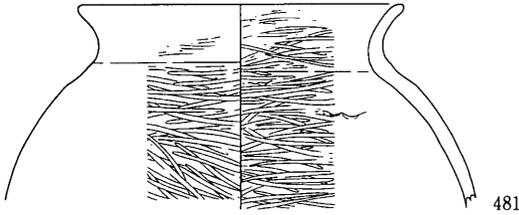
479



477

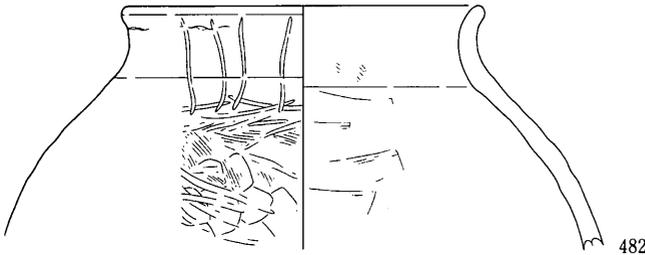


480

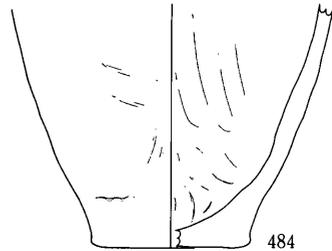


481

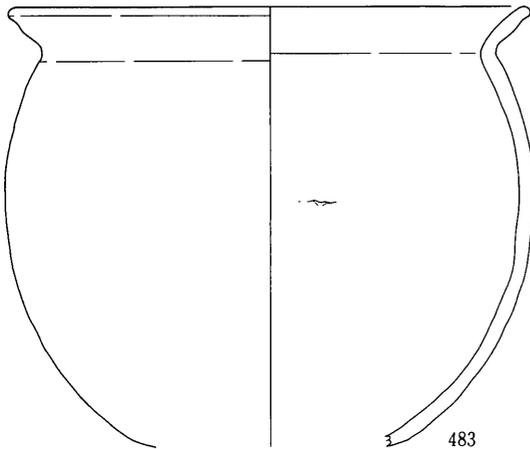
第88号住居址(484~486)



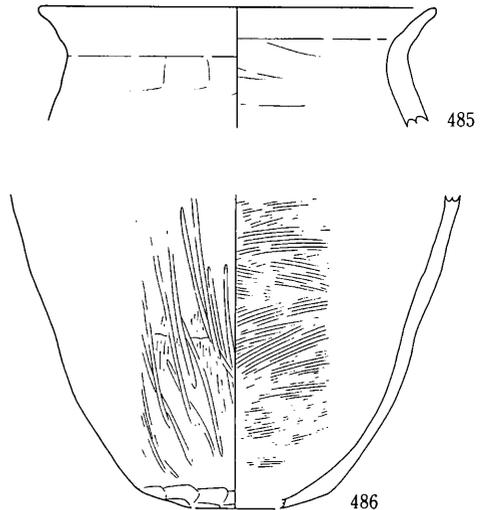
482



484



483

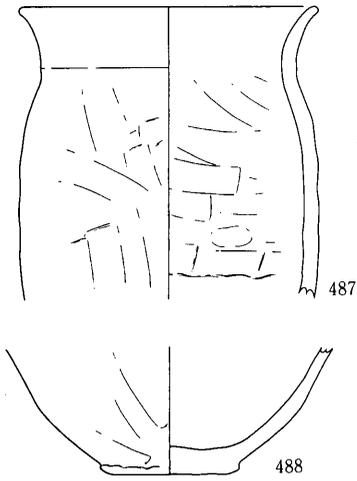


485

486

0 10 cm

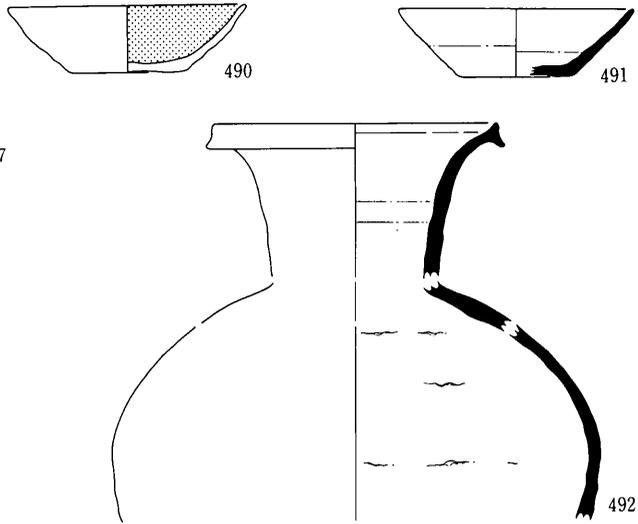
第91号住居址(487・488)



第93号住居址(489)



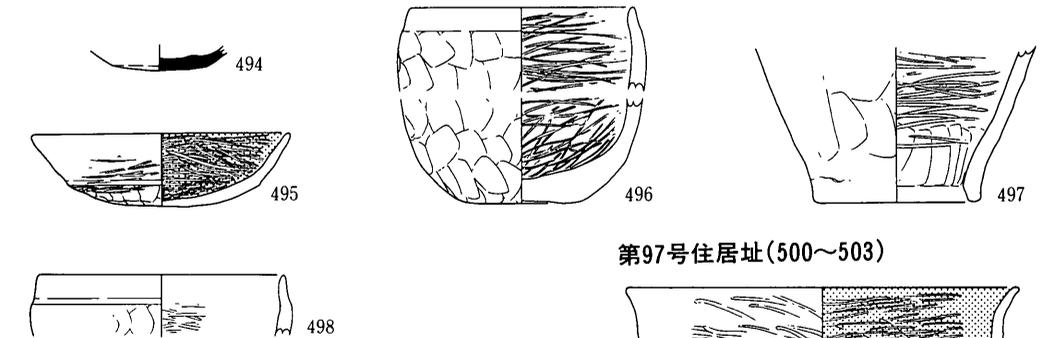
第94号住居址(490~492)



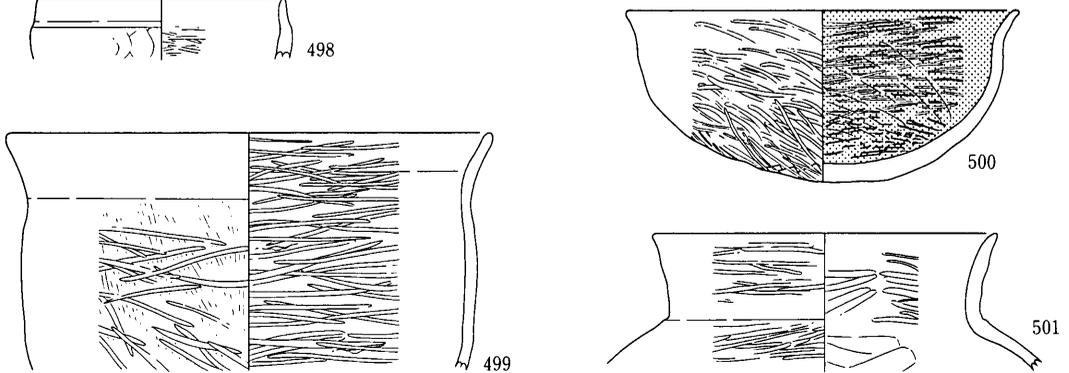
第95号住居址(493)

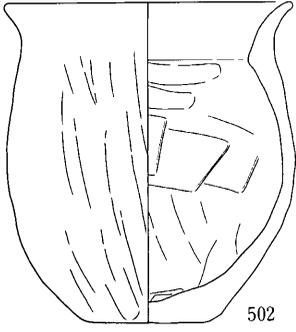


第96号住居址(494~499)

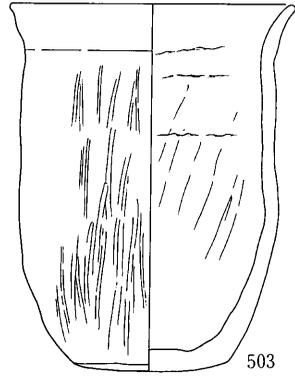


第97号住居址(500~503)



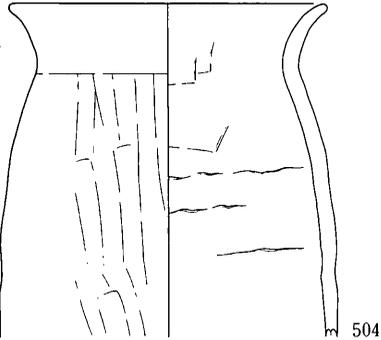


502

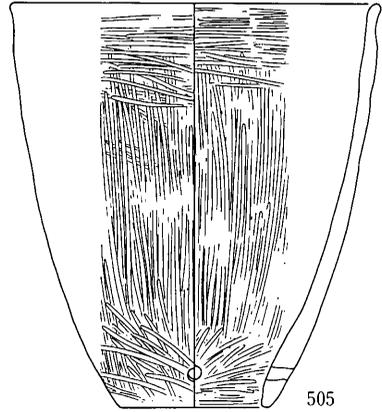


503

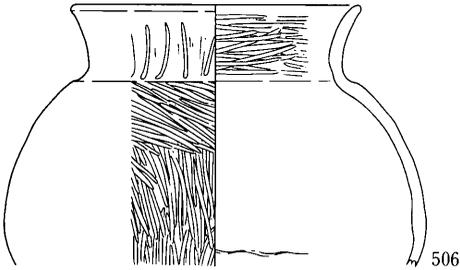
第100号住居址(504~506)



504

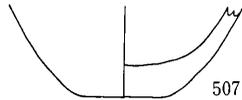


505

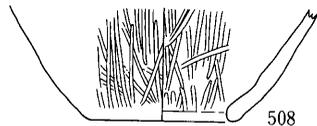


506

第102号住居址(507-508)



507

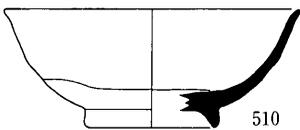


508

第103号住居址(509-510)



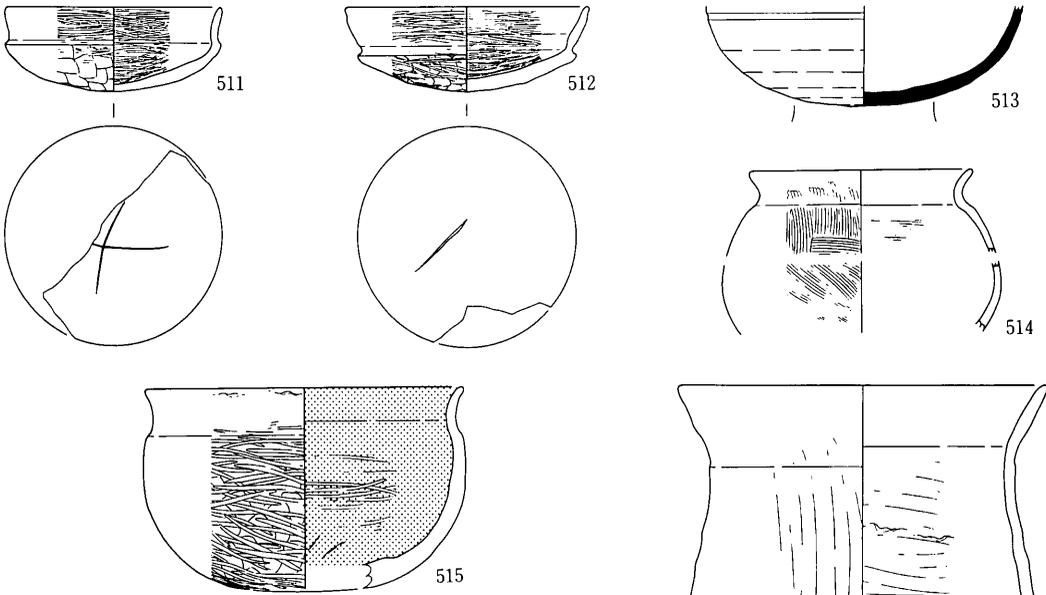
509



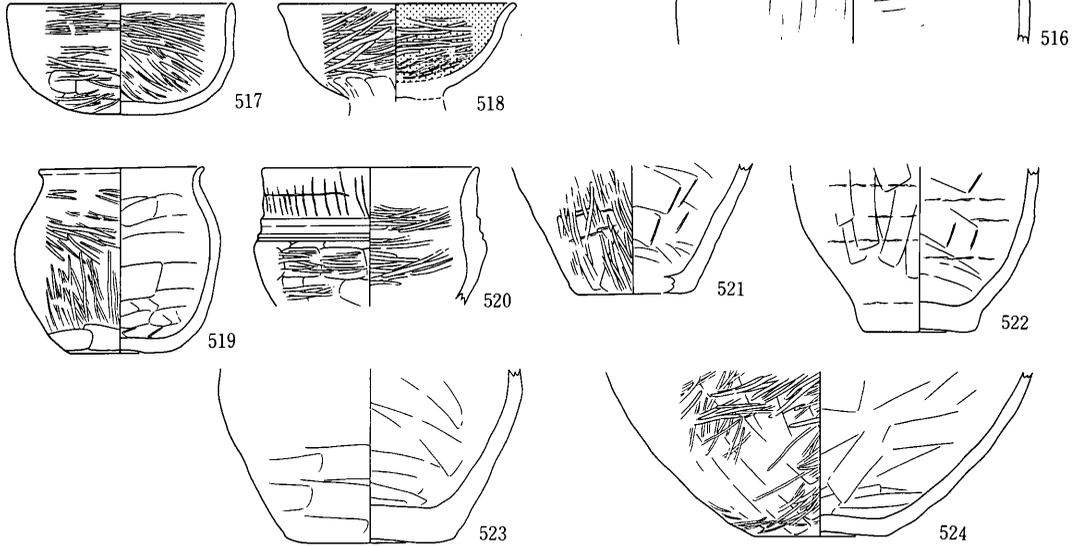
510



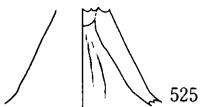
第105号住居址(511~516)



第106号住居址(517~524)



第107号住居址(525)



第108号住居址(526~536)





528



529



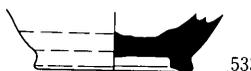
530



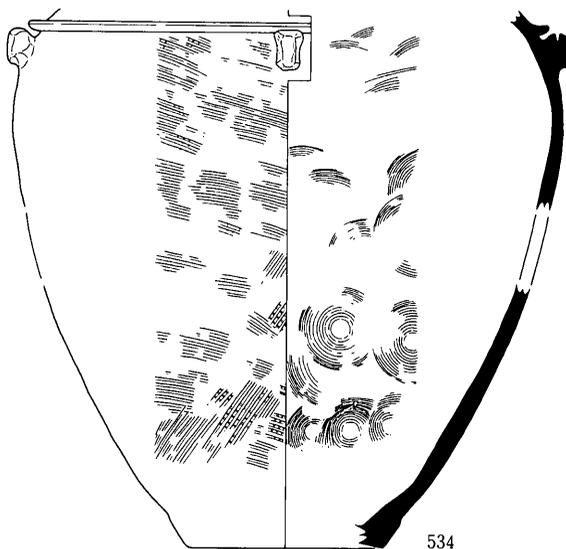
531



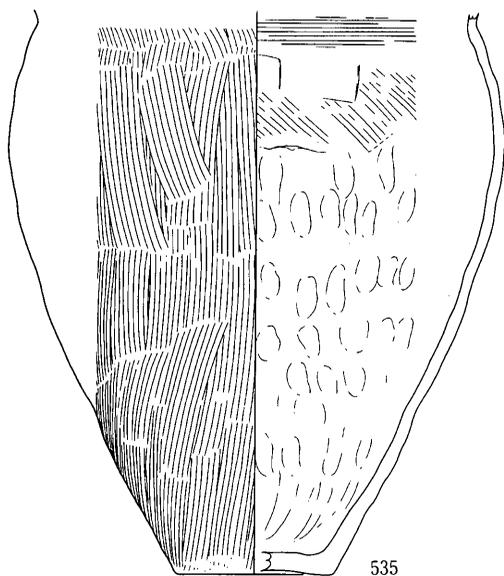
532



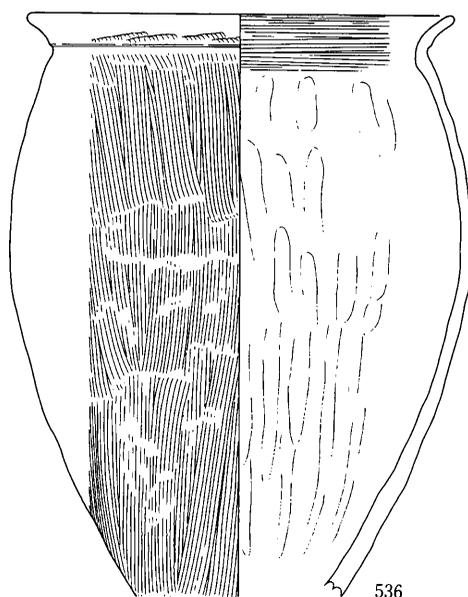
533



534

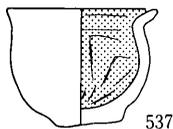


535

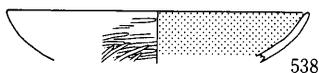


536

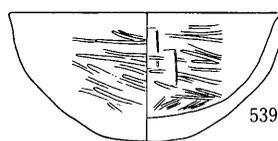
第110号住居址(537~544)



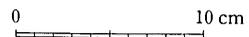
537

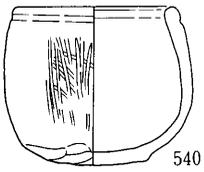


538

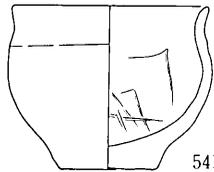


539

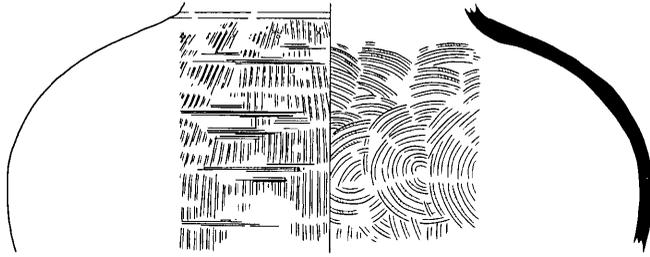




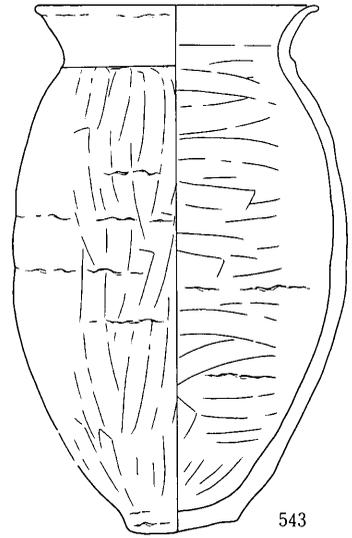
540



541



542



543

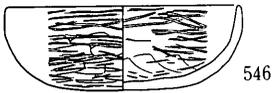
第114号住居址(545~555)



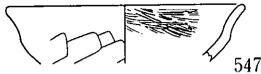
550



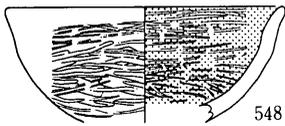
545



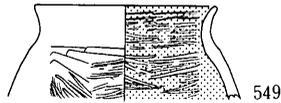
546



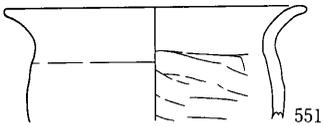
547



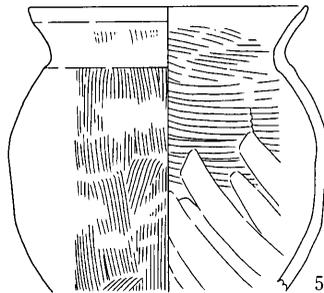
548



549



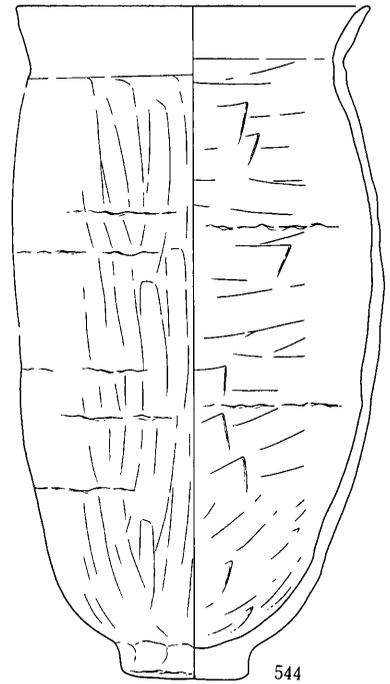
551



553

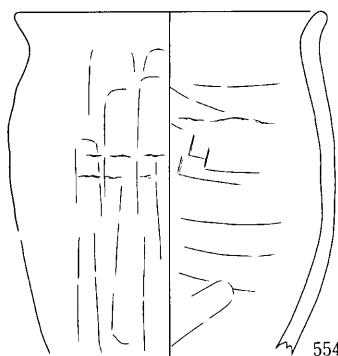


552

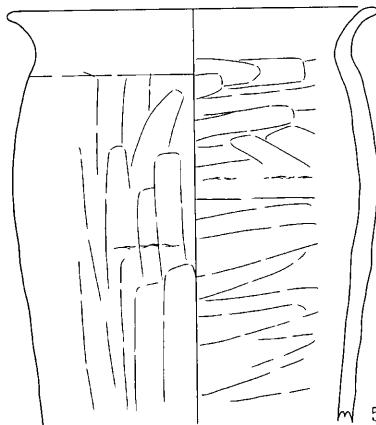


544

0 10 cm



554

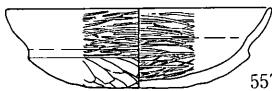


555

第115号住居址(556~558)



556

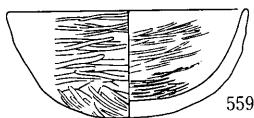


557

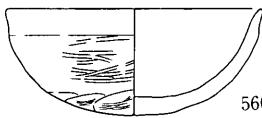


558

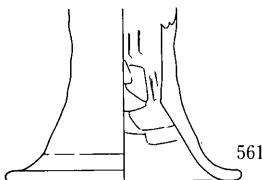
第120号住居址(559~565)



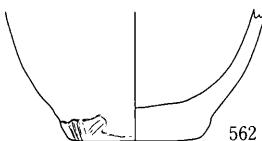
559



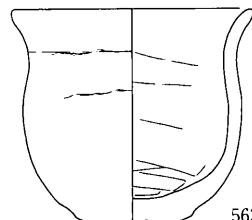
560



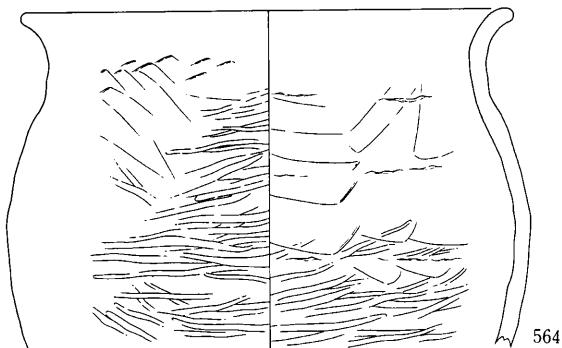
561



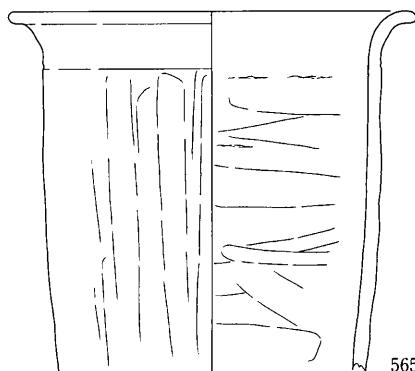
562



563



564



565

第122号住居址(566~575)



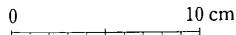
566

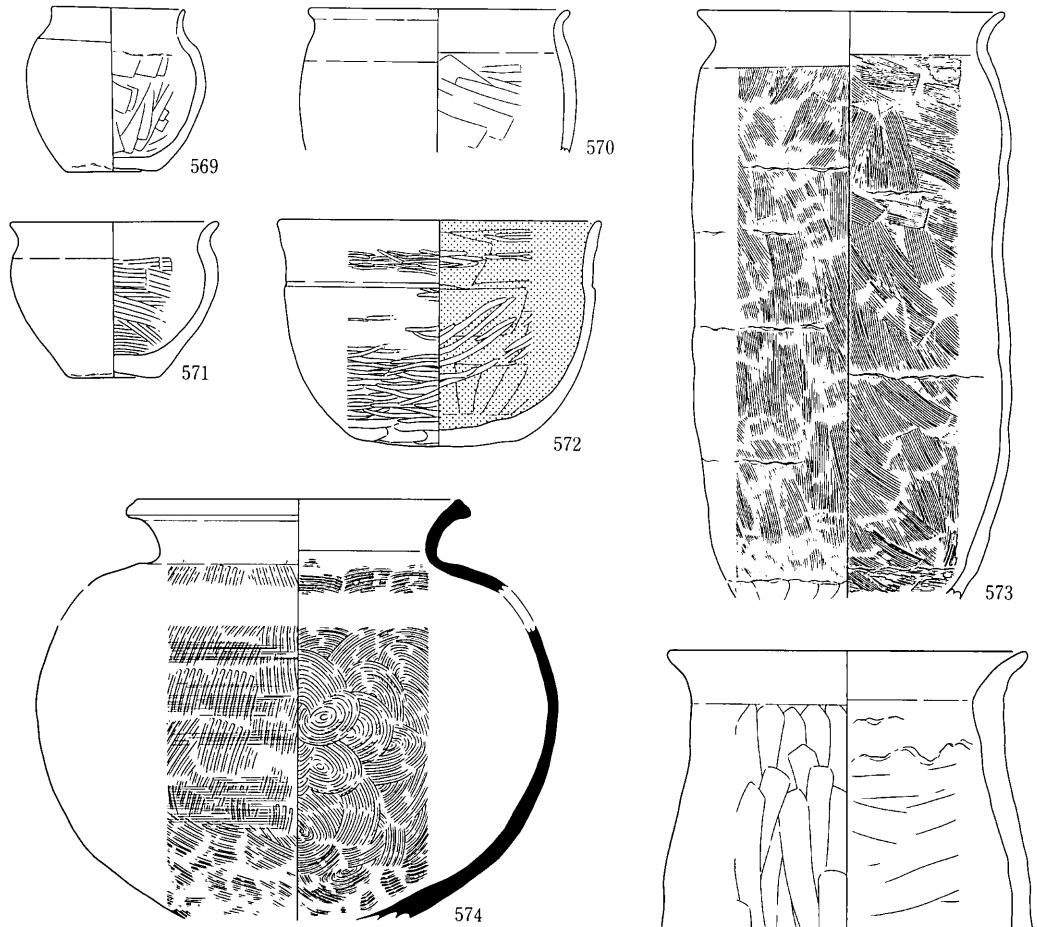


567

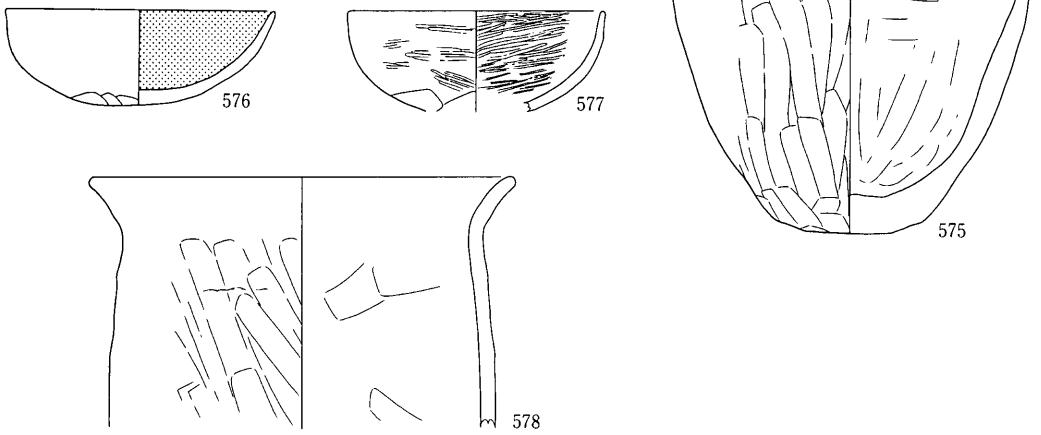


568

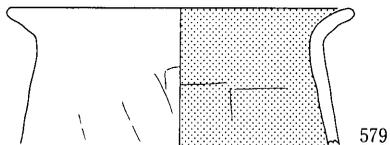




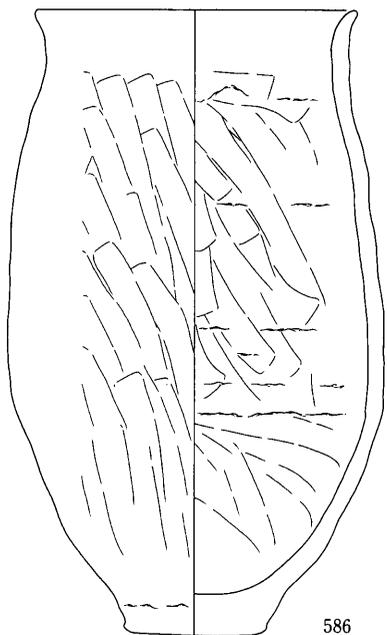
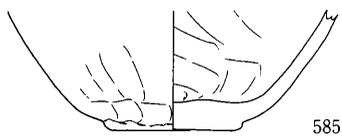
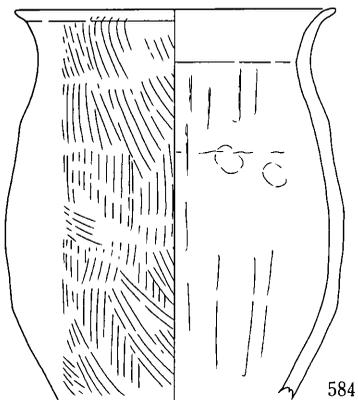
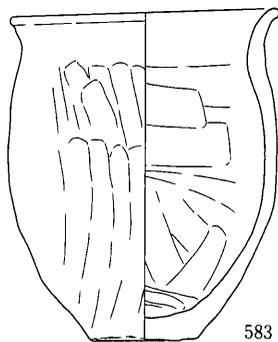
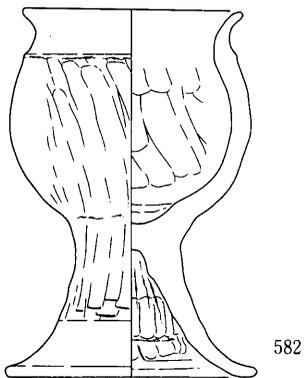
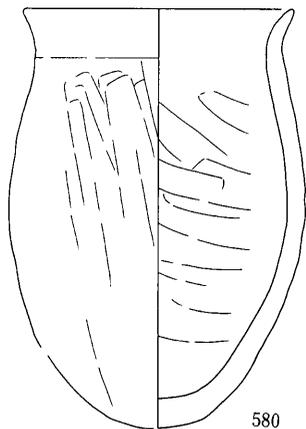
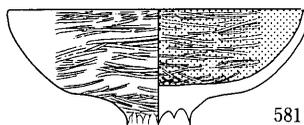
第123号住居址(576~580)



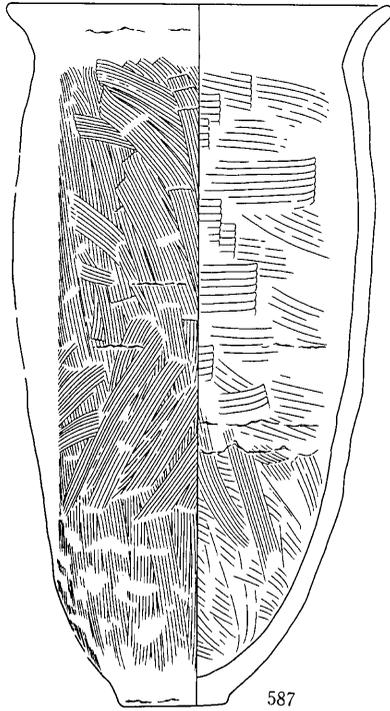
0 10 cm



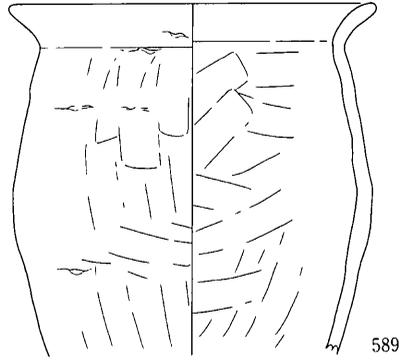
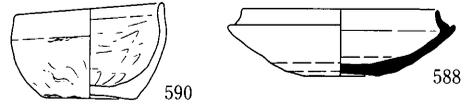
第124号住居址(581~587)



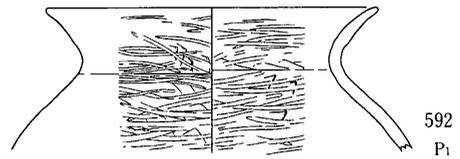
0 10 cm



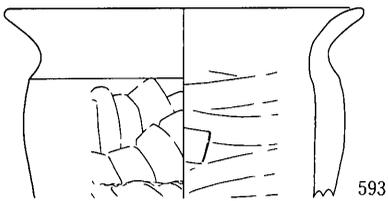
第8号溝状遺構(588~590)



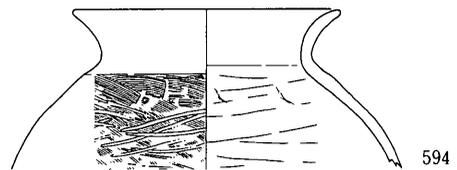
ピット(591・592)



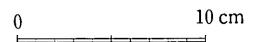
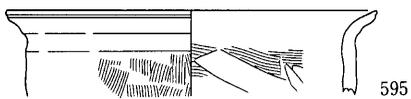
第16号掘立柱建物址(593)



第2号掘立柱建物址(594)

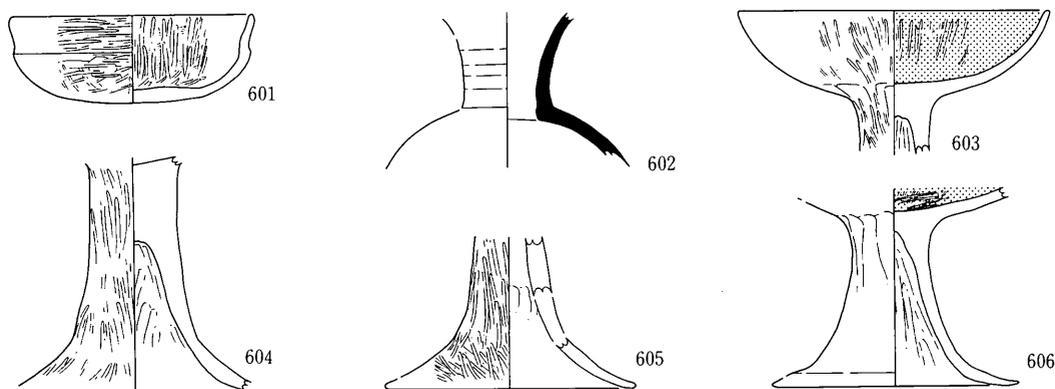
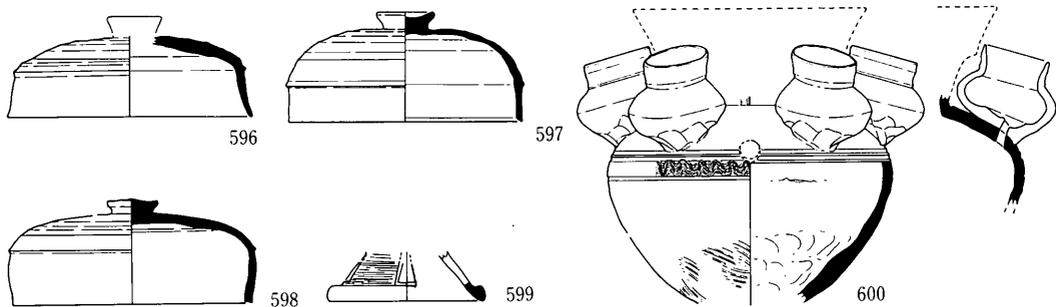


検出面(595)

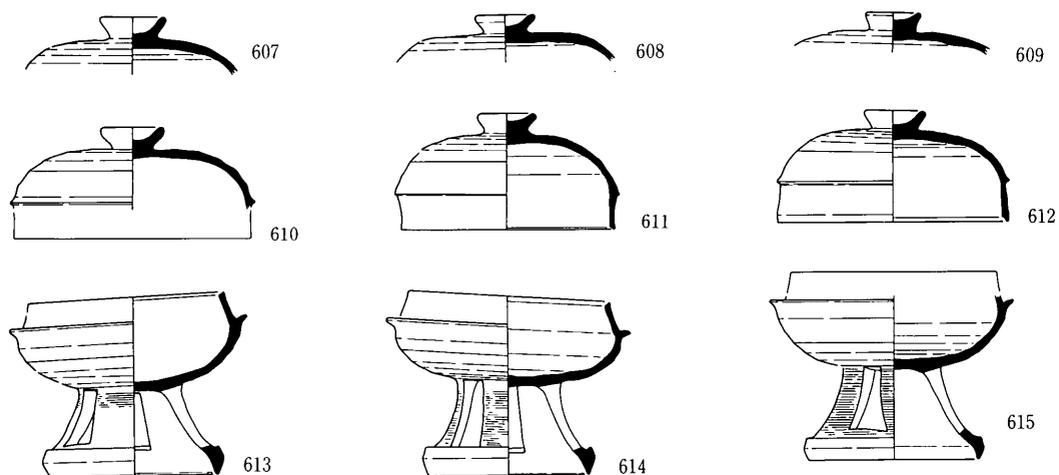


平田里第1号墳

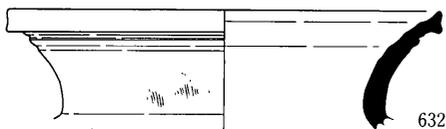
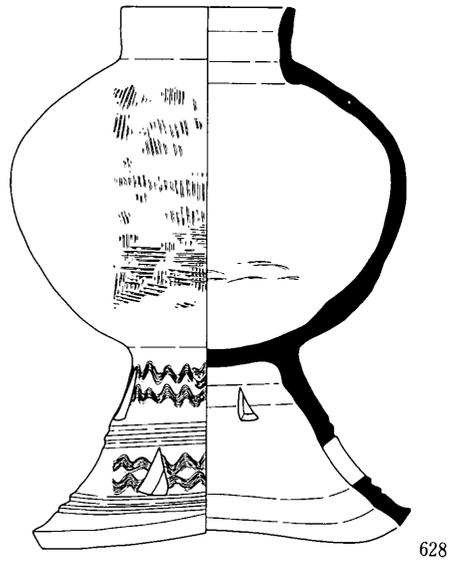
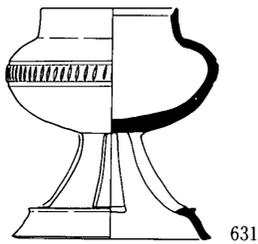
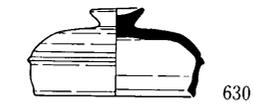
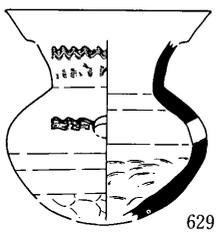
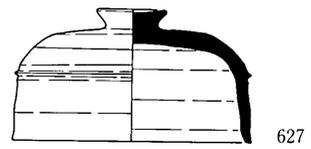
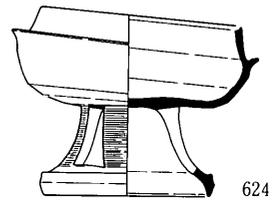
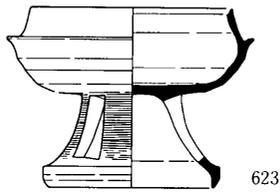
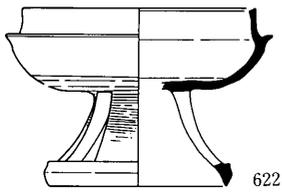
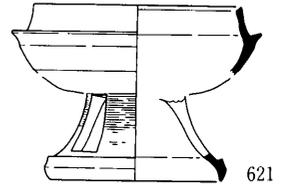
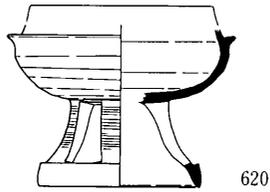
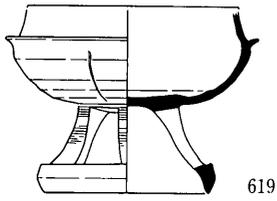
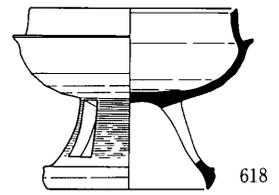
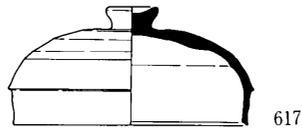
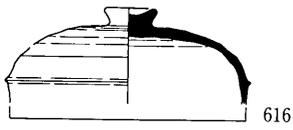
南遺物集中区<1区>(596~606)



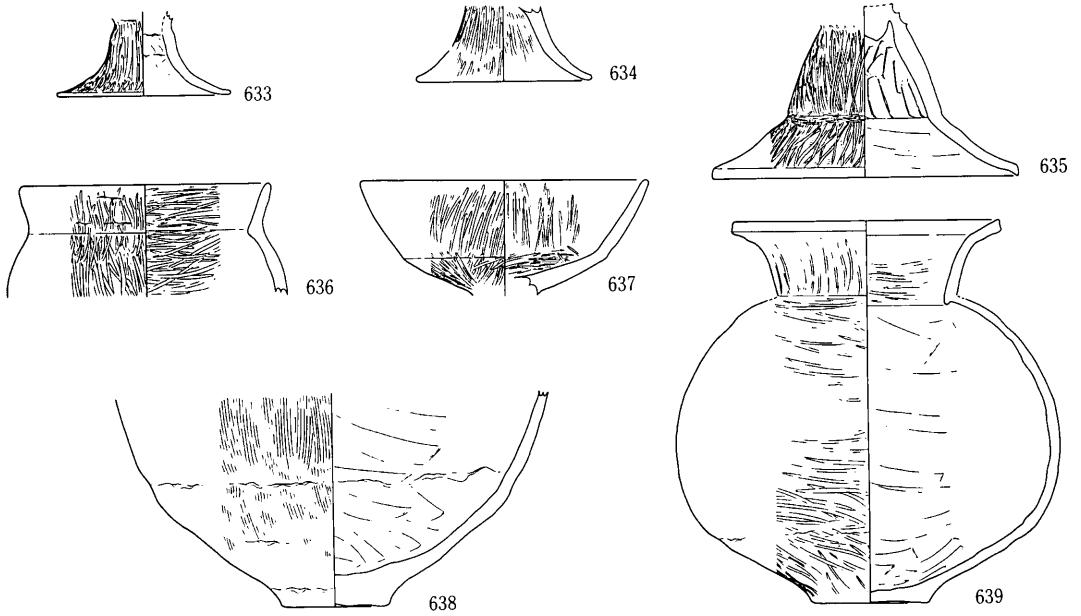
南東遺物集中区<A群>(607~639)



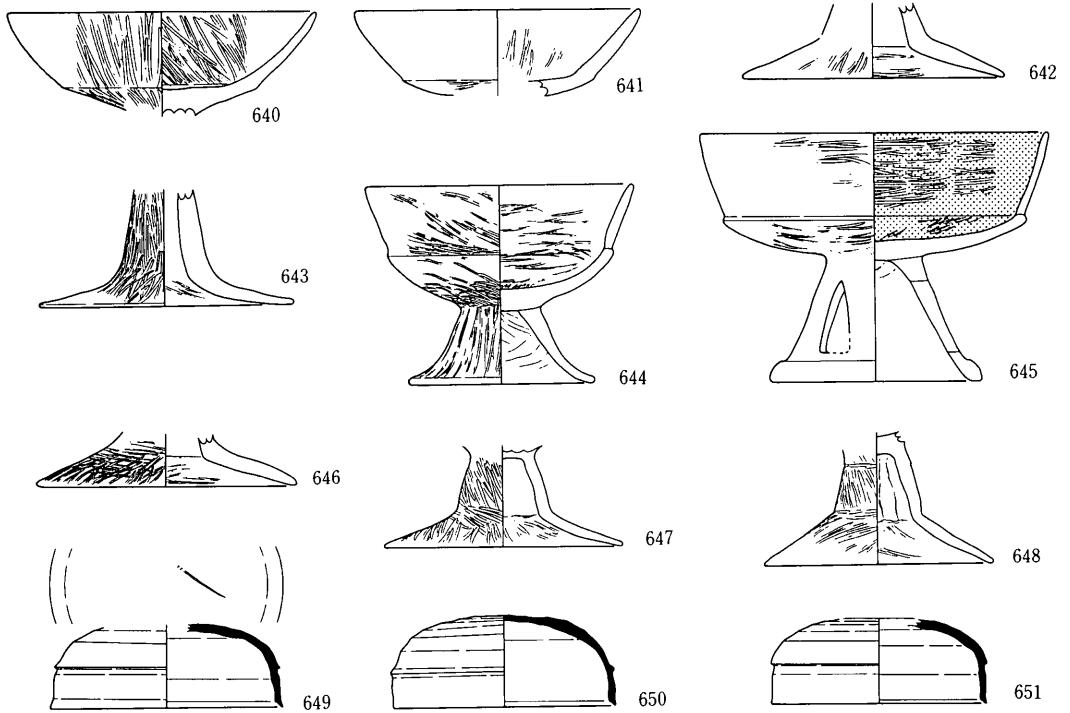
0 10 cm



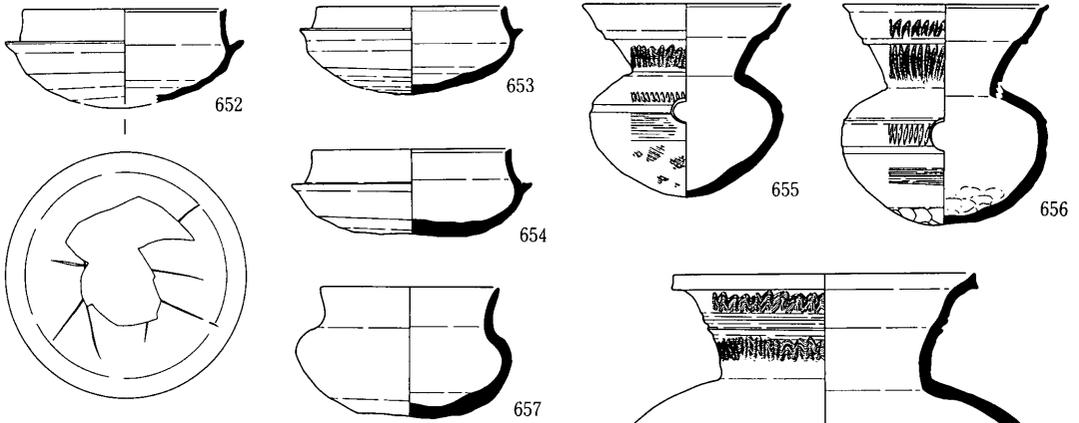
0 10 cm



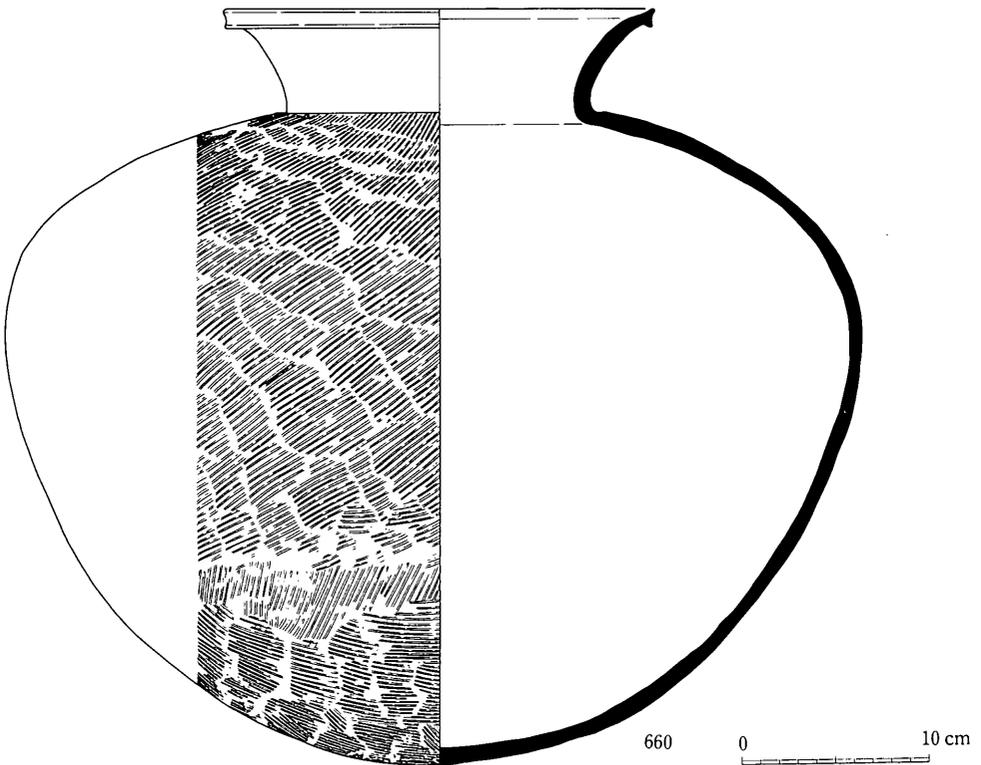
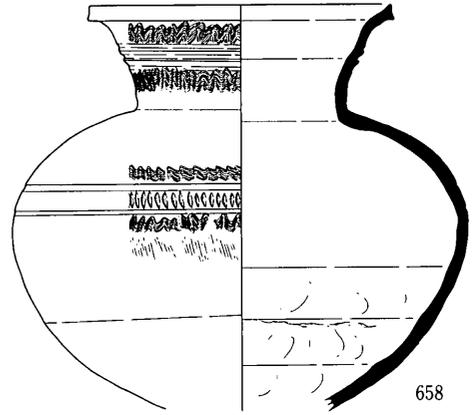
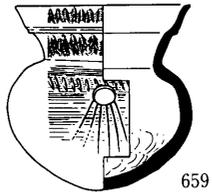
南東遺物集中区<B群>(640~658)



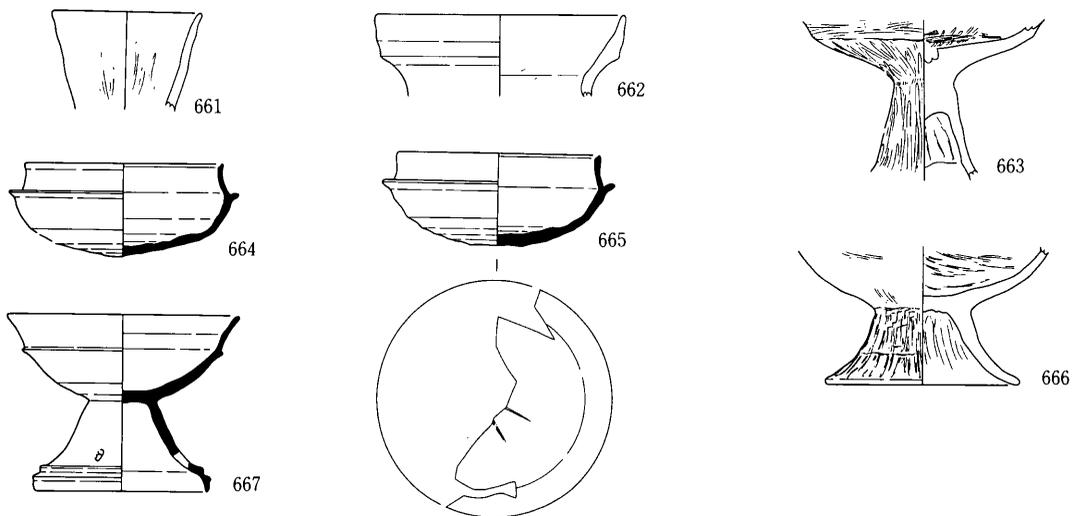
0 10 cm



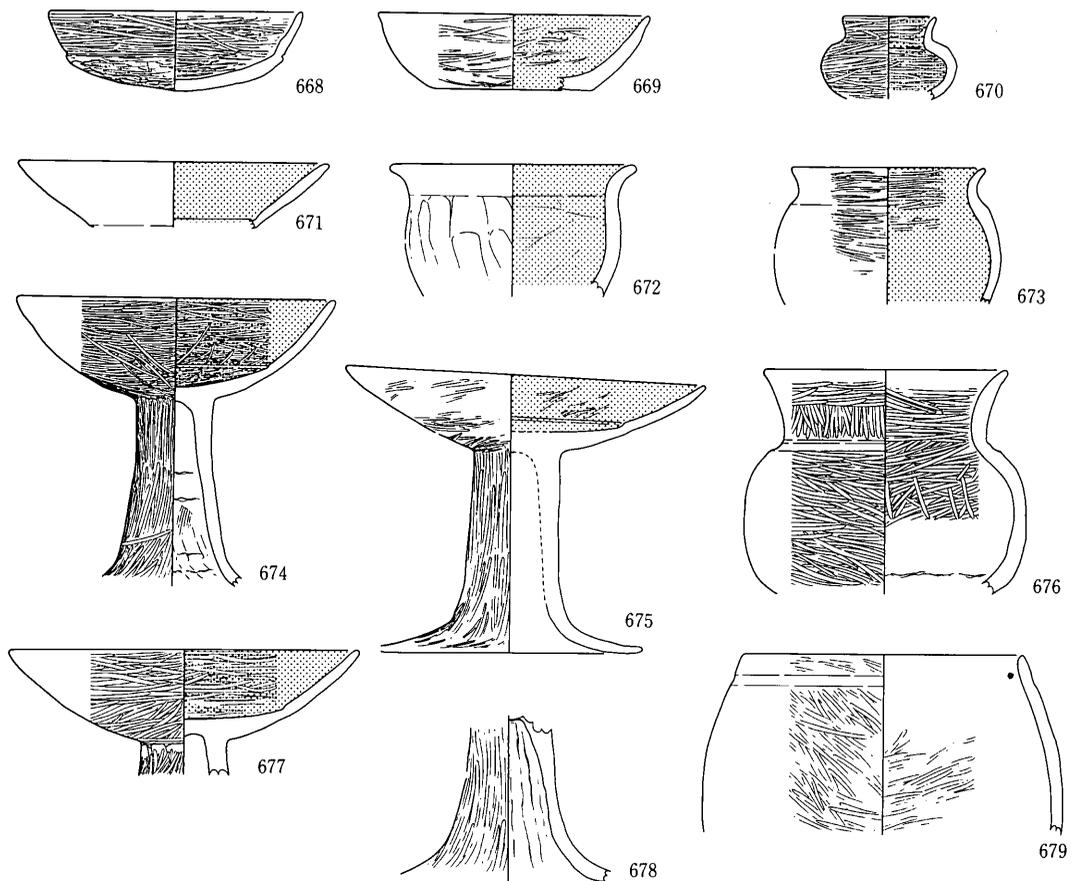
南東遺物集中区<C群>(659-660)



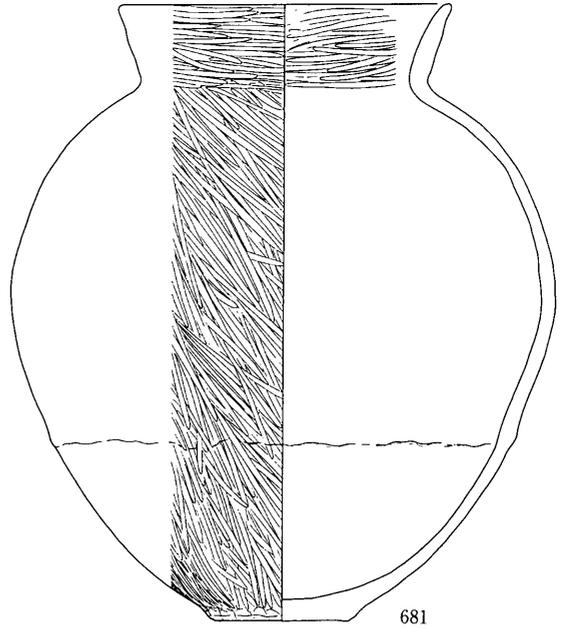
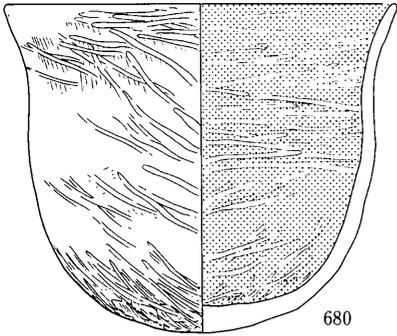
南東遺物集中区<その他>(661~667)



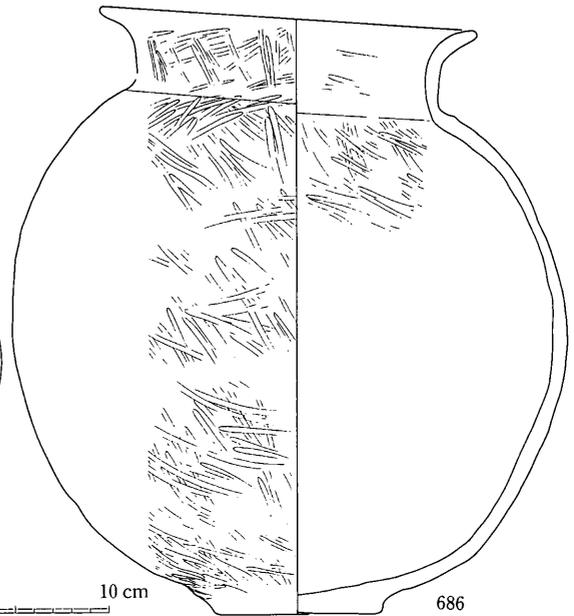
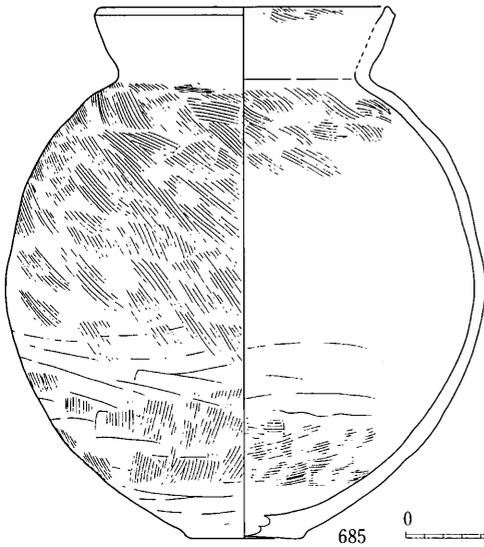
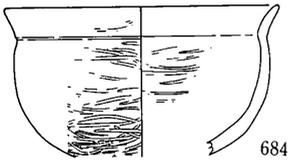
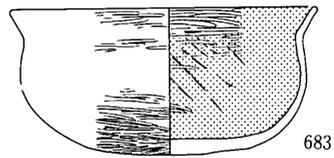
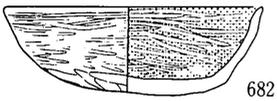
北東遺物集中区<D群>(668~681)



0 10 cm

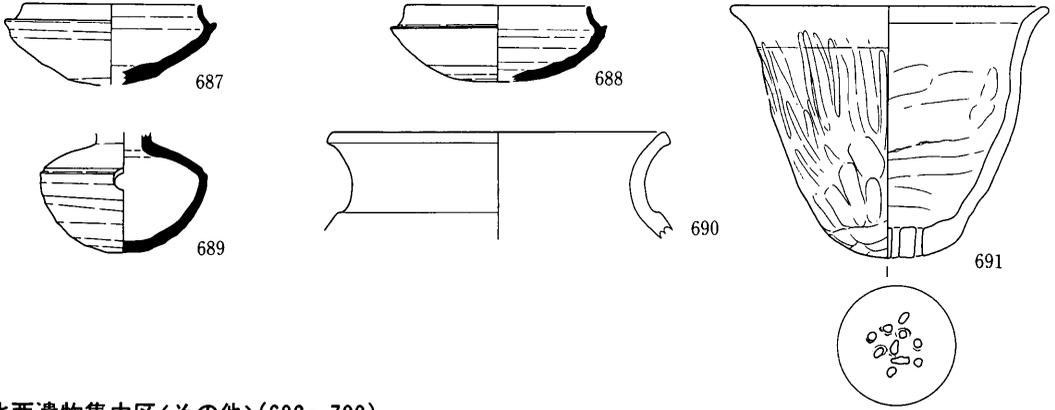


北東遺物集中区<その他>(682~686)

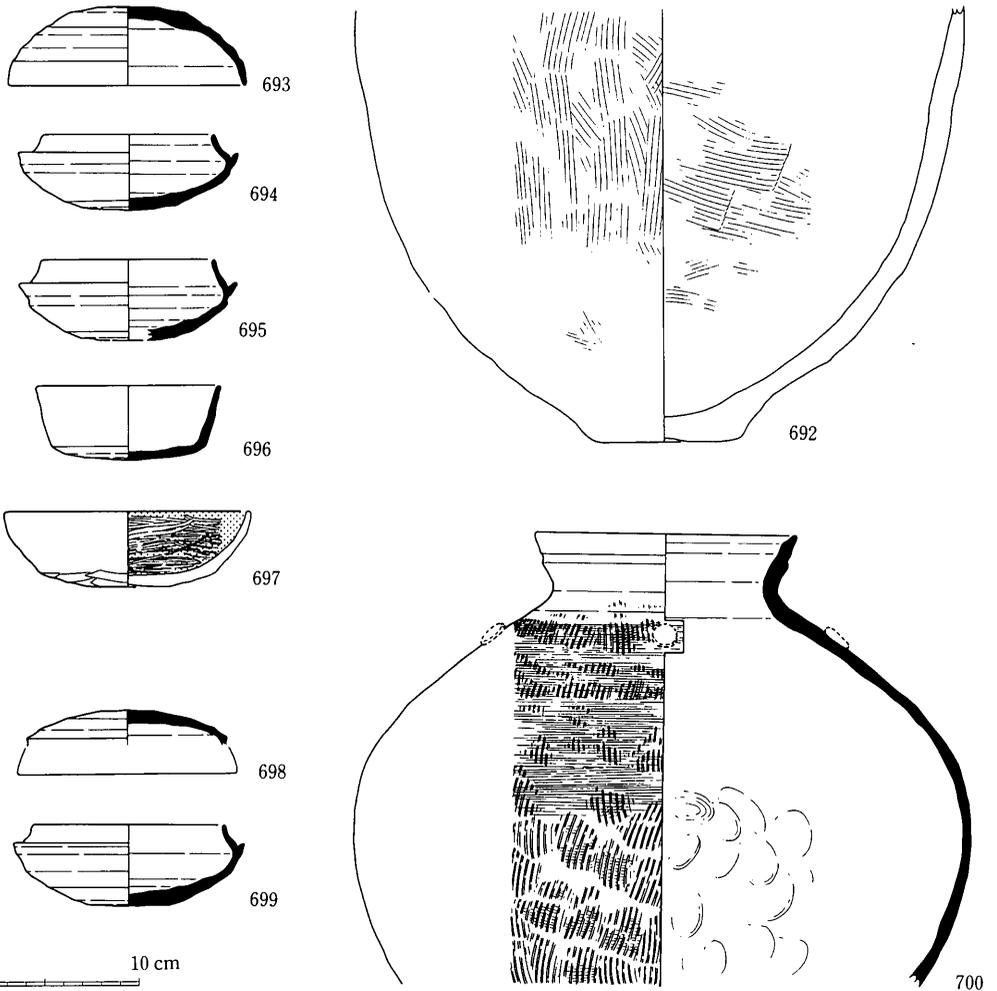


0 10 cm

北西遺物集中区<E群>(687~691)

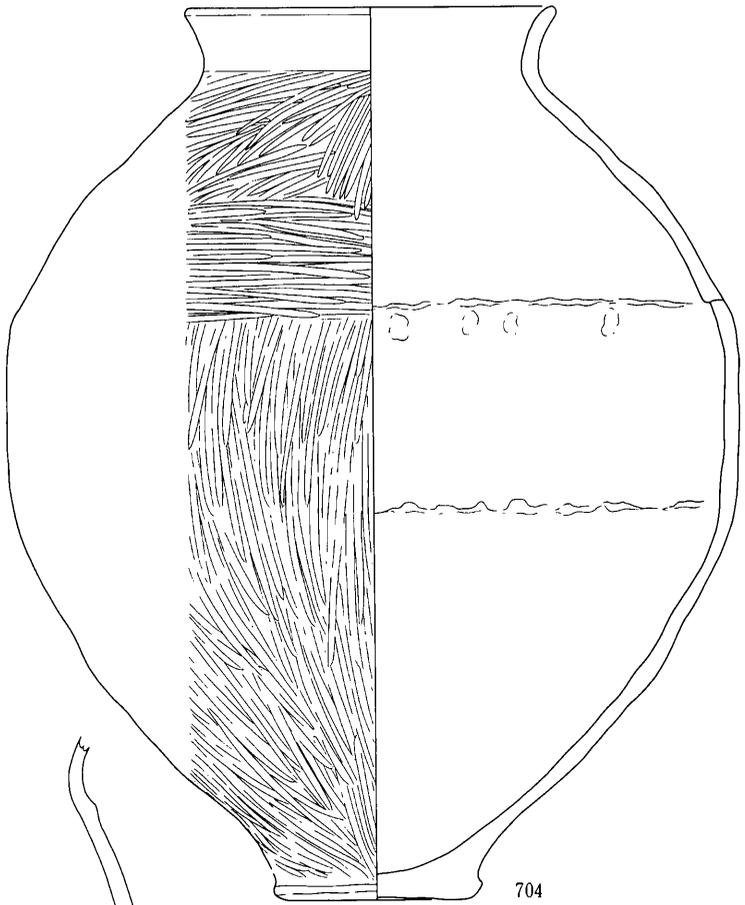
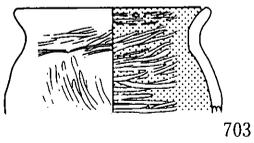
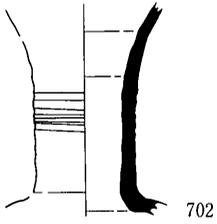


北西遺物集中区<その他>(692~700)

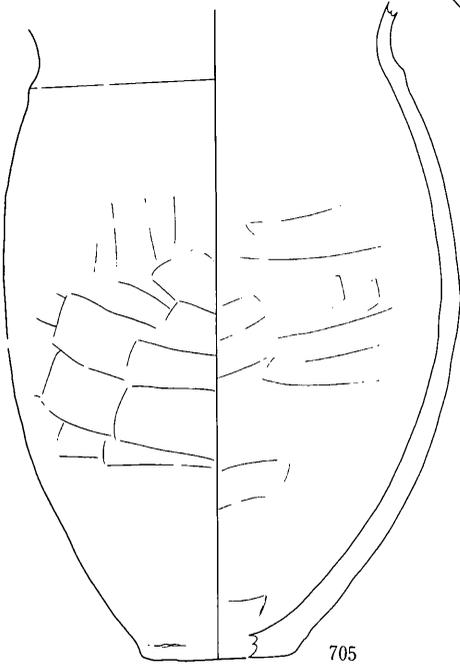


0 10 cm

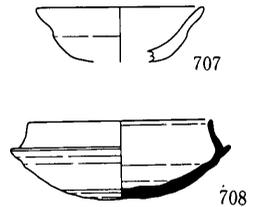
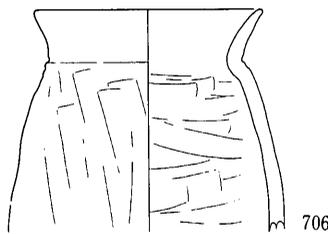
西遺物集中区<F群>(701~704)

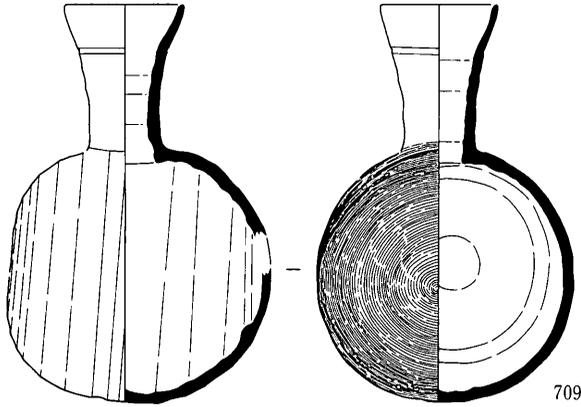


西遺物集中区<G群>(705)

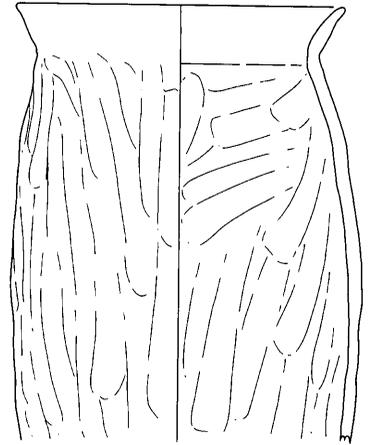


西遺物集中区<その他>(706~710)





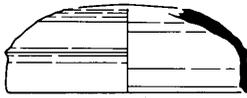
709



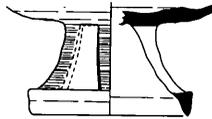
710

平田里第3号墳(713・714)

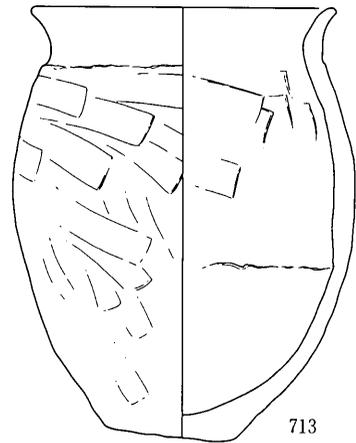
その他(711・712)



711

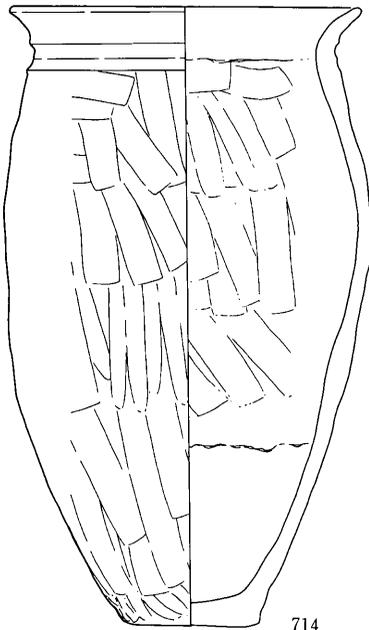


712

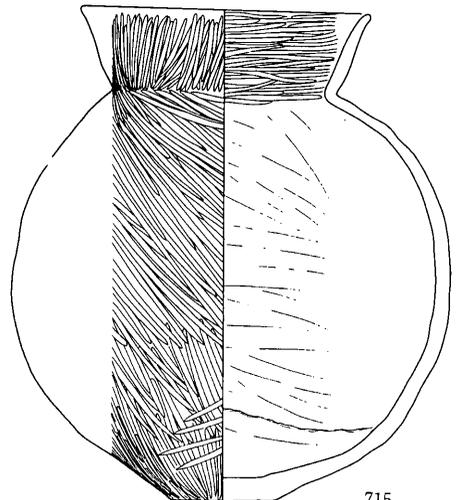


713

平田里第2号墳(715)



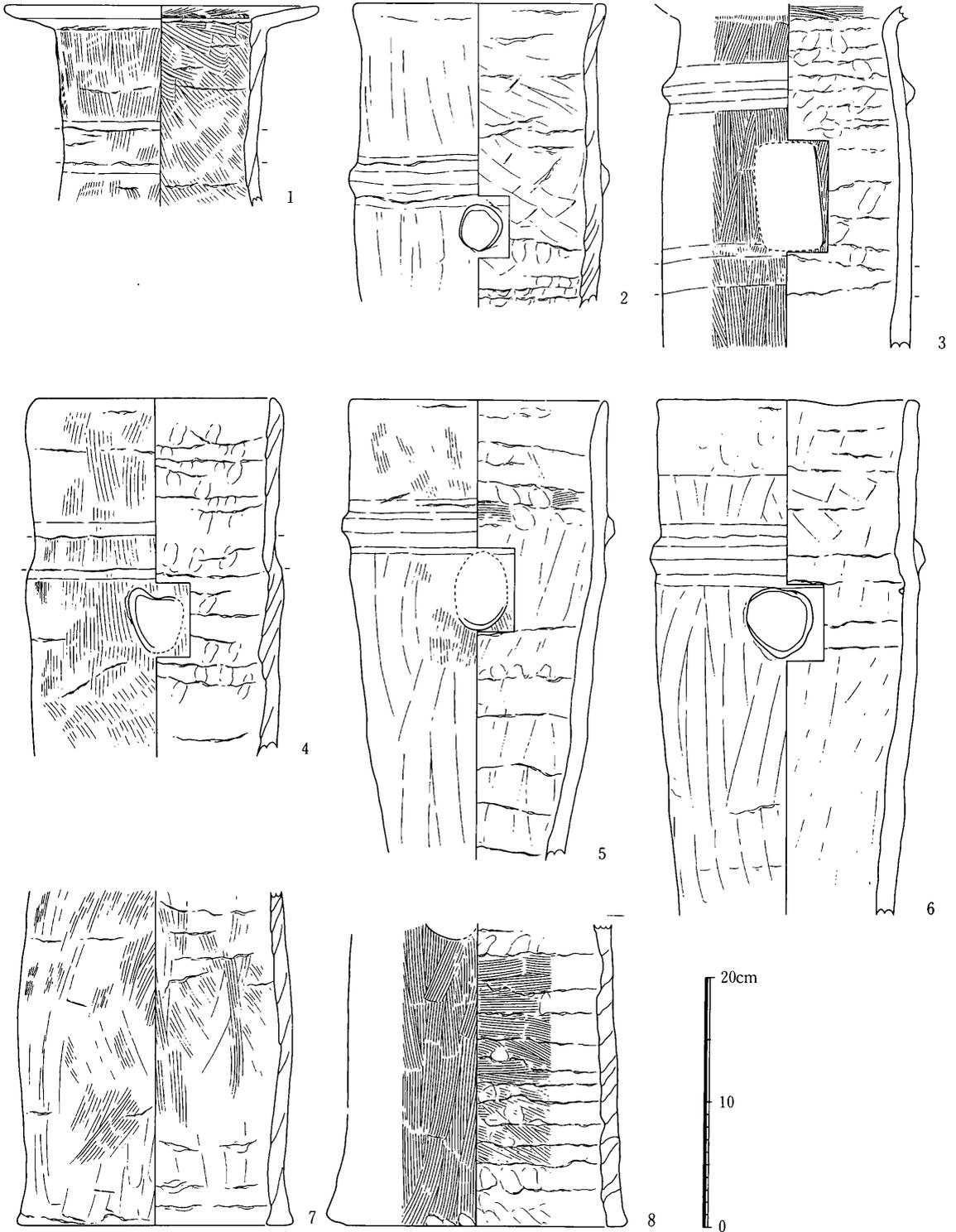
714

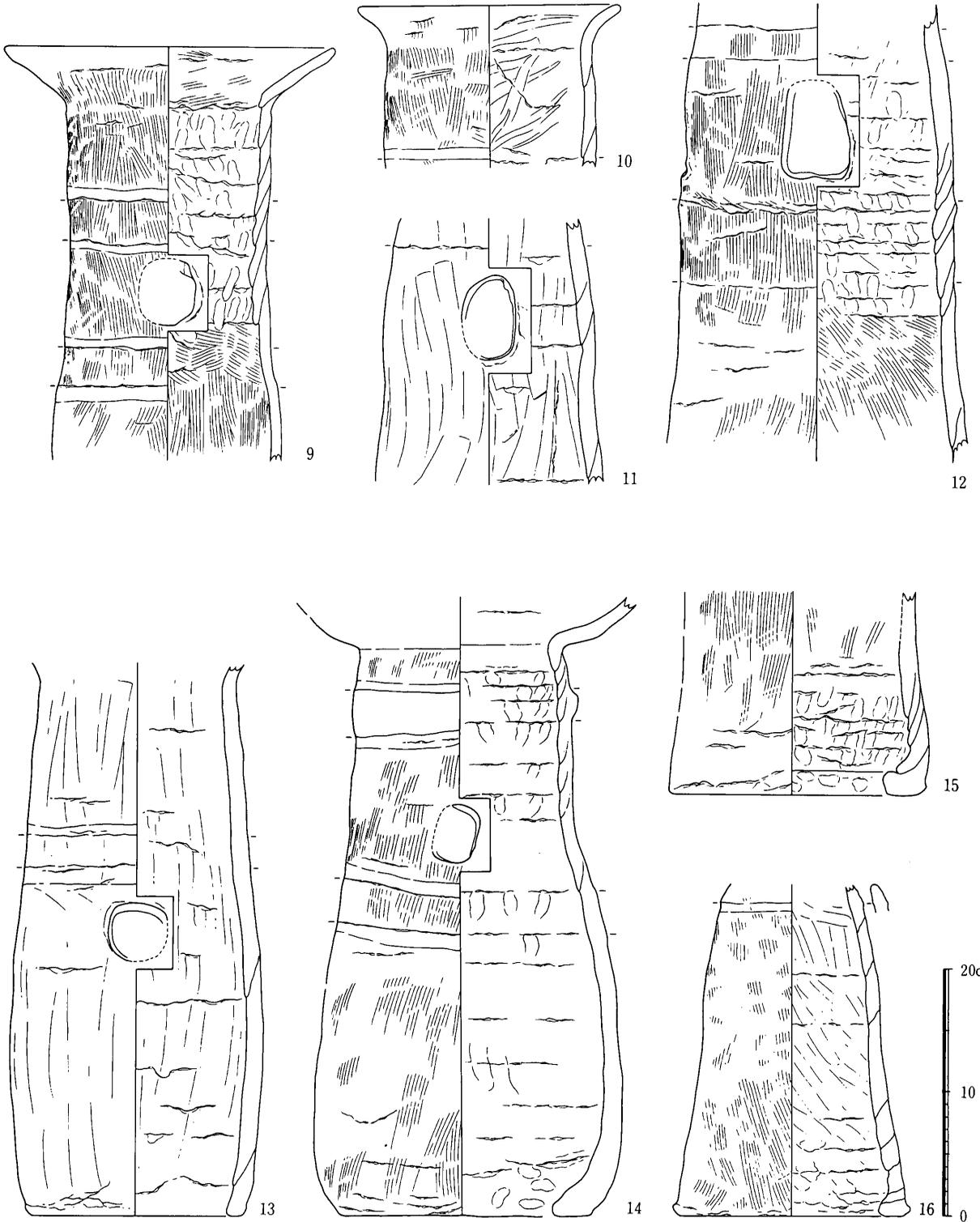


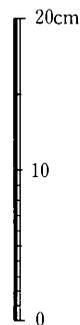
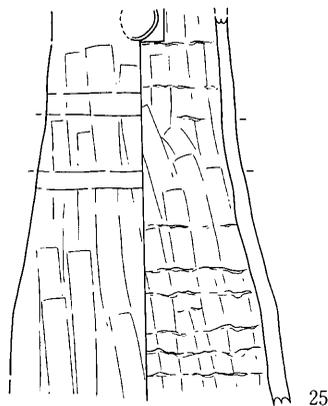
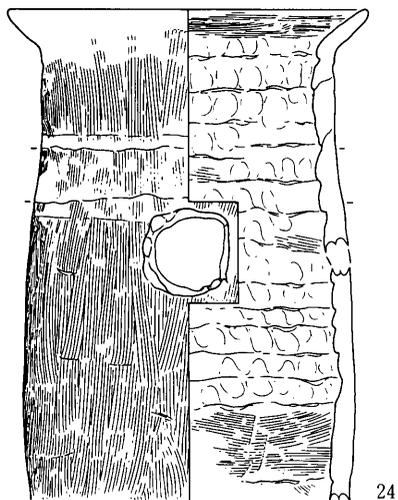
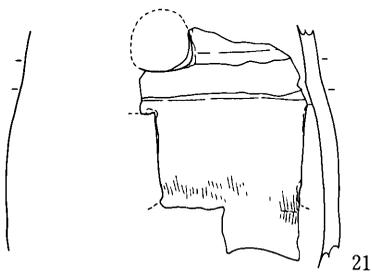
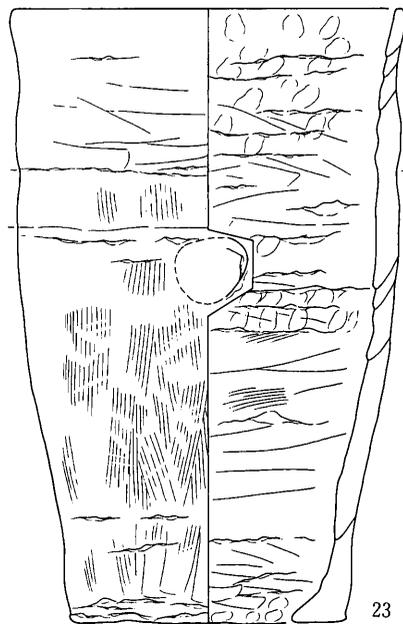
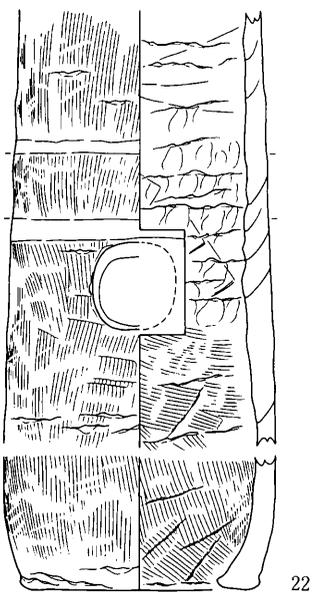
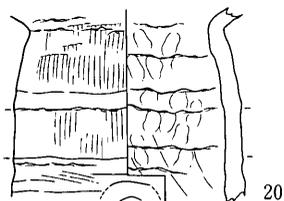
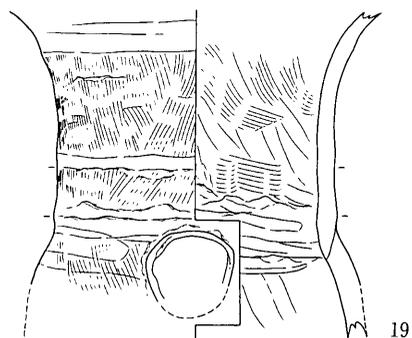
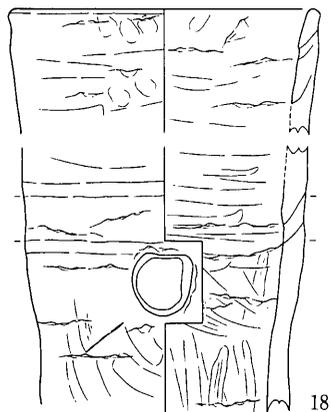
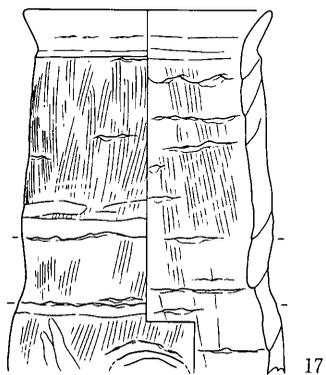
715

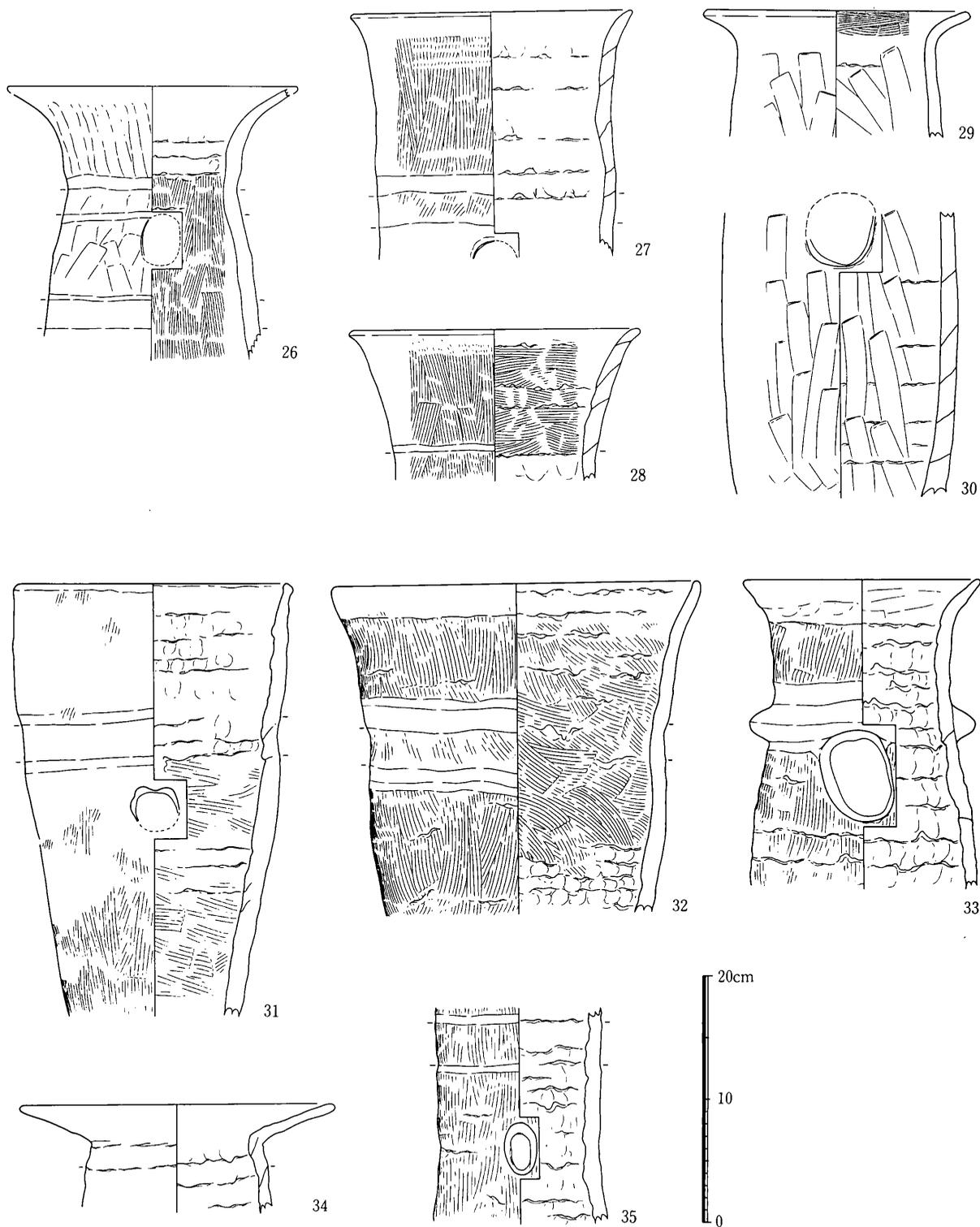
0 10 cm

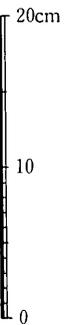
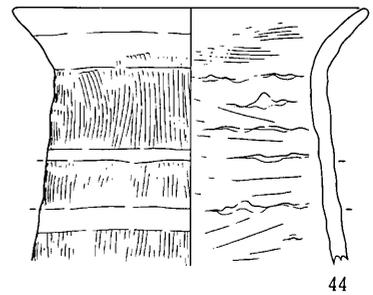
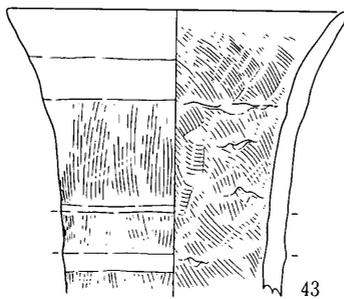
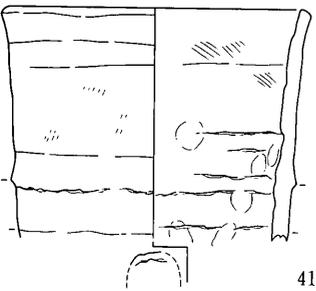
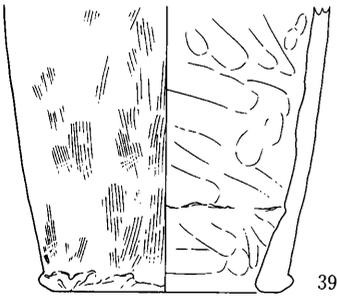
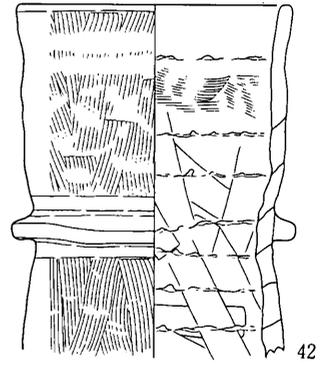
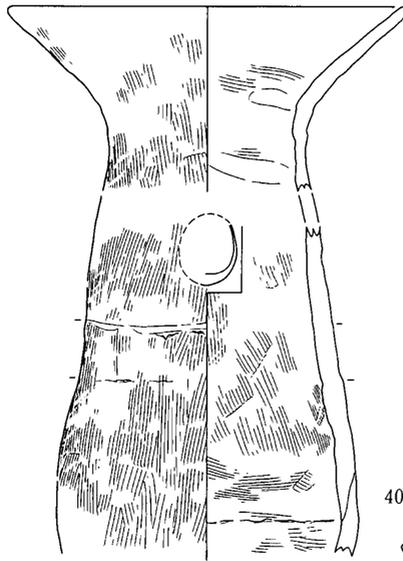
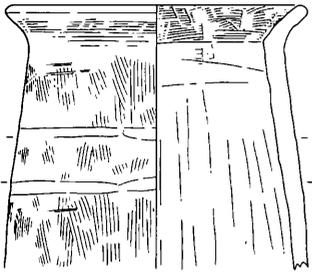
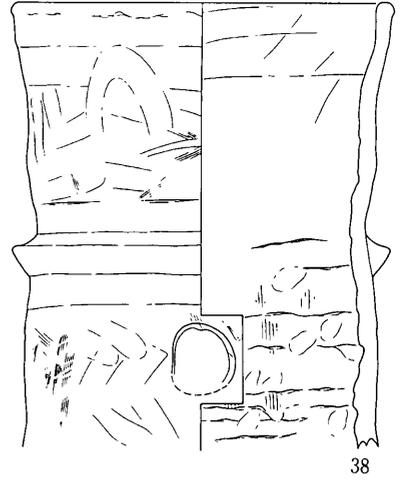
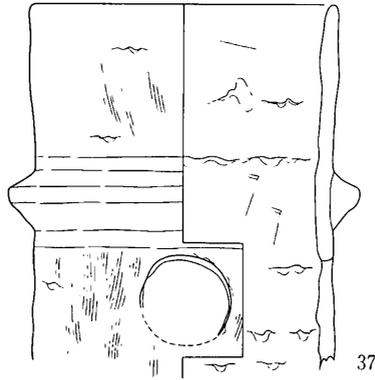
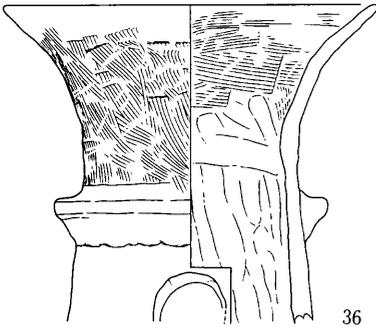
円筒埴輪 (1~78)

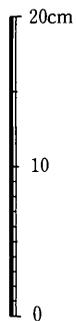
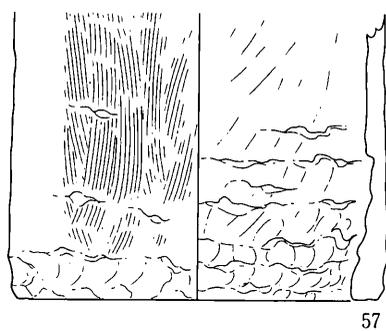
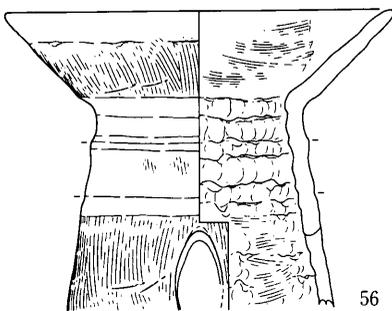
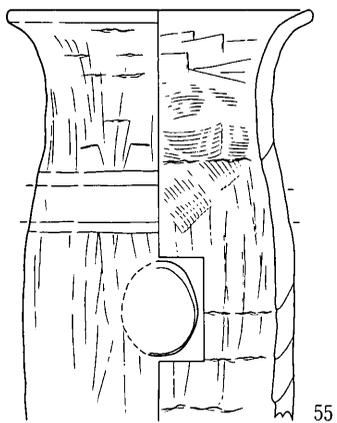
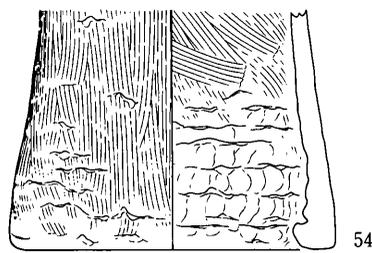
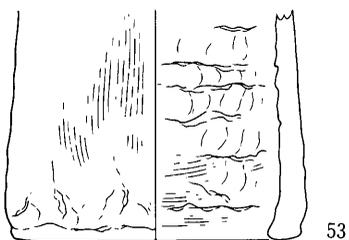
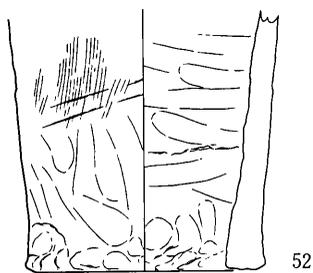
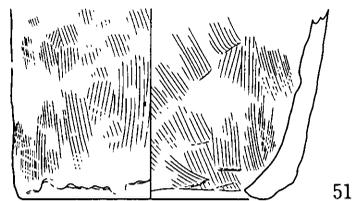
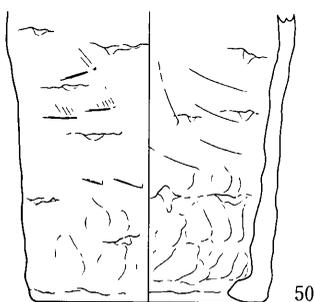
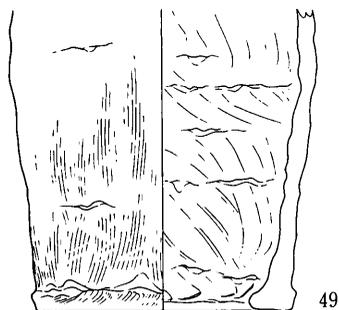
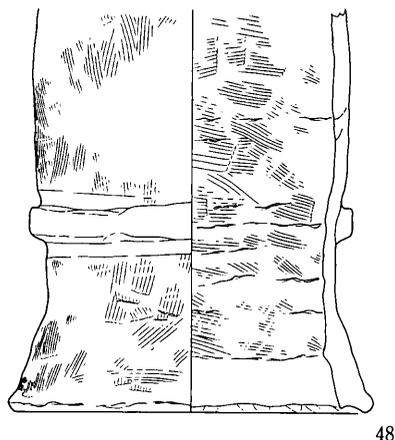
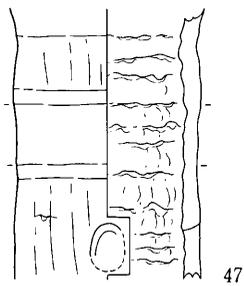
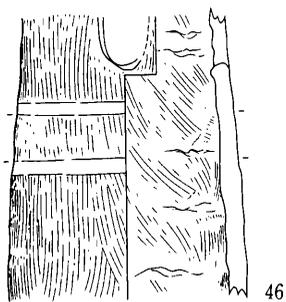


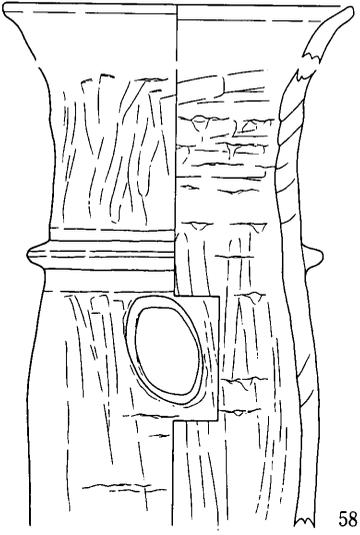




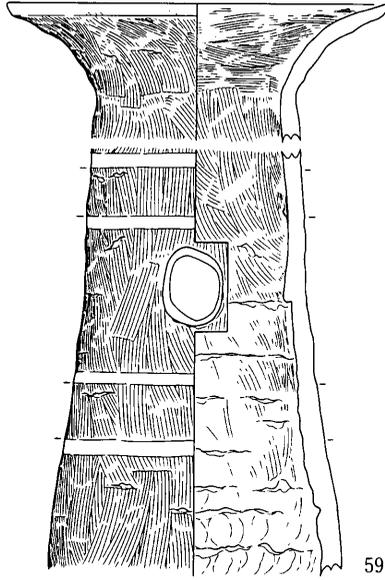




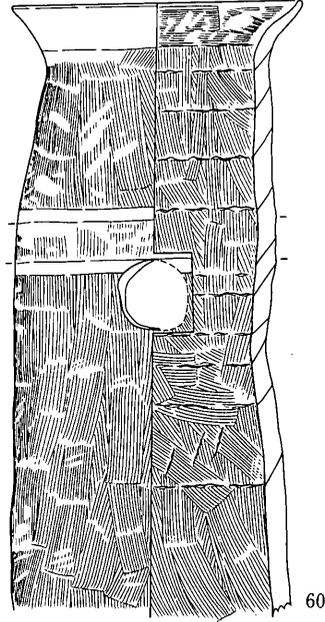




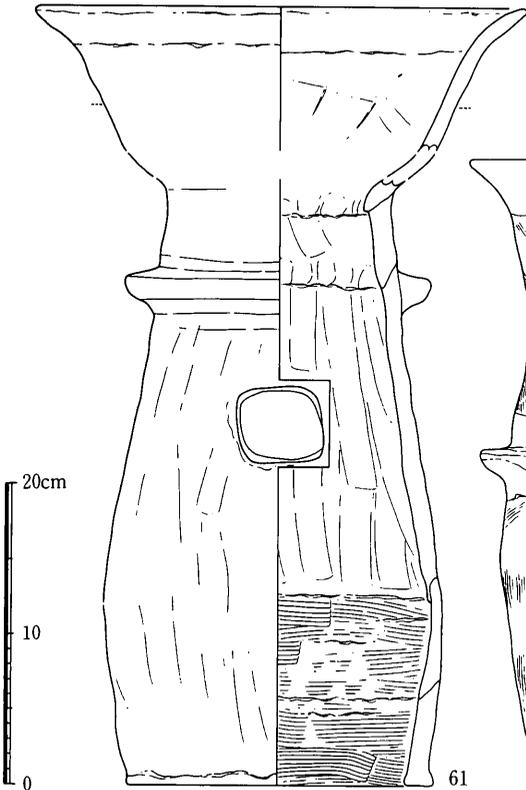
58



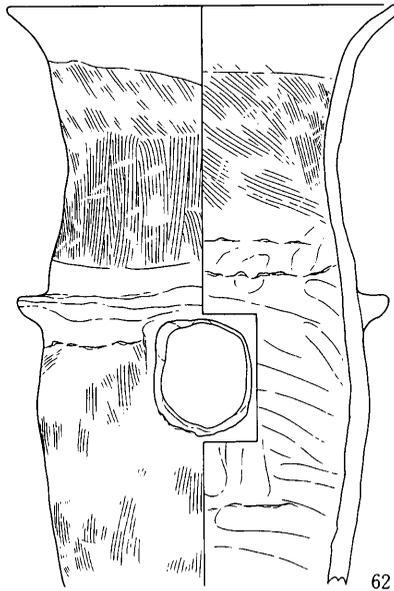
59



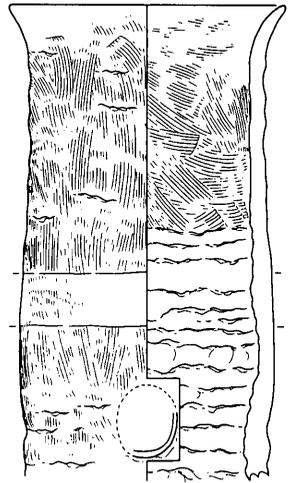
60



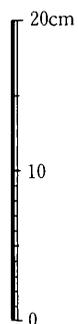
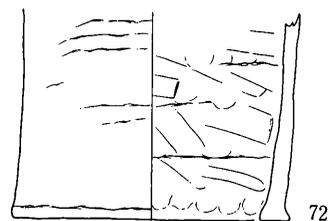
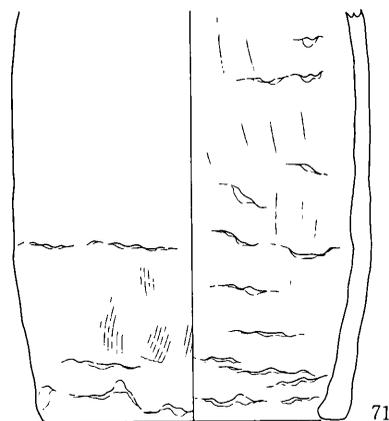
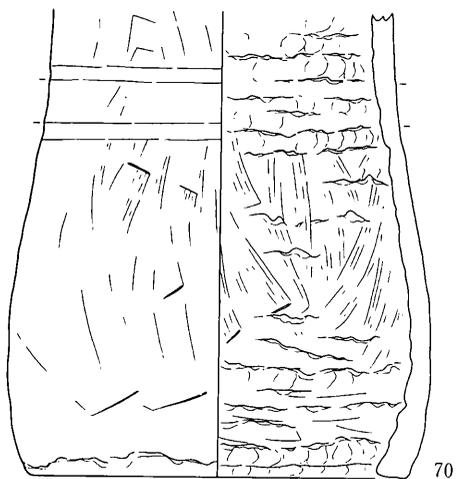
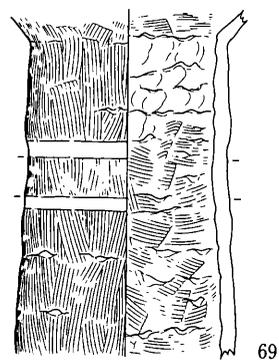
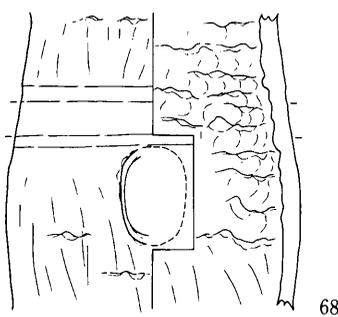
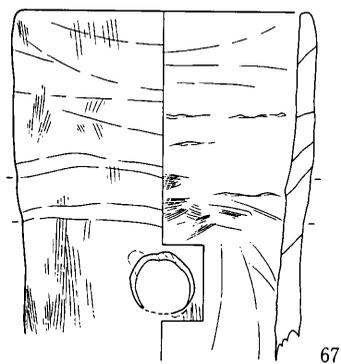
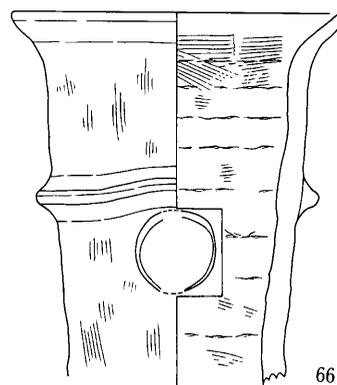
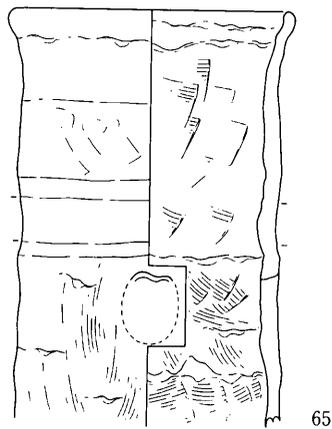
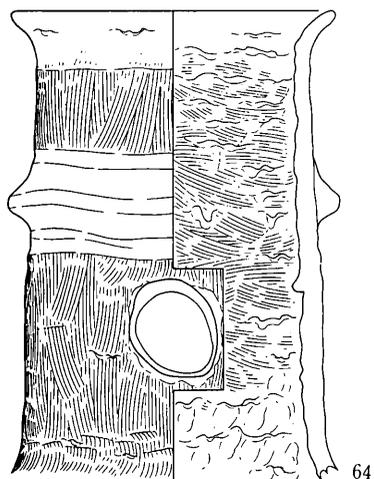
61

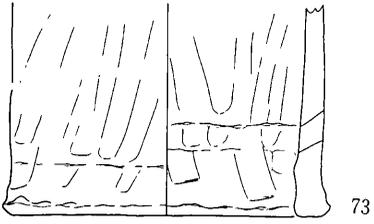


62

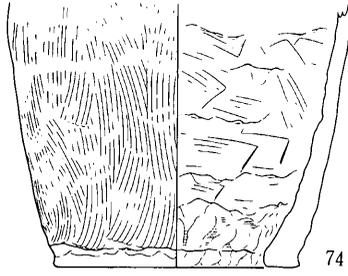


63

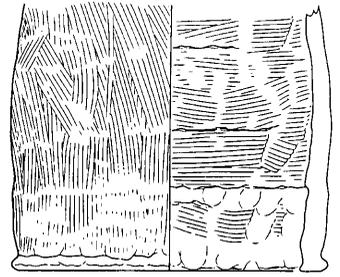




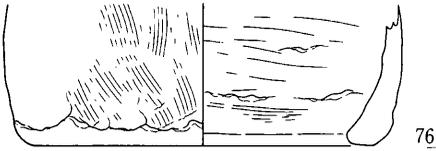
73



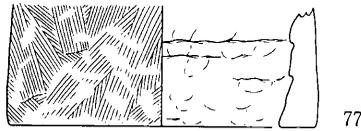
74



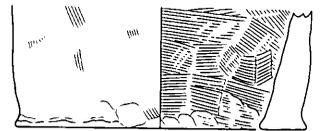
75



76



77

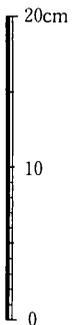


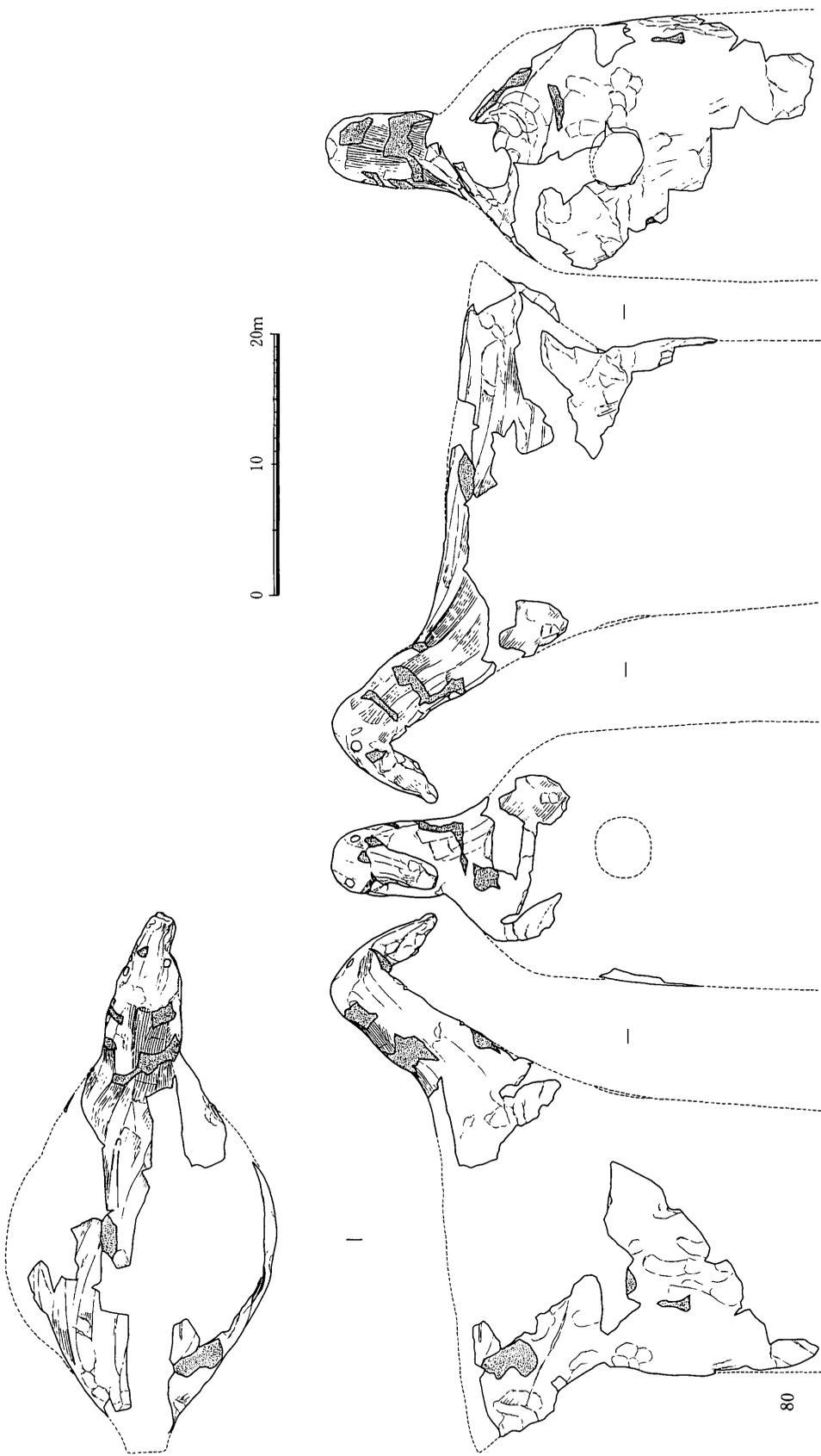
78

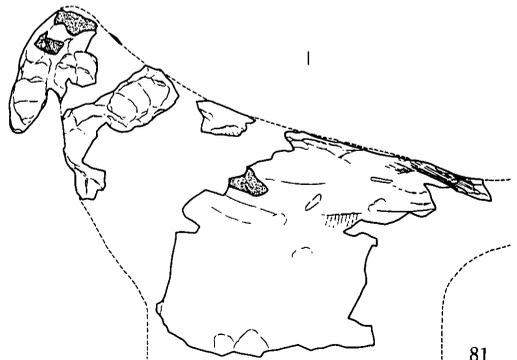
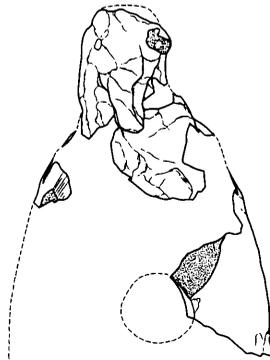
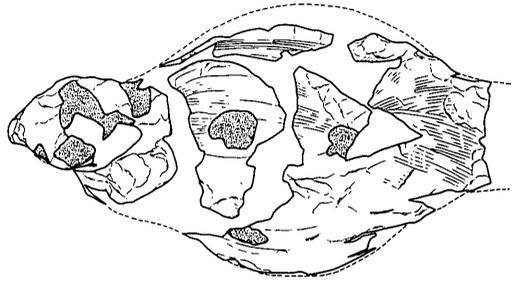
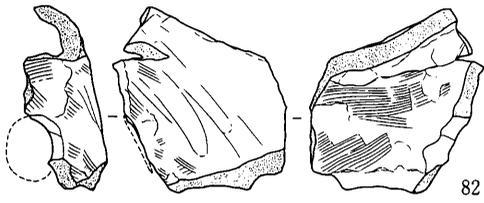
形象埴輪 (79—98)



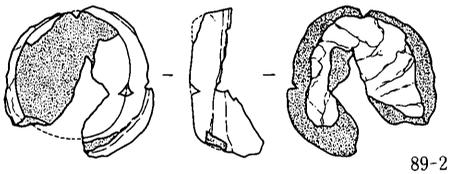
79



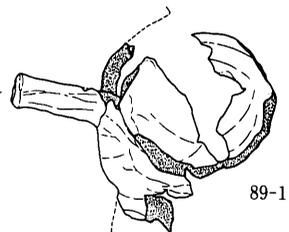
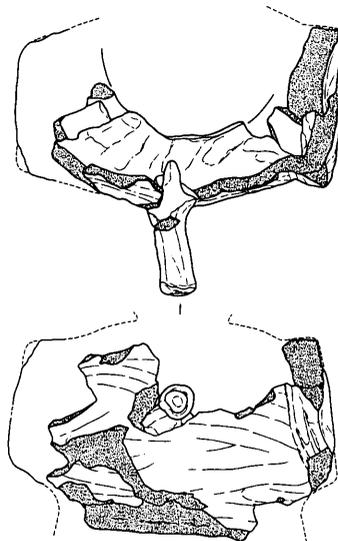




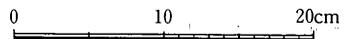
81

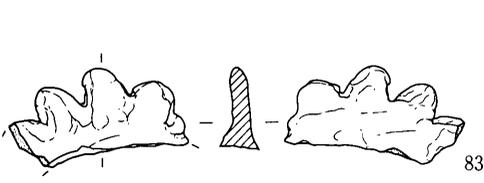


89-2

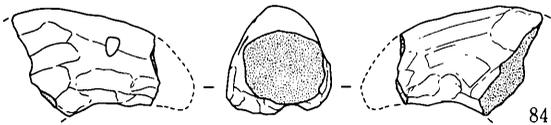


89-1

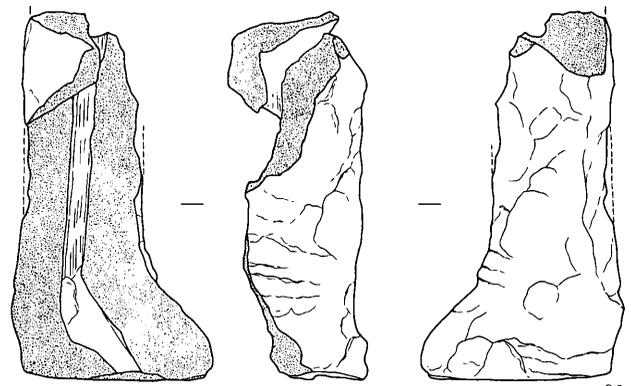




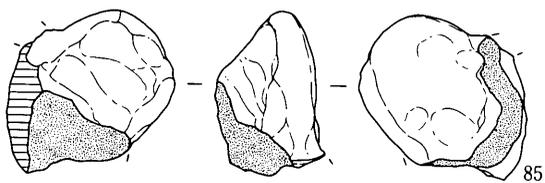
83



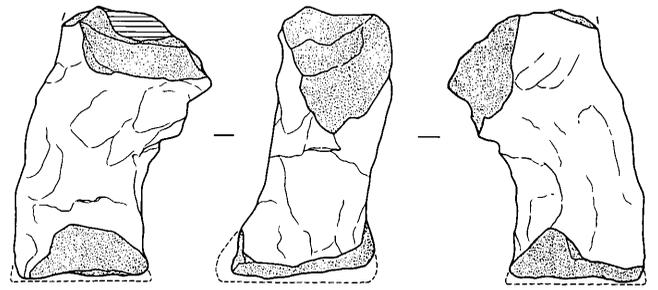
84



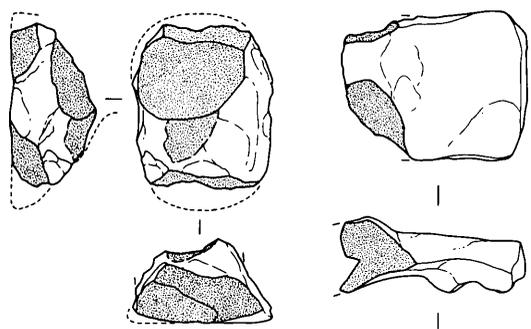
86



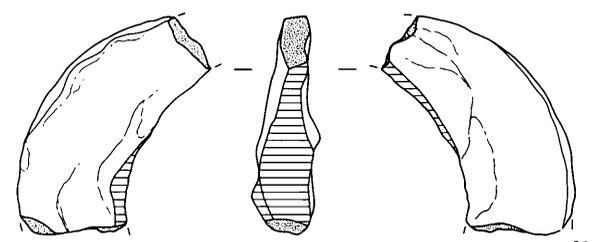
85



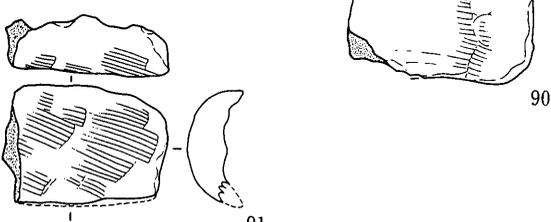
87



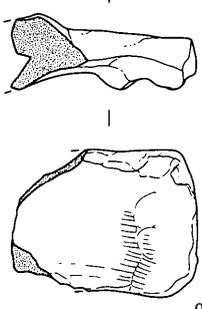
88



92

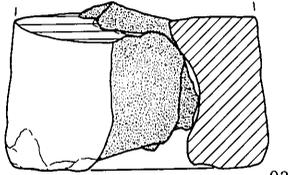
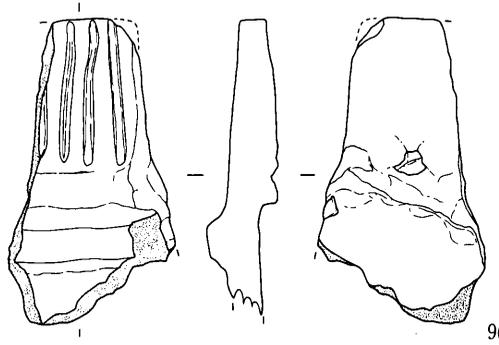
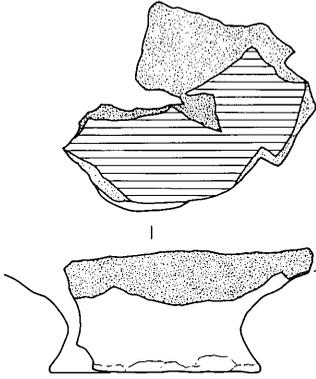
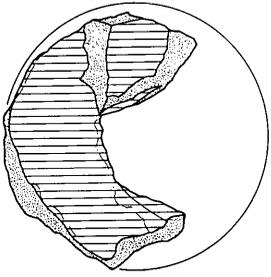


91

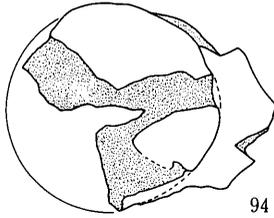


90

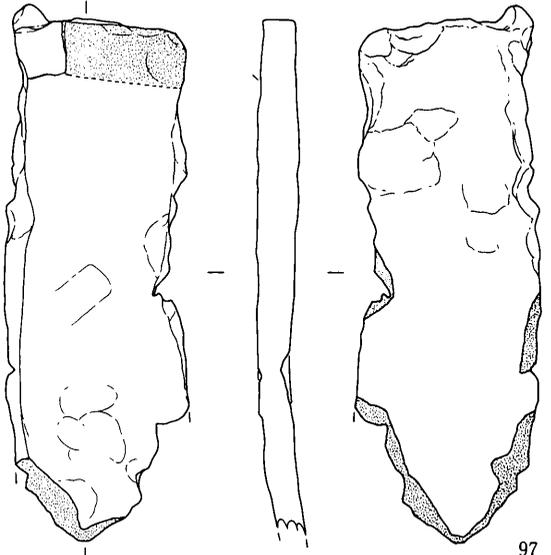




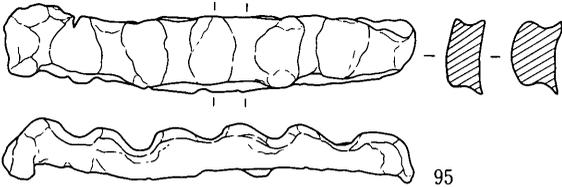
93



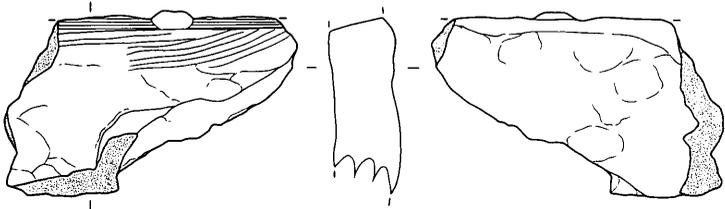
94



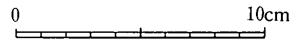
96



95

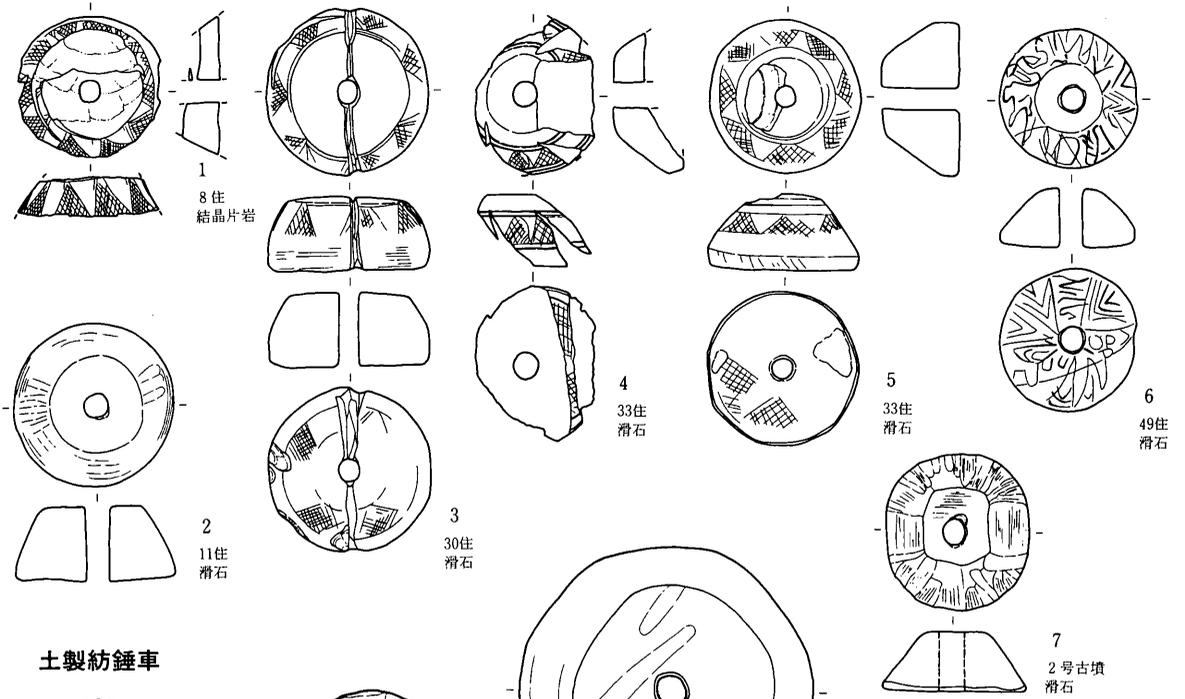


98

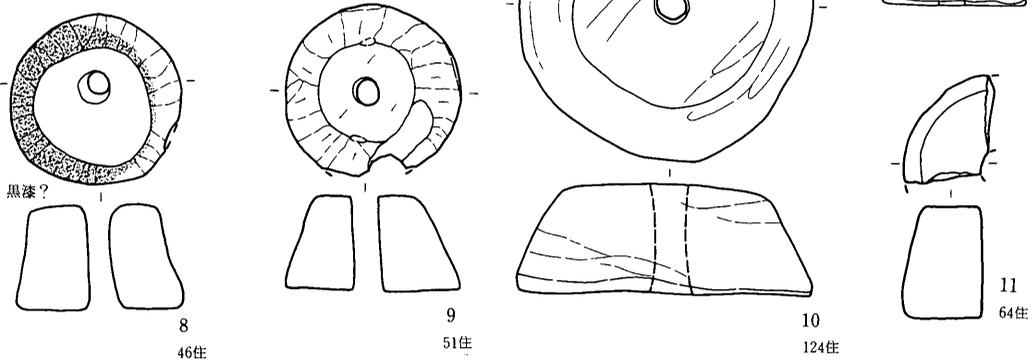


97

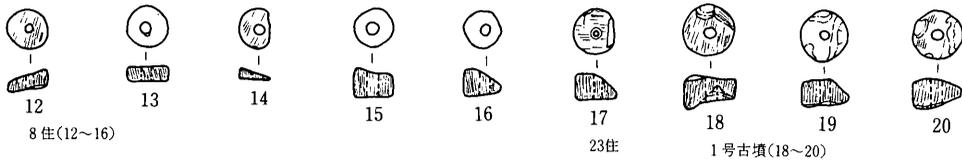
石製紡錘車



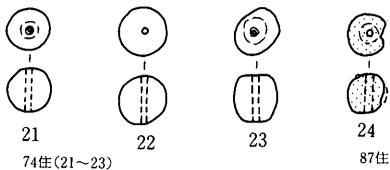
土製紡錘車



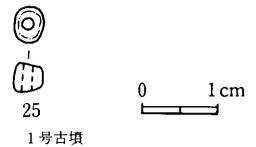
滑石製白玉



土製丸玉



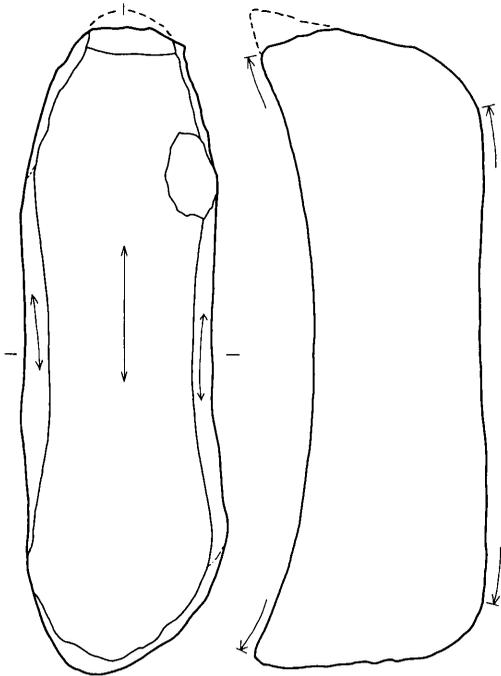
ガラス製小玉



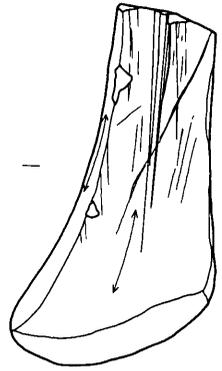
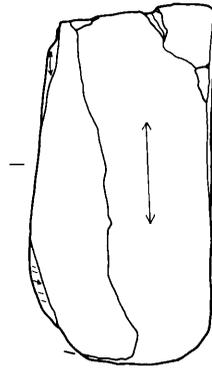
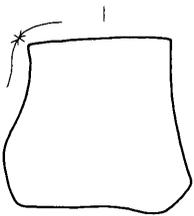
0 5 cm

0 1 cm

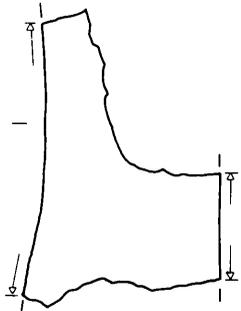
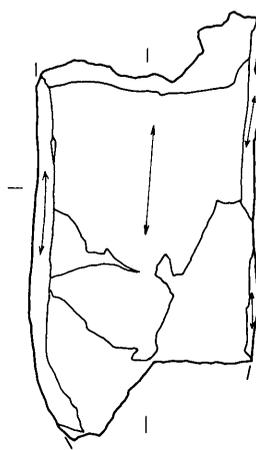
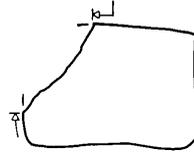
砥石



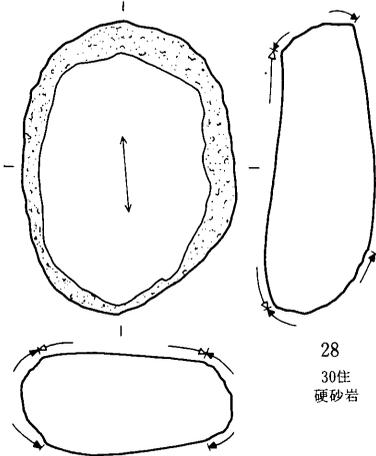
26  
9住  
凝灰岩



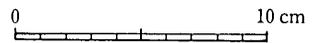
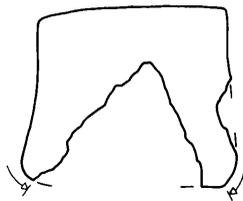
27  
9住  
凝灰岩

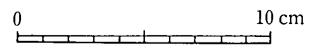
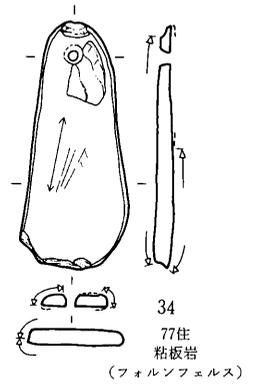
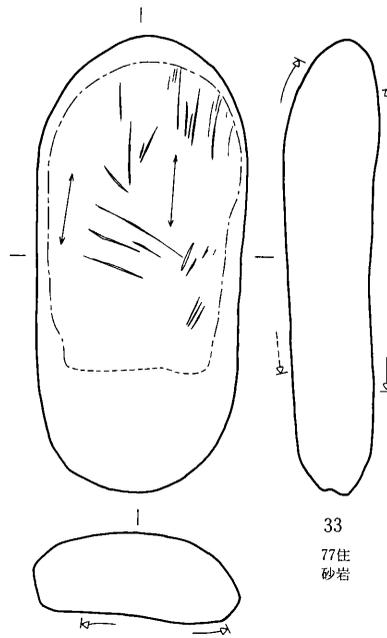
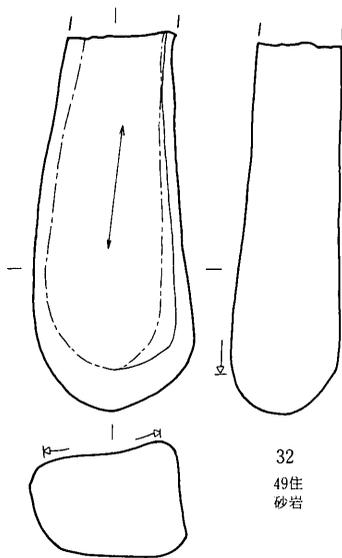
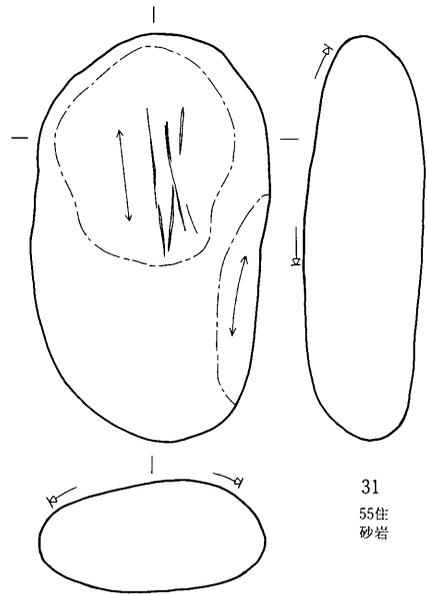
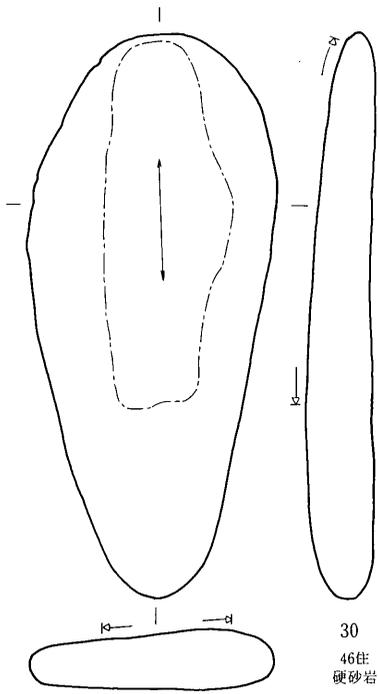


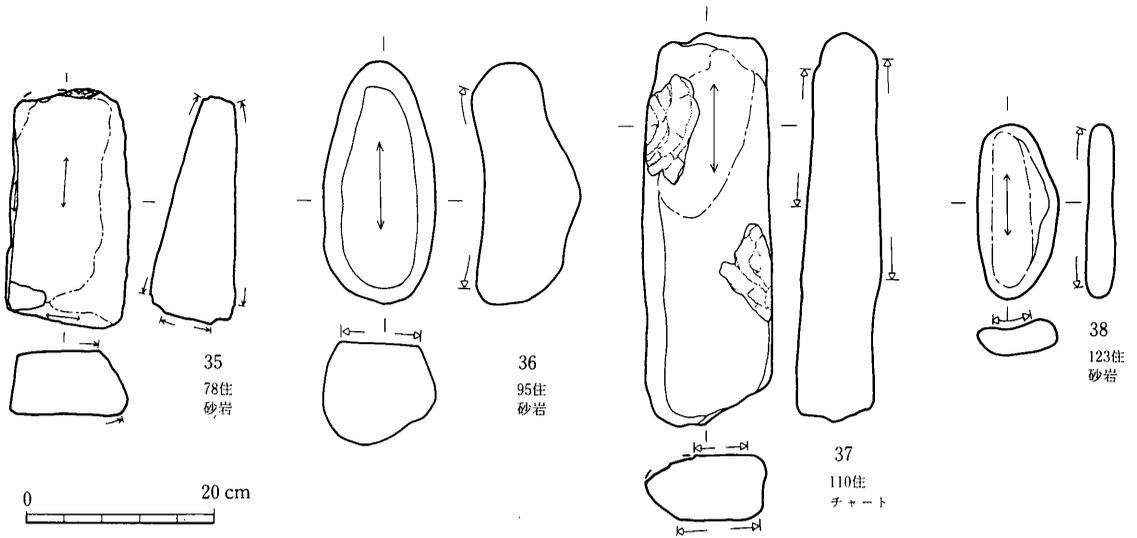
29  
33住  
凝灰岩



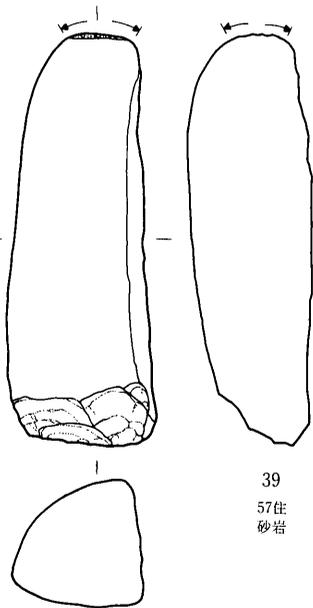
28  
30住  
硬砂岩



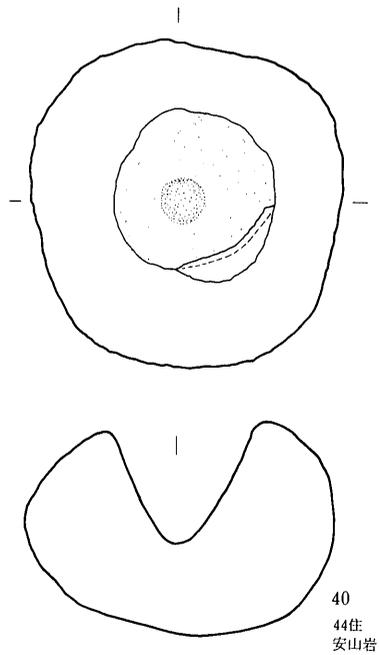




敲石



つき臼



耳環



1

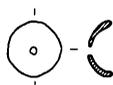
27住



2

64住

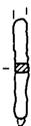
空玉



3

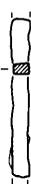
49住

鍬



4

16住



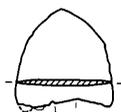
5

17住



6

33住



7

56住



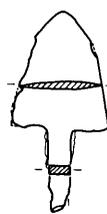
8

87住



9

88住



10

100住



11

107住



12

111住

釘?



13

93住

刀子



14

46住



15

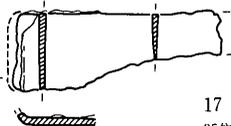
110住



16

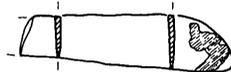
66住

鎌



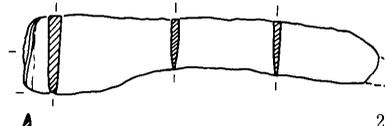
17

35住



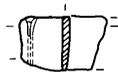
19

114住



20

114住



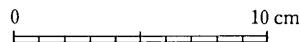
18

43住

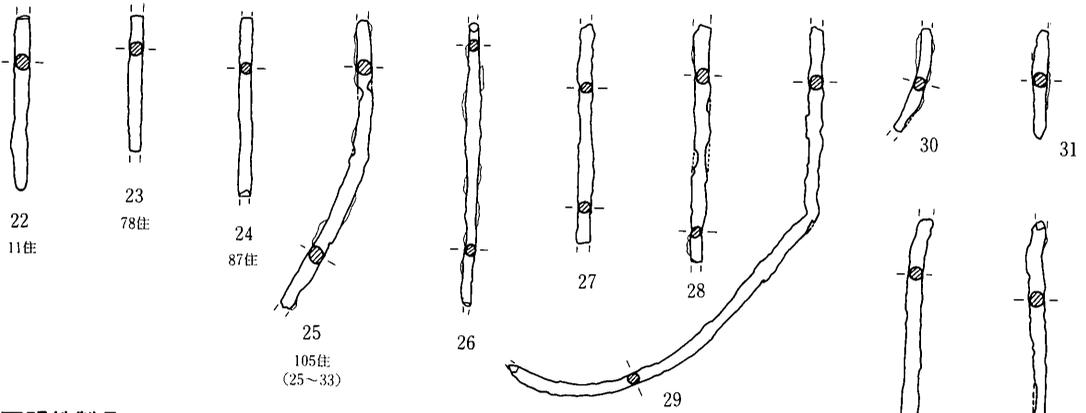


21

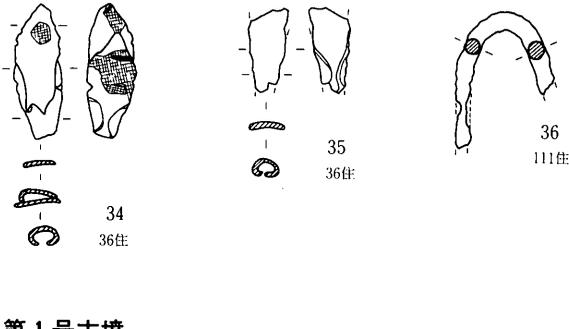
116住



紡錘車



不明鉄製品

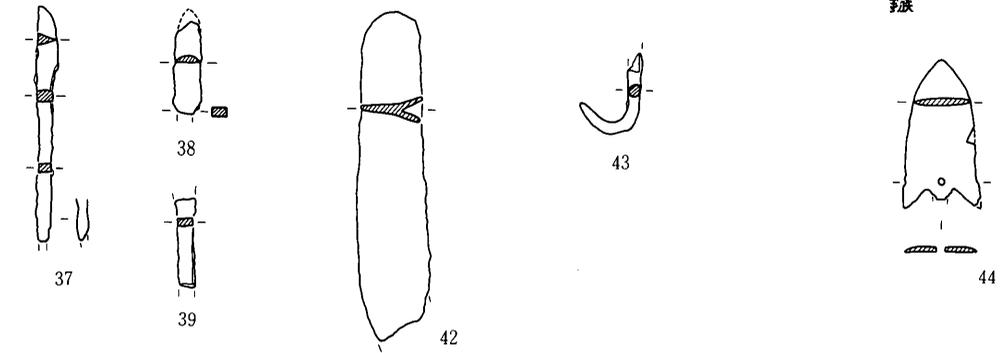


第1号古墳  
鏃

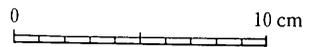
鋤・鍬

不明鉄製品

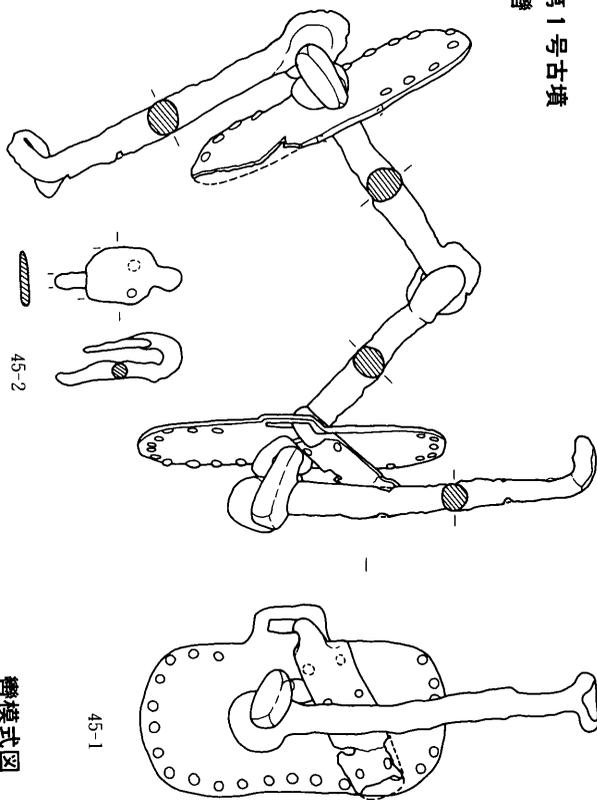
第3号古墳  
鏃



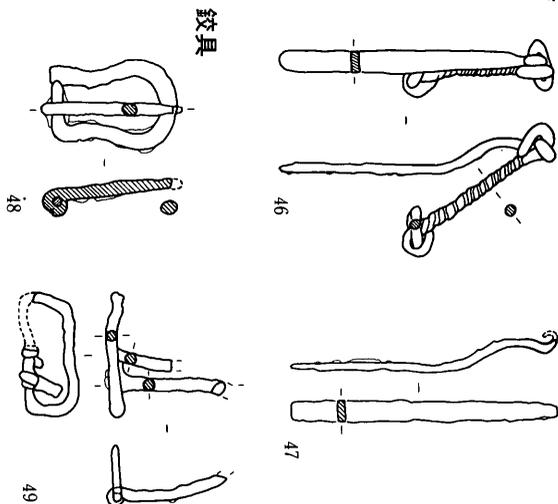
刀子



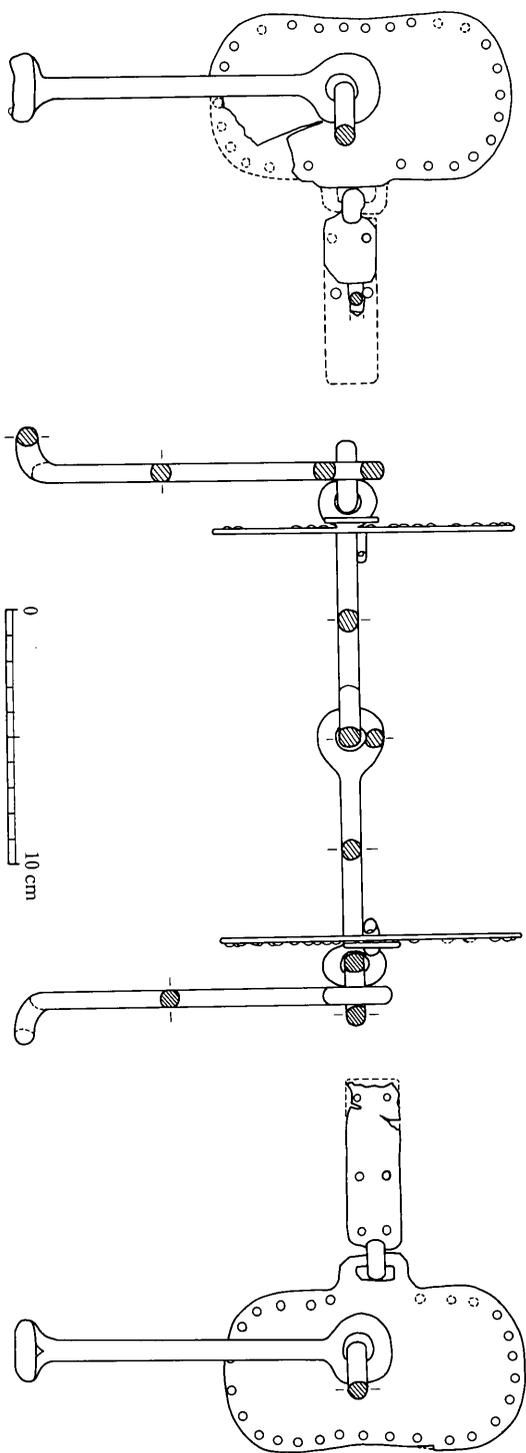
第1号古墳  
槽



馬具



槽模式图





調査区全景（東から）



調査区全景（北西から）



調査区1（東端）



調査区2（東側）



調査区3（中央）



調査区4（中央）



調査区5（西側）



調査区6（西端）



平田里第1号古墳（全景）



左同（作業風景）



平田里第1号古墳（埴輪・礫出土状況）



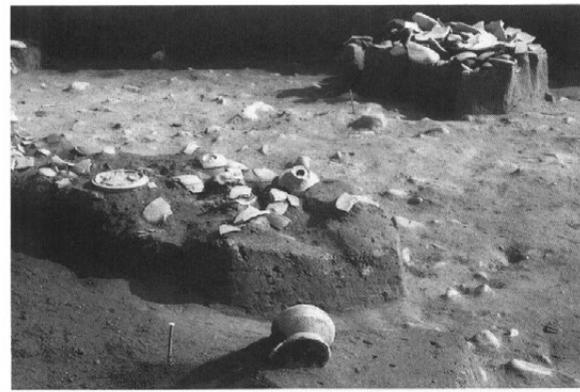
左同（左同）



平田里第1号古墳（A群）



左同（A群：脚付壺）



平田里第1号古墳（手前：B群，後方：C群）



左同（B群）



平田里第1号古墳 (C群)



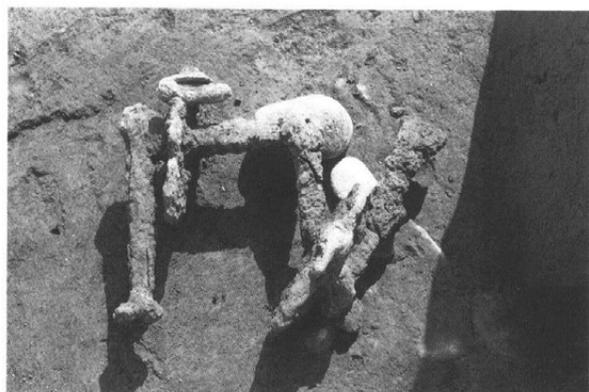
左同 (D群)



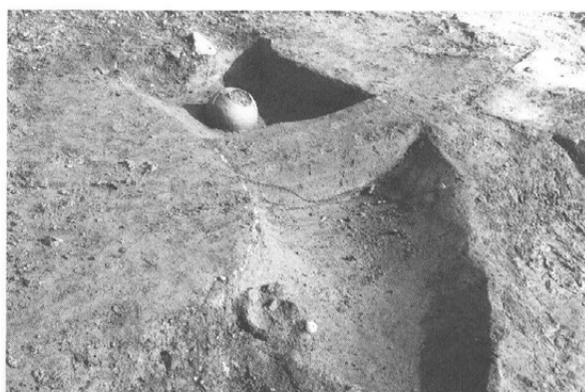
平田里第1号古墳 (F群)



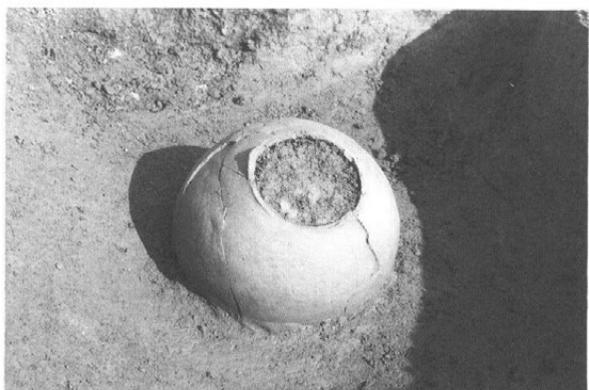
左同 (G群)



平田里第1号古墳 (轡出土状況)



平田里第2号古墳 (出土状況)



平田里第2号古墳 (壺出土状況)



平田里第3号古墳 (完掘)



第11号住居址（カマド）



第25号住居址（炭化材出土）



第28号住居址（出土状況）



左同（カマド）



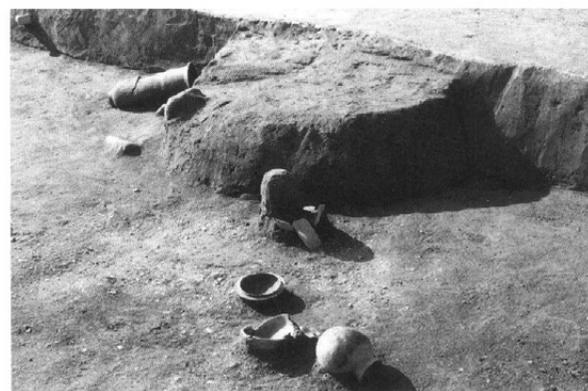
第33号住居址（出土状況）



左同（左同）



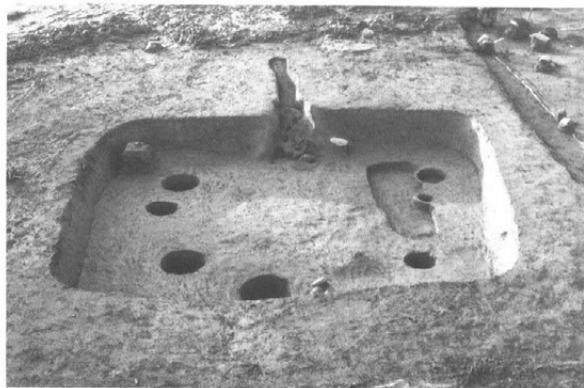
第35号住居址（カマド）



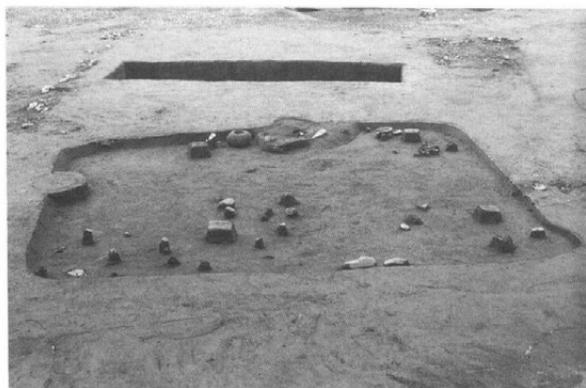
第36号住居址（出土状況）



第38号住居址（完掘）



第43号住居址（完掘）



第44号住居址（出土状況）



左同（カマド）



第49号住居址（出土状況）



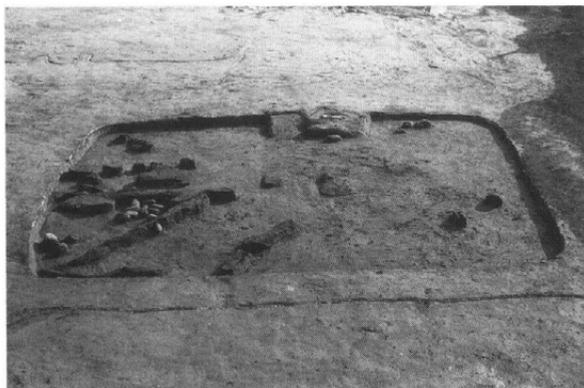
第50号住居址（出土状況）



第56号住居址（出土状況）



第69号住居址（カマド）



第77号住居址（出土状況）



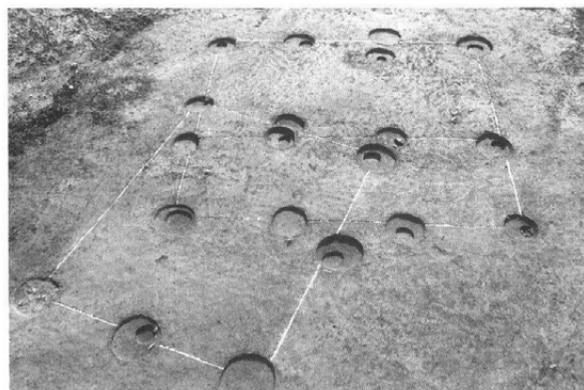
第91号住居址（カマド）



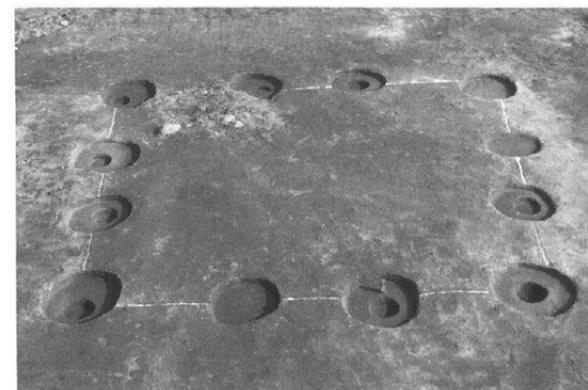
第94号住居址（出土状況）



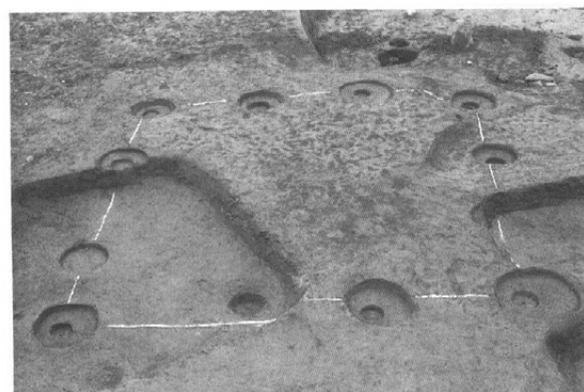
第124号住居址（出土状況）



第2号(右)・3号(左)建物址



第6号建物址



第9号建物址



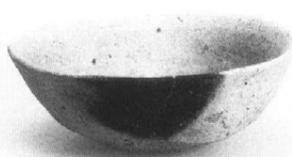
現地説明会



185



417



180



181



188



192



107



111



190



512



379



182



346



92



124



46



193



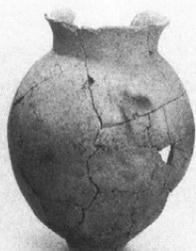
116



227



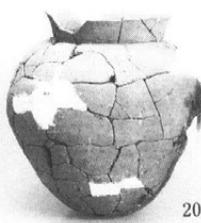
423



94



270



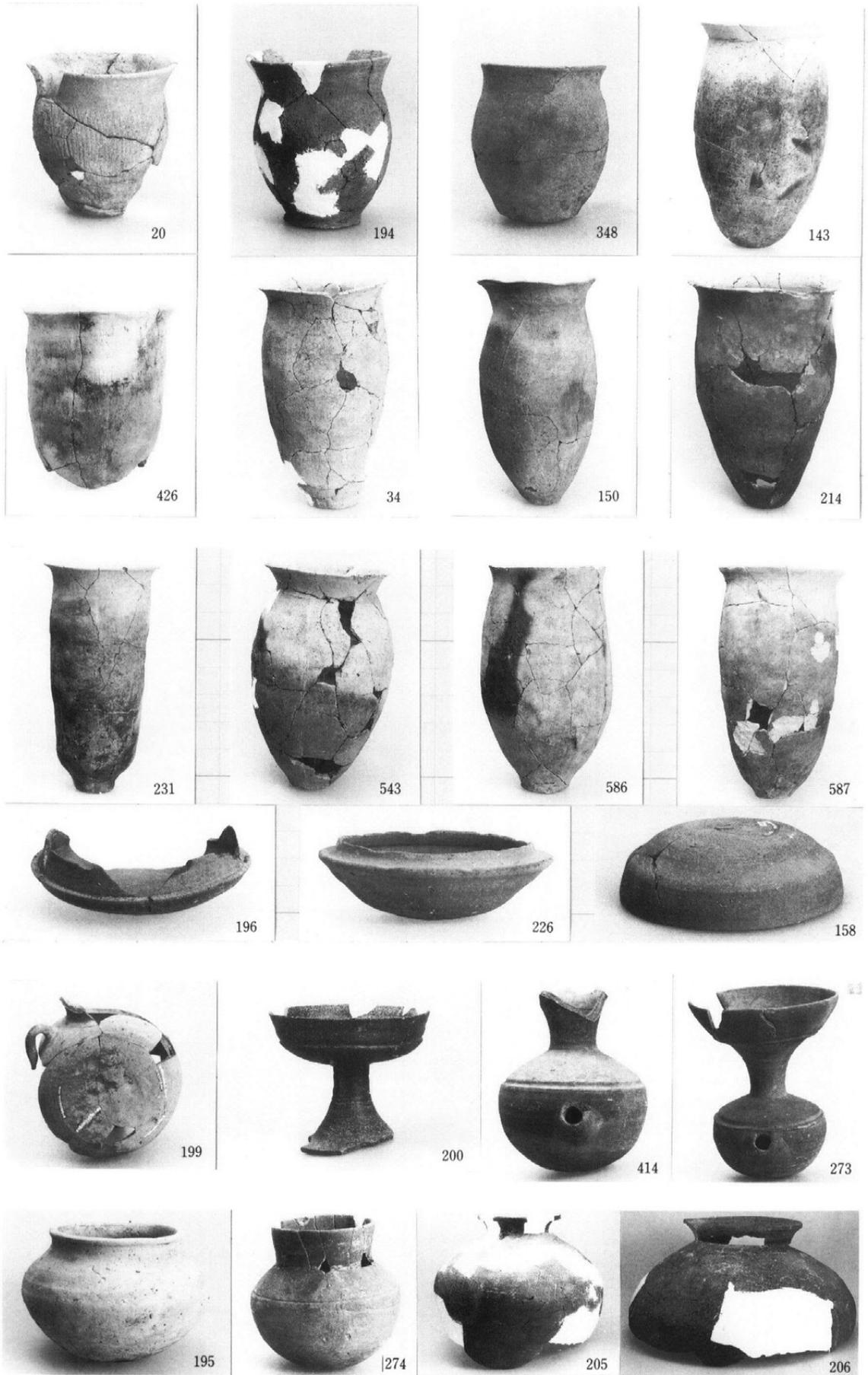
203



204



386





597



612



613



614



618



623



625



626



649



650



652



654



655



656



659



600



627



630



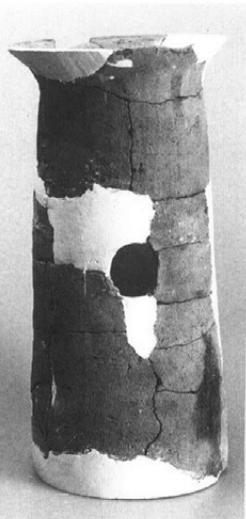
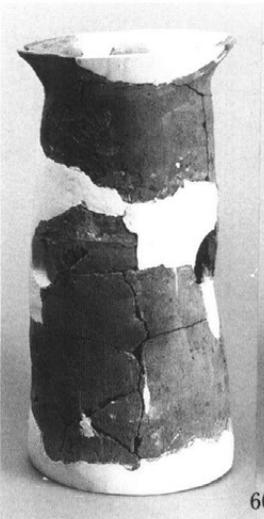
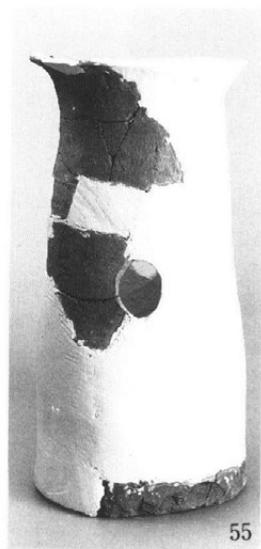
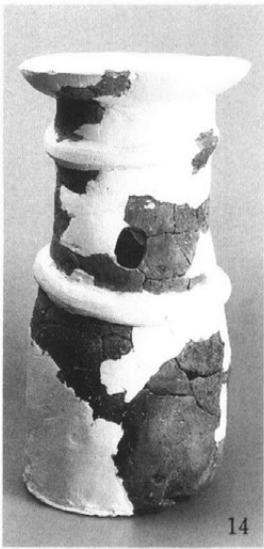
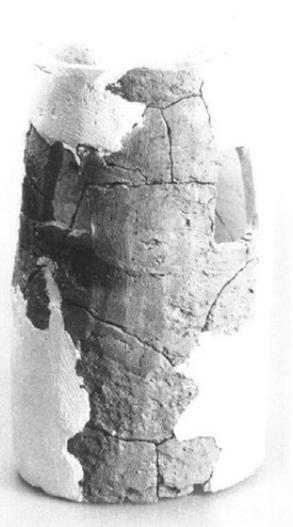
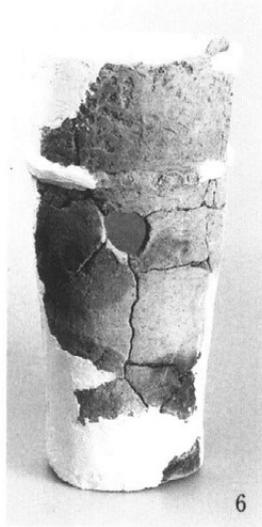
657

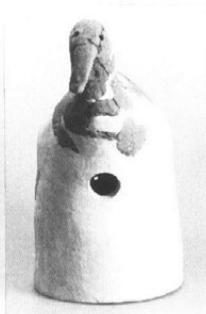
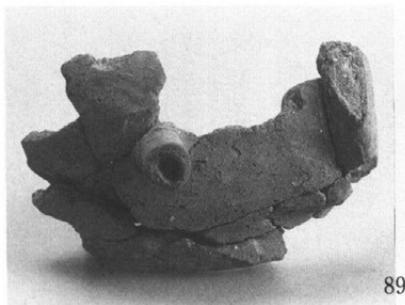
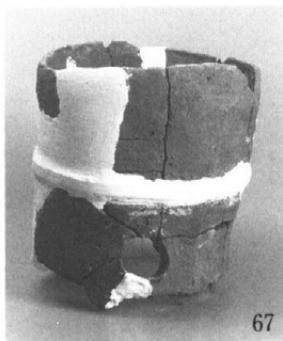
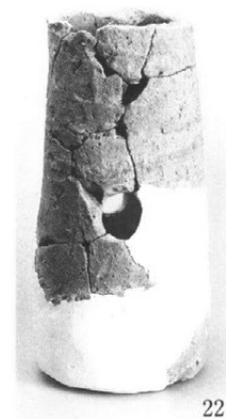
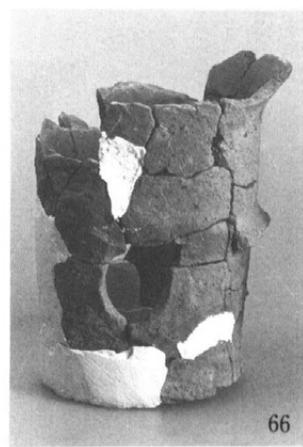
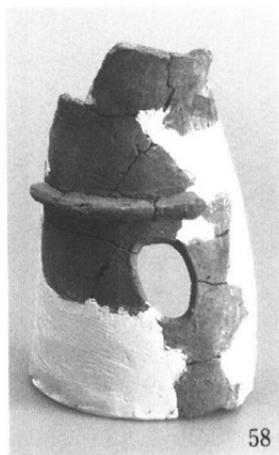
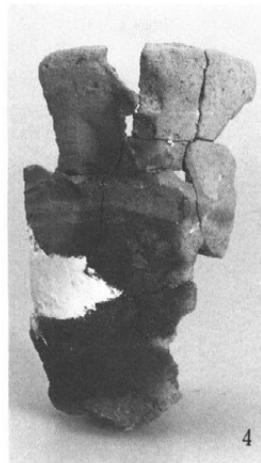
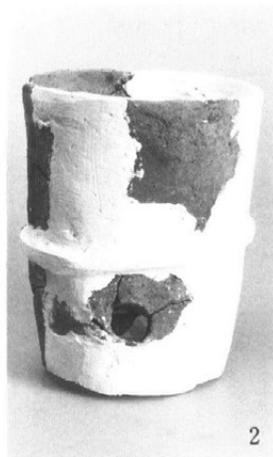


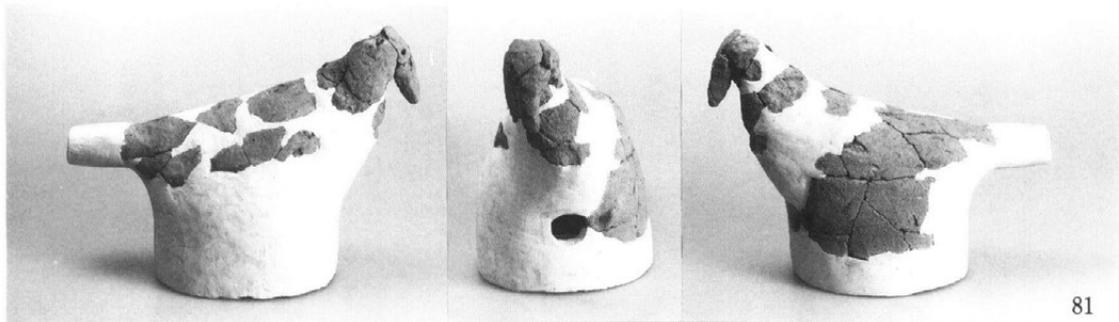
660

628

631







81



84



83



90



91



95



92



98



85



88



96



86



87



45



46



47

出川南遺跡IV・平田里古墳群調査報告書抄録

ふりがな	いでがわみなみいせきIV・ひったりこふんぐんきんぎゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	出川南遺跡IV・平田里古墳群緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.115							
編著者名	関沢 聡・竹原 学・太田守夫・久保田剛							
編集機関	長野県松本市教育委員会							
所在地	〒390 長野県松本市丸の内3番7号 Tel 0263-34-3000							
発行年月日	平成6(1994)年3月22日(平成5年度)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
出川南 (出川南BⅢ)	ながのけんまつもとし 長野県松本市 ふたば 双葉5-20		177	36度	137度	19911016	14688	大型店舗建設に伴う事前調査
			191	12分	58分	1		
			192 193	20秒	10秒	19920328		
平田里 古墳群								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落跡	弥生 古墳 平安	竪穴式住居 掘立柱建物 溝 土坑・ピット	116軒 21棟 11本	弥生土器・土師器・須 恵器・灰釉陶器・石器・ 石製品・土製品・ガラ ス製品・金属製品	6世紀後半～7世紀後半 にかけて継続した古墳時 代後期の集落。(該期の住 居は113軒)		
平田里 古墳群	古墳	古墳	円墳	3基	土師器・須恵器・埴輪 (円筒・形象)・石製品・ 土製品・ガラス製品・ 金属製品	松本平で初めて確認され た埴輪を伴う大形古墳。 鶏・水鳥等の形象埴輪出 土。		

松本市文化財調査報告 No.115

松本市 出川南遺跡IV  
平田里古墳群

—緊急発掘調査報告書—

平成6年3月22日 印刷

平成6年3月22日 発行

編集 長野県松本市教育委員会  
〒390 長野県松本市丸の内3番7号  
Tel 0263-34-3000

発行 長野県松本市教育委員会  
印刷 電算印刷株式会社